
GIOGAME

Anacletus

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G I O G A M E

【Nコード】

N 8 1 6 4 W

【作者名】

A n a c l e t u s

【あらすじ】

借金生活に悩む大学院生【外字久重^{がし・ひさしげ}】は何でも屋として年齢不詳の女アズの下で働いていた。仕事トラブルに見舞われた久重は不思議な力を使う少女ソラに襲われる。近未来科学によって社会、国家、民族、企業、あらゆる人の群れが混沌へと飲み込まれていく。ワールド・フォーター・ウォーWWへと突き進む日本を止めようとする青年と少女の行く手には死を携えた者達が迫る。近未来科学SFただいま加速中！！

プロローグ&第一話 迫り来る恐怖の影

G I O G A M E

プロローグ 天より降り来るモノ

東京。

嘗て隆盛を極めた極東国家に存在する一都市。

人口一千万を越す怪物都市の一角で彼らは奇跡を目撃していた。

奥多摩と呼ばれる東京二十三区内において最も自然を有する地域。

広大な山林や古びた私道、林道、あるいは民家、川、草原、そんな場所の至るところで彼らは空を見上げながら世界最後の日と目されたX-DAYを過ごしていた。

巨大隕石激突なんて映画で使い古されたネタではあった。

しかし、彼らにとって生存不可能という政府広報も十分実感の湧かない冗談だった。

それでも世界各国のマスコミは相変わらず祈る以外にもはや手は無いと言う話を垂れ流していたし、最後の日を家族と過ごすそうと大勢の政治家や企業役員、あらゆる業種職種の重役達も家に帰っていた。世界のリーダー達の帰宅風景が映画さながらに世界中の至る場所で見られ、人々に滅亡を実感させた。

世界中の核弾頭を一斉発射する案や絶対境界線上に宇宙用の核機雷を敷設するなんて方法も国連主体で進められ、全世界の核弾頭三分の一以上が宇宙に上げられていたが、それでも状況は絶望的だった。地球に隕石が当たれば何処に逃げようと惑星そのものが崩壊すると言われた通称【黒い隕石】(ブラックメテオ)は最新の光学観測技術によって地球には存在しない分子組成を持っていて極端な耐熱性を有するらしい・・・なんて新聞に載ったので、彼らの誰もが人類滅亡というお祭り騒ぎを静かに鑑賞しようという諦観しか持ち合

わせていなかった。

諸外国では暴動・略奪・犯罪件数が鰻上りとなり、国家の破綻や経済の破綻が起きていたが、日本の混乱は極めて軽微なものだと新聞は人々の冷静さを伝えていた。

草原でノートパソコンを開く若者を中心に人の輪が出来ている。

リアルタイムでカウントダウンされる人類滅亡、隕石衝突時刻を黄昏時と空と交互に見つめていた人々は、ジャスト一分を切つて、家族や恋人と抱き合った。

午後七時三分。

カウンターゼロ。

大質量隕石の衝突。

地殻が捲れ上がり、惑星が歪み、一瞬の内に人々は熱波で蒸発する、はずだった。

【.....】

長い沈黙と死んでいるかもしれない恐怖と安堵とも着かない胸の高鳴りを彼らは奇妙に思い空を見上げる。

夏も近い暮れ掛けた空には雲一つ無く、太陽は未だ穏やかな光で人々を包んでいた。

助かったんだ。

誰かの言葉だった。

助かったんだ。

続く言葉を紡ぐ者がいた。

彼らの間に大きな声が上がりに始める。

世界は滅んでいない。

地球は滅んでいない。

喜びの声が山林を振るわせんばかりに巨大化し風に乗って渡って行く。

「.....」

ノートパソコンを持っていた青年はネット上に応えを求めようと
して、メールが届いた事に気づく。

「こんな時に人妻もOLもお断りだ。くそつたれ」

ダイレクトメールの節操の無さで生きている事を実感してしまった
自分に苦笑して、青年はメールを開いた。

「G I O ? 何処の会社だ」

メールの添付ファイルを開くと大きな垂れ幕に「祝。人類生存おめ
でとう。我が社の商品を特定区域の方々にプレゼント致します」の
文字。

小さな捕捉項目を呼んで「ああ」と青年は納得する。

特定区域のGPS位置情報を送信する事によってゲーム内でのク
ポンやら特典やらを受け取る事が出来るジオゲームと呼ばれる種類
のネットゲが最近流行している。

様々な会社が特定のイベントを行う際に様々なネットゲとコラボして
特定時間、特定区域の位置情報にクーポンや特典を設置してもら
事も多々あり、近頃ではそういう客寄せ効果を期待してか、ゲーム
会社だけではなく普通の会社もサイトで位置情報特典契約という項
目を設けている。

イベント加者が位置情報を送れば特典として何か送られてくる。

そういう話だ。

「それにしてもこんな時に回線込み合ってるはずだろ？」

半ば呆れながら商魂逞しい会社に脱帽しつつ青年はパソコンを閉じ
る。

青年が伸びをして当たりを見回すと誰も彼もが喜びを互いに分かち
合いつつ平静を取り戻し始めていた。

ピロリン。

青年の後方にいた少年が手に持っていたケータイに着信が入る。
ポロン。

青年の前方にいた老人の手にあったスマホにも着信だった。

家族と連絡を取り合った者、電話を終えた者、メールを送り終えた

者。

誰のケータイにも着信音が響き始める。

青年はひょいっと後ろにいた少年のケータイを横から覗き込んだ。

そこにはやはり【GIO】という会社名があった。

世界が減びなかった日、GPS機能を搭載する情報端末約四億台にそのメールが届いた。

新たな世界に響く着信が誰の目にも奇異に映っていた。

セカンドプロローグ ジオネット

20xx年某月。

国会において一つの法案が提出され全会一致の可決を見た。

時に人類の生存から十五年後。

太陽系絶対防衛線構想が持ち上がってから十年の月日が流れていた。

【個人座標情報保護法案】

俗に【ジオネット法】と呼ばれる個人情報保護法案は新たな時代の到来を告げた。

それは政府の下にGPSの送受信を一元管理保護する法案であり、複数の財閥、コングロマリットが政治工作を全面的に行ったと揶揄される程に、一部の者達には刺激的な内容だった。

具体的内容に付いては政府管理下のサーバーを経由しなければGPSに関するあらゆる情報をやりとりできないようシステムの再構築と端末への新OS導入を行い、あらゆる環境下で通信を確保する光量子通信網を持って旧態然とした複数の情報網を刷新、一元管理するということものだ。

商業利用においてのGPS機能、特にジオゲームと呼ばれる位置情

報の送信によって様々な特典を得るゲームに端を発した「位置情報利益」(ジオプロフィット)に関する様々な規定・罰則を設けた事で、ジオネット法は世に多大な影響を与えたと言われている。

GPS機能を用いた個人位置情報の取得とその送受信に関して世界に先立って行われた法整備が威力を発揮しだしたのはそれから数年後の事だった。

商業目的でジオプロフィットは莫大な利益を生む利権と化した。

企業側から提供される特典と特典を得る為に特定の場所へと集まる民衆。

この図は一目では企業側からのみ利益が供与されているように見えるが、実際には人を集める新しい方法として企業側にとっても有益な手段となった。

最初期、イベントなどの開催を行いながら人を集めて収益を上げるといふ形を取っていたジオプロフィットの基本的なスタイルに変化が起きた。複数のジオプロフィットを扱う企業や団体が日時や位置に規定を置き、その規定によって得られる利益にも起伏を付けるといふ事をやりだしたのだ。

これによって単なる客寄せ効果は人口を複雑に分配する効果へと昇華された。

人の位置を自在とまではいかなくとも、ある程度コントロールする術を企業・政府・民間を問わず手に入れたのだ。

心理学とジオプロフィット。

最初に新しいジオプロフィットスタイルを確立した男はそう最初に説いた。

人を動かす為に必要なのは動機。

その動機を補強する為の因子として彼はジオプロフィットを使った。

「もしも、目の前の位置で十秒後十万円を確実に得られるとしたら君たちはどうする?」

カリカリと大学講義を行っていた老齢の教授が訊く。

窓から入ってくる熱線にグッタリしている学生達は心此処にあら

と言った心境で無言だった。

「まあ、大概の連中は十秒後までにその位置を陣取って待つだろう」
反応は無い。

「簡単な話だ。ジオプロフィールは人間を特定位置へ精神的にも経済的にも縛り付ける効果を発揮する。これを心理学的な応用と組み合わせて、彼は様々なイベントや政府主催の巨大事業をプロデュースしたのだ」

カリカリと応えない学生達がノートを取る音だけが響く。

「現在、政府のジオプロフィール政策には主に三つのものがある。一つは超高齢者社会対策、福祉分野への応用。二つ目は税制に関する応用。三つ目は企業へのジオプロフィールトマニュアルの推進。その他の例外として自衛隊、つまり軍事関連が現在模索されている状態だ」

ジリジリと髪を焦がしているような顔で教授が話しを進める。

「君達も知る通り、高齢化と過疎化が進む地域では特定の期間や時刻に政府が特典を設けている。その時期、その時間帯を歩きながら端末で位置情報を送るだけではあるが、人が集まる事で地域の横の繋がりや高齢者と若者の交流、更にはもしもの時の対策として多いに役立つている。昨年、この政策で夏場に病院へ運ばれた人間は六千人。政府広報は当てに出来んが、少なくとも数百人以上の人間は命を取り留めただろう。効果を疑問視されていたにしては上々な成果だとは思わんかね？ 利益目当ての人間でも死に掛けた老人をそのままにしておけない奴がいれば電話の一つも掛けてくれるというわけだ」

丁度、ベルが鳴った。

「続きは来週。各自、今回話した福祉分野におけるジオプロフィールト応用についてレポートを一枚提出するように。それと先週から言っていた任意の常時位置情報送信については更に一週間期間を延ばす。来週の講義は外国人条項の削除がジオプロフィールスタイルにおいて望ましいかどうかだ。では、解散」

ゾンビのように起き出した学生達がフラフラと部屋から出て行く。
「あちーよ。なげーよ。もうことばがゼーんぶひらがなになっちま
うぐらいな」

背丈のある青年だった。

洒落つ気の無い黒のスラックスとワイシャツに黒革のごついベルト
をしている。

何処かのバーでソファアに寝そべていれば「組」に関係した「そ
っち系」な「有力株」のように見えない事もない。

彫りの微妙に深い顔はまるで刃物の鋭さとは無縁そうならしない
ものだが、ワイシャツの中に詰まっている決して太くは無い洗練さ
れた筋肉が青年の雰囲気を多少シリアスに保っている。

青年はソファアの代わりに長椅子でたるそうに寝そべる。

その手にあるペットボトルのお茶は完全に温くなっていた。

「貧乏学生してるかい。貧乏人」

姿の見えない声の主に青年はだるさ全開で無視を決め込む。

「僕が恵んであげた熱いお茶も温くなってるみたいだけど、やはり
君もこちらの冷たいアイスティーの方が良かったかい？」

クスクスと声が弾む。

青年は嘆きながら顔を顰めた。

「それじゃあ、賭けは僕の勝ちだね。利子は明日までに払ってもら
おうかな」

「金は無い。それ以前にこのクソ熱い時間帯に熱湯寸前のお茶を飲
み干せたら利子を待ってやるとか何か？ 悪鬼羅刹なのかお前は？」

「可哀想な人生の負け犬には僕の家飛び込んでくれれば三食昼寝つ
き待遇で借金帳消し待遇をご用意するけど？」

「それは、ない」

「あ、今一瞬だけ考えただろう？」

悪戯ずきな子供のように声の主が笑う。

「まあ、それじゃあ仕方ない。利子も払えぬ輩には一仕事してもら
おうかな」

青年の顔に一枚の紙が落ちる。

「探偵事務所もとい興信所の犬として君には新しい任務に付いてもらおう」

「非法法の癖に」

ボソツと青年が愚痴ると紙が細い手によって引き上げられそうになる。

青年は紙の端をさつと掴んだ。

「探偵じゃなくて、何でも屋、だろう？」

青年が紙を放さず起き上がる。

青年の目の前にはニヤニヤと笑う女が一人立っていた。

真夏だというのに全身を黒のスーツで覆い男のように無造作な髪型の女は甘い声で青年に囁く。

「いい加減に返済を諦めてくれると僕も嬉しいんだけどな。外字がじ・ひさ久重君」

「テメエだけはお断りだ。アズ」

黒のスーツの内、ワイシャツのボタンが上から三つまで外れている女はまるで汗を掻いていない。

ワイシャツの中に治まっている胸はかなり「無い」ものの、そのまま直視し続けるのは躊躇われて、青年久重はアズと呼んだ女から顔を背けて紙を強引に奪い取った。

「ふふ、ノーブラな僕に釘付けになりたくないという君の心意気が胸に染み渡るようだ」

「僕口調の年齢不詳女が何言つてやがる」

吐き捨てられる言葉にニヤニヤしながらアズはやれやれと肩を竦める。

「未だに僕の事が怖いなんて、君はよっぽど強い星の下に生まれたんだねえ」

「たまには人間らしい顔してみせやがれ。この悪魔」

「悪魔だったら今頃僕は君を誘惑し放題でとつくの昔に落としてるよ」

「オレの信条はノータッチオカルト、ノータッチアズ、だ」
久重が紙の内容を頭に入れ始める。

「今回のは別に【ちょっと怪しい病院で夜の叫び声の調査をしたら不倫現場でした】とか【丑三つ時の路地裏で行われている取引を調査したらヤクじゃなくてチャカでした】とかじゃないから大丈夫大丈夫。君なら楽勝さ」

「無いはずのクラブを探し出せつてのはどこら辺が大丈夫なんだお
い？」

「ダミー企業でジオネット使って連中の足取りを追ってみただけ
ど、途中で消えちゃって困っててね。地下か特殊な施設にでもいる
のか一定区域で情報が途切れたんだ」

「おい。ダミー企業でジオネット使つとか気でも狂ってんのかテメ
エ?!」

「大丈夫大丈夫。休眠状態の宗教法人複数買い取って、その系列の
会社つて事で審査通してるから。使い終わったらポイっとね」

置かれていた飲み掛けのペットボトルに蓋をしてアズがゴミ箱へと
投げた。

「あ~~~~もう?! 訊かなきゃ良かった!!! そんな裏話?!
オレのささやかな青春がバラ色からドブ色に!!!」
もう、お前なんかの話聞いてられるか。

ベチリとそう机に紙を置いて久重はその場から「うわ~~~~ん。オレ
の青春があああああ」と逃げ出していく。

アズは放り出された紙に目を通した。
ビッシリと書き込まれた情報は普通の人間ならば一度見ただけでは
覚え切れない程の量に達している。

「ふふ、やっぱり君は僕に相応しい男だよ。久重」
妖艶に笑んだアズの指から離れ紙が窓から外へと運ばれていく。

20xx年七月下旬。

外字久重二十四歳の日常は借金と危ない仕事と黒い女によって九割
が占められていた。

第一話 迫り来る恐怖の影

朝方の薄暗闇に画面からの光が輝く。

マンション二十五階ワンフロアの一角で朝からシユールな音楽が流れていた。

じゃーじゃん、じゃーじゃん、じゃーじゃんじゃーじゃんじゃーじゃん
やんじゃんじゃん。

朝から海と叫びとヒレと牙とサスペンスが繰り広げられる一室で、裸の女が毛布に包まり寝こけている。

横のソファでバスローブ姿の優男が次々に餌食になっていく画面の中の人々をぼんやりと見つめていた。

ポチコーンと安っぽい呼び鈴の音が鳴ると優男はノロノロ起き出して玄関まで遠い廊下を歩きつつ、あちこちに散らかる衣服を無造作に拾い上げ一応の身嗜みを整えた。

無造作に玄関のドアを開けた優男はドアの先にいた男の顔を見て、閉めた。

「おい?! ちょっと待て!! さすがにそれは傷つきますよ?!
ええ、オレの心情的に!!」

「何だ。ただの新聞配達のおっさんか。家新聞取ってないですよ」
優男の返答にドアがガンガンと叩き壊される勢いで打ち鳴らされる。

「もうその発言が矛盾してるから!?! 親友として少しは親友を敬いやがれ!!」
「というか飯を食わせる!!」

優男がドアを開ける。

「本音はそれ? 久重」

「う……」

「今月で何回目だっけ?」

「ぐく……」

「あ、そつか。今月は借金の利息で首が回らなくて二日に一回ペー
スだったかな？」

「・・・・・・・・だ、ダメ?!」

ヒシツと低姿勢で久重が優男に上目遣いのキレーな瞳で訊く。

「はぁ・・・・・・・・」

優男がサンダルを突っかけてマンションの外付け非常階段を下りる。

「僕、永橋風御ながはし・かぜおはこれから親友（笑）と食事に行きたい気分だから、
来たかったら来れば？」

「おお、心の友好的な発言に感謝ませう」

なむなむと拝み倒す勢いに優男風御は親友（笑）久重にジツトリと
した視線を向けた。

「朝っぱらから友達に食事をたかるしか能の無い人間で最低だよね」

「人間は食わなければ生きていけないんだ」

「ドヤ顔で言うな」

風御は歩きながら財布の中を確認した。

現金なんてものはなく、カードばかりが並ぶ財布の中身に久重が脂
汗を浮かべた。

「何でお前のカードは金ぴかと真っ黒しかないんだろうな」

「僕、昔からカードコレクターだったんだよ。結構今でもコレクタ
ーらしいだろ？」

「ええ、そうでございますですはい。どうせオレは鉄道ゲームで必
ず貧乏神的な何かが付くような人間ですよ」

「朝から何かテンションおかしくない？ 僕は今はスーパー賢者タ
イム突入中なんだけど、さすがに切れていい？」

「何て羨まし　ごほん。何て爛れた生活を!? そんなんだから
未だにスーパーニートなんだよ!!!」

「悔しがれビンボー人」

「自分で言っておいて何だが自滅!？」

下らない話をしながら二人が向かったのは大手牛丼チェーンだった。
朝っぱらから開いている聖地を目の前に久重がハートマークになら

んばかりの瞳を輝かせる。

牛井大盛りが二つ。

久重の箸が牛肉に掛かる刹那、風御が話を切り出す。

「で、どうしたの久重？」

「ぐ、こういう時だけ鋭い……」

「で？」

「……アズからの仕事だ」

「僕、関係ないみたいだから帰ろっかな。あ、支払いはしておいて」

「ちょ、ガチで親友を食い逃げ犯にするつもりか親友!？」

溜息を付いて風御は再び席に腰を降ろした。

「それで僕に何を頼みたいわけ？」

「あ……ほんのちよつとでいいから真つ黒の方貸してくんない？」

「とうとう落ちるとこまで落ちちゃったんだね久重……」

哀れみの視線に久重が否定する。

「今回行かなきゃならない場所の情報は解ったんだが、入る方法がそれしかなくてな」

「一分以内で簡潔に説明してよ」

「アズに頼まれたスニーキングミッション【あるはずのないクラブを探し出せ(できれば内部の情報も一緒に)】でそれらしい場所までは解ったんだが、扉の前にこわいガチムチ黒人お兄さんがいて【おいジャップ。テメエみたいな貧乏人には此処に入る資格なんざねーんだよヒヤッハー】とか言われた」

「金持ちのフリして入りたいわけね？」

「ま、まあ、簡単に言っと」

「……何処？」

「さっすが親友。話が解るうううう」

「そのキャラうざい。静かに食べようよ。人間でしょ君？」

「はい。申し訳ありませんでした親友様」

イソイソと食事に戻った久重が牛井を約三分で平らげる。

「それにしてもまだ諦めてないの？ あのアズトウアズに狙われ

て無事だなんて君くらいだよ」

「オレだってまだ人生の墓場に向かうのは早いと思ってる」

「最終手段はアズの奴隷か。これが大学一の頭脳（笑）とは世界って広いよね」

「頭の出来と貧乏は関係ない」

「ちよちよいと書庫で金融工学でも学んでくれれば？」

「オレはそういうのは……」

久重が苦い顔で水を呷る。

「あーはいはい。頭良い癖に中の中で成績維持してた人間には無理か。ま、こつちも人のことをとやかく言えるような人間じゃないからいいよ」

「……悪い」

「悪いと思ってるなら誠意で返して欲しいね。今まで奢った朝食代を耳を揃えて返してくれるとか」

「ごめんなさい。オレが全面的に悪い」

溜息を吐いて久重から時間と場所を聞き出した風御は食事を済ませた後、久重を連れて駅へと向かう。

「カード貸したところで入れる場所でもないでしょ。僕が付いてつてやるからガードと調査は任せる」

「了解した。それで何処に向かっているんだ？」

「こんなみすばらしい格好でクラブとか行けとかどうかしてるよ。」

久重

「男の買い物に付き合うとか。オレの青春が遠のいていく」

「ま、君もただどね」

「は？」

久重がその言葉を理解するのは数時間後。

無駄に高そうなスーツを着込まされ、グラスンを与えられ、ちやらいリングや指輪を付けさせられてからだった。

午後八時。

当初の予定時刻に達した二人は高層ビルが立ち並ぶ一角の商業ビルへと足を運んでいた。未だに営業している店が多数あるというのに早々とネオンが消えたビルの中を進む。

あちこちにある監視カメラに視線を向ける事もなく二人はその入り口まで辿り着く事が出来た。

安っぽい鉄製の扉の前にはお約束の如く黒スーツの黒人が屯している。

「ハロー」

ズンズン進んでいき軽いノリで挨拶をかました風御に黒人の瞳が集まる。

如何にもちゃらいスーツ姿の優男。

無駄に光物が使用されている腕時計を煌かせる姿は何処かのホスト風とも見える。

しかし、黒人達はその腕に囚われるわけでもなく、風御の隅々まで舐めるように見回した。

「いやん。僕そついう趣味ないよ？」

ゲラゲラと品も無く笑う男の全身がまったくもって完全無欠に【金】以外の言葉が見当たらない事を確認して、二人の内の一人が風御にボソボソと質問した。

「あーうん。紹介は無いんだけどさ。お得意様にはなってあげられるかもよ？　ここそついう場所でしょ？」

黒人が難色を示すと風御は後ろで控えていた完全無欠に危ない「お兄さん」と化した久重に目配せする。

久重は手に持っていたケースの中身をぶちまけた。

比較的重い紙の束がほぼ百、床に落ちたソレを見て黒人達が慌てる。「あーうん。これでこのオーナーさんに取り次いでくれる？　幾分か懐に入れても構わないよ？」

サラッと流した風御の言葉に男達が二人で顔を見合わせた後、一人を残して慌てて扉の中に入っていく。

扉を開けると更に扉があり、その扉の内には更に扉がある。

三重の警戒を解いた内部へ駆け込んだ黒人が戻ってくる頃にはケースに再び束が収められていた。

残って散らかった束を片付けた黒人が手数料とばかりに幾つか束を懐に入れていたのをニコニコしながら見ていた風御が出てきた黒人に振り返る。

黒人は慇懃無礼に礼をして扉の内部へと二人を招き入れる。

扉の先の暗幕が払われた。

ボディーチェックを受けて入った扉の中には十数人の客。

(!?)

内部の様子に僅かに久重が動揺する。

「久重。自重」

「解ってる」

久重がグラサン越しにも解る内部の様子に歯を軋ませ風御に止められる。

内部では競りが行われていた。

競りが行われている以外の場所には複数の強化プラスチック製とも見える大きな箱が無造作に置かれている。商品はまるで生気もなく与えられた食事をもそもそと口に入れていた。

「あなたがお見えになられたお客様ですか？」

競りを行っているステージ横から出てきたのは安っぽい流行りの戦隊モノの仮面を被った壮年の男だった。

「その仮面も売り物？」

「いえ、これはちょっとしたお遊びですよ。競りに来ている方々の中にもそういう方がいらっしやいます」

久重が競りを行っている者達の内の数人が様々な仮面を付けている事に気付く。

東南アジアのものと思われるもの。

米国のヒーローを象ったもの。

それぞれにまったく別の仮面が競りに夢中で札を上げ下げする光景

は滑稽なものに見えた。

「ふーん。結構、雰囲気良い店だね。昔はこういって、もっと臭い場所だったもんだけど」

「いえ、それでは近頃の商売は成り立たないもので」

「そうなんだ」

「はい。それでお客様は何方様からの紹介も無いという事ですが、此処の事は何処で？」

「え？ ああ、僕さ。【ADET】の関係者だったもんなんだけど、一人で商売始めたら少し仕入れが芳しくなくてね。小耳に挟んだ此処でちよつと仕入れて見ようかなあつて」

「【ADET】の？ 今はフリーという事ですか？」

「まずいかな？」

「いえ、それなら基本的に身元確認さえ行っただけならば今からでも競りに参加できますが」

「あ、そう？ 無理言っつて悪いね。それじゃあ、ほら出して」

久重が懐から数枚の書類を取り出して仮面の男に渡す。

「はい。では、どうぞ。ご既約はお読みになりますか？」

「え？ いいよ。どうぞ、何処も同じでしょ」

「それは・・・まあ、そうかもしれません」

「そうそう。で、ちよつと相談なんだけど、今競りに出されてるモノと此処にいるモノ合計で何匹？」

「今はそうですね。おい、在庫表を」

仮面が競りの参加者にシャンパンを配っていたボーイ風の男に声を掛ける。

ラテン系の顔立ちの男はすぐに店の奥に消えて戻ってきた。

男から渡された紙に仮面の男が目を通す。

「現在二十四匹で。今競りに出されているのが一、上物が七、売約済みが一、それ以外が十四、塵が一」

「売約済みと競りに出されてるの以外を全部でコレぐらいでどう？」
風御がスマホを取り出して計算した金額を提示した。

「ん・・・んん。今日のお客様方をこちらも手ぶらで帰らせるのは忍びないのですが」

難色を示す仮面の男に風御が更に追い討ちを掛ける。

「ま、それじゃあ、ちよっとおまけしようか。参加者に一人これくらいでどう?」

「ふむ。それならば」

「商談成立。ちなみにキャッシュでいいよね?」

「ええ、それ以外は受け付けていません」

「なら、コレ。隣のビルの七階にフェラーリ止めてあるから。車ごとでいいよ。差分は次の競りが行われる時に回収でいいかな?」

「よろしいですとも」

仮面が上機嫌に頷く。

「で、モノの移動はどうやってしてるのか聞いていい?」

「はい。落札後は基本にお客様のご自宅に私どもの宅配業者が赴く事になって」

「トイレって何処?」

「トイレは左奥の部屋を曲がって突き当たりです」

久重の言葉に仮面の男がすぐに返した。

「じゃ、後は任せる」

「はいはい」

風御が安請け合いすると久重はそのまま歩き出した。

(ホント、君は優しいよ。久重)

内心で溜息を吐きながら、親友の善良さを好ましく思う風御は更に商談を進めた。

誰もいないトイレの鏡の前。

「クソがッ」

手洗いの台に拳を振り下ろして久重が唇を噛み締めた。

店内の商品と競りが生み出す空気が未だ久重の肺に蟠っていた。

「人間を何だと思ってやがる!?!」

店の商品は人間であり店の競りは人間の競りだった。嘗て黒人奴隷が競りに賭けられていた如く店内では若い人間が競られていた。

（ああ、くそ！ アズめ！？ 最初からオレがどうという反応するか解ってて・・・）

妖艶な笑みで人を地獄に落とす天才を恨みながら久重は頭を切り替える。

トイレを出ると左脇にスタッフオリーの文字が扉に刻印されていた。

躊躇無く扉を開けて内部に侵入し扉を閉じる。

内部で監視モニターを見ている二人と先程までボーイをしていたラテン系の男がギョツと驚いている間に久重は行動に移る。

距離を瞬時に詰め、立っているラテン系の男の喉を拳で潰し、そのまま肘で鳩尾を抉り抜く。

振り向きざまに二人の男の一人を無防備な首筋に拳を振り下ろし昏倒させ、立ち上がるうとしたもう一人の顔面を蹴り碎いた。

脳震盪で意識を失った三人の男達がそれぞれに下手をすると死亡する可能性があったが、久重は構わずに辺りに積み上げられている資料の何枚かを掴んで懐に収める。

部屋の上部にブレーカーと配電盤を見つけて、久重は座る者無き椅子を持ち上げて投げ放った。

突如として店内の全ての電源が落ち、一瞬の静寂の後、ざわめきが広がる。

部屋から出た久重は確認しておいたステージの舞台裏へと移動した。まだ何が起こったのか把握しない監視者が三人いた。

舞台裏で外国人の少年少女を監視していた男達へ音も無く歩み寄った久重は予め闇に慣らしていた片目からの情報を頼りに拳銃を取り出していた男の鳩尾に拳を打ち込んだ。

「がはッ!？」

仲間の苦鳴に驚いた二人が銃口を向けた時には、姿勢を低く保った

まま突進していた久重の拳がもう一人の鳩尾を打ち抜いている。

「がッッ」

やっと慣れてきた目で仲間を打ち倒した侵入者を見つけた最後の一人が発砲する。

左腕を掠めた銃弾に怯む事なく、久重が低姿勢から全力で膝蹴りを放つ。

「」

ゴチュリ。

男の下半身から聞こえる男には耐え難い音に顔を顰めて、久重は男達が落とした銃を舞台へと蹴った。

銃声に恐慌を来たした客達が扉の方へと殺到しているのか。

悲鳴とざわめきに包まれる暗闇がやっと本来の意味を取り戻したように異様な気配を醸し出す。

人が売り買いされるといふ異質さを包んでいたオブラートが消え去った今、その場に残っているのは暴力と悪徳の気配のみだった。

「これでは警察にでも任せるか」

さっさと撤収しようと久重が親友の姿を探そうとした時だった。

「【I T E】起動」

小さな声に籠る殺意に久重は反射的にその場から飛び退いた。

刹那、久重が今までいた場所が明滅した。

瞬時に治まった光が何だったのか解らない久重の背筋に冷たいものが走る。

理解できない致命的な何か。

それを本能的に感じ取った久重がその場から舞台へと疾走する。

「【I T E N D】Multi p l i c a t i o n R a t e 4。I n c r e a s e L e v e l 3」

久重の後を追うように立て続けに光が明滅した。

「【D e v i l l】A r m o r y y o r i 項 目 M a r t i a l A r t を 検 索。 第 四 種 近 接 格 闘 武 装 D o w n l o a d」

久重が舞台から飛び降りると明滅が止まった。

(この棒・・・伸びてるのか?)

異常な状況を久重は冷静に受け止める。

1 少女は自分を敵だと思っっている。

2 少女は手が燃えて、燃えた手に握られた棒は伸びている。

3 少女は Fire Bag (たぶんはあの発光現象) を攻撃手段として認識している。

4 少女の言い分を聞く限り攻撃が当たったら死ぬ(かもしれない)。

5 少女から安全に逃げる術が今のところ思いつかない。

以下の条件から導き出されるその場での最善の方策を久重は瞬時に叩き出した。

「投降する。だから、オレの話聞いてくれ」

「馬鹿じゃないの?!」

思い切り悪態を吐かれて、棒が振り回される。

飛び退った久重のいた場所を棒が通り抜けていく。

少女の燃えていた手の光が消える。

次の瞬間、久重は一瞬少女を見失い、大量に何かの欠片が落ちる音を聞いた。

「い?!」

それが少女の振り回した棒の通り過ぎた後の観客達の椅子の末路だと気付いて、久重はそろそろ全員が脱出しそうになっている扉へと逃げるべきか悩んだ。

「ツツ」

久重が瞬時にその場から跳ぶ。

瞬間的に空間がまた明滅した。

「何ソレ?! 気配も何も無い攻撃避けるなんて薬でもやってるの?!」

「オレは基本的にノータッチオカルト・ノータッチアズ・ノータッチヤクの厳然とした普通人だ!!」

「そうやって混乱させようなんて!! 『連中』らしい手口!!」

「『連中』って誰だ!!」

明滅から逃れながら瞬間的に見える少女と棒を回避しつつ、退路を探す久重の耳に開けっ放しのドアの外から警察よろしくパトカーのサイレンが聞こえ始める。

「く、警察にだってまだ息が掛かってない場所くらいあるんだから！！」

「何か大事になってくれてるようでまったく嬉しくない予感だチクシヨオオオオ！！」

涙目で回避行動を取りつつ久重が何とか少女を取り押さえようとした時だった。

銃声が響く。

「あうツツ！？」

弾かれたように少女が倒れた。

「何の騒ぎかと思えば、やはり貴女でしたか。ソラ・スクリプトウーラ」

突如、電源が回復し当たりに明かりが戻る。

「ッ、おい！！」

久重の目の前で少女の金髪が血に塗れていた。

「ター・・・ポーリ・・・ン」

少女はどう考えても致命傷だった。

出血する胸元から後から後から血が溢れていく。

「気をしっかり持て！！　すぐ救急車を呼んでやる！！」

少女の傍に膝を付いて久重が胸の傷を押さえながら声を掛ける。

「どうやら逃避行も此処までのようです。【D1】は回収させて頂きます」

舞台袖から白いスーツの青年が降りてくる。

普通の日本人然とした顔とは不釣り合いな白いスーツが薄暗い中で浮かび上がり、底知れぬ何かを連想させる。

「おい！？　テメエか！！　この子を撃つたのは！！」

「え・・・？」

「ソラ。彼はどういったお知り合いですか？」

「ま・・・さ・・・か・・・」

少女が死の間際に目を見開く。

「おや？ まさか、貴女の知り合いではない。という事は部外者？ はは、貴女も最後まで笑える人生ですねえ。関係ない人間と戦つてる最中に隙を見せるとは・・・く、く、く、いやいや、傑作にも程があるでしょう」

笑いを堪え切れないように青年が口元を押さえる。

「あ・・・ご・・・め・・・ッ」

少女が久重を見上げて喋ろうとして吐血した。

「いい！？ もう喋るな！！ すぐに助けが来る！！」

「で・・・ごめ・・・な・・・かん・・・け・・・」

「いい！！ 気にしてない！！」

「あ・・・」

少女は微かに久重の言葉に微笑んで、手から棒が零れ落ちた。

「さて、掃除も済んだ事ですし、貴方にも死んで頂きましょうか」

「おい」

「はい？」

薄ら笑いを浮かべていた青年が銃を久重の頭に付けて撃つたと同時、青年の顔が見事に歪み、体が数メートル吹き飛んだ。

「テメエは、クズだ」

白く握り締められた拳から血が滴り落ちる。

「はは、これは・・・どういう冗談で・・・私が傷を？」
何か酷く驚いている青年が見上げる。

「貴方は何なんですか？」

「オレか？ オレはただの通りすがりの何でも屋だ」

近づいてくる久重に対し、青年は構わず銃を連続で撃ち放つ。
計十五発。

しかし、弾丸が久重に当たっている様子は無かった。
弾丸は全て外れていた。

「銃弾が効かない？ いえ、これは、ッ?!」

立ち上がった青年の顔に渾身のストレートがめり込み舞台下へと激突した。

「これはいけない。さすがに未知数の存在との交戦は骨が折れる」
鼻がねじ折れ、歯が欠けた青年が己の状態を意に介した風も無く立ち上がる。

久重が疾走する。

まるでトラックが激突したような衝撃音。

最後の一撃を見舞われた青年が何とかその拳を両腕でガードして、舞台へと吹き飛ばされる。

ゴトリと立ち止まった久重の足元に何かが落ちた。

閃光。

「彼方のような得体の知れないモノと戦うのはご遠慮します。もしもまた会う事があれば、その時はお相手しましょう。では」

舞台からすでに消えている青年の足音が遠ざかっていく。

追いかけてよとした久重だったが、その時異様な臭いに気付いた。

「ガソリン！」

ハツと顔を上げた久重に雨のようなガソリンが降り注ぐ。

「くそ！？ 証拠隠滅は万全とか！？」

舞台袖で震えていた子供達の事を思い出し、久重が走る。

数人の子供達を見つけた時にはスプリンクラーで撒かれたガソリンに部屋の一角から火が回り始めていた。

久重が透明な箱の鍵を次々に破り、売り物にされていた誰もを走らせる。

避難させる途中。

客達の椅子の最中に倒れ臥した少女を見つけたが、完全に炎に巻かれていた。

「悪い」

久重は歯を食い縛って、未だに逃げ遅れている者の誘導を行う。

見る限り最後の一人を外に出した時点で扉の外に出た久重は扉を閉めた。

すでにビル周辺には紅いパトカーのサイレンが屯していた。大勢の足音が駆けつけてくる。

「この子達を非難させてくれ!!!」

銀色の衣服を身に纏う消防隊数人が駆け寄ってくると久重の言葉に頷いた。

そのまま隊員に先導されてビルの外に出た久重が上を見上げるとビルの一角から煙が立ち上っていた。

「くそ!!!」

助けられなかった少女の事を思い、久重が歯を噛み締める。

「君!!! その君!!! 今、ビルから子供達と一緒に出てきたね!!!」

警官の声に振り向いた久重は自分が多くの警官に囲まれている事に気付いた。

「ちよつと事情を聞かせてもらいたい。署の方までご同行願うよ」

完全に密室となった店内。

炎がうねり、全てを呑み込んでいく。

血に塗れた少女の死体もまた燃えていた。

しかし、燃えているにも関わらず、少女の体には焦げ目一つ付いてはいない。

少女の前髪が炎の熱で炙られて揺らいだ。

髪に今まで隠れていた額付近に僅かな輝きが灯る。

少女の額に文字が浮かび上がった。

【ITE】Automatic Control。
Lost Part Activate。

【ITEND】Restart。

周囲の炎が急激に静まり始める。

その熱量はただ一点へと吸収されていく。

少女の負った傷へと。

G I O N E T C o n n e c t i n g

Channel Police Radio。

【あーこちら233。本件の重要参考人と思われる青年一名を確保これより移送する。名前は本人によると外字久重。二十四歳。來邦大学大学院一年生。尚、現場での　　】

「・・・ひさ・・・しげ」

その日、商業ビル群の一角で起こった小火騒ぎは比較的小規模で収束した。

火の手は何故か急激に弱まり、二時間後には鎮火。

火事における犠牲者は零だった。

ただ、不思議な事に店内の一角だけが不自然に焼け残っていた為、現場検証が引き続き行われている。

そこにはもう少女の姿は無かった。

第二話 謀略の読み手

第二話 謀略の読み手

物語には小道具が必要だと知る者ならば、その光景をこう表したかもしれない。

舞台装置としての神。

全てを終着させる【造られた神々】（デウス・エクス・マキナ）の墓場。

古びた劇場の最中、地に落ちた面と衣装が散乱している。

雄々しく優雅に人間臭い愛と欲望に満ち溢れた神々の衣装は安っぽく、生地も飾りもおざなりな出来だった。

『ターポリン』
舞台の上で一人。

頭を下げている青年がやっと散乱した塵の上で頭を上げた。

「はい。ここにあります」

白いスーツ姿の青年は何処からともなく響く合成音声に畏まった。

『首尾は？』

「ソラ・スク립トゥーラの処分を完了し、現在は警察に【D1】の回収を急がせています」

『そうですか。無能の烙印は避けられませんか』

「それはどういう事でしょうか？」

『【D1】が稼動しています』

「まさか？ 確かにこの手で胸部に致命傷を負わせましたが」

『どうやらソラ・スク립トゥーラは【D1】を完全に取り込んだようですね』

「生体融合実験は未だに成功しては……」

『ジオネット上で【D1】の活動再開と同時に探査プログラムからの発信が途絶えました。変異した【D1】はバックアップが起動し

たと考えられます』

「では、ブラックボックスが開いたと？」

『ええ、完全な形でプログラムが甦れば、我々が施したロックは消失するでしょう』

「【D1】の機能が完全に戻る事になれば……」

『その事態だけは避けなければなりません。ターポリン』

「はい」

『二個中隊を貸し与えます。ソラ・スクリプトゥーラの処分を最優先に』

「アレは如何しますか？」

『アレと【D1】は諦めて構いません』

「よろしいのですか？」

『他のオリジナルロットの解析が遅延するのは避けられませんが、致し方ありません』

「了解しました」

青年はその場に背を向けて劇場の外へと歩き出した。

『……悪魔が笑っていますね……これは……』

声途切れた劇場にはもう何の気配も残ってはいなかった。

警察署を後にするクーペの後部座席で久重は空ろな瞳で虚空を見つめていた。

「……」

「随分とご傷心のようにけど、どうかしたのかい？」

アズの声に答えは返らない。

「もしかして、行ったら悪徳の限りアンアン喘がされる可哀想な子が一杯いたとか？」

楽しげなその無神経極まる発言に久重の手がすつと伸びた。

胸倉が今にも事故を起こしそうな程に強く掴まれる。

「知ってたな」

質問ではなく確認。

「知ってたとしたら？」

「オレはデメエを……」

「許さないなんて言葉だったらガツカリするよ。久重」

「何？」

「君には何が出来た？ 君はただの便利屋だ。警察でも無ければN
GOでもない。精神科医でも無ければ、消防士でもない。君が出来る事は潜入して探って場を引つ掻き回す事だけだ」

「……?!」

「君が怒るべきは世の悪徳であつて僕じゃない。でも、世の悪徳に君は無力だ。怒るだけなら誰でも出来る。いや、殆どの人間はそれしか出来ない。君がどんなに強くても、君はただ強いただけだ」
久重の手の力が緩む。

「今日だつて世界の何処かじゃ大勢が不幸な目にあつてる。親に売られ、兵隊に浚われ、乱暴され、薬漬けにされ、兵隊にされ、同じ民族を殺し、病気になるれば棄てられ、ボロボロになつて死んでいく。貧困と格差と差別と宗教と憎悪と多くの悪徳が今日も誰かを呑み込んでいく。だろう？」

久重の手がダラリと下げられた。

「それでも君は怒るんだろうさ。君の心は真つ直ぐで、折れても折れても真つ直ぐで、君を傷つけてばかりなのに」

「解つたような口を利くな……」

「久重。君は一人の少女を救えなかつたらしい。だから、君は悔やんでる。心で泣いてる。けれど、それは無意味な感傷だ。少女の人生で君はたった一欠けらの最後に過ぎない。悲しみも苦しみも痛みも君は癒してやる事が出来ない。少女の命すら助けられない。それが君だ」

「オレは……!？」

久重の手がゆつくりと白く白く握り締められた。

「君には出来ないことがある。君には助けられない人がいる。偶然、

君は出会ってしまったただけだよ。自分の手の届かない人に。忘れるといい。殆どの人間はそうやって生きてるんだから」

「オレを勝手に決め付けるな」

力なく頂垂れる久重が吐き棄てるように呟く。

「着いたよ」

久重が顔を上げるともう安アパートの前でクーパーは止まっていた。車を降りた久重が少しだけ躊躇してから窓を叩く。

ウィンドウが下り、怪訝そうな顔のアズに対して久重は一言だけ告げた。

「……送ってくれて……ありがとう」

少しだけ驚いた顔をしてアズが小さく首を振る。

「警察から釈放させた分は付けておくよ」

「金取るのか」

「ああ、それが僕のやり方なのさ」

僅かに微笑んでアズはクーパーを発進させた。

僅かに軽くなった心を引きずりながら、久重は階段を上る。

自分には他に何が出来たのだろうか。

自室のドアを開ける。

そのまま靴を脱ぎ散らかして畳みの上に倒れこんだ久重は天井を見上げる。

「……オレには出来ない事がある……か」

どんなに怒っても少女を生き返らせる事はできない。

どんなに怒っても少女を救う事はできない。

「格好悪くて死にたくなる。まったく……」

独り言の余韻すら消えて、静寂に耳を傷めながら、久重は瞳を閉じた。

そうして、やがて眠りへと誘われていく。

(オレには誰も救えないのか……)

答えはもう出ていた。

明確な回答が映像となって久重の脳裏を巡っていく。

『泣かないで』

不意に響く声に夢現を漂う久重の意識が反応した。
ゆっくりと瞼を開ければ、滲む世界は紅。

いつの間にか夕方になってしていると気付く。

起き出そうとして、紅の世界に金色が紛れ込んでいる事に気付く。

ぼやけた視界がゆっくりと焦点を結び始めて、久重は初めて、自分が心に大きな傷を負ったのだと知った。

見下ろす瞳。

緩められた口元。

ほっそりとした手。

久重自身、そんなものを見てしまえば、認めざるを得ない。

自分は少女を救えず、傷つき、幻想に逃げてしまっくらい、疲弊しているのだと。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

紅の静寂に温もりが入り込んだ。

頭を撫でる手。

「!!!!」

完全に目が覚めて久重が起き上がり、振り向く。

「あ・・・・・・・・」

金色の髪をした少女。

何故か、命のやり取りをして、何故か、殺されてしまった、守れなかったはずの少女。

「・・・・・・・・えと・・・・・・・・ひさ・・・・・・・・しげ？」

そんな少女を前にして久重はただ呆然とするしかなかった。

「戒かいと十じゅうささ〜〜ん。ちょっとはここっちにもネタ回してくださいよ〜」

警察署の一角。

資料の山に埋もれるようにして存在するデスクに近づいた三十代の女が画面に齧り付いて文書を作成している男にベッタリと甘えた調

子でしな垂れかかった。

「うつせえ。ちよつと黙つてろ」

「そんなどうでもいい報告書なんて書いてないであたしとお話しましょ？」

「手口が記者クラブ時代より悪辣になつてねえか？ 了子」

「今はフリーですから」

今年で定年を迎える佐武さたけ・かいと戒十六十五歳にとって女はハイエナより達の悪い友だった。

了子と呼ばれた女は佐武にとってみれば、自分の子供の世代で、どうしても何処か甘くなつてしまふ部分がある。

記者クラブ時代の女はまだ本当に佐武にとって子供と思える程に若かった。

それが今では長年連れ添つた伴侶以上に色々ややこしい関係になりつつある。

ネタをくれとせがまれたり、ネタをくれとせがまれたり、ネタをくれとせがまれたり。

友人だからとお歳暮を毎年毎年贈ってくるわ、色仕掛けが似合う歳になるわ、ピンポイントで佐武自身の情報が筒抜けになっているわ。化粧が若い時より濃くなつた以外はまだ二十代でも通用しそうな美貌が懐いた猫みたいに擦り寄ってくる光景は警察署内でも見過ごされてしまう程に常態化している。

「不祥、羽田了子はた・りよこ。上司のセクハラに耐えられず辞職して、今はフリーですから」

「そこんとこだけ強調すんな。セクハラに対してビンタ一発お見舞いして慰謝料ふんだくつた奴が言う事じゃない」

「このお仕事、お金の為でもあるけれど、自分の為でもあるんですよ？ ネタを追う。良い記事が書ける。世間が少しだけ、ほんの000000パーセントくらい良くなる。私、超満足。良い事づくめじゃないですか！」

「真実を探求するかフリージャーナリストみたいな事を言い出さ

んところは買つてやる」

「それでネタありませんか？」

溜息を吐いて佐武はデスクを発った。

お供にはありがたくない良子を子機よろしく引き連れ、近くの公園まで散歩を始める。

警察署に出入りする老若男女の署員達が微笑ましそうな顔で二人を見送った。

「で、で、ネタはあるんですか!!」

「あゝどうだったかな。この頃物忘れが激しくてよお」

「そうなんですかDHAがいいらしいですよDHA」

「ホント、そういう旧過ぎるネタだけは持ってるのな。お前」

「社の書庫で時々昔の記事漁って読んでますから!!」

「何してるんだよ？」

「年目の真実的なネタが無いかと暇潰ししてるだけですけど？」

「…….…….もういいわ」

「そうですか。それではさっそくネタを頂戴します」

「マグロでも食ってる」

「絶滅危惧種で今じゃ一皿二千元。奢ってくれるなら頂きます」

「解った。お前と話していると頭痛がしてくらあ。ネタやるからとつと今日は帰れ」

キラキラと子供のように瞳を輝かせる三十代のフリージャーナリストに頭痛を通り越したものを覚えつつ、佐武はタバコを取り出して啜えた。

無論、火は付けない。

「昨日のビル火災あんだろ。あれの出火の原因は人為的なもんだ」

「ネタキタ　!!」

突っ込みも入れずに無視して今では一箱四千元するタバコを噛みながら佐武が続ける。

「ちなみに放火とかそんなんじゃない。証拠隠滅ってやつだ」

「証拠隠滅キタ　!!」

「あそこは人身売買の拠点だった」

「それって近頃話題になってる華と韓の非合法風俗に関係ありますか？」

「いや、裏ルートで入国させた連中を働かせてるとか、そういうのじゃない。移民政策であぶれた連中が報告してない未戸籍の人間をターゲットにした専門店だったらしい」

「らしいってまた戒十さんにしては曖昧ですね」

「しょうがねえよ。本庁から来た奴らが主軸で捜査が進んでやがるからな」

「それでそれで!!」

「こつからはオフレコにしとけよ」

「イエスシーキャン」

「その場所で商品にされてた連中を保護した際に怪しいのを引っ張ってきたんだが、あっさり釈放された」

「はい？ それって重要参考人って事ですよ？」

「ああ、だが、上の連中はバツサリ捜査線上からそいつを切り捨てやがった」

「どついう裏が？」

怪訝そうな子に佐武が解らないと首を振る。

「ただ、問題はそれだけじゃねえ。あいつらが何故か執拗に現場を漁っててな。とにかく虱潰しに何かを探してるみてえなんだよ」

「何かを探している？」

「他にも不可解な点が幾つもある。さっきの重要参考人だが、店にいたのは確かだが、別に店を利用してたわけじゃねえらしい。それどころか保護した連中の話だと助けようとしてくれたとか。そいつの証言だと女の子が一人死んでるはずだとか」

「死体って事は殺人も絡んでますか。だとすれば、何故釈放されたんですか？」

「死体が出なかったからさ」

「は？」

「証言が丸っきりの嘘だったのか。あるいは死体が消えたのか・・・」

「これはまさかのミステリー路線!？」

「って事で、オレは帰る。お前もお前の巢に帰れ」

佐武が後ろを振り返った時にはもう了子の姿は影も形もありはしなかった。

「お前の方がよっぽどミステリーだっつーの」

佐武の声は暮れ始めた空に虚しく吸い込まれていった。

夕飯の匂いが家々から立ち上り、まるで平和という名を表したかのような黄昏時。

八畳一間で机と本棚しかない場所で、久重はジツトリとした汗を浮かべていた。

その前には少女が何処か済まなそうに正座して久重を真っ直ぐな視線で見上げている。

「その・・・」

ゴクリと唾を呑み込んで、その行為があまりにも周囲から誤解されそうであるという認識の下、久重は混沌とした内心とは裏腹に、明るい声でソラ・スクリプトウーラと呼ばれていた少女に声を掛ける。

「君は・・・どうして？」

冴えない一言はあまりにも多くの質問を含んでいる。

どうして此処にいるのか。

どうして死んでいないのか。

どうして自分の名を知っているのか。

どうしてどうしてどうして。

「謝り・・・たくて・・・」

会った時とはまったく正反対に大人しい少女が真摯な瞳で久重に向かい合う。

「私・・・勘違いして・・・それなのに・・・助けてくれようとしてくれて・・・だから」

「オレは別に……ただ、当たり前な事を」

少女ソラが久重の手を両手で掴んだ。

「ごめんなさい。ありがとう」

ソラが頭を下げた。

そして、頭を上げると立ち上がり、ドアの方へと歩いていく。

「さようなら……」

久重の勘は言っている。

その少女ソラに関われば大事になる。

問題が多発する。

関わるべきではない。

関われば、命にすら危険が及ぶ。

長年アズに使われている久重にとって、危機に対する防衛本能は絶対の信頼を置けるもの。

そうなる为核心したならば、それはもう現実に完全な危機と代わらない。

だから、久重は己の本能に従った。

「え……」

ソラの手を掴んだ久重は一言。

「命の取り合いをした仲だ。夕飯ぐらい食べてけ」

「あ……」

久重の手に籠る力にソラは俯けていた顔を上げる。

「でも……私……」

「それとオレはこう見えて危ない仕事も引き請ける何でも屋なんてのをやってる」

ソラが呆然として、慌てて首を振る。

「もし、何かに巻き込むと思ってるならもう遅い」

「ど、どうして？」

「あの白スーツ野郎にオレとお前の分はぶち込んでおいた」
「な!？」

ソラの手を離して、久重が台所へと向かう。

「わ、私……!?!」

慌てて止めようとするソラに久重がそつと人差し指で口を閉ざす。

「人の厚意は素直に受け取っておけ。それが世渡りの基本だ」

クシヤクシヤと金髪を撫でて、久重が台所に立つ。

「ちゃぶ台が横にあるから出しておいてくれるか?」

「……」

ソラが泣いているような笑っているような、そんな顔で久重の背中を見つめ、

「……はい」

玄関から部屋の中へと戻る。

黄昏時、どこからかチャルメラが響いた。

「あ」

久重が固まる。

「?」

「ちよつと一人増やしてもいいか?」

「??」

久重は冷蔵庫を背にケータイを取る。

その中身は言わずとも空っぽだった。

「で、正体不明の死んだと思ってた命の取り合い（ガチ）をした謎少女が部屋に来て、優しくも夕食をご馳走すると言い張った愚かで可哀想な外字久重君は、夕飯にする食材すら買えない有様でありながらも見栄を張る為に更なる借金をこの僕に申し込み、尚且つ食材の調達まで任せてくれたわけなんだね?」

胃酸で今にも解けそうな内心をグツと呑み込んで久重はアズのジツトリとした視線を背中に受けながら答えた。

「イエス」

「へえ、君にこんな冗談の才能があつたなんて僕もまだまだ君に対する研究が必要だと心底に感じているよ」

「HAHAHAHA」

食材を調理しながら白々しい会話が展開される。

「君にもロリコンなんて高尚な日本の精神が根付いてたとは。気付けなかった僕の負けだよ。今日の分は僕が支払っておくから」

アズの機嫌を損ねている要因が主に自分の女性関係だと理解している久重にとつて、「支払っておく」との文句は「君は命を大切に出来ないの?」という死刑宣告に等しい。

一頻り久重にプレッシャーを掛けたアズはちゃぶ台を挟んで座っているソラへと視線を向ける。

「【ただ聖書のみ】(ソラ・スクリプトウーラ)・・・か」

ボソリと名を呼ばれて、縮こまっているソラが更に身を縮こまらせた。

「久重の話を要約すると君は狙われている。狙われるに足る何かを持っている。そして、殺された。殺されたにも関わらず生き返った。あるいは死亡できなかった。更には【僕の】久重に会いに来てしまった」

「いつ、オレがテメエのもんになったんだよ!？」

「何か問題でもあるのかな。久重」

思わず突っ込んだ久重にアズの眼光が飛んだ。

怖気すら走らない、見られれば諦観しか持てなくなる視線に晒されて、久重が脂汗全開で調理に戻る。

「その容姿からしてゲルマン系かな。アングロサクソンの中でも血統書付きなレベルだ。所作に美しさがある。上流階級だね。その歳で日本語がペラペラって事は頭は優秀だ。男の部屋で羞恥心丸出しだからまだ男性経験は無しかな。キョロキョロ視線が動くのはこういう室内が珍しいから。つまり、少なくともこの国でもそれなりの場所に住んでいたわけだ。眉間の筋肉の動きからして近頃は怒ってばかりいたんじゃない? 服装のデフォルトが某有名ブランドのワンピースだけど、それは近頃発売した奴だ。その状態からして買ってきたばかりだろう。キャッシュの持ち合わせが外国人に多くあるとは考えにくいから支払いはカードだ。更に言うと君はどうしてそ

んな事が僕に解るのだと不安に思ってる。ただの推理にしか過ぎないけれど、当たってる？」

「それくらいにしておけ」

ペチンと久重がアズの頭を叩く。

「君が知りたい事を教えてあげただけだよ。久重」

「人に知られたくない事まで晒すのは卑怯者のやる事だ」

「それじゃあ、一番重要な事だけ教えておこう」

「なに？」

料理がちゃぶ台に置かれる。

カレーだった。

「久重。この子は間違いなく君に思慕の情を抱いているよ」

「ば?!」

「し・・・ぼ・・・?」

ソラが首を傾げ、久重が顔を紅くした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・?!!」

意味に気付いたソラも顔を急激に紅くした。

「ついでに言うとな猫も被ってる。ちょっと考えられないくらいの優良物件だけど、手を出したりしないように」

「テメエはどうしてそう場をカオスにぶち込む天才なんだ!？」

「ふふ、こんな事言ってるけど、内心少しだけ嬉しいのさ」

「え?」

「そこ!？」

「無駄話をしない!!」

そ知らぬ顔でカレーを突き始めるアズにそれ以上何も言えなくなっ

て久重が自分の分をちゃぶ台において座る。

「こいつの話は真に受けなくていい。とりあえず飯にしよう」

「頂きます」

久重が手を合わせる。

「いただきます」

ソラもそれに習った。

静かに始まる食卓にカチャカチャと音が響く。

「それで久重。これからどうするつもりなんだい？」

「Cコースつてのはどれくらい掛かるのか聞きたい」

アズと久重のやり取りにソラが疑問符を浮かべる。

「ざつと四千万」

「!？」

ソラがアズの語る金額にビクリと体を震わせる。

「……………付けておけ」

「君は優し過ぎるよ。久重」

アズが溜息を吐いた。

「あ、あの、何を話して……………」

「良かったね。ソラ・スク립トゥーラ嬢。君の身の安全の値段を

久重が僕に払ってくれるってさ」

ソラが目を見張る。

「な、何でそんな?!」

「それは君に死なれたのがよっぽど堪えたからじゃないかな」

久重がアズを睨み付ける。

口元を押さえてアズが話題を変える。

「ちなみにこのコースはジオネットからの完全遮断と戸籍の抹消その他の個人特定情報の完全秘匿を目的にして僕が開発した代物で、捜査機関や公安が全力でも追跡は不可能。要するに君は目視以外の情報を完全に失う事になる。その上で生活していく為の環境の全てを整えるからお値段的にも馬鹿高い」

ソラが久重を見上げる。

久重は頭を掻いて、目を逸らした。

「あー、袖振り合うのも他生の縁ってな」

「君が気に入ったから助けたいらしいね」

翻訳したアズの言葉に信じられないといった面持ちでソラが首を振る。

「そ、そんなのダメ!!! 私、他の人にこれ以上迷惑なんて掛けられない!!!」

思わず立ち上がったソラの手からスプーンが零れる。

そのまま立ち去ろうとするソラの手が大きな手で掴まれる。

「オレは君を助けられなかった。その代償だと思ってくれればいい」

「そんな?! だって、全部私の勘違いで!! 私には彼方を殺そうとして!! それで勝手に巻き込んで!! なのに!?!」

手を振り払おうとしたソラの肩を掴んで久重が視線を合わせる。

「オレは、君を助けたい。だから、助ける。これは君の為じゃない。オレの為なんだ」

「オレの為……?」

「ああ、オレのただの我侫だ。君を救えなかったオレが、自分が救われたいから願いだだけの事。君がもしもそれを本当に嫌だと思ふなら断ってくれていい。でも、その場合はオレがオレの責任でオレの力でオレの都合で君を勝手に助ける」

「私、そんな、そんな価値なんて!!」

うるたえるソラにアズがお茶を啜りながらニヤリとした。

「ご愁傷様。こうなったらこの年中金欠男はテコでも動かないよ。」

犬に噛まれたとも思っただけで諦めるといい

「私……私……」

ポロポロと零れ始める雫が頬を濡らした。

「まずは夕食を済ませてからこれからの事を話そう」

久重の優しい声にアズがやれやれと肩を竦める。

「まるで【できちゃったの】とか言われた男のいいそうな台詞だ」

「」

ソラが涙を零しながら紅くなった顔を伏せた。

すっかりと夜が更けた八畳間からアズが立ち上がる。

「とりあえず、この子の身柄は此処に置いておくよ。今説明したようにに必要な偽装と戸籍、書類は三日で何とかする。ちなみに此処に居候する【聖空】（ひじり・そら）のストーリーはこうだ。君はロンドン留学の経験がある久重がお世話になった日系の大学教授の娘

で夏休みを利用して遊びに来ていて、日本での保護者である久重の自宅にホームステイしている」

「ああ、解った」

「Cコースは最低でも二か月以上準備が必要になる。準備が出来るまでの仮の身分だけど気を付けるように」

久重が頷く。

アズがソラへと視線を向ける。

その視線は今までの遊び半分のものではなかった。

「ソラ・スクリプトウーラ嬢。僕は君の過去に付いて一切の調査を行わない。君が何処の出身で、どうして追われていて、何を秘めているのか。依頼を受けた以上、追求する事は無い。ただ、それは久重の身に何も無かった場合の話だ。僕は君を信じていないし、君の何かしらの事情も斟酌しない。僕の債権者である久重が死ぬという事は君と久重に関する全ての負債を償還できないという事だからだ。もしも、久重に何かあった場合、君がそれでもものうと生きてる場合、僕は君が負債を償還し切るまであらゆる方法を使って稼がせる。君が『潜伏先』として使ったあのクラブで行われていたような事を含めてだ」

アズの念押しにソラが真っ直ぐな瞳で頷き返す。

「後、僕の久重にちよっかいを出したら僕も本気を出すからそのつもりで」

「だから、テメエのもんじゃないって」

頭痛を抑えるように久重が片手で頭を押さえる。

「それじゃあ、また明日」

ドアが閉まる。

まるで嵐の後。

静けさが戻ってきた部屋に互いの呼吸音だけを認めて、久重がオロオロし始める。

「そ、そろそろ寝るか？」

「ひゃ、ひゃい！！？」

完全に意識してしまっているソラが頷く。

まるで沈黙を嫌うかのように久重はパパッと布団を敷き終えた。

「悪いがオレの布団しかないんだ。これでいいか？」

「は、はい。で、でも、その、ひさ……しげ……さんは？」

ソラの問いに久重が首を振る。

「オレは別に何処でも寝られるからな。布団は使っている」

「で、でも!？」

「それと口調も……これからしばらくは一緒に暮らす事になるんだ。遠慮とかしなくていい」

「で、でも!！」

「でも、は無しだ。オレも君の事をソラって呼ぶ。だから、君もオレの事は呼び捨てでいい」

ソラはしばらく迷っていたがコクリと頷いて、躊躇いがちに名前を呼ぶ。

「ひさ……しげ……これでいい？」

「ああ、十分だ。ソラ」

「うん」

ソラの天真爛漫を絵に描いたような笑みに久重も思わず笑みが零れた。

明かりが消える。

もぞもぞと布団の中で動いていたソラが壁に寄りかかって瞳を閉じた久重の方を向く。

「ひさしげ」

「何だ？」

瞳を閉じたまま、久重が答える。

「ひさしげは優しいわ」

「そんな事ない」

「嘘。だって、普通はこんな事してくれる人なんていないもの」

「言っただろ？ オレの為だ」

「人を助けるのが？」

「ああ、そうだ」

「日本人つてもっと慎ましい人達だって思ってた」

「難しい単語知ってるな。慎ましい・・・か」

「私の日本語。何処か変？」

「いや、今の日本に慎ましいなんて使う奴はいないと思ってな」

「そうなの？」

「オレもアズもソラよりは慎ましくない」

「そ、そんな事・・・」

照れた声のソラがもぞもぞと布団を口元まで上げる。

「いや？ 一応、慎ましくないとこもあるか。勘違いで戦ったし」

「あ、あれは！？ ちょっと、その・・・ひさしげが強くて・・・」

絶対追跡者だって思ってた・・・」

「オレ、強いかな？」

「普通の人は銃を持つてるプロを倒せたりしないわ」

「武術つてのは肉体労働じゃなくて思考作業だつてのがオレの持論なんだがな」

「どうして？」

「自分の体なんだから自分の思うように動かせて当然。自律神経や副交感神経だつてある程度は恣意的に操作できるのが普通だ」

「それって普通？」

「銃だつて射線上にいなければどうって事ない。人間が引き金を引く時間は狙いが定まった時こそ早いけど、狙いも定まってない時は躊躇するのが大半だ。ちなみに真正面の至近距離でもなければ狙いも定まってない銃で負傷するなんて有り得ない。そもそも拳銃じゃ致命傷を負わずには一発二発じゃ殺傷能力が足りない。頭や心臓を狙い撃たれない限り」

「ひさしげが玄人なのは理解したわ」

「難しい漢字知ってるな」

「ひさしげって危ない仕事をしてる人なの？」

「オレは大学院生だ。何でも屋は借金返済の為の副業だ」

「ダイガクインセイ？」

「簡単に言うと Graduate Student」

「博士になりたい？」

「オレの場合は色々と事情があるんだ」

「事情……」

「そろそろ寝ないと明日起きられないぞ。今日はここまでにして寝た方がいい」

「うん。オヤスミナサイ。ひさしげ」

誰かにそんな言葉を掛けられて眠るのはいつぶりだろうか、そんな感慨を覚えながら久重の意識は落ちていった。

第三話 証左無き仕掛け

第三話 証左無き仕掛け

【明日を夢見て集え！！】

海外留学のポスターが張り出される構内。
ストローを啜えてミルクティーを吸い上げている金髪少女ソラは外国人が多数往来する廊下を見つめながら目立たないようにラウンジの端で約束の時間を待っていた。

(ひさしげ。まだかな?)

今はソラの保護者と化している久重が学業を休学する旨をソラに持ちかけたが、ソラはそれを断固拒否し、自分の為に何かを犠牲にしないで欲しいと久重に懇願したからだった。

(.....)

朝食後、一人で部屋に置いておく事に不安を感じた久重が多数の留学生を受け入れている自分の大学ならば目立たないはずだとソラを連れ出していた。

「う~~~~~」

久重の通う大学構内の風景にウズウズと体が好奇心に負けそうなソラが立ち上がるうとした時だった。

「これはこれは。学生の妹さんかな？」

「!？」

ビクリと体を震わせたソラが振り向くと大柄で小麦色の肌をした男が金髪を掻き揚げたところだった。

「.....」

警戒心マックスとなったソラが視線を険しくする。

男は四十代で大学の講師をしているのか白衣を着込んでいた。

「子猫ちゃん。君の飼い主は誰だい？」

嫌味の無い口調で爽やかに聞いてくる無礼者にソラが口を開く。

「彼方、ステーツの人？」

ノリで看破したソラに男が頷く。

「如何にも。そういう君はクイーンズの人だ」

僅かに日本語に残る訛りを感じ取られたのかとソラが口を引き結んだ。

「警戒させちゃったかな？」

「初対面の年下を子猫ちゃん呼ばわりするなんて命知らずだわ」

「俺の母国ならな。此処はそういうのに寛容な国さ」

ソラが男の瞳に気圧されて、反射的に後ろに下っていた。

男の持つ雰囲気。

覇気のようなものがソラにジリジリと焦りを生む。

「彼方、ライオンみたい」

「俺がライオン？ はは、冗談は止してくれ。これでも大学一の平和主義者で通ってるんだ」

寧猛な獣に睨まれたような圧迫感を感じてソラがラウンジから逃げ出そうとした時だった。

ポフツとソラの頭が何かに当たる。

「どうかしたか。ソラ？」

「ひさしげ！！」

思わぬ救い主の登場にソラが猫よろしく久重の背中に隠れた。

「ひさしげ。そこにライオンがいるわ」

久重がソラの指差した先にいる男を見つけ、頭を掻いた。

「んん、確かにライオンって言えばライオンか？ 全体的な輪郭が

・・・」

「お前のお友達か久重！？ それはそれはとりあえず赤飯でも奢るか！？」

男が大げさに喜びH A H A H Aと笑う。

「ひさしげ。このライオンと知り合いなの？！」

驚くソラに久重が首を振る。

「知り合いになりたくない知り合いのナンバーツー。簡単に言うと

オレの大学での上司だ」

「ふえ?!」

ソラが素っ頓狂な声を上げる。

「そういう事だ。子猫ちゃん」

男が豪快に笑った。

「冶金学の博士。ステイブ・ライオネル・ジュニアとは俺の事だ
ZE」

無駄なポーズを取りながら変人はソラにキラリ と白い歯を見せた。

変態チックな動きでポーズを決めたステイブの研究室をソラは久重の背中に隠れながらも尋ねざるを得なくなっていた。

「それで久重。今回のプロジェクトから外れたってのはどういう事なんだ?」

「やる事が出来た。それだけだ」

ソファに座りながら、出されたコーヒーにミルクを大量に投下してフーフー冷ましていたソラは二人の会話に耳を澄ます。

「いつもの借金返済か? だが、利息くらいは返してるんじゃないか?」

「ざつと四千万程追加になった」

「ほう? 使い道は?」

ソラがコーヒーを掻き回すスプーンを止める。

「アンタに教える事じゃない」

ステイブが「ふむ」とコーヒーを嚙る。

「大学院を休学するわけじゃないってのはいい。論文はもう大学時代に出してなかったやつを三つ提出済みで審査を待ってるだけだから問題も無い。だが、俺の研究にはお前が必要だ」

「オレは別にアンタの研究室から出たわけじゃないし、あくまで研究への参加は自由って事になってたはずだ」

「そんな事は解ってるさ」

「なら、何が問題だ?」

「解析結果が出た。ほら、これだ」

手渡された紙を見つめて久重が溜息を吐く。

「お前がこのプロジェクトから抜ければ、これからの研究に十年は掛かる。研究が此処で減速すれば、プロジェクトの規模は縮小されるだろう」

「だが、アンタと研究室の連中だけでも出来ないわけじゃない」

「研究が完成すれば各方面からの資金提供と特許の使用料も入ってくる。特許の二つ三つに関してはお前の名前で登録しても構わない」「随分と豪気だな？」

「それがお前を引き止めるに足る材料なら、その程度の利権ぐらい手放すさ」

それからの沈黙が長かったのか短かったのか。

ソラが久重の顔を見上げた時にはもう答えが返されていた。

「悪いが降りる。オレは別に金持ちになりたいわけじゃない」

「世の中にはそんな台詞を吐けない人間が五万という」

「アンタがオレを特別視してくれるのは光栄だと思ってる。今までの恩もある。でも、それはオレの人生じゃない。アンタの人生だ。」

オレの人生じゃなくてアンタの人生を賭けるべき問題だ」

「天才と秀才の違いが解らないわけじゃあるまい？」

「スポーツの才能があつたからってオリンピックに行くかどうかはそいつ次第なはずだ」

「この我侭小僧め」

ステイブが仕方なさそうに笑う。

「ああ、アンタに扱かれて育つたからな」

「なら、行け。お前の進む道がオレの研究より凄かったら、その時は祝福してやる」

その言葉に頭を下げて久重はソラを伴い研究室を後にした。

大学の廊下を歩きながら、ソラが久重の袖をクイクイと引っ張る。

「ねえ、ひさしげ」

「何だ？」

「断つて良かったの？」

「ソラが気にする事じゃない」

「気にするわ。気にならないわけない……だって、協力してれば借金返せたかもしれない。私の事なんか放つて置いてもだい

」

それ以上ソラに久重は言わせなかった。

唇の上に人差し指がそつと乗せられる。

「今現在、オレの人生を賭けるべき問題は此処にある」

コツコツと人差し指がソラの額を突いた。

「ひ、ひさしげ……」

照れくさそうにソラが視線を逸らす。

「とりあえず、これからアズと合流する」

「うん」

二人の足音は講義の時間となつた誰もいない廊下に重なり合つた。

久重とソラが大学の正門を出るとクーペが一台止まっていた。

運転席からヒラヒラと手を振るアズが二人の様子を見てニヤリとする。

「おい。何だその笑み？」

久重が助手席にソラが後部座席に乗り込むとクーペが発進した。

「いや、仲睦まじいとは良き事かな、とね」

バックミラーに移つたソラのそわそわした様子にアズが目を光らせる。

「で、そつちの首尾は？」

「上々だよ。色々と生活に関するマニュアルも組んでおいたから。

ソラ・スク립トゥーラ嬢。君の足元にあるバッグを開けてくれないかな？」

「は、はい」

ゴソゴソと足元のバッグを開けたソラが？マークを頭に浮かべた。

「出して着てみてくれるかな」

アズに言われるままソラがバッグから取り出した灰色の外套を着込んだ。

袖が余り手先が隠れるくらいの大きさにソラが戸惑う。

「あ………」

着込まれた外套の表面に自動で不規則な文様が浮かんだ。

「夏にそれは無いだろ?!」

突っ込みを入れた久重にソラが驚いたように首を振った。

「ひさしげ。これ凄く涼しいわ」

「涼しい? それが?」

「ふふん。久重。君は僕を侮り過ぎだよ」

「何なんだ。あのコート?」

「都市迷彩仕様の軍用品」

「ぐ?! おい。何か物凄い犯罪の二オイが………」

アズがダツシユボードから書類を取り出すよう久重に促した。

数枚の紙の束を取り出した久重がTOP SECRETと書かれた一枚目に顔を引き攣らせる。

更にはその紙に描かれている何処かの米印な国の軍事機関のマークに汗を浮かべた。

「………おい」

「ちなみに正規品じゃないから大丈夫」

アズが物品の入手方法を得意げに話し出す。

「いや、僕に逃がしてくれて頼んできた米軍帰属の元特殊部隊員がいてね。金が無いって言うから何か金になるもん持ってないのか聞いたらソレをね。こうポンと」

「で、ただ夏場に着てて涼しいコートなんてのがどうして軍事機密なのか聞いていいか?」

「簡単さ。都市部で着てたらまず見つからない」

「は?」

「ひさしげ!!!」

「うお?!」

響き渡った大音量に久重が驚く。

「ソ、ソラ。どうかしたか!？」

「さっきから話しかけてるのにどうして無視するの?!」
機嫌を損ねた様子でソラがコートを脱いだ。

「いや、話しかけてた・・・か？」

「話しかけてたわ。ちよつと声小さかったかもしれないけど、なに・・・」

「わ、悪い。気付かなかった」

「そんなにその人とお話するのが好きなんだ。ひさしげ」

何故か半眼で睨まれ、久重が慌てる。

そんな久重とソラの様子にクツクツとアズが笑った。

「効果あるだろう?」

「な・・・そのコートの?」

「簡単に言つと簡易のパワードスーツみたいなものさ。内部温度の調節と防弾性、耐火性、帯電性。それはデフォで付いてるおまけ機能。一番の売りは臨床心理学の研究で出来た人の意識に視覚で干渉する心理的迷彩つてのを真面目に付け加えたところかな。更には最近になって実用化した光学迷彩も装備。超薄型のバッテリーと表面に仕込まれた太陽光と熱から発電するシステムで充電も経済的」

楽しげに話すアズの言葉にソラも久重もマジマジと外套を見つめた。

「それを着て全迷彩機能を使う限り、監視カメラにも違和感程度しか映らない『怪奇、真夏にコートを着る少女』とかになれるって寸法さ」

アズの得意げな顔に久重がげっそりした。

「おい。得意げになってるとこ悪いがそのコートのまま行き倒れたらどうする?」

「ずっとコートが壊れるまでそのままかもね」

微笑むアズが良い事を思いついたとばかりに手を打つ。

「そんなに心配ならコートを着ている間は手でも繋いだら?」

「な!？」

「ふえ?!」

二人同時に動揺する様子にアズがジツトリとした視線で久重を見る。

「ロリコン」

「ぐふ?!」

思わぬダメージに久重が呻いた。

それに構わずアズが続ける。

「ちなみに心理的な迷彩って言っても大した能力じゃない。そのコート
の文様を見た人間が次ぎに見たモノを強く印象付けられ、コートを着た人間を見たって記憶が薄れるとかそういう話だったはずだから。記憶自体はあるけど大した記憶として残らないって言うのが正しい効果かな」

「だが、ずつと透明人間になってるわけにはいかないだろう? 監視カメラだって都市中にある」

何とか心理的ダメージから回復した久重が訊く。

「光学迷彩機能を使わない場合に監視カメラなんかには映ると隠しようはない。けど、都市中の監視カメラに関してはジオネット経由で細工し始めたから、こちらが指定した、あるいは君達が指定した区域での活動なら特定の時間帯は問題無く外出OKだよ」

「凄い……」

アズの説明に正直に感心するソラがアズの横顔をマジマジと見つめた。

「で、今日はこれだけか?」

「君が昨日僕に借金した額を言ってみてくれるかな久重」

「とつても一杯ですはい」

久重が額に汗を浮かべて笑った。

「君にプライベートな時間なんてあると思ってる? きつちりと体で払ってもらって予定立てておいたから。ちなみに借金の完済までざつと単純計算で五十年。これからも末永く君には働いてもらつよ」

「お、お手柔らかに」

ソラが二人のやり取りに暗い顔をする。

自分のせいで久重にどれだけの借金を背負わせてしまったのか。そう考えるだけでソラの心は沈んだ。

「それじゃあ、まずは猫探しでもしてもらおうかな。君も手伝うかい？」

「え……」

ソラが驚いた顔をする。

「君の借金は確かに久重が肩代わりした。けれど、君が協力するなら二人分の働きを差し引きして構わない」

「おい。アズ」

「僕はソラ嬢に訊いてるんだ。久重」

アズが久重を訴えを退ける。

「どうする？」

「やらせてください」

「聞こえない。もつと大きな声で」

「やらせてください!!!」

久重がソラの出した出会った時以来の声に驚く。

「決まりだよ。久重」

「いいのか。ソラ？」

久重の問いにソラが決意を瞳に秘めて頷いた。

「私、久重に助けられてばかりだった。だから、今度は私が久重に何かしたいの」

「……解った。これからよろしく頼む。ソラ」

「ッ、うん!!」

ソラの溢れる笑顔に久重は思う。

それは救えなかった後悔より、強く久重の胸に響く思いだった。

この少女にずっとこれからもこういう顔をしていてもらいたいと。

(これからが大変だよ。久重……)

アズが二人の様子にひっそりと目を細めた。

安アパートの一角。

外字との表札が出ている部屋の扉を前にして了子は溜息を吐いていた。

「いないのかあ。やっと見つけたのに……」

己の伝手と情報網を駆使して、ビル火災現場で確保された重要参考人である人間の名前と住所を突き止めた了子だったが、取材を申し込もうと意気込んでその男の住むアパートに突撃を掛けた結果は空振りだった。

生憎の留守。

居留守ではないかとしつこく扉を叩いたものの誰も出てこず。

アパートの管理人に話しを聞こうとしたがそちらも留守だった。

トボトボと萎れた様子で了子はその場を後にする。

「外字久重。二十三歳。來邦^{らいほう}大学大学院一年生。大学での専攻は位置情報利益学。近頃流行りのジオプロフィールトのスペシャリスト……か」

了子が調べ上げた経歴に「う〜〜ん」と唸る。

経歴は平凡なものばかりだった。

別に何かに突出しているわけではない。

それ以前に何か犯罪に巻き込まれるような経歴でもない。

それなのにビル火災の現場にいた。

一部の人身売買被害者からは自分達を逃がしてくれたとの報告も警察にはある。

警察の取調べには淡々と応じていたらしいが、すぐに釈放された。

(経歴と行動がチグハグ過ぎる……)

了子は自分が見逃しているモノの大きさと調査不足を痛感した。

(本人に当たれないなら、友人や家族に当たるのが妥当だけど、この人『黒い隕石』騒動で家族失くしてるみたいなのよね)

了子がやっと手に入れた学生の個人情報には家族欄の場所があった。殆どが黒塗りで読めないものの、家族欄だけは基本的に開示されていた。

その場所には『黒い隕石』被災孤児との名称があった。

（友人から探るにしても友人関係の把握がまだ出来てない。ああああああ、もう！！ 後出来る事が何かないかな！？）

歯痒さに悶絶して、了子はガックリと頂垂れた。

「一回帰って風呂でも入ろう」

トボトボと肩を落として帰ろうとした時だった。

ポチコーンとの音。

グルリと首が九十度は曲がったような振り返り方で了子はその光景を神に感謝した。

外字の表札が出ている扉の前、一人の青年がインターホンを連続で鳴らして諦めたのか帰ろうとしていた。

ゴキブリも驚く脅威の瞬発力を発揮した了子の足がハイヒールで百メートル十二秒を叩き出す。

「すいませ〜ん」

「はい？」

声に振り返った青年に人当たりの良い外面で了子が近づいていく。

「外字久重さんのお知り合いの方ですか〜？」

「………アンタ誰？」

「あ、私はこういっ者です」

ササツと懐から名刺を取り出した了子が青年にそれを手渡す。

「へえ、ジャーナリスト」

「はい」

「………この間の件調べてるの？」

「ビル火災の現場で外字さんを見たとの話がありました、それでお話を伺わせて頂くかと思っただのですが、どうやらご在宅ではなかったらしく、諦めかけていたところに彼方がいらしたので」

「つまり、僕に久重の事が訊きたいんだ？」

「はい。それはもう是非に！！ もし、これからよろしければ喫茶店なんて如何ですか？」

「悪いけど行き着けの店以外は行かない事にしてるもんだから」

「あ、そうなんですか。それなら乗せていきますよ？」

「言つとくけど、高いよ?」

「いえ、気になさらないで下さい」

「そつ?」

「ええ」

近くの駐車場からセダンを回した了子が内心でガツツポーズ出来たのは外字久重の親友永橋風御の行き着けの店の駐車場に行くまでだった。

聳えるホテルの最上階。

『これはこれは永橋様』との声に魂が抜けた了子はその日、自分の給料の半分を放棄するかネタを追い求めるかの二択を迫られた。

無論、ネタを追う者としての矜持がどちらを選んだかは言うまでもない話だった。

魂の抜けた了子が黙々とモグモグと行き着けの『喫茶店』自慢の料理を涙半分自棄で頬張る。

「凄いねジャーナリストさん。こんなところで涙流すくらい美味しいんだ?」

「い、いえ、あんまりの展開にこつ涙が……うう……喫茶店じゃない」

「何か言つた? ちなみに此処は僕にとって喫茶店みたいなもんだけど?」

「な、何でもありません!」

「で、僕に久重の何を訊きたいわけ?」

ゴクリと水でしっかり料理を平らげた了子が本題に入る。

「そのお友達の外字さんはどうしてあんなビル火災現場に居たんだと思われませんか?」

「仕事でしょ」

「仕事?」

「あいつ何でも屋だから」

「何でも屋?」

「ま、何でも屋って言っても仕事そのものはあいつが取ってるわけじゃないけど」

「それはどういう事でしょうか？」

「つまり、あいつは特定の人間から仕事を下請けしてるわけ。内容は言わずもがな」

「……では、あそこで外字さんは仕事をしていたと？」

「そうなんじゃない？」

「そう、ですか。では、その今度は外字さんの人柄についてお聞きしてもいいですか？」

「人柄？ あいつの人柄なんて一つでしょ」

「一つとは？」

「お人よし」

「お人よし？」

「昔っからあいつは何かと厄介事に首を突っ込んで貧乏籤引いてたし」

「外字さんとは昔からのお付き合いなんですか？」

「中学生くらいからの付き合いだけ」

「外字さんは昔から人が良かったんですか？」

「根っからの善人。しかも偽善で付く方の」

「え……その、お人よしなのは？」

「だから、お人よしで偽善者。更には貧乏人。そんなだからかな。僕といつまでも縁が切れないのは……」

何処か遠い目で言う風御に了子は目を細めた。

嘘を言っている様子ではなかった。

仕事柄、人を見る目と嘘を吐いているかどうかを見分けられた。

了子にとって自然と身に付いたスキルであり、そのスキルは風御の発言が嘘ではないと言っていた。

「その、貧乏人というのは……？」

「文字通り。金が無い。いつも金が無い。そういう事」

「外字さんはお仕事なんかはされてなかったんですか？ アルバイ

トでもいいですけど」

「言ったでしょ。あいつの仕事は何でも屋。それで食ってる。全うな仕事も出来ないわけじゃないだろうけど、長続きしないだろうね」
「長続きしない？」

風御が皮肉げに頷く。

「世の中つてさ。妥協とか必要悪とか、悪い事やそれに近い事でも強要されたりするじゃない？ 理不尽な事やどうしようもないと目を背けられるような事とかもある。あいつはそういうのが我慢できないタイプだね。例えば、並ばない客。例えば、不当な借金の取立て。例えば、見知らぬ死に掛けのホームレス。例えば、ヤクザに殺されそうなサラリーマン。例えば、花壇を荒らす高校生。例えば、落とした財布を盗む馬鹿。例えば、猫を轢き殺したチャラ男。例えば、男に食い物にされてる女。例えば、年寄りから騙し取る詐欺師。例えば、悪事を働く国家権力。例えば、売り物にされた移民の無戸籍児童」

「！？」

了子が息を呑む。

風御が常のヘラヘラした顔のまま瞳だけは真っ直ぐに了子を見つめる。

「そういうのが許せないから、あいつに他の仕事は無理でしょ。報われるわけでもない。理不尽や悪が消えるわけでもない。それでも許せないから拳を握れるだけの自分で在り続ける。タフでなければ生きられない。優しくなければ生きる価値がない。なんてのはあいつの為にあるような言葉だよ」

「褒めてるんですか？」

「いや、貶してるんだよ」

「そうは聞こえませんか」

「偽善者って言ったでしょ？ あいつはいつだって自分がそういう人間で在りたいから戦う人間だ。そこに自分の感情は差し挟むけど、あいつの芯の部分は他人ではなく自分の為には戦ってる」

「誰かの為じゃなくて自分の為にそういう事をしていると？」

「そ。だから、あいつは聖人君子や正義漢って奴とは根本が違う」

「でも、それは……」

「ま、だからこそ付き合いは長いんだろうけど」

「え？」

「考えてもみなよ。本気で誰かの為だけに何かをするなんて傲慢じゃない？ 僕は聖人君子的に正義や愛なんかを信じて戦うヒーローに助けられるなんて御免被る。誰の為でもなく自分の為にお前を助けるなんて『綺麗事』を真顔で言える馬鹿にならちよつとは助けられたいと思うけど」

「……」

風御がワインを空にしたグラス置いて立ち上がる。

「これが僕が知る外字久重という男だよ。少しは参考になったジャーナリストさん？」

「はい……」

「そ。それは何より。じゃ、僕は帰るから。あ、送ってくれなくても結構。此処のマナージャーにタクシー呼ばせてるし」

「あの一！？」

スタスタと歩いていく風御の背中に思わず了子が声を掛けていた。

「ん？」

「何で……彼の事を教えてくれたんですか？」

了子は直感的に風御が外字久重の側にいる人間だと感じていた。

どんなに貶しても外字を語る風御は愉快げで楽しげだった。

親友と呼ぶからには外字久重を擁護する、あるいは何も話すべきではないと判断してもおかしくは無い。

「ジャーナリストさん。あなたがどれだけ調べても解らない事が世の中には沢山ある。そして、その解らないカテゴリーの中にあの貧乏人はいる」

「私は……ただ……」

「真実が知りたい。」

そんな言葉を了子は呑み込んだ。

「手を引くなら今の内だよ。世界なんてのは謎に満ちていて不可解で理解できないまま過ごした方がいい。下手に理解して人生台無しにはしたくないでしょ？」

もう言う事は無いと支払いをカードで済ませた風御が店を出て行く。

「それでも私は……」

一人残された了子はポツリと呟いた。

闇の中に白いスーツの青年が立っていた。

その後ろには多くの紅い光が闇に浮かんでいる。

光の源は顔を完全にマスクで覆った人間の群れだった。

マスクの目元はまるで目隠しをするように硬質な物体で覆われていた。

複眼にも見えるフラクタルな眼球部分に小さな紅い明かりが点いている。

「では、目標を再確認します」

闇の中、真上に巨大なビジョンが浮かび上がる。

まったくテレビやAV機器やコードが見当たらない虚空に映し出されたビジョンの中には少女が一人笑っていた。

「これが我々の殲滅するべき目標Aです。最後に反応があった地点からサテライトを使って探査中ですが、微弱な反応があったと報告がありました。数分で場所が特定できるでしょう」

ビジョン内の画像が差し替えられる。

次に出てきたのは白衣の人の手に乗った小さな黒いボールだった。

「これが我々の殲滅目標Bです。現在は殲滅目標Aとの融合を果たしているはずですが、目標A死亡後にどうなるか未知数な為、ここで見せておきます。尚、これは初期状態のものであり、この状態で現れるとは限りません」

ビジョンが更に刺し替えられる。

最後に出てきた画像は一番最初に映されていた金髪の少女が白い部

屋で黒いボールを掴んでいる画像だった。

「では、これから目標の性能をお見せします。これは目標が実験で出した値ですが、あくまで目安としてください」
画像が動き出す。

その動画の中で少女以外の声が記録の為か実験の詳細を述べていく。
「0020時。これより【情報熱機関^{インフォメーション・サーマル・エンジン}】の起動を開始する」
白い部屋の各場所で小さな炎が立ち上り始める。

「被験者名ソラ・スク립トゥーラ。実験名【I T E N D】集積制御装置【Devil】の人制御による全力稼働実験」

炎が少女を取り囲み始めるが、少女はまったく動じずに瞳を閉じて黒いボールを持ったままだった。

「尚、本実験において博士によるNDの仕様変更が行われている。現在稼働しているのは熱量閉鎖系の作業構築タイプではなく、熱量開放系の放出特化タイプである」

炎が正に白い部屋を完全に埋め尽くし業火とばかりに少女を包んだ。
「設定焦点温度は放射線発生危険を考慮して一百度以下とする」
炎が緩やかに少女を取り巻いた。

にも拘らず、少女の髪は一本たりとも焼け焦げていない。

「破壊対象は全方位の十四層耐火防壁を使用」

少女の周囲の壁から炎が完全に消え、少女を取り巻いた炎が意思を持っているかのように蠢き出す。

「使用プログラム。NO.3“fire bag”今実験用の特殊プログラムである。このプログラムは作業構築タイプNDを複数繊維状にして一点に貼り付け対象へ瞬間的な熱量の伝達を行い仕様変更されたNDを通して放出、温度を急激に上げるものである」
少女を取り囲む全ての壁が中央を瞬時に発光させ、融解した。

「このプログラムは通常では不可能な溶接作業を行える可能性があり、本実験後最終調整を経てオリジナルロットに登録される予定となっている」

「え………何？」

少女が不意に声を上げた。

「どうかしたか？」

「どうして?! 熱量が急激に増大して!?!」

動画の中で少女の周りの炎が膨れ上がる。

「ッ、実験を中止!! 全熱量を緊急に放出!!」

「だ、ダメ?! 【D1】の制御が、あう?!」

少女が持っていた黒いボールを落とした瞬間だった。

動画が全て白く染まり途切れた。

「では、予習を済んだところで出かけるとしましょうか。どうやら目標の位置も特定できたようです」

白いスーツの青年ターポールンがマスク達に号令を掛ける。

「全隊、行動開始。目標を完全に殲滅せよ」

マスク達がターポールンの言葉に闇の中走り出していく。

やがて、足音が途絶えるとターポールンが溜息を吐いて上を見上げる。

ビジョンが再び現れる。

ビジョンの中には紅い大地と白い建物が映し出されている。

それが、瞬時に、中心から融解した。

融解した建物を中心にグズグズに大地が蕩けていく。

やがて、巨大なクレーターの中央。

その解けた大地の中心からせり上がるように黒いドーム型の物体が現れる。

「.....博士。彼方はアレも【Dシリーズ】も造るべきではなかった」

ターポールンが顔を伏せるとビジョンが消えた。

「さて、今度こそ死んでもらいましょうか。ソラ」

闇の中を歩き去る男の背中は何故か悲しみを湛えていた。

第四話 グレムリン

第四話 グレムリン

「にゃーにゃー」

細く鈴のような声が可愛らしく響く。

「にゃーにゃー」

野太い声がげんなりした様子で響く。

「ひさしげ。そんな声じゃ逃げちゃうわ」

「勘弁してくださいマジで」

そろそろ夜も更けてきた時間帯。

都市の路地裏で迷い猫を探す地道過ぎる作業も終盤に差し掛かってきた。

鳴き真似作戦と称して近寄ってきた猫を片っ端から照合するという作業に久重の心は折れそうになっていた。

路地裏を覗く輩から悉く哀れみの視線（お大事に……）を受けるのは苦行以外の何物でもなく。

久重はげっそりとやつれた顔で相棒の少女ソラを見る。

路地裏を覗く輩から悉く微笑ましいものを見てしまった笑み（が、頑張つて！！）を受けて闘志を燃やすソラが近寄ってきた猫を怒涛の如く掻き分けていく。

「あ、この子みたい」

「ピンゴ?!」

久重が懐から写真を取り出す。

夜のピンク色のネオンに照らされた写真の猫とソラが持っている三毛猫は正しく瓜二つ。

間違いなく探していた猫だった。

「でかした!？」

人間に慣れているのか。

ブラインとソラに抱かれている猫は大人しい。

久重がソラに近寄ろうとした時だった。

ソラの額に瞬く紅い点に気付いて走る。

久重の行動に驚いた猫が「ふぎゃ?!」とソラの手から逃げ出した。

「ひ、ひさし　?!」

久重がソラを庇い路地へと転がった瞬間、久重の肩を熱いモノがすり抜け、地面が爆ぜる。

「?!」

庇われたソラが久重の先、遙か先の高層ビルからのレーザーサイトを確認した。

「【ITE】起動!!」

次撃の弾丸が久重の背中に殺到する。

更に路地裏へと複数の方向から弾丸が奔る。

一連の流れで放たれた弾丸の銃声はほぼ一発。

それも常人の僅かに耳に聞こえる程度。

最新式の静穏ライフルによる高精度遠距離の同時狙撃。

初弾は測量の為。

次弾こそが必殺。

しかし、その並の要人なら即死の状況でソラは慌てなかった。

ソラの周囲数メートル四方に薄く黒いカーテン状の幕のようなものがそり立つ。

（【CNT Defender】展開!!）

ソラの思考を読み取ったように展開された薄いカーテンが数箇所ソラに殺到するように槍の如く迫る。

弾丸を受け止めたカーテンが変形して勢いを殺していた。

様々な方向からカーテンがソラの頭部に向けて幾度も槍の如く伸びるものの、全てが頭部に届く事なく元の形状に戻って地面に弾丸を零していく。

「大丈夫か!？」

「ひさしげ!!!　ここから離れないと!!!　たぶん部隊が展開され

てる！！ このままじゃ囲まれて蜂の巣にされる！？」

「部隊！？ 追手つてあの白スーツだけじゃないのか？！」

「あいつはエージェントなの！！ 部隊を動かす権利があるから、指揮官として何処かにいると思う！？」

立ち上がった久重が次々に勢いを殺されて落ちていく弾丸の音に顔を引き攣らせた。

「おいおい？！ くそ、ここじゃ狙い撃ちかッ。ソラ！！ この力ーテンみたいな動かせるか！？」

「大丈夫！！ 走れば一緒に付いてくるからッ」

「なら、行くぞ！？ ここら辺の地理なら詳しい！」

ソラの手を取って久重が走り始める。

それと同時に弾丸の雨が止んだ。

表通りに出た久重が何やら五月蠅そうな住人達の怪訝そうな顔を横目に地下道へと降りていく。

「この地下道は東西南北に出入り口がある！ 今は北口から入った。南口は駅の構内。西口はアーケード。東口は国道に出る」

「駅とアーケードはダメ！？ あいつら絶対に他人を巻き込むわ！？」

「国道か？！ 障害物が看板ぐらいしかないぞ！！」

「いえ、その前にたぶん」

二人が曲がった直後。

銃撃の雨が降り注ぐ。

薄いカーテンのような幕に突き刺さり次々に落ちていく弾丸が小山程になるまで数秒も掛からなかった。

「ちよ？！」

奇妙なマスクを被る黒いスーツ姿の一団から銃撃は止まない。

慌てて戻ろうとした久重をソラが止める。

「大丈夫。あいつらはただの足止めだから。問題は」

「そう、問題は私に追いつかれてしまう事です。ソラ」

交差路の中央で立ち往生する二人へと西から歩いてくるのは白いス

ーツの青年ターポリンだった。

「こんな街中で銃の音響かせるなんてどういうつもり?!」

ソラが久重を後ろに庇うように前に出て、歩いてくるターポリンを睨みつける。

「おお、怖い怖い。簡単に言いますが、今の彼方達は正体不明のテロリスト。こちらは警察の特殊部隊。付近はさっきから警察の誘導で避難中です」

薄く笑うターポリンに空が苦々しい顔をした。

「もう、そこまで治安当局に侵出してるなんて……」

「いえいえ、こちらの作戦時間も情報漏洩の可能性を考えると十分程度で切り上げなければならぬので」

「どうやって私達を見つけたの!?!」

「企業秘密です」

「……サテライト?」

「企業秘密です」

「その様子だと【ITE】のサスペンドモードを嗅ぎ付けたってところ?」

「企業秘密ですから教えて差し上げるわけにはいきません。さて、と」

話を切り上げたターポリンが大声を張り上げる。

「皆さん。仕上げといきましょう!!」

ターポリンが懐から巨大な銃を取り出す。

「デザートイーグルなんて格好付けすぎ!! 馬鹿みたい!!」

「ちよつと弾が特別製です」

軽い調子で向けられた銃口が火を噴く。

「EAT Mode!!」

ターポリンからの銃撃が安々と黒いカーテンを貫いた。

しかし、ソラの叫びに反応したようにソラと久重を周囲を覆つように黒い霧のようなものが発生する。

弾丸が黒い霧に飲まれ消失した。

「どうなつて?!」

久重が目を白黒させ後ろを振り向くと今まで銃撃してきていたマスク達が巨大な砲身を担いでいるところだった。

(RPG?!)

未だ現代において現役を貫く『兵器』に久重は其処が日本の地下道であるという事を忘れそうになった。

「ソラ!!」

「解つてる!!」

弾体が着弾し周囲に爆風と炎が吹き上げる。

それでも黒いカーテンと霧に覆われている二人の場所まで爆風は届かなかつた。

「さすがにEAT Modeまでは届きませんか。ですが、どれだけ耐えられますか?」

ソラが唇を噛み締めた。

「大丈夫なのかソラ?!」

「大丈夫……久重だけはちゃんと守るから」

「そういう事を聞いてるわけじゃ?!」

「ひさしげ」

久重の言葉を途中でソラが遮る。

「ごめんね。こんな事に巻き込んで。一杯苦労掛けて。大学の事も借金の事も」

「ソラ?!」

銃撃が再開される。

言葉の端々の不吉な響きに久重の体温が下る。

「日本のカレー美味しかった。お布団温かった。私の為に一杯頑張ってくれて……嬉しかった」

「おい!? 何一人で完結しようとして、オレはま」

振り向いたソラが久重の唇を塞ぎ、すぐに離れる。

「これで我侭最後だから。お礼」

「……ソラ」

そつと久重を突き放し、ソラが背を向ける。

「今から全力で【ITE】を駆動するわ。瞬間的に百メートル圏内で気温が数十度下る。今、久重には防護用の【ITE】を渡したから五分ぐらいは大丈夫。あいつらもターポリン以外は動けないはずだから逃げ切れる」

「何勝手な事言つて!?!」

「これしか!」

久重の声にソラが大声を上げる。

「これしか……私、ひさしげにしてあげられないの……私、もう誰も目の前で大切な人に死んで欲しくない……」

何も言えないまま、呆然とする久重にソラが再び明るい声で語りかける。

「後、少し。大丈夫……絶対にひさしげは守ってみせる」

「お涙頂戴は結構。そろそろお終いにしましょう」

銃をその場に棄ててターポリンが二人へと近づいていく。

「全力で食らえば少しは痛いでしょう!!」

「それで死ねない身なればこそ、私は貴女の殺し手に選ばれた」

「可哀想な人。【死体袋】^{ターポリン}に入れられてもまだ使われるなんて」

「博士のお人形に言われる筋合いはありません。これでもこちらは世界平和の為に働いています」

黒いカーテンをターポリンが引き裂いた。

「増殖終了。撒布完了」

「それでは倒せないと言っています!!」

黒い霧へと拳を振りかざしてターポリンが叫ぶ。

「なら、喰らつて!! 全てを鎖す氷獄!! NO・00“clo
sed jail”!!!!」

「無駄です!!」

黒い霧を抜けた腕が衣服を消失させながらソラの首を掴み取り、久重がもう一方の手で邪魔とばかりに払われ吹き飛ばされる。

地下道を照らしていた全ての電灯が消え、久重は絶望する間もなく、

壁へと激突した。

高級レストランの食事を味わっておけば良かったと微妙に後悔しながら帰途に着こうとしていた了子は途中、警察の封鎖により帰り道を寄り道に変更していた。

都市の地図が頭に入っている了子にとって警察の封鎖の網を潜り抜けるのは至極簡単な仕事だった。

時には裏の世界を覗いて危ない目に会う事もある記者。

蛇の道は蛇の言葉通り、執拗にネタに迫る気魄は了子を狩人よろしくカメラという銃とペンというナイフを装備した【兵隊】（ジャーナリスト）へと変えていた。

（ネタ！！　ネタ！！）

レコーダーを片手に路地裏から外の様子を伺う了子に気付かず警察官達が素通りしていく。

『いきなりテロリストとか本気なのか？　本庁の特殊部隊と公安が来てるらしいが』

『何でも国際テロ組織の一員らしいぜ。半径三百メートルの封鎖をいきなりヤレとか頭ごなしに命令されてもな。実現可能かどうかよく考えろってんだ。本庁の連中も困ったもんだよ本当』

すっかり録音した了子はササササと何処かの蛇的な兵も真つ青な足取りで現場へと裏道から接近していく。

現場周辺では警察官に促された市民が混乱しながらも遠ざかっていく。

「これは？！　確かこの先は地下道と駅だったはず……………」
駅側からの封鎖があるとすれば、むむ」

現場へと急いだ了子が地下道付近の路地裏に付いた時だった。

（静か過ぎる……………）

そつと顔を路地裏から半分出して見回した了子が不自然な周囲の状況に顔を潜める。

（封鎖しているはずの警察官の姿が見当たらない？　これはどうい

「殺すなら殺せばいい」

「ここで殺すのは簡単です。いえ、此処で殺さない方がこちらにとつては簡単ではない」

「何が言いたいの？」

「もう一度戻ってくる気はありませんか？ ソラ」

「私を一度殺した癖に！！」

「生体融合の被検体としてなら生かして差し上げるのも吝かではありません」

「モルモットなんて！！」

ソラがターポリンの顔へと唾を吐き掛ける。

しかし、その行為に激昂するでもなくターポリンは続ける。

「貴女を殺してやるのが貴女にとつても最良だと思っていました。

しかし、【D1】がもう覚醒しているにも関わらず貴女の能力はこの程度だ。死の間際だというのに強力になる気配もない。これならば上層部にも掛け合うだけの価値はある。【D1】がああ悲劇を起こさずアレを貴女が大人しくこちらに渡すと言うならば、命を取る必要も無い」

「………本気なの？」

「ええ、この上なく」

「博士は……信じてた……信じてたの……なのに今更！！」

「悪役に何を期待しているのですか？ これは取引です。博士亡き今、貴女を本当の意味で知っているのは私しかいない。これは過去の私が、今の私に送る最後のケジメだと思ってください」

「！！」

「地べたに這い蹲れと言っているわけではありませんよ？」

「此処でそんな風に生かされるなら死んだ方がいい」

「く、く、そうですか？ 仕方ない………博士、あなたの

愛した人形を今そちらに送ります。どうか、安らかに」

何処か寂しげに笑いながらターポリンの手が力を入れ始めた。

金色の髪を持つ少女の口から唾液が流されていく。
炎の魔人に少女は縊り殺されようとしている。

なのに、体は動かなかつた。

外字久重は所詮、誰も守れない、誰も救えない、そんな人間だった。
そう思えば、幾分楽になれる気がして、久重は己の無力を、嗤う。

はは。

ははは。

はははは。

そう、嗤う。

【君は何を憎む？】

そんな声が聞こえた気がした。

（人一人助けられなくて、何が男だ）

【君は何を憎む？】

（頼ってくれる女一人救えなくて、何が何でも屋だ）

【君は何を憎む？】

「オレは……オレが憎い」

ギチギチと体が悲鳴を上げる。

間に合わないと理性が囁く。

それでも前に向かわねば、手を握ってやる事も、殴ってやる事もできないと知っている。

「オレは、オレの無力を憎む……」

掠れた声に対して、幻聴はもはや無く。

『君は良い奴そうだ。助力しよう』

「……？」

死に掛けていた少女と炎の魔人が同時に驚愕した。

キュアン。

そんな甲高い弓を引くような音がして、魔人が吹き飛んだ。

「な?! 馬鹿な?! 博士!? ぐア、があああああああ

あああああああツツツツ!!!」

その場で落とされたソラが咳き込みながら、涙でブレる視界で辺り

を見回す。

「博士！！ 博士！！」

呼ぶ声に答えは返らない。

ただ、声は続く。

『君はソラが好きか？』

「な！？」

ソラが状況も忘れて紅くなった。

「大切に思ってる」

久重の答えに声は続ける。

『君はソラが可愛いと思うか？』

「将来、綺麗になるだろう」

「ちよ、博士？！」

ソラがあまりの状況に声を荒げる。

『君が誰か僕は知らない。君が本当はソラをどう思っているのか僕には解らない。僕はこの音声が流れた時には死んでいるだろう。ソラ、君もたぶんは逃走しているか戦いの最中だろう。だから、僕は僕が持てる全ての英知を持って、此処に遺書を残す事にした。我が人生最大にして最高の傑作と我が人生最愛の娘を授けるに相応しい者がいた時、その窮地にのみ、この遺書は発動する。ソラ、君がもしも一人だったならば僕はもう君が生きているべきではないと思う。生きていても辛い事ばかりで幸せにはなれないのは目に見えているからだ。しかし、もしも君を守るに足る者がいるならば、君はその人と共に人生を生き抜け。世界の何もかも敵に回して上回る力が在れば生きる事は可能だろう。さあ、涙を拭いて立ちなさい』

電灯もターポリンの体の炎も消えた地下道で光が溢れる。

「博士……」

ソラが泣いていた。

今まで一度として久重の前ですら気丈に振舞っていた少女が、何の躊躇いも無く、ボロボロと。

その胸に光の源があった。

地下道に響く声が続ける。

『見知らぬ君よ。さあ、剣を取れ。そして、どうか……この子を救ってやってくれ!!』

「ああ、見知らぬおっさんに言われるまでもない!!」

久重は重い体を押しソラの前に立ち、その胸元の光を掴んだ。

「ははは、はははははは、博士ええええええええええ!!!! さすが博士です!!! 正に貴方らしい遺書でした!!! ですが、ただの素人に【D1】が使いこなせるはずもないでしょう!!!」壁にめり込んでいたターポリンが全てをかなぐり捨てて、久重の背中に襲い掛かった。

『反応を確認。敵は君か。厘西^{りんさい}』

ギクリとターポリンの動きが止まった瞬間、地下道を風が吹き抜けた。

ターポリンの体があまりの風速に飛ばされ東口の出入り口の虚空で縫い止められたように止まる。

『そうだな。敵が君だと言うならば、最後の講義をしてやろう』

久重が立ち上がり、掴んだ光を握り潰した。

潰された光が零れ落ち、ソラの額に微かな光の文字が連なる。

【ITEND】Annihilation Mode。
Energy Source 【SE】。
Full Drive。

零れ落ちた光が久重の右腕を覆った。

『そもそも情報熱機関内臓のナノデバイスを有効に使うには膨大なフィードバック制御情報が必要だ。その為に我々は量子コンピュータを小型化するか、他の選択肢を考える必要があったわけだ』
「ええ、だからこそ、あなたは人間の脳を使う事を考えた。その試作品を愛でる程に研究にのめり込んだ」

『君には教えていなかったが僕はソラの脳そのものには何ら手を加えていない。せいぜいが情報の送受信と信号の変換を行う端末を埋め込んだ程度だ』

ゴポリと込み上げてきた血にターポリンの肺が溺れ始める。

『ちなみに君達の有する【I T E N D】の永久停止信号を見知らぬ君には与えておいた。君達が最先端の科学を有する存在だと言うのなら、見知らぬ君は科学を食い物にする悪魔グレムリンといったところかな。君がまだ人間らしい体である事を祈っている。厘西』
それを最後に声が途切れる。

「もう……遅いです。博士……今……あなた
の……ここに……に……あなた……あなた……
……」

途切れた声に続くようにターポリンと呼ばれた男は静かに目を閉じた。

何故か、その顔は安らかに笑みを浮かべていた。

「どうなつて、え？ 人が！？ ちょ、ちよつと貴方大丈夫ですか
！！」

了子は闇の中に瞬いた光に打ち出されたかのような全裸の男に駆け寄った。

そのまま何度か頬を叩き、呼吸を確認し、脈を取り、救命措置を取ろうとして、気付く。

闇の中、薄ぼんやりとした光が消えていく。

その最中に今日出会うはずだった男の顔を刹那見た。

「誰かいるの！！」

『！？』

『こつち！！』

闇の中から聞こえた声に了子が目を見張る。

少女の声だった。

綺麗な鈴を鳴らしたような声。

足音が駆け足で遠ざかっていく。

「ちよつと！！ 救急車！！」

もう片手でスマホをコールしながら了子は地道へと続く闇を見つ

める。

（あれは確かに外字久重だった……どういう事？ テロリス
トと何か関係があるっていうの?!）

『その女あああああああああああ！！ 君は何者だあああ
あああああ』

突然の大音量に了子が顔を上げる。

道を百メートル以上離れて警察官の群れがジリジリと迫りつつあ
た。

「あ……やば……」

『もしかしてお前了子かあああああああああああああ』

「え……まさか戒十さん？ 戒十さあああああああああ
あああああん」

『とにかく其処の男と一緒に事情を訊かせるおおおおおおお』

「救急車あああああああああああああ用意してくださあ
ああああああああああい。この人心臓止まってるううう
ううううううううううううううううううううううううううう」

現場によく解らない微妙な空気が立ち込める。

変なやり取りをする正体不明の女と現場のトップ。

その間柄がどんなものなのか。

大事が発生したにしては呆気ない、あまりにも不可解な事件の終結
だった。

封鎖された駅構内に警察官の姿が無い事を確認してから地下の線路
に出た二人は全速力で走っていた。

「大丈夫か？ ソラ」

「うん。ひさしげはケガしてない？」

「ああ、こつちも大丈夫だ」

「そっか。良かった……」

何をどう切り出せばいいのか解らない。

両者とも同じような顔で只管に走る。

「ソラ」

「うん」

「此処から逃げ出せたら後で訊きたい話がある」

「うん。私もひさしげに話したい事沢山ある」

「なら、一緒だな？」

「うん。一緒」

命の危機を迎えていたからか、走っているからか。

その二つの胸には多くの感情が過ぎる。

「オレ、人殺しになっちまったみたいだ」

久重が少しだけ苦笑った。

「違うわ。ターポリンはそもそも死人だった」

ソラが首を振る。

「どういう事だ？」

「【ITEND】で体の各場所の機能を誤魔化してたの。融合体とは程遠い設計だったはずだから、寿命そのものは後一、二年も無かった。ひさしげは死んでいる人間を元の死体に戻しただけ」

「ずっと気になってたんだが【ITE】とか【ITEND】って何なんだ？」

「【ITE】正式名称インフォメーション・サーマル・エンジン。

NDはナノデバイス」

「まさか・・・」

久重がSFでよくある設定を思い出す。

「うん。ひさしげが思い浮かべてるモノで正しい。簡単に言うとナノマシン」

「ちょっと待て！？ 確か、ナノマシンってのは」

「ひさしげが言いたいのはナノマシンはあくまで『出来ただけ』って事でしょ？ でも、私達の体はそれに守られてる」

「どういう事だ？」

驚く久重にソラが自分の額をコンコンと叩く。

「【ITEND】は完成してるの。それもSFに出てくるような高

性能な代物として。私もひさしげも今全然息を切らしないで走れるわ。それはこの【I T E N D】にサポートされてるから」

「・・・信じるしかないんだろうな」

「さっきのターポリンは【I T E N D】での人体修復の検体として『連中』に体を弄繰り回された。でも、技術不足で修復ではなく『不完全な固定』しか出来なかった」

「それは・・・ソラが生きてる事とその・・・関係あるのか？」

「うん。私の【I T E N D】は肉体だけなら細胞の残骸とエネルギーで完全な修復が出来る。エネルギーが溜まったら自動で肉体の破損を修復してくれるの。細胞の活性化支援プログラムとNDの細胞再構築OSが完全なものだから・・・」

「S F・・・だな」

「うん。でも、S Fみたいに無限のパワーや無限に復活なんて都合主義じゃないの。この力を創造した人は言ってた『無から有を創造する事は今の科学では出来ない。これは神の力ではないんだ』って」

「なら、ちゃんと守らないとな」

「え？」

「ソラ。オレは君を二度も死なせない」

「あ、ありがと・・・ひさしげ」

二人は不意に夜の風を感じた。
長いトンネルから抜ける。

「帰るか。まずはそれからだ」

いつの間にか繋がれていた手をしっかりと握り返して、ソラは頷いた。

第五話 風車と狂気

第五話 風車と狂気

「ふんふんふん〜ん」

何処にでも在る高校の何処にでも居る女子高生『布深朱憐』（ふみ・しゅれん）は上機嫌に未だ朝早い道を急いでいた。

亜麻色の完全な縦ロールが左右に三つずつ燦然と輝く髪は正にチョココロネを思わせる。

スレンダー『過ぎる』体型を覗けば、顔の美醜は近隣の高校の中でも群を抜いている。

しかし、決定的に今時の洒落た高校生と違うのはそのチョココロネでも顔でもない。

化粧つ気や洒落つ気の無さだった。

最低限の手入れはされているが、まったくのノーメイク。

最低限の身嗜みはあるが、まったくの装飾品絶無状態。

高校の制服を正しく着こなし、鞆も新品を絵に書いたように綺麗で小物も付いていない。

高校一年生という事を除いてもまったくさら過ぎる様態はある種の人間達にすると「自分色」に染めたくなる程の無垢さで、夏の朝日に照らされた朱憐はキラキラと何らかの粒子でも放射していそうな笑みで道を急ぐ。

その嬉しそうな笑みには理由があった。

朱憐の運命の出会いを回想する。

中学三年生冬の陣。

最初から推薦を貰っていた朱憐は高校受験とは無縁な暢気さで冬の夜道をホクホク顔で帰っていた。

無論、焼き芋屋さんから大量の焼き芋をゲットしたからだ。

そこに悪者がやってきた。

『おつおつおつ。その焼き芋旨そうだな。ちよつと寄越せ。何？寄越せない？ なら、お前の体で払って貰おうか！！ げへへへへへへへ、げははははははは（主観と客観の相違が含まれています。ご了承ください）』

『待てえええええええい。貴様ら！！ そのかわゆいおぜうさんをどうするつもりだ。オレが相手になつてやる。キラン（主観と客観の以下略）』

ぐああああああああ。
どかーん。

『そこのおぜうさん。大丈夫でしたか？ あの悪い連中に何かされやしませんでしたか？』

『大丈夫ですわ！！ わたくし、これでも合気道六段ですの それにしても遅しい方・・・わたくしと恋人になつてくださいませんこと？』

『そいつはいけねえや。そういうのは結婚できる歳になつてからにしてください。おぜうさん』

『何て謙虚な方・・・ぼ』

『それではまた何処かで』

『ああ、行つてしまわれるのですか！？ せめて、せめて！！ お名前だけでも！！』

『あつしの名前はガジ・ヒサシゲ。けちな遊び人でさあ』

『ひさしげ様・・・あの方がわたくしの運命の人・・・』

半年後。

『お、おぜうさん！？』

『ひさしげ様！？』

『こんなところで会うとは偶然で』

『まさか、こんなに早く・・・出会うなんて・・・高校の登校途中の道で会うなんて・・・運命を感じますわ・・・』

『そうかもしれやせん。オレの家は此処の近くなんですさあ。もし、

良ければ今度は家に来てくだせえ」

『はい。喜んで……ひさしげ様』

そんな事があつて以来朱憐は三日に一度必ず朝から運命の人の家へと通っていた。

清貧を旨とした運命の人はいつもお腹を空かせているので朝から朝食を作る。

少し新婚さんチックで朱憐にとっては何よりも優先するべき高校生活の一部としてその行為は組み込まれている。

朱憐にとってはまるで一世紀以上昔のような住宅が見えてくる。

その009号室。

外字の表札があるドアのベルを鳴らした。

「もう、ひさしげ様だったらお寝坊さんなんですから。わたくしが起こして差し上げなければなりませんわね」

そつと朱憐はドアを開ける。

鍵は掛かっていない。

それが自分の来るのを待っている合図なのだ。朱憐には解っていた。靴を脱いで上がると小さな小屋のような場所で愛しい人の入った布団の膨らみを見つけ、朱憐の胸がキュウウウンと高鳴った。

「ひさしげ様。ひさしげ様」

優しく優しく声を掛け、それでもやはり布団の中から顔が出てこず、朱憐が少しハシタナイと思いつつも頬を染めて、そつと布団を剥いだ。

「ひさしげ様。朝ですわ。わたくしの方にお顔を向けてくださいませ」

背中を向けている久重の背中をそつと引き寄せて顔を拝もうとした朱憐が久重の顔とは別の顔を見つけた。

「？」

バツチリとその久重ではない視線と目が合った朱憐がしばしの沈黙の後、倒れた。

「……?」

久重の腕の中でぼんやりとしていたソラが頭に？マークを浮かべて数秒。

「ひさしげ。誰か倒れてるわ」

「………んあ？」

起こされた久重はまだ寝ぼけている内から自分の布団を朱憐に譲渡する事となった。

「………ん………ん………？」

目が覚めた朱憐は目元を少し擦った後、体を起こした。

ぼんやりとする頭の中に響く包丁の音。

その音の大本を見つめて、胸が高鳴る。

（ひさしげ様。わたくしの代わりに朝食を作ってくださいますの？ ああ、そんな、わたくし嬉しくて涙が出そうに……）

少しだけ伸びをして出た涙をそっと拭い、朱憐が出されたちゃぶ台に気付く。

「？」

更にちゃぶ台の上に肘を乗せてジイイイツと自分を見ている少女に気付く。

外国人の少女。

流れるような金髪でほっそりした手足がお人形のよう。

更に朱憐の興味を引いたのは少女の仕草だった。

ほんの少しだけ首を傾げて朱憐を見つめているだけなのに、その所作は洗練されていた。

「あの、何方かしら？」

「私？ 私は………ひさしげの大切な人」

「お、おい。ソラ！？」

「ひさしげ。昨日、大切な人って言うてくれたの嘘？」

少女の少しだけ不安そうな顔で背中を見つめる瞳に自分と同じものを認めて、朱憐が驚く。

「そ、それは言った。言ったが、それを人前で公言するのは日本人

としてどうかと思う。そういうのは秘めてこそ華って日本では言うんだ。OK?」

「うん。おーけー」

クスクスと慌てた背中を悪戯っ子のような笑みで見る少女は朱憐にも解るくらい、自分と同じだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「？」

再び気を失った朱憐にソラが首を傾げる。

「ねえ、ひさしげ。また、この子気を失ったわ」

「おい!？」

一行に事態が進展しないまま進んでいく何かが久重の背中にズッシリと重く押し掛かった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙を打ち破ったのは朱憐の方からだった。

「ひさしげ様」

黙々と鮭の切り身と白米と味噌汁を口内に消していた久重が白米を喉に詰まらせそうになってお茶を啜る。

「わたくし一つだけお聞きしたい事がありますわ」

「何だ？」

「この外国人の子は何方ですか？」

「オレが昔世話になった外国人の教授の娘で夏休みを利用して今はホームステイに来てる。止まる場所をオレが提供する形で今は居候の同居人だ」

「いつからですか？」

「二日前」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・どうして一緒のお布団で寝ていましたの？」

「どうしてだ？」

「そこで私に話を振るなんて、ひさしげって女性心理に疎いわ」

「いつの間にかオレが悪い事になってないか？」

「ひさしげ様？」

朱憐の問いかける眼差しに久重が重い口を開く。

「う、昨日二人で疲れてたからな。急に眠気が襲ってきて、記憶が曖昧な感じだが、そのまま寝たらしい」

「ひさしげ様。日本は男女七歳にして同衾せずとか。そのような格言があつたりなかつたりする国ですわ」

「以後、気をつける」

頭痛を抑えるように頭に手を当てて久重が頷いた。

「その……貴女お名前は何といたしますの？」

「ソラ。ソラ・スク……ひじゅん聖空。片親が日本人なの」

「空さん？」

「うん」

「わたくしは朱憐。布深朱憐ですわ」

「シユレン？」

「はい」

「シユレンはひさしげの恋人？」

「な?!」

うるたえる久重だったが、以外にも朱憐は動じなかった。

「ひさしげ様はわたくしの運命の方ですわ」

「ちょ?! ぐ?!」

サラリと答えられて久重が喉に飯を詰まらせ、グビグビとお茶を啣る。

「……シユレンは高校生？」

「はい。近頃進級しまして。今は來邦高等女学校の一年となります」

「（大和撫子って慎ましやかで御淑やかな人だって聞いてたけど、随分積極的だわ）」

「あの、何か？」

ポソポソと呟いてソラが朱憐に何でもないと答えて食事を再開した。それから食事を終えて洗いものまで済ませた朱憐が正座でちゃぶ台の前にジツと座っている久重の前に戻ってくる。

「ひさしげ様」

「何だ？」

「今日からお夕飯も時折作りに来ますわ」

「あゝ夕方は基本的に仕事でいない事も」

「はい。ですから、これを」

鞆を手繰り寄せて朱憐が中からゴトリとちゃぶ台に一台のスマホを置く。

「」

その意味に戦慄した久重は作り笑顔のまま絶句した。

「必要な時は学校が終わる三時以降にお掛けくださいまし。そろそろ夏季休業に入りますから、その時はお電話差し上げます。わたくしもいつも空けておけるわけではありませんが、出来る限りの夕食を用意させて頂きますわ」

「いや、さすがに悪」

「何も、悪くありません。ひさしげ様は信頼に足るお方ですから。ちなみに料金はわたくしのポケットマネーですからご安心を」

「いや、そういうもんだ」

「ひさしげ様がわたくしを必要としてくださる時にわたくしが出来る限り応える。何処にも問題なんてありませんわ」

「はい……」

朱憐が「それでは」と丁寧な頭を下げてそのままドアを開けて駆けていく。

高校の一時限目は迫っている。

しかし、久重は知っている。

何事にも丁寧な朱憐は必ずドアはゆっくり閉め、どんな時も決して走るような事はない。

「ひさしげってプレイボーイなの？」

その様子を畳んだ布団の上に座り込んで見ていたソラが半眼で訊く。
「その表現の断固とした変更をオレは要求する」

ちやぶ台の上のスマホを凝視しながら脂汗を滴らせる久重が溜息を吐いた。

「あんな可愛い子に言い寄られて本当はちよつと気分いい？」

「人間は愛だけじゃ生きられない。そこを的確に突いてくるからな。朱憐は……」

「それって久重に生活能力が無いだけじゃ……」

ジットリとダメなモノを見る視線を送ってくるソラに久重はもうグウの音も出ない有様でバツタリと畳みに倒れ臥した。

「それを言われるともうオレには返す言葉もない」

「でも、あの子の気持ち。少しだけ解るわ」

「？」

「ひさしげは寄る辺無き小鳥にとって止まり木みたいに見えるんだと思うの」

「止まり木？」

「ひさしげ。あの子助けてあげた口でしょ？」

「半年くらい前にチャライ男のグループに囲まれてて、ほんの少し捻って追いついただけだ」

「ひさしげ……」

呆れた様子でソラが溜息を吐く。

「それって運命の出会いとか、馬に乗った王子様って言うわ」

「いや、本当にその時だけしか助けてないぞ？ それ以前に再会したのが四週間前。不定期で朝食を作りに来てくれるようになった。何処に王様様フラグがあるのかとオレは聞きたい」

「ひさしげって女性の機微が解らない人？」

「オレは運命だからあいつを助けたわけじゃない」

「他の人が同じような目にあっても助けてた？」

「当然だ」

「でも、今は大切に思ってるでしょ」

「でも、今は大切に思ってるでしょ」

「だが、今の関係を数年は続けるべきだとオレは判断した」

「シユレンの事好き？」

「恋愛感情に関しては……まだ先延ばしにしておきたいと思ってる」

「ちゃんとシユレンが大人になったらって事？」

「見て話せば解るが、朱憐はお嬢様だ。本来ならオレが普通に話す事も難しい家の一人娘。ちなみにいつも朱憐が来る日は朝から周囲に複数の気配がある。窓から見える風景の何処かから双眼鏡で見られてるぞ」

「それホント」

驚いた様子で窓の外をソラが見つめた。

「ああ、あくまで来る日だけってのがポイントだ。たぶんこっちのプライベートも一応は考慮してるんだろう。さすがに集音マイクや盗聴器なんか怖かったからアズに頼んで調べてもらったがそういうのは来る日でも無いらしい」

ソラが布団の上から降りる。

「ひさしげ。ずるい……」

指摘されて何も言い返せない久重は「そうだな」と一言だけを口にした。

やがて、沈黙を割るようにソラが今までの『日常の確認』を終えて本題へと入る。

昨日は結局精神的な疲れからまったく話せていなかった『事情』が二人の上に押し掛かっていた。

「ひさしげ。まだ、戻れる……」

「そういうのは大人の方から言わせてくれるとありがたい」

「子ども扱いする気？」

「違う。ソラはオレが一方的に巻き込まれてると思ってるだろうが、そうとは限らないって事だ」

「どついう事？」

何を言われたのかと混乱したソラが訊き返す。

「オレを見てきたなら解るはずだ。オレは一般人じゃない。いや、一般人に見えても普通じゃない」

「何でも屋の事？」

久重が頷く。

「オレが普通だと思うか？」

「久重は私みたいな暗い世界よりは普通の世界で生きてるもの」

「普通の日本人は君の事情が透けて見えれば冗談と笑うか警察に行く。少し暗闇に踏み入れた人間なら利用しようとするか、全力で逃げようとする。でも、オレはそのどれでもない」

「そう……かも」

「アズの本名というか通り名というか正式な名称は『アズ・トウ・アズ』、昔に聞いた話だと国籍も人種も年齢も住所も性別以外は何かも未定なんだそうだ。そんな奴の下で働いてるオレはその手の一部の人間からは正体不明なアズの手下らしい」

久重がまだちやぶ台の上に残っていたお茶で口を湿らせる。

「オレはあいつと一緒に色々やってきた。時には非合法、時には合法、やり方は問わなかった。日本のマフィア。ヤクザの連合と話付いたり、お米の国の情報機関に付け狙われてみたり、日本の国家権力にちよつかい出してみたり、そういうのがオレとアズの仕事上何度もあった。外国に連れていかれて仕事させられた時はトカレフどころかサブマシンガンだの機関銃だのよく向けられたし、工作員がまとめて三ダース程攻めて来た事もあった」

ソラがあまりの内容にポカンとした。

「どっかのアニメとか漫画の話どころじゃない。オレはそういうところで生きてる。アズがオレを使う理由は単純にオレの頭のデキとオレの精神的な耐久値を見込んでとの事だ」

「漫画みたい……」

「本当な。だが、それがオレの、外字久重の日常だ。だから、オレは昨日の襲撃の時も銃を向けられて動く事ができた」

「久重ってやつぱり玄人なんだ」

「オレはソラの事情に一方的に巻き込まれたわけじゃない。まだ、そういう事態になってないだけでソラがオレの周囲の事情に巻き込まれる可能性だってある」

「シユレンみたいなの？」

久重がお茶を噴出しそうになった。

「そ、それとは別にして」

お茶が喉の奥に強引に流し込まれる。

「オレにとって、ソラの事情はたぶん『凄い技術』が関わってる以外はいつもの事だ。だから、言うなら『まだ、戻れる』なんて水臭い事じゃなくて『助けてくれる？』の方がオレは嬉しい」

ソラが顔を伏せる。

「久重。絶対後悔するわ」

「見知らぬおっさんに頼まれたからな。たまにはそういうのもいいさ」

少しずつソラの声がブレていく。

「後悔しないって言わないんだ」

「オレが後悔するのはソラを死なせた後だろう」

その視界が滲んでいく。

「私、凄く凄く迷惑かけると思う」

「今更だな。朱憐の今後の行動にオレの胃は現在ジクジクしてる真っ最中だ」

鼻が嘍られる。

「世界の運命とか、悪の組織なんて馬鹿なものとか戦わないといけなくなるかもしれない」

「オレがどうにかできるのはオレの手が届く範囲にいる奴だけだ。」

世界も悪の組織も知った事じゃない」

ポタポタと音がして畳に染みが出る。

「命掛けじゃない。命を掛けてもどうにもならない。きっと、久重死んじゃう……」

目を瞑って、ソラという少女は震える。

ナノマシンそのものを造り出した事は賞賛に値したが、そのナノマシンの限界と実用性が当初の予測を下回ったからだ。

ナノマシン一つを作る為に掛かる莫大なコスト。

ナノマシンの性能限界。

ナノマシン量産の困難さ。

様々な問題が山積した後、ナノデバイス研究はナノマシンそのものから離れて、ナノマシン開発過程で発生したナノテクノロジー応用研究へと移行していった。

しかし、一人の男はその多くの困難を解消した。

博士。

そう呼ばれた存在はナノマシンの研究において画期的な多くの発明を行った。

複数のナノマシンによる自己複製能力の開発。

ナノマシンの複雑な動きを可能にする新OSの開発。

ナノマシン制御を簡易に行えるデバイスの開発。

その他無数の改善がナノマシンの能力をSFの域にまで引き上げた。どれもこれもがノーベル賞どころか歴史に名を残すに足る所業だった。

その行いが一つの組織の下で行われたものでなければ。

その後、彼らは【ITEND】（インフォメーション・サーマル・

エンジン・ナノ・デバイス）研究において一つの成果を望んだ。

それは一人の科学者が考え出した無限機関の創造。

人類の歴史を左右する力。

【シラード・エンジン】

不可能とされていたソレに足る、その名を冠するに足るだけのモノを彼らは博士に望んだ。

昼も過ぎた頃。

ソラと久重はアズに導かれるまま都市の外れの廃工場跡に辿り着いていた。

「で、今日の仕事は？」

「逃げ出した脱走犯の捕獲」

クーペから降りたばかりの久重が思わずコケそうになった。

山が近く緑豊かな廃工場跡。

一面が草で覆われたアスファルトと鉄筋コンクリート製の建物。

どう見ても夏場の怪談スポット。

どんよりと垂れ込め始めている雲で薄暗さが増した周囲には虫の声。

「おい?! 何で警察が動いてない!?!」

「公安の人的にそれは不味いらしいね。監禁場所から逃げられたらしいし」

笑顔で言われてグツタリしたい気分を駆られた久重は後ろでジツと待っているソラに声を掛ける。

「手伝ってくれるか？」

「どうすればいいの」

何もかも吐き出してスッキリしたのか。

何の気負いもない笑顔で言われて、訊いた久重の方がうるたえそうになった。

「へえ……昨日の仕事を失敗して何をしてたのか知らないけど、随分と仲が良くなっただね？」

笑みと怒りを同等に混ぜ込んだアズの皮肉に久重の胃がシクシクと胃薬を要求し始めた。

「それについては謝る」

「いいよ。何か依頼人が勝手に帰ってきたとか言ってたから」

「帰ってきた？」

「何でも酷く怯えた様子で外に出たがらなくなったみたいだよ」

「……………」

内心、二人が猫に謝った。

「ちなみに今回の目標の顔写真はこれ」

差し出された顔写真を二人が覗き込む。

「おっさんだな」

「うん」

「しかも、アロハを着てる」

「うん」

「グラサン掛けてるな」

「うん」

「何か釣り番組でクルーザーに乗りながらカジキ釣ってそうだな」

「？」

よく解らないという顔をしたソラが首を傾げる。

「で、このファンキーなおっさん誰だ？」

「G I Oの幹部候補生。名前は『田木宗観』（たぎ・そうかん）三十九歳」

「ちよつと待て!？ G I Oって言ったか？」

「言ったね」

「ゼネラル・インターナショナル・オルガン？」

恐る恐る久重がアズに訊く。

「そう。現在世界一の超巨大多国籍企業。世界各国のジオプロフィール
ットプロデュースを手掛けるジオネット時代の雄。君の仕事の八割
を占めてるお得意様」

「おいおい……何でそんな大物が公安に捕まってる？」

キナ臭さ全開の仕事に久重が愚痴る。

「テロリストとの関わりを指摘されて逃げ出そうとした。確保した
はいいが結局逃げられてしまいましたとさ」

「表の事情なんぞいい。本当のところは？」

「内閣官房長官をブチ切れさせたみたいだよ」

「は？」

「日本政府、経済界とG I Oとのデカイ取引をぶっ潰されて、どち
らの幹部もお冠なのさ」

「待て待て。どうして幹部候補生がそんな事をする？」

「さあ？ 取引内容はトップシークレット扱いだから知らないけど。
拳銃持って経済界の大物達の傍にいたって証言が出たから、そこか

らテロリスト扱いされたみたいだね」

「ちなみに訊くが、今回の公安からの依頼か？ それともお前自身の私用か？」

「どっちだと思う？」

「どっちにしる断れないのは分かってる」

「なら、悩む事なんてない。はい。捕獲用のスタンガンと催涙スプレーと警棒」

「要るか?!」

後ろの席から取り出された黒いバックを久重が速攻で拒否する。

「要らないの？」

ソラの不思議そうな顔に久重が頷く。

「とりあえず先行する。ソラはオレの合図でオレの後を追うようにしてくれ」

「うん」

久重が歩き出す。

「ふふ、久重は相変わらずだなあ」

「・・・・・・・・・・それ中身無いわ」

ソラがボソリと呟く。

「おや？ バレてたかい？」

「ちよつと気になったから調べただけ」

ナノデバイスでは言わず、ソラがアズを見上げる。

「久重はああ見えて熱血漢の博愛主義者だから、人間は死傷させないようにしてる。まあ、熱血漢だから悪い奴は死ぬぐらいボコボコにしたりするけどね」

「そういう道に誘ったのは貴方だって久重が言ってた」

「これでも付き合いは長いから。色々久重には儲けさせてもらってるよ」

「・・・・・・・・・・」

「一つ誤解が無いように行っておくけど、久重は僕がいなければ、いつか、どこかで、理不尽を許せず理不尽に殺されてただろう。小

悪党、巨悪、それが例え国家であろうと自分の許せないものには容赦なく立ち向かっていく。それは所謂アロンソ・キハーナの生き方だ。基本的に現代の生き方として賢くない。自分の物語を現実として置き換えた者の末路は愉快な騒動じゃなく無様な死に様となる。だから、僕はこれでも久重の保護者を自負してる」

「風車に立ち向かっていく勇気があるから、久重は私を助けてくれた。不器用かもしれないけど、私はそんな久重だから一緒にいたいって思う。そんな久重だから……」

「人はそれを狂気と呼ぶよ？」

「私の知ってる人が言ってたわ。狂気の無い人間にどれだけの事が出来るのかって」

「確かに……そうかもしれないね。狂気無くして偉人は何も生み出せないのかもしれない」

ソラが病院の方に顔を向ける。

久重は手を上げ、もう合図していた。

「アレが偉人かどうかは後世の歴史家にも評価を任せるとしようか」

駆けていく背中をアズは笑いながら見送った。

未だ雲は晴れていなかった。

第六話 善悪の彼岸

第六話 善悪の彼岸

「本はいい」

曇天。

「実に素晴らしい」

廃屋の屋上にて、彼はアロハを着込み、ビーチチェアに腰掛けて本を読む。

「そうは思わないかね？」

傍らにある台には骨董品クラスの機械であるラジカセ。

「人類が他の種に唯一自慢できる文化だろう」

サングラス越しで文字が見えているのかも怪しい。

「君達はどう思うかね？」

ひょいとグラサンを外して尋ねる男に久重は本能的に関わり合いになりたくはない人間だと察した。

「フーガか。随分と趣味がいいな」

ラジカセから流れる旋律に男が微笑む。

「そうか。これが解るか……」

パイプオルガンの音色にソラが興味深そうな顔でラジカセを見つめる。

「今時の若者にしては見識が深い」

「それはどうも」

男が片手に持っていた缶ビールを煽る。

「傘はどうした？」

「生憎と仕事は迅速が信条だ」

「ふむ。感心な事だ」

「あんたを捕獲にしに来た」

「雨と一緒に打たれてみないか？」

胡散臭い男の提案に久重は首を横に振る。

「お友達を募集中なら会社に帰ってからにしてくれ」

「会社には嫌われたらしくてね」

「ついでに政府と経済界からもか？」

「雨に打たれた事の無い連中が考える事はどうにも合わない」

「致死性トラップを百以上仕掛けた人間の言うこつちゃない」

呆れながらもまったく油断していない久重は男を睨む。

久重とソラが通ってきた道には巧妙に隠されたトラップが幾重にも張り巡らされ、ソラの【ITEND】のサポートが無ければ建物ごと二人は爆死していたかもしれなかった。

「結構、真面目に組んだんだがなあ。自衛隊仕込だよ？」

「訊いてない」

「それにしても驚いた。こんなに可愛いお嬢さんが一緒とは」

頭に載せた麦藁帽子を取って、男がソラに一礼する。

「お嬢さん。『田木宗観』（たぎ・そうかん）と言います。どうぞよろしく」

「ふえ！？ ひ、ひさしげ」

『どう接すればいい?!』とオロオロするソラの気持ち解って、久重は苦い顔をした。

目の前の男が柔和どころか、見たままの男である事が二人を困惑させていた。

「あなたは国からも組織からも追われる立場だ。言ってる意味が解るな？」

「人生最後は笑って前のめりで死にたいものだ」

「あなたの持つてる情報を欲しがってる奴がいる。オレはそいつからの使いだ」

「お嬢さんや未来ある若者を巻き込む程の秘密じゃない」

「後、数時間もすれば此処も嗅ぎ付けられる。此処で拘束を待つか死を待つか」

「君達と共に行くか？」

言葉尻を捉えられて久重が頷いた。

「そうだ」

「……曇天に掛かる虹を期待して此処で待つてたんだが、どうやら一緒に見る時間も無いらしい」

「おい。少しは真面目に」

久重が男に声を荒げようとしてソラが久重の前に出る。

「ソラ？」

ソラが男の前に立つ。

「おじさんは悪い事をしたわ」

「ん？ 何かな？」

「あんなに罨があつたら誰も虹と一緒に見てはくれない」

「……そうか……いや、その通りだ」

男が一瞬、我に帰つたような顔をして、まるで悪戯を叱られる子供のように頭を掻いた。

「お嬢さんに言われてしまつとは我ながらみつともないな」

男がズボンの横をゴソゴソと漁り、久重に投げた。

久重がそれを受け取ると男が歩き出す。

扉の方ではなく、屋上の淵へと。

「持つておきたまえ。それが答えだ」

「おい！？」

久重が慌てて男を追おうとすると、ソラがそれを止めた。

「ソラ?!」

「ダメ!!! 足元よく見て!!!」

言われて初めて久重が気付く。

足元に薄く光輝く線が僅かに見えた。

「ちなみに連動している爆薬は全てこの場所の支柱に仕掛けられている」

男の声に久重が呻く。

「あの罨は罨か……」

「最後に君達のような若者に会えて良かった。たまには偶然も良い

仕事をする」

「おじさん」

「お嬢さん悪い。こんなおじさんの我俣に付き合わせて。目を閉じていなさい」

男が手すりを越え、呆気なく、落ちた。

「アディオス」

最後の声が遠のいていく。

久重がソラの視界を手で覆う。

「ひさしげ」

「悪い。やっぱり待ってて貰えば良かったな……………」

久重の苦渋の声にソラが首を振る。

「生きてるわ。おじさん」

「は？」

「さつき話してる間に【CNT Defender】張っておいたから。降りよう」

ソラが下来た道を急ぎ足でも戻っていく。

それに久重も続いた。

二人が建物の外に出る。

「この間の黒いカーテンか？」

上を見上げた久重が気を失い薄く黒いカーテンに受け止められ宙吊りで気を失っている男を見つけた。

「ターポリンにやられたのが修復終わったから。おじさん一人くらいなら大丈夫」

「……………ソラには頭が下るといっつか何とかか」

安堵の息を吐いて久重はゆっくりと降りてくるカーテンから男を受け取ると背負う。

「行こう。厄介な連中が来る前に」

「うん」

二人を迎えたアズは男を後部座席に座らせ、その場を後にした。車が出発して数分後。

巨大な爆光を後ろに確認したアズは目を白黒させている二人を楽しそうに見つめ、クーペのスピードを上げた。

寂れた商店街の一角。

シャッターばかりが下りた店舗の一つ。

細い路地を抜けた裏側から一つの階段が続いている。

錆びた鉄を軋ませながら大きい荷物を運び込んだ久重は遮光カーテンが下りている部屋のソファでグッタリと椅子に座り込んだ。店舗の一角を改装してある事務所にはデスク用品が並び、クーラーがガンガンと冷風を吐き出している。

部屋の中央。

巨大な黒檀の机が鎮座していた。

無闇に大きな牛革の椅子がその主を向かえて沈む。

「ご苦労様。久重」

アズの労いに久重は更なる疲労に襲われたように溜息を吐く。

「ここ……事務所なの？」

久重の横の椅子に座って内部をキョロキョロと見回していたソラがアズに訊く。

「ようこそ。我が居城へ」

アズがにこやかに告げる。

「本当に城だから達が悪いけどな」

ボソツと久重が呟いた。

ソラが首を傾げる。

「さて、今回の仕事の報酬だけど。これくらいでいいかな」

机からゴソゴソと茶封筒を取り出したアズが久重の方へと押しやる。立ち上がった久重がそれを受け取って中身を確認した。

「……………これで何日生活しろと？」

「ああ、そうだ。忘れてた」

アズが更にもう一つ茶封筒を差し出す。

「布団一組分。必要経費として出しておくよ」

「一応、感謝しておくべきなんだろうな」

「勿論。君の借金の利息は年利で0・00002パーセント。それすら返せない君に、それでも儲けを考えて出してる金額だ。借金が今日も一万円程減った事を僕に感謝するんだね」

ソラが利息の低さに驚きを隠せない様子で目を丸くする。

「それでこいつはどうするつもりなんだ？」

ソファーに“大きな荷物” 田木宗観三十九歳が目覚める気配もなく眠っている。

「とりあえずは事情を訊いて。金目のものを吐き出してもらって世界の果てにでも送っておこうかな」

「世界の果て？」

ソラの呟きにアズがニツコリと微笑む。

「北は北極から南は南極まで」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ソラが驚いて久重を見る。

「本当だ」

久重が悪い冗談でも口にしたのかのように呆れながら頷いた。

「近頃は衛星技術も発達してるからな。そういうのから逃げたい連中を一年中空が曇ったり吹雪いてたり雨が降ってる場所に何度もそいつは送ってる」

「君に褒められるなんて何年振りかな？」

久重が無視して続ける。

「主要各国が独自の宇宙開発とGPSネットワークの構築に躍起になってるからか、そういう情報も結構そいつのところに入ってくる。そういう情報から抜け穴を見つけて、こいつは逃亡者に高額プランで売付けてるわけだ」

「地獄の沙汰も金次第ってわけさ」

人差し指を立ててフフフと妖艶に微笑んだアズだったが、不意に上を見上げて懐から拳銃を取り出す。

「おい！？ 何懐から出して?!」

「久重、お客さんが来る」

「な！？ どうやってだ！？」

「ああ、どうやら其処の眠り王子に衛星からの監視が付いてたらしい」

「お得意の抜け穴の話はどうした！？」

「思わず喚いた久重にアズが首を振る。

「さすがに抜け穴を全部網羅してるわけじゃないよ。と、言っても日本が上げてる衛星に関しては殆どの情報を網羅してるはずだけど・・・。たぶん、あの金に五月蠅い政府肝入りでわざわざ特別予算まで組んだ【上弦一号】かな。アレにはG I Oも出資してて打ち上げが先月だ。TV見なかったかい？」

「家にTVなんて時代遅れなものは無い」

「女からは端末を買ってもらえるのに君ときたら」

「やれやれと言いたげなアズが肩を竦める。

「何で知ってるんだ！？」

「君の事で僕が知らないのはその心の内くらいだよ」

「言ってる。で、数は？」

「二十人。米軍上がりのゴロツキにヤクザ屋さん。それとG I O警備部の特務外部班。この構成から言って国民の選んだ政治家とG I Oの御偉いさんがそれぞれの人脈に声を掛けたってところかな」

「特務が？ 洒落にならない冗談だ」

「久重が頭痛を抑えるように頭を押さえた。

「ひさしげ？」

「ソラが不安そうに久重の袖を引っ張る。

「あ、ああ、悪い。少し嫌な思い出が・・・」

「思い出？」

「話に出てたのはG I Oの掃除屋だ。表向きは現金輸送車の護衛とか、G I O要人の警護なんかを担当してるんだが、裏の顔は簡単に言つと諜報機関さながらのエージェントが蔓延る魔窟だ」

「殺し屋・・・とか？」

「かなり荒っぽいG I A、公安の類と思つて構わない」

「外はもう固められてるっぽいなあ。ついでにジオネット上で半径三キロのマップがジオプロフィールから除外されてる。しかも、五キロ以上先の地域でスーパーやら百貨店のプロフィールがオンパレード。あからさま過ぎだね」

「その、どうして解るの?」

ソラは虚空を見ているようにしか見えないアズが次々にライブ情報を口にする不思議にマジマジ顔を見つめた。

「昔、左の眼球をやつてね」

アズが片目でウィンクすると、虹彩の色が変色し、薄く輝く紺碧に染まる。

「それ以来、楽をさせてもらつてる」

ソラが目を見開く。

「【B M I S i g h t】……」

「ご明察。よく知つてるね?」

「日本が近頃今までの視力装置より高性能なものを開発したって二ユースで聞いたから。でも、確か……」

「僕のはちよつと高性能なんだ。色々と繋げてあるからね」

「言つてる場合か。ルートは?」

「地下から二百メートル先の倉庫下」

「了解。で、このおっさんはどうする?」

「もう起きてるよ」

久重が後ろを振り向くとボリボリ頭を搔いて田木が起き上がるところだった。

「どうやら君達を巻き込んでしまったようだ」

ばつの悪そうな顔で田木が三人を見渡す。

「こちらで何とかしよう。それがケジメだ」

「違う」

「お嬢さん?」

ソラが田木の前に立ち、真っ直ぐに瞳を見上げた。

「死ぬのは責任を取るとは言わない」

「どうやったかは知らないが命を助けられた。こちらに出来るのは君達にこれ以上迷惑を掛けない事だけだ」

言い聞かせるように笑みを浮かべる田木にソラが首を横に振る。

「人生に疲れたからって、私たちを言い訳にしないで欲しい。それはケジメじゃない」

辛辣な言葉に田木は初めて少女の瞳を見た。

その瞳の奥にある光が田木の全身を射抜く。

「まったくもってその通りだ。私も焼きが回った。一日に二度も年下のお嬢さんに教えられるとは」

田木がアズに視線を向けた。

「あなたの高額プランとやらを利用させてもらいたい」

「お支払いは？」

軽い調子でアズが営業スマイルを浮かべる。

「今の私はカードもキャッシュも持ち合わせていない。資産の大半はG I Oに押さえられていて引き出す事も出来ない。隠し口座もたぶんバレているだろう」

「返済プランもご一緒はどうですか？」

「臓器と良心を売り渡す以外なら何でもしよう」

アズが胸に手を当て一礼した。

その顔が久重には悪魔のような天使に見えた。

「ご利用ありがとうございます。お客様」

「話はまとまったな。行くぞ」

久重がソファアを退かした。

「隠し通路？」

ソラが驚きに目を見張る。

下にポツカリと口を明けた黒い穴には梯子が掛かっていた。

「元々、私は防衛大卒でね。陸自で働いていた。一身上の都合で退職した後、あの会社に声を掛けられたのが全ての始まりだった」

暗い通路を懐中電灯で照らし歩く中で田木は事の発端を語り始めていた。

「私はエリートコースを自分から外れた人間だ。古巣には未練も無かった。だが、彼らは最初から私のコネを当てにしていたのだろう」

「コネ？」

「コネクション。つまりは自衛隊との繋がり」

ソラの疑問を久重が補足する。

「私は提示された金額にそう興味が無かった。ただ、新しい仕事場としてあの会社は魅力的に映った」

「そこまではよくある話だね」

アズに田木が頷く。

「そうだ。私も企業側の意図は何となく察してはいたが、別に職業倫理上問題があるとは思えなかった。役人が天下りしているように、私もそういう枠組みの中に組み込まただけだったからだ」

田木が一拍の間を置いた。

「政府高官や経済界と元々太いパイプを持っていたGIOにとって、私の取り込みはコネの強化の一環。その程度の認識だった。しかし、とある計画が私のいたセクションで持ち上がったから、私は自分の仕事に疑問を持つようになった」

未だ追手に追いつかれる気配もない通路で田木の声が反響する。

「自衛隊へのジオプロフィット導入。それはそもそも私がいた時代にも一部で噂されていた。それを行うのが自分の仕事になるとは思わなかったが、時代の流れだとは思っていた」

「試験的な導入こそあるが本格的な導入はまだ政府で審議中じゃなかったのか？」

久重の言葉に田木が首を振る。

「いや、問題だったのは表向きの平和利用ではない」

「表向き？」

ソラの疑問に久重が答える。

「今現在でも日本は米軍の力で国の防衛費を削減してる。日米安保

が未だに生きてるから日本は本来巨額の負担になるはずの防衛費を安く済ませてる面がある。だが、近頃は米国の凋落が激しい。米軍の再編で基地なんかもどんどん自衛隊側に引き渡されてる。そこで問題になったのが自衛隊の頭数だ。超少子高齢化＋自衛隊員確保の困難さ。更に移民の受け入れ失敗で懲りた日本は多くの職業に国籍条項を取り入れた。差別だなんて言われたが世論は支持してな。そういう経緯から今の日本は人員不足で自衛機能が停滞してる」

「G I Oがそこにジオプロフィットを持ち込んだ……？」
ソラの言葉に久重が頷く。

「簡単に言つと法整備を行つて民間人なんかに危険地帯で『特定の行動』を起こすと給料が出る仕組みだ」

「……それって」

「所謂、戦時特例法。ジオネット法の拡大で民間人なんかに国土の防衛を自発的に行つてもらおうつて訳だな。つまり、戦争へのジオプロフィット導入だ」

「それ本当に？」

日本の平和憲法を知っているソラからすれば、まるで信じられない話だった。

「昔の日本なら絶対に潰されてそんな法律だが、今の人口の高齢化比率を考えたらやむを得ないんだろう。何せ自衛隊員の平均年齢が四十四歳。七十六パーセントが六十五歳以上、どうしようもなく疲弊してる」

田木が声を硬くして久重の説明を引き継ぐ。

「国土の防衛は綺麗事では済まされない。実際に現環境では人口の増大した大国と渡り合うのは自衛隊では不可能だ。どんなに兵器を効率化しても、どんなに兵士達の練度を上げてても、数の前には敗北するだろう。だから、自衛隊はその信念というべきものを曲げざるを得なかった。守るべき国民に自衛という名の戦闘行為を容認する・
・そんな政府の暴挙を留める事は出来なかった」

田木の言葉に滲むのは力無き自らへの悔恨だった。

「審議は続いているが数年の内には成立するだろう。法案が成立すれば『誰であろうとも』その地域において国土防衛の為の戦闘行為は合法となる。その高額なジオプロフィット目当てに人は集まるだろう。民間人への武器の供給はG I Oの軍事部門が自衛隊協力下で行う事になっている。それによってG I Oも利益が上がる仕組みだ」

「そんなの……」

何と言っているのか解らず顔を曇らせるソラが黙り込む。

「昔の日本なら完全に馬鹿にされただろうね」

アズがその会話で初めて口を挟んだ。

「でも、日本の国民はそれを受け入れた。五十年続く不況、続く超少子高齢化、移民に労働人口を奪われた悲哀、それらは目を曇らせて余りある。それにジオプロフィットを求めて戦場に行く日本人は事実上存在しないと云っていい。だから、国民からは大きな反対意見が出ない」

「え……でも、それだと……」

ソラの言いたい事を先取りしてアズが皮肉げに笑った。

「移民政策の失敗で難民化したような外人が今の日本には三百万人もいる。生活保護も受けられない彼らは日本という国ではスラムすら作れない。徹底した治安対策、テロ対策、労働政策が移民を下層労働者として固定してる。更に『日本人』じゃない彼らに『敬意』を表して、政府は法案が通った後、彼らに対してのジオプロフィット設定金額を高くする予定さ」

ソラが完全に沈黙した。

「それと同時に何故かコスト削減の名目で経済界が賃金を引き下げればアラ不思議。日本の為に命を掛けて戦ってくれる移民達の出来上がり。ちなみに指定される一定地域で自衛隊や日本人への攻撃が確認されれば、マスコミはこぞって放送するだろう。ああ、やはり移民なんて受け入れるべきじゃなかったと。その差別利権に乗っかるのは移民排斥運動で国民から圧倒的支持を得るだろう与党なのさ」

「……………」

ソラが泣きそうな顔を俯けた。

久重が隣を歩く小さな手を握る。

「だが、それだけならまだ私は会社の歯車として今も職にあっただろう。少しでも人々へ働きかける術があるなら、それに越した事はない。同じ国に住んでいる以上、私は彼らも守るべき国民だと思っている。しかし・・・」

今までの『前置き』を挟んで尚、田木の口は重かった。

「G I Oは・・・政府と密約を交わした」

「それが狙われる理由か？」

久重に田木が視線を合わせた。

「もし、自衛隊へのジオプロフィット導入やジオネット法の拡大が全て茶番だったとしたらどうする？」

「茶番だと？」

「現代の戦争は経済活動の一部だ。利権が生まれるのは当然だろう。そこに漬け込むのは死の商人だけではないのだよ」

「一般論だな」

「G I Oは政府に戦争が起こった場合、その危険区域に指定される場所の統治を『委託される』事を約束した」

「一種の特区分てわけか？」

「違う。地方の疲弊著しい日本で企業が主体となって地域を立て直すというのは昔から言われていた事だ。G I Oはそれを戦争で実現しようとしている」

「嫌な想像しか出来ないんだが、あなたの言ってるのはまさか」

「戦時ジオプロフィットの指定区域がG I Oの統治下に移行する。

法、政治、軍事、経済、全てが『委託』という形で譲渡されるはずだ」

久重が空も見えない地下道で天を仰いだ。

「いつから企業が国を欲しがる世の中になったんだ？」

「一応の形は戦時ジオプロフィットの明確な指定と管理を行う為、自治体から自治権を一時的に借り上げる事になっている。事実上の

国土分割に等しい」

「国土を守る為に国土を企業に売るか。確かに知ればG I Oはこの国から追われるだろうな。矛盾してるところの話じゃないだろソレ」

「一部勢力の政府高官が調印した契約書と詳細な資料は全て手に入れた。政府は私の裏切りがあるとは思ってなかったからか契約を闇に葬りたくなったらしい」

「そりゃそうだろうな。今の官房長官は元々クリーンなイメージで売ってきた。企業経営手腕を大物から買われた起業家からの転身組みだ。こんな大スキャンダル喰らったら速攻アウトだろ」

「どうして解った？」

「その雇い主が激怒してる奴の話をしてたからな」

「そろそろ出るよ。久重」

「解った」

今まで先頭を行っていたアズの声に久重が前が出る。

一分もしない内に道の先、鋼鉄製のドアが現れた。

「殿は僕が勤めるよ。ソラ嬢と田木さんは彼の後ろから離れないように」

「私がお嬢さんの前になろう」

田木がソラの前に入る。

「おじさん……」

「叱ってもらったからな。少しは格好を付けさせてくれ」

「出るぞ。オレが出て合図をしたら出てきてくれ」

ドアに手を掛けた久重の耳元で声が囁く。

「（ひさしげ。ひさしげの周りに【CNT Defender】張っておくから）」

（ソラか?!）

思わず後ろを振り返った久重の耳にまた声が飛び込んでくる。

「（こっちは私が守るから。気を付けて）」

【I T E N D】を使った何らかの通信手段なのだと気付いて、久重

がジツとソラを見つめる。

「（私は大丈夫だから。ひさしげ）」

ソラが微笑んだ。

その笑みに何も言えずに久重は頷く。

「恋人みたいに分かり合うのは僕達がない時だけにしてくれないかな？ 久重」

「まさか君達はそういう関係・・・近頃の若者は進んでいると聞いてはいたが、まさかロリコンだったとは。避妊と認知はしっかりと」

「ひにん？」

ソラが何の事か分からず疑問符を頭に浮かべる。

「お前ら大人なんだから少し空気読め！！」

ツッコミを入れてから久重が扉を開け素早く駆け出していく。

光の差し込む扉の先で久重が周囲を警戒した。

確認を終えた久重が手を上げた瞬間。

バスツと音がして久重の周囲の床に硬い金属音が響く。

合図するのと撃たれたのは同時だった。

G I O警備部特務外部班。

その肩書きは場所によってはそれなりの価値を持つ。

表向きは現場担当者クラスの高い地位であり、裏向きには各国の諜報機関に蛇蝎の如く嫌われる地位である。

一国の諜報機関よりも相当に高い給料。

各種の保険や危険手当。

更には様々な融通をG I Oの他セクションに利かせる事も出来る。

そんな場所に生きている彼らの基礎能力は正規の諜報機関を超えるものだと言われている。

兵隊としても諜報員としても優秀な者達の集まり。

ある者は米軍からの離脱者であり。

ある者はC I Aからの離脱者であり。

ある者はモサドからの離脱者であり。
ある者はM I 6からの離脱者であり。
各国の組織からあぶれてしまった能力だけは無駄に高いアウトロー
をこつた煮にしたような部署なのだ。

故に彼らは己を正しく評価し、自負もなく淡々と仕事をする。
出来て当たり前。

やれて当然。

それが彼らの身上であり、無能なものはいない。

「目標1を確認」

「風が東南から三メートル」

「了解」

スポッターからの適切な情報を元に僅かにライフルの銃口を調整し
た男が淡々と引き金を引いた。

「命中。いや、待て。足元に弾丸有り。当たっていないぞ」

「何だ・・・何か目標の周りに薄くて黒いものが見える。そちら
で確認できるか？」

「確認した。何かしらの防弾装置だと思われる」

「このライフルの銃弾を受け止めるだど？」

「周囲の部隊に通達する。『ブラボー』。目標に対して至近距離の銃
撃を敢行せよ。尚、目標は徒手空拳であるが何らかの防弾装置を使
用している可能性有り。銃撃で倒しきれないと判断した時は接近戦
に持ち込め』」

「了解」

テナント募集中の窓から見える倉庫一階の駐車場。

敷地内立ち入り禁止の札を振り切ってマスクを被った男達が潜んで
いた場所からと飛び出した。

サイレンサー付きの拳銃が幾度も火を噴く。

集中砲火で釘付けになった男の周囲にバラバラと弾丸が落ちていく
不思議を目の前にしても男達は動じずにナイフを取り出して襲い掛
かっていく。

「『目標1に続き目標2、目標3、目標4を地下通路側から挟撃』
これで今日の仕事は終われそうだな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おい？」

スポッターが横の相棒を振り向いた瞬間だった。

頭のある場所から熱く間欠泉のように紅い温かな液体が噴出し、
顔を染めた。

「へ？」

それが男の最後の呟き。

一秒後、男の頭部は綺麗に宙を舞った。

最後に男が見たのは遠い場所で部隊が目標1に叩き伏せられていく
光景だった。

「ああ、ターポーリン先輩。後はこちらに任せておいてください。え
え、今確認しました。それにしても彼強いですね。素手なのに特殊
部隊上がりポンポン投げられてますよ。ええ、はい。はい。それ
では療養が終わるのをお待ちしてます」

声の主がボールでも投げるような動作でソレを投げる。

紅い血飛沫を振りまきながら、ソレは狙い変わらず部隊を全て叩き伏
せ終えた男へと突き進み【CNT Defender】に止められ
た。

「卑怯臭い装備だよなあアレ。幾らカーボンナノチューブ繊維を保
存しておいて組み上げてるだけと言っても戦車砲とか自走砲レベル
じゃないとどうしようもないとか。チート過ぎ」

声の主がスマホの電源を落とし、握り潰す。
降ってきたソレにうろたえた男の後ろ。

扉から出てくる人間の中に顔見知りを見つけて、声の主はその場か
ら空へと飛び出した。

「ソラ・・・今、行くよ・・・【ITEND】 Multi
plication Rate10。Increase Level
7。Assistant!!!!」

声の主が瞬時に久重の至近に到達した。

久重が気付いた時には黒いカーテンは引き裂かれていた。

「こんにちわ。そして、さようなら。見知らぬ君」

「!？」

そして、呆気なく、久重の片腕が宙に舞う。

「ひさ……しげ？」

続く少女の絶叫が戦いの幕が上がった事をその場の誰もに告げていた。

第七話 その腕に掴むもの

第七話 その腕に掴むもの

「戒十さくくくん（涙）」

警察署の一角で任意の事情聴取を終えた了子は涙目で佐武に泣き付いていた。

「ええい！？ 鬱陶しい！！」

羽田了子的に言うつと佐武戒十は厳しい父親や歳の離れた兄のような存在と言えるかえもしれない。

「お前少しは反省しろ！？」

了子の取材手帳を没収した佐武が泣き付いてくる了子を振り払いつつ自分のデスクへと収まった。

寝ていない目元には黒いクマが浮いている。

「これ一つで拘留を免除してやってる俺の身にもなってみろ。本庁の連中が引き下がったのは以外だったが、本当なら取調べですつとは留置場だぞ」

「だって、テロリストなんてネタが！！ ネタが悪いんですよくくくく！！」

「ああ、お前のその頭の出来だけは褒めてやりたいよ……」

「え、本当ですか！？」

「少しも堪えてねえ……」

げんなりした顔でデスクの上に手帳を広げた佐武がページを捲ろうとした。

「きゃ えつち 佐武さんがそんなセクハラする人だとは思いませんでした」

署員達が一斉に佐武のデスクを振り向く。

「お・ま・え・はあああああああ！！！！」

ついにキレた佐武に首根っこを掴まれた良子は署の玄関から摘み出

された。

「一週間出入り禁止だ！！ コピーを取り終わったら郵送してやる！！」

肩を怒らせて署の中に戻っていく佐武を見送って、了子は懲りる事なく事件に付いての思考を巡らせていた。

「とりあえず駅に行かなきゃ」

車も押収された為、徒歩で駅へと向かう。

道すがら了子は昨日得た情報を脳裏で整理していく。

人身売買が関わったビル火災と現場で確保された青年外字久重。

留守の外字宅で出会った親友と称する青年永橋風御。

海外からのテロリストを緊急で包囲した警察。

封鎖された地域で起こった不可解な異常気象。

地下道の闇から突如として出現した死に掛けの全裸男。

地下道の微かな光に見た外字久重。

親友と言っていた風御の話の総合した場合の外字の性格と何でも屋という職業。

（外字久重はテロリストと何らかの因果関係にあった。それは外字の何でも屋という職業に通じている？）

憶測は了子が最も嫌うものだ。

しかし、事実を元にした推測ならば出来る。

了子の中での外字久重は大学院という博識者達が集まる場所へ所属するインテリであり、同時に親友に言われる程のお人よしで、その性格故に何でも屋等という怪しい職業に就いている変わり者というものだ。

それが事実かどうかはともかく、情報を総合すると難儀な性格と仕事をしている貧乏インテリという事になる。

「事实は小説より奇なり・・・か」

駅の改札を潜ろうとして了子は電光掲示板に映る電車時刻が遅れている事に気付く。

『え〜〜〜現在、復旧作業により一部区間に五分から十分の遅れが

出てい

（昨日の事件のせい？）

駅員に詳しい事情を訊き、了子はホームで電車を待つ。

（テロリストには結局逃げられたって戒十さんは言ってた。設備の不具合が起きたのは昨日の騒ぎの後。なら、テロリストは駅の設備の故障と何らかの関係があってもおかしくない。逃走に地下鉄の線路が使われたなんて漫画か映画の見すぎかもしれないけど……）

了子が歯噛みする。

情報が圧倒的に足りなかった。

詳細な情報は手帳に書かれてある。

事実関係を整理するのにはやはり手帳を眺めるのが一番だと思っ
ている了子にとって、手帳の没収は痛いペナルティーだった。

（でも、戒十さんには感謝しなきゃ。テロリストに間違われて射殺
されるところだったみたいだしね）

心臓の止まった全裸の男を抱きかかえながら無数の光源に照らされ
て歩く。

そんな非常識な体験から現実的な感覚が麻痺していた了子だったが、
今更に自分が実は死の淵に立っていたのかもしれないと内心で震え
た。

（とりあえず調べなきゃならない事は四つ。外字久重の昨日午後十
時から事件終結午前二時までのアリバイ。全裸男の身元と現在の安
置所。外字久重が行っている何でも屋の実態。それからあの声の主
について）

了子が今も耳に残る声を脳裏で反芻する。

綺麗な鈴を鳴らしたような声。

たった一言の声を自分の知識を動因して分析する。

（一瞬だからかもしれないけど訛りは殆ど感じ取れなかった。でも、
発音に若干の拙さがあった。女の子としてもまだ中学かそれ以下く
らい？ だとしても、あの状況で凜とした声が出せるならメンタル

面が強いはず)

ようやく来た快速に乗車して満員とは程遠い座席に座り揺られる。

(まずは情報。全部それからね。連絡取ってみよう)

端末は没収されていたが財布とその中のカードは無事だった。

未だに滅んでいない公衆電話のある駅に降り立った了子はさっそく

テレホンカード(死語)を差し込む。

馴染みの情報屋が出るまでの数秒。

了子は何か言い知れぬ不安が己の内に蟠っている事を自覚して……

……気合を入れ直した。

警察に渡さなかつた頭の中のネタを頼りに良子は行動を開始する。

佐武が溜息を吐きながらデスクに戻ってくるとデスク前に数人の男達が待っていた。

「これは宮田さん。こんな所にどうしてまた？」

内心、苦虫を噛み潰しながらも、佐武は嫌な顔一つせず、男に挨拶する。

「いえ、捜査本部を立ち上げたはいいんですが、あなたがまだ重要参考人から取り上げた証拠をこちらに提出していないというので。

こうしてわざわざ出向いてきたわけです。佐武警部補」

嫌味な顔一つせずにこやかに嫌味を言ったのは男達の統率者だった。

『宮田坂敏』(みやた・さかとし)五十二歳。

本庁からテロリスト捜査本部を任された実質的なリーダー。

幹部クラスのエリートだった。

警察官僚の見本のような男でもある。

その情報に脳裏で毒づきながら佐武がデスクをチラリと見た。

「コレ、有効に使わせて頂きます」

宮田がスーツから手帳を取り出す。

(この優眼鏡が……)

佐武が長身で細い宮田の容姿にそんな綽名を付けて一日。

その鼻に付く態度に佐武は苛立ちながらも顔には出さない。

「どつぞどつぞ。こちらも早く提出しに行こうと思つてたところだったので」

「そうですか？ では、遠慮なく」

クソ高いテラー製のスーツを颯爽と翻し部下を連れて巢へと戻っていく背中に佐武が小さく舌打ちした。

（全部取り上げていきやがる。捜査本部はどうなつてんだ）

テロリストを確認したから包囲せよと本庁からやってきた宮田は佐武にとっていきなり家に入ってきた強盗もいいところだった。

混乱する現場を仕切り、訳も解らぬまま働かせられて、その上情報の一つも寄越さない。

何が起きているのか。

何一つとして署の人間は知らされていなかった。

ただ、捜査本部の要請に出来る限り協力するようにとの通達があった以外は他に何も無く。

テロリストの逃走という非常事態にも関わらず、マスコミは協定で黙らせて、捜査は粛々と水面下で進行している。

「こりゃ、そろそろ槍か霰でも降ってくるか」

ボソリと愚痴った佐武がデスクに戻ろうとすると、佐武の背中に声が掛かる。

「佐武さん。ちょっと」

同僚の一人がこっそりと呼ぶ声に佐武は去っていく宮田に気付かれぬよう静かに近寄った。

「何だ？」

「さっき通報があつたんだ。何か銃声がしたと」

「何？」

「あの連中、本当は通報の内容を確認しに来たんだよ」

「どつという事だ？」

「テロリスト警戒してる時に銃声がしたなんて通報があつたら報告しないわけには行かないだろう？ それで上に報告を上げたら、今から本部で人員を派遣して真偽を確かめるから余計な事をしないよ

うになんて釘を刺された」

「ついでに俺のデスクで手帳を見つけたと」

「そういう事。ちなみに通報があったのは東のシャッター街近くにある住宅地だ」

「住宅地っておい！？ 連中、真偽の確認なんてしてる場合か！？」

「こつちもそう言ったが聞く耳無しだった。連中の言い分だと真偽が解るまでは関わるなだと」

「殆どが売り物件とはいえ、あそこらにはまだそれなりに人が住んでるはずだぞ！？」

「テロリストはもうこの都市から逃げ出してるってのが公式見解なんだとよ」

「クソがッ、何が公式見解だ！！」

壁に思い切り拳を打ち付けて、佐武が拳を振るわせた。

「ほら」

「？」

「こんな事もあるのかとコピーしておいた。時間が無かったから重要そうな部分だけだが」

同僚が数枚のコピーを佐武に渡す。

「………解ってんじやねえか。行ってくる」

佐武が同僚と拳を合わせ、その場を早足で後にする。

その背中を見ていた他の同僚達が同時に顔を見合わせる。

「さてと。全員解ってると思うが準備だけはしておけ。戒十さんが『お前ら早く来い』なんて言ってくるかもしれん」

頷いた誰もが仕事をこなしながら、その同僚の言葉に頷いた。

それから一時間後、準備は無駄にならず、数人の捜査員が事件現場へと応援に向かった。事件現場へ最後に駆けつけたのがテロリスト捜査本部だったという皮肉は署員達の溜飲を大きく下げる事となった。

咄嗟に脇を締めた久重は後方に跳んでいた。

叫びが響く。

それも束の間、瞬間的な大量失血が久重の意識を明滅させ奪った。倒れこむ久重を田木が咄嗟に支えた。

追撃を掛けようとした者の前に黒い嵐のような霧が吹きつけ、背後へと後退を余儀なくさせる。

「いきなりイートモードとか酷いなあ。それが久しぶりにあった友人に対する態度。ソラ」

軽い調子で笑ったのはやや猫背の少年だった。

水色のパーカーに半ズボン。

外見上目立ったものはない。

十二歳かそこらの少年がふわりと着地する。

「メリツサ……」

激情に駆られながらもソラはそのまま久重と田木の前に不動となつて己を盾とし、その少年の名前を呼んだ。

睨み付ける視線の苛烈さに少年が辟易したように肩を竦める。

「そんな怒らなくても。君の未練を断ち切ってあげようって言う友人としての善意なのに」

「どうして此処にいるの？」

ソラが横目で駐車場の横に転がっている人間の一部を確認し、歯を噛み締めた。

「愚問だよ。ターポリン先輩が上と掛け合ったおかげで君にもまだ生き残る芽があるって事を伝えに来た」

「ターポリンが!？」

「ああ、蘇生が間に合って助かったんだ。新しいNDを運んだの僕だから感謝してくれたよ?」

まるで天気の話でもするように少年が笑う。

「……今すぐ帰って」

「今の君に僕が退けられるとは思えないけど」

「帰らないなら死ぬ事になるわ」

「おお、怖い怖い。でも、死ぬのは僕より彼の方が先じゃないかな

あ

「絶対に死なせたりしない」

「咄嗟にNDで血管の縫合と傷口からの出血を抑えたのは凄いいけど、僕と戦いながら維持出来る？」

「あなたを倒せばいい」

「言っておくけど連中はもうオリジナルロットの解析を始めてる。オリジナルそのものは使えなくても、その解析情報は十分に活用されてる。言ってる意味解るよね？」

黒い霧に周囲を覆われつつありながらもメリッサと呼ばれた少年は動じない。

「どんなに情報を解析しても【Dシリーズ】以上のものは造れない。である以上、あなたが勝てる要素は無い」

「嘔吐かなくてもいいのに。確かに君の【D1】の能力は最高だ。

でも、それはあくまでオリジナルロットの超近似レプリカの増殖能力と博士の制御OSを搭載してるからに過ぎない」

「何が言いたいの？」

「つまり、劣化版だって目的特化で運用すれば」

ソラが硬直する。

『君の戦闘能力は超えられる』

耳元で声が囁き、ソラは脇腹からの衝撃に一階駐車場から矢のように吹き飛んだ。

「ターポリン先輩みたいに」

周囲のコンクリート壁にぶち当たって土煙が上がる。

「最高の性能じゃなくても一芸特化で君の防御は抜けられる。ちなみに展開速度が遅過ぎるよ。ソラ」

「それが・・・どうかした？」

ガラガラとコンクリート片の中からソラが起き上がる。

「へえ・・・でも、その場所から彼を助けられる？」

死に掛けている久重に意識を向けようとして、メリッサの顔が變形し、体が吹き飛んだ。

「大人を舐め過ぎだ。クソガキ!!」

駆け寄ったソラが久重の横に立つ。

「田木さん。あんたはアズと一緒に逃げてくれ」

「何が何やら解らないが大丈夫なのか!？」

「腕は回収しておくよ。後で繋げたかつたら早めに切り上げてくるように」

田木とアズが今まで閉じていた口を開く。

通常では考えられない事態にも平静を失わないのは裏を歩いてきた人間故だった。

「とりあえず、あいつが復活する前に此処から退避してくれ」

田木とアズが顔を見合わせ、頷き合った。

「死なせるな。まだ、私はお嬢さんに恩を返していない」

「解ってる」

「いつものとこで待ってる。久重」

アズがブラブラと久重の腕を持って走り出す。

二人の背中がコンクリート製の壁を越えていった。

「ふ・・・ふふ・・・まさか、死に掛けの一般人に殴られるとは思わなかった。これもNDの能力？」

ズルズルと駐車場を滑っていたメリッサがゆっくりと立ち上がる。

その目に久重へ寄り添うソラの姿が映った。

「ソラ・・・君は間違ってる」

「博士は私に自由をくれた。久重が人の温かさを思い出させてくれた。私はもう戻らない」

「世界の全てを敵に回しても？」

ハッキリと頷くソラに今までの軽かった調子が嘘のようにメリッサが深く溜息を吐く。

ソラはその濁った瞳を真っ直ぐに見返した。

「僕にも勝てない君が？」

「もう解析は終わってる。あなたは【I T E N D】で造った糸を周囲に張って、身体の動作を制御してるだけ。出力が小さくてもそれ

なら超人的な動きができる」

動きの速さを看破されたメリッサが嗤う。

「まあ、それが連中の限界でもある。でも、それだけじゃあない」
横にあった駐車場の柱の一つにメリッサが裏拳を叩き込む。

柱がそのたつた一動作で中央から吹き飛んだ。

「!？」

「元々の肉体強度と筋力があってこそ、僕のNDは威力を発揮する」
「まさか、『開発』で体を・・・？」

衝撃を受けたようにソラが目を見開く。

「君は僕が宛がわれただけの友達に過ぎないとも思ってたの？」

「それは・・・」

「おめでたいなあ。薬物にDNAドーピング。骨格強化手術にホル
モン操作。君の友達は全員が君とは別系統の基礎改造の被検体だっ
た。君も知ってるかと思ってたんだけど」

ソラの顔が何かに気付いて歪む。

「メリッサ。止めて・・・」

ソラの言葉にメリッサが愉快げに笑う。

「く、くく、止められないよ」

「博士はこんな事望んでなかった！」

「泣き言なんて聞きたくない。僕が聞きたいのは帰ってくるの一言
だけだ」

「昔のあなたはあんな事しなかった！ 人殺しなんて絶対したりし
なかつた！」

ソラは視界の端に転がっている誰とも知れぬ首の残骸に唇を噛む。

「裏の人間が何人死んだところで痛む良心なんて持ち合わせてない。
何なら転がってる奴らも同じようにしてみようかなあ」

「止めて!? 昔のあなたは空が飛びたいって・・・そういう・・・
・・・」

ソラが声にならず拳を握る。

「博士なら本当に翼か羽をくれたのかもしれない。でも、博士がも

ういない以上これが僕だよ。ソラ」

「メリッサ……」

泣きそうなソラに向けてメリッサが嗤い告げる。

「僕は【蜜蜂】（メリッサ）。世界平和を約束する人殺しだ……」

「」

「そんなのツツ?!」

「ターポリン先輩から聞いたよ。君が『開発』されていない事
「!?!」

「あの博士が、あの馬鹿みたいに子供っぽい無慈悲で哀れなマッド
サイエンティストが、君に手を出してなかったなんて笑ったよ」
メリッサの瞳に憎悪が宿り、揺らめき始める。

「僕達はいつも博士に構ってもらってる君を羨んでた。でも、そんな君を時には哀れんでもいた。自分の意思や思考をどれだけ弄られているのかと、それに比べれば自分達は何て恵まれている事かと」

「」

「だが、君は今も綺麗なまま、あの『開発』で頭の中にちょっと機械を据え付けただけで済んだ。偶には死体袋に入れられて、薬品付けにされてみたらどうだい？」

もうやり取りを見ていられなくなった久重が震えるソラの前に出る。

「おい。ガキ」

「僕が話してるのはソラだ。半死人は黙っててくれないか？ 黙って此処を去るなら追いはしない」

「テメエはクソだ」

「言葉には気を付けた方が」

「女の気を引きたいなら、少しはマシな顔で泣かせてみるツツ!!」

「調子に乗らない方がいい。殺すのに一秒」

完全に会話を打ち切ると構える素振りすら見せず、メリッサが消える。

打撃音。

『要らない』

人間の視界では追いきれない速度を持った恐るべきメリッサの打撃が片腕を失った久重の腹へとめり込んでいた。

「死ね」

「お前がなッッ」

打撃に吹き飛ばされる刹那。

「!？」

メリッサの鉄筋コンクリートの柱を打ち砕く一撃を受けた久重が残った腕の肘と方膝で伸び切ったメリッサの手首を捉えていた。

メキリと何かが割れる音と共にメリッサが久重の前から消える。

「ッッ」

再び姿を現したのは久重達から数メートル前方だった。

吹き飛んでいく久重に対する追撃を掛けようと再度動作に移ろうとした直前。

「NO.00 “closed jail” ツッ!」

駐車場全体の気温が一気に数十度下った。

「く!？」

一早く反応したソラの【ITEND】による周辺熱量吸収に出遅れ、メリッサの動きが鈍る。

(退避!?)

瞬時に判断を下し、駐車場から外へと転がり出たメリッサが今まで自分がいた場所に眩い光が現れるのを見た。

「Fire Bag」で友達を焼き殺そうとするなんて人の事を言えるの。ソラ」

「私はひさしげを守る。そう決めたのよ」

メリッサが久重の腹部に黒い液状の何かがベッタリと張り付いているのを見て瞳を細める。

(対衝撃防御? NDを凝集させて、やっぱり基本性能が違い過ぎる……)

「最初から知ってたみたいに反撃かぁ。あなたソラが守ってなきや上半身と下半身が分かれてましたよ?」

「頭に血の上ったガキがどう攻めてくるかなんてお見通しだ。真正面から来る拳なら見えなくてもインパクトの瞬間にカウンターくらい取れる」

「漫画の読み過ぎって言われませんか？」

「ソラを信じてる。それだけで十分試すに値するだろう？」

軽口で返されてメリッサが閉口した。

「ひさしげ」

久重に駆け寄ったソラが残った片腕に自分の胸を押し付ける。

「ソラ?! な、何して!？」

「ひさしげが博士から貰った力があればNDは止められるわ」

「アレか!? だが、出し方とか解らな」

ソラの額に微かな光の文字が連なり、久重の手に触れた胸から光が寄り集まっていく。

【ITEND】Annihilation Mode。

Energy Source 【SE】。

Full Drive。

(これが先輩の言っていた【D1】の裏モード!? でも【SE】の効果範囲外なら!!)

急激に周囲の温度が下っていくのを黙ってみているわけもなく。

メリッサが超高速でその場から離脱しようとした。

「　　　ツツツ?!」

久重が走り出す。

(体が動かない!? 何をされ!?)

ハッとメリッサが気付く。

駐車場の中、一人でこちらを見つめているソラの額の文字が浮いていた。

Coupler Mord。

結合。

その意味にメリッサが思い当たる。

久重の腹部に集積されたNDへ大量接触していた事に。

ドサリとその場で久重が崩れ落ちた。

「ひさしげ!!」

駆け寄ったソラが久重を抱えて歩き出す。

ソラが歯噛みした。

(どうすれば、このままじゃ!?)

『【D1】は正式な【Dシリーズ】の一号機。他のオリジナルロットの目的特化型とは違い汎用型だ。その能力は他ロットに先鋭的な部分でこそ劣るものの、総合的な値では最高の能力を有している』
NDによって現状を維持する事は出来るが、ソラに出来るのはそれだけだった。

基本的な治療がそもそも出来ない。

重大な症状が生じててもソラは根本的な治療など出来ない。

久重が先程まで動けたのは傷口の組織をNDで応急処置をしたからに過ぎないからだ。

それでも意志の力が強くなければ片腕が無い状態で立ち上がる事など不可能に違いなく、危険な状態であるのは今も変わっていないかった。

『今日も一人退けた君に感謝する。では、また次の機会に』
博士の声が途切れる。

久重を抱えたソラがジオネットに接続、周囲の地図を確認し、アズ達が逃げていった方角へと歩みを進める。

しかし、アズ達が見つからない。

人通りの多い方角へと向かっている事に気付いてソラの足が止まった。

出来れば公的な病院は避けたかった。

迷惑どころの話では無くなるかもしれないし、人死が出かねない。更にソラの内心を曇らせていたのは久重が危ない事に関わっていると誰かに知られる事だった。

久重の人間関係が裏のものばかりではない事は共に数日過ごしただけでソラには十分理解できていた。

ライオンのような大学の上司に健気な大和撫子。

きつと、他にも久重には大勢の友人がいて、そんな友人関係を壊すかもしれない噂や事実は他人の目から遠ざけておくべきものに違いない。

「ひさしげ。いつもの場所ってどこ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そつと聞いて、やはり目覚めない久重を前にソラが涙を堪えた。

（もし、本当に危なくなりそうだったら・・・・病院に行こう）

それでまた襲われるような事があれば、その時は自分の命を賭けて全てを守る。

それでいいとソラは己を納得させた。

ルルルルルル。

「!？」

ソラが久重のズボンの振動に気付き、それが朝朱憐に渡された端末だと気付いた。

「は、はい。こちらソ・・・・外字です」

慌てて取り出した端末に出て、ソラが久重の苗字に言い直す。

「朱憐ですわ。あなたはソラ・・・・さん？」

「あ、えと、ひ、ひさしげなら今少し出てるから、それで家に置いてあったコレ届けに行く最中なの」

「まあ、ひさしげ様ったら」

「い、今ちよつと立て込んでるから、ひさしげ見つけたら渡しておくから、その、ごめんなさい!!」

ブツリと通話を切って、ソラが道を急いだ。

再びの着信。

出ずにやり過ぎそうとしたソラが先の番号とは違う着信である事に気付いた。

「は、はい。外字」

「ソラ嬢？ ひさしげの様態は」

「あ、アズ!!」

メリッサの肉体のあちこちで内側からの圧力に耐え切れず破裂が起き、血飛沫が上がる。

膨大な量の筋肉がメリッサの肉体を内側から圧壊させつつあった。無数の改造を受けた肉体の筋肉はその骨格や内臓を己の圧力だけで壊す程に肥大化していく。

メリッサのNDはそれを押さえ込み、それを精密制御する為のものだった。

ガシャンと音がして、瓦礫に埋もれていたメリッサの前に手が差し出される。

その手の上には黒い玉のようなNDの塊があった。

『随分と手加減したようで』

玉から発せられる声にメリッサが笑う。

「ああ、ターポーリン先輩」

『そのまま死ぬつもりですか？』

「それもいいかなあって思いますけど」

『任務の完了は報告を持って行われるものだと教えたはずですが？』

「【D1】は能力の封印を解かれています。これは間違いないかと。」

でも、リミッターが掛かっているって先輩の推測は当たりです」

『根拠は？』

「ソラは未だにあのND無効化以外に二種類しかプログラムを使用していない。たぶん、使わないのではなく使えないからと考えるのが妥当でしょう」

『では、あなたには引き続き、情報収集の任を受け持つて貰います』
「殺さなくてもいいんですか？」

『上には博士が独自にリミッターを設けている為、過去の力は余程の事が無い限り復活しないと言い添えておきました』

「瀕死の重傷でも負わせなければ？」

『ええ、しばらくは様子見をしながら、時折人員を当てて力を見る。それでも安定していれば安全に【D1】を回収する方法を探るといふ事で落ち着きました』

「……この善人」

ボソツとメリツサが呟く。

「善人は人殺しをしたりしないでしよう。ましてや過去の仲間を本気で殺そうとも」

「【D1】が起こした悲劇だけは避けなければならないと上を煽っていたのは先輩ですよ？」

「だからこそ、殺す以外の方法を模索するのも手の一つとしては切り捨てられないものとなる」

「了解しました。先輩」

メリツサが残った腕で黒い玉を掴み取り、

「」

口に運んだ。

警察が駆けつけた時に見つけたのは凍りついた駐車場と瓦礫と化した売り家。

それから駐車場の地下に続く崩落した通路だけだった。

第八話 長椅子に寝子

第八話 長椅子に寝子

【黒い隕石】（ブラックメテオ）。

その当時、世界を滅ぼすとされた巨大隕石。

人類の科学技術では破壊不可能とされたソレが落ち、人類は滅びるはずだった。

しかし、人類は生存してしまった。

その矛盾に科学者達が挑んで結果を得るまでに十数年の時を要した。「解った事はたった二つ」

教師のチヨークが箇条書きで事実を羅列する。

「一つは【黒い隕石】が日本上空十五キロ地点で最後に観測された事」

学生達のやる気が底を尽いている為、その声に反応するものも一人もいなかった。

「一つは【黒い隕石】が日本上空で消失した事」
流れる汗を拭い教師が巨大な疑問符を描く。

「今現在も研究が続けられていますが【黒い隕石】の消失原因は未だに解っていません。そして、国連は【黒い隕石】事件当時の混乱時に出た被害がどれ程になるか未だに完全には把握してないと言われています。その当時、各国の混乱は凄まじいもので諸外国では暴動と治安悪化、紛争などが起こっていました。その殆どの記録が残っていません。これは警察の治安維持機能が完全に麻痺し、公務員やそれに順ずる人々、高額所得者などを狙った犯罪が莫大な数に上った為です。その当時の国が今は政府も無く無法地帯として放置されているところもあります。特に第三世界での混乱は各地で虐殺を誘発し、アフリカ大陸だけでも推定四千万人が死亡しました。滅んだ民族も多く、生き残った人々も民間からの支援でどうにか耐え

凌いでいるのが現状です。殆ど犯罪発生率が変わらず、大きな暴動や紛争が起こらず、他国からの侵略すら無かった日本は世界でも例外的な扱いと言っていていいでしょう。国連加盟国の半数以上が政府の機能不全に陥った後、全ての国にいち早く支援を行った日本が国連での指導力を発揮しているのは皆さんも周知の
「

布深朱憐にとって世界は謎に満ちている。
それは所謂世界が減びなかった理由とか今世紀最大の謎とか学校七不思議的なソレではない。
オカルトなど眼中にない。

あるのはいつの世も女と男の間に蟠る深くて長い溝だ。

例えば、いきなり外字久重の前に現れた美少女とか。

朱憐の知らない間に家に泊まっているらしい美少女とか。

自分と同じ表情で外字久重を見る美少女とか。

朱憐にとって問題なのはソレだ。

どうしたらいいのかと混乱したままお昼を過ごし、混乱したまま体を育を受け、混乱したまま渡したばかりの端末に電話してみる。

そして、何故か端末に出るのは朝方に紹介された少女で忘れ物として端末を届けに行くと一方的に告げられて通話が途絶えてしまう。

「・・・・・・・・・・うう」

パタリと朱憐の縦ロールがゆるふわカールのように萎びた。

「ひさしげ様・・・・・・・・」

昼休み。

年頃の女性が男性の部屋に寝泊りするという衝撃的な事実についてどう対応したらいいか朱憐は友達にアドバイスを受ける事にした。朱憐の友達の多くは快く相談を受け、顔を真っ赤にし、何やらヒソヒソと話し合った後、アドバイスをを行った。

曰く。

「家の方に調査を依頼してみても如何でしょう？」

「ここはその殿方が布深さんをどう思っているのか直接的に訊いてみては如何かしら？」

『それにしてもその殿方も殿方です！！ 布深さんがこんなにも心を痛めているというのに』

『布深さん。負けちゃダメですよ！！ 幾ら若い子が良いと殿方が言ってもきつと最後には戻ってきますから！！』

男女七歳にして同衾せず。

旧い話とは解っていててもそう教育されてきた朱憐にとって今朝の久重とのコミュニケーションは刺激的過ぎた。

友人達からのアドバイスを聞いても更に心が重くなった。

朱憐にとって久重に対する不安とは未だ強固な信頼関係を築けていない事を意味した。

お世話になった大学教授の娘さんが遊びに来ているというだけの話に衝撃を受けているのは久重と自分が未だ『そういう関係』とは程遠いからに他ならないと朱憐は自覚する。

恋は闘争。

奪われてしまえば帰って来ない。

友人達の話の総合して、朱憐にはそう聞こえた。

自分には誰かと争うなんて向いていないと思う。

(聖空さん……………)

しかし、諦められるものではない。

朱憐は自分がお嬢様であると自覚がある。

女性が運命という言葉に弱い生物であるとの知識もある。

それでも特別な人というものが家族以外にも存在するのだと朱憐は知った。

知ってしまった。

初めて久重と親しく話した日から胸に積み上がっていく感情と記憶を否定出来ない。

何かの本で読んだ知識では三年もすれば本能的な愛は醒めるとあった。

だが、胸に降り積もるものが三年で熱を失うとは朱憐には到底思えなかった。

『では、これでホーモルムを終わります』
気付けば放課後。

朱憐は友人達に挨拶しながら学校を後にする。

傘を差して歩き、端末を見つめつつ、今一度電話するべきか悩む。
思い切り躊躇してから電話を掛けた。

『はい。お嬢様。何か御用でしょうか？』

(うう……わたくしの意気地なし……)

使用人への電話に変更してしまう自分の情けなさに肩を落としてつつ
用事を告げる。

「ひさしげ様のお家に寝具を一式配達しておいて頂戴」

『畏まりました。あの【小屋】に相応しいものを一式ご用意してお
きます』

「お願い」

『帰りの車は如何しますか？』

「今日は歩いて帰りますわ」

『そうですか。では、湯女達を何人か見繕っておきますので』

「それと……」

言い掛けて止まり、己を恥じながらも朱憐は続ける。

「ひさしげ様のお家に女の子が一人泊まっています……少し調
べて欲しいの」

『畏まりました……』

「な、何か言いたそうですわね？」

『いえ、お嬢様も御家の力をそういう事に使われるようになったの
かと。少し時間を感じてしまいました』

「よ、余計な事はいいですわ！？ と、とにかく家に帰るまでに調
べておいてください！！」

『はッ、畏まりました。それでは』

通話を切った朱憐が溜息を喉の奥に呑み込んで空を見上げる。

「……ひさしげ様の馬鹿……」

己の嫉妬に微かに頬を染め、傘で顔を隠した朱憐は帰り道を急いだ。

「 !? 」

思い切り起き上がるうとして全身に激痛が奔り、久重は自分が黴臭い寝台に寝かされている事に気付いた。

視線だけで辺りを見回して、眠りこけている少女を見つめる。

「ソラ……」

「ようやくお目覚めかい？」

頭上から掛かった声に驚きもせず、久重は内心の緊張が解けていくのを感じた。

「あれからどうなった？」

アズが久重の横の椅子に腰掛けた。

「ソラ嬢に担がれてクープで回収。闇医者に見せてどうにかね」

「よく繋がったな」

片腕の感覚がある事に驚きつつ、久重はソラのおかげなのだろうと内心感謝で一杯になった。

眠りこけているソラの肩に掛けられたタオルケットが徹夜での看病を物語っていた。

「ソラ嬢に感謝するように。彼女のNDが無ければリハビリで元に戻るまで数年は掛かったかもしれない」

「……知ってたのか？」

「何も知らないよ。理解できるのはソラ嬢が使っている力の正体ぐらいいさ。それでも十分状況を想像するのは容易だけどね」

「なら、そういう事だ」

「あの域のNDなんて後三十年は出ないと思っただけだなあ」

「そんなにソラのアレは進んでるのか？」

「凋落した大国を再び再興する程度には」

「そこまでの……」

「現在のNDは莫大なコスト問題を除けば夢の医療機器で工業機械で兵器だからね。その使い道は千差万別。特定部分の腫瘍を壊滅させるだとか、ナノレベルの精密作業でしか造れないものを容易く作

るとか、人体に致命的な損傷を与えるとき、色々と使い道がある。でも、転用分野が莫大な数に上つてもコストの問題で殆どの分野に導入できないってジレンマを抱えてる」

「コストに見合う利益が出ないわけか」

「そう。でも、もしそのコストを劇的に下げる事が出来たら・・・。そういう意味でその子のNDに遣われている技術は数十兆ドル以上の価値がある」

「す」

久重が絶句する。

「SFチックな国と戦場が増えればそれくらいの価値は幾らでも湧くさ」

(いきなり話がでかくなつたな)

久重がソラの寝顔を見る。

簡単に事情を説明されていたとはいえ、そこまでの大事と実感していなかった久重にとってアズの言葉は十分に自分の置かれている状況が悪いものなのだと感じさせた。

「アズ。シラードエンジンって知ってるか？」

アズが僅かに片眉を上げた。

「・・・久重。いつから人類の未来とか背負いたい人間になつたんだい？」

「数十兆ドルに人類の未来とか。最後には宇宙でも救えばいいのか？」

アズが久重のぼやきに思い切り溜息を吐く。

「元々、NDは【マックスウェルの悪魔】を実験装置で実証した事から研究が飛躍的に進歩した。そして、その【マックスウェルの悪魔】を使って空想上の無限機関を想像したのがレイ・シラード。故に彼が考えたエンジンはシラードエンジンと呼ばれてる」

「そいつはどういう奴だつたんだ？」

「現在の原子力研究の基礎を作り、確か原爆にも関わってたかな」
「物騒な奴だつたのは理解した」

「とんでもない。彼は原子力の兵器的な運用には反対の立場だった。技術そのものには関わってたけど、その研究が無きゃ世界中の経済成長を支えた原子力エネルギー供給は不可能だったし、二十世紀中の飛躍的な工業発展も有り得なかったかもしれない。悪人と彼を誇る者もいるだろうけど、確実に人類の発展に貢献した一人だよ」

「ん……？」

薄らとソラの瞳が開き始める。
(話はここまでだ。とりあえず飯でも持ってきてくれ)

アズが仕方なさそうに頷いて古びた木製の扉から出て行った。

「ひさ……しげ……？」

「おはよう。ソラ」

「ひさしげ!？」

完全に目を覚ましたソラが慌てて立ち上がった。

「だ、大丈夫!? ひさしげ!！」

「問題無い。今、アズに状態は聞いた」

「そ、そう」

ほつと肩を下ろしてソラがパイプ椅子にへたり込む。

「良かった……」

「心配掛けた。悪い」

「うん。ひさしげが無事ならそれでいい」

微かに紅い目元に久重は何も言わなかった。

泣き腫らしたのだろう紅い目が全てを雄弁に語っていた。

「ありがとう。ソラ」

ソラが鼻を吸る。

「……うん」

突如、扉が開いた。

「?!？」

「大丈夫 済まない。出直してきましょう」

二人の間に漂う空気を読んだ田木が一瞬で踵を返そうとして、慌てた二人に止められた。

酷く静かな画廊で白いスーツ姿の青年ターポリンが色鮮やかな絵画には目もくれず道を急いでいた。

その行く手には有名な絵画がズラリと並べられている。

ゴッホ。

ゴーギャン。

ルノワール。

無論、全てが贋作。

それでも照明に照らし出される絵画は人の目を楽しませるには十分かもしれない。

歩き続けるターポリンがようやく見えてきた道の先の扉に目を細める。

扉の前に立ち、ノックは二回。

どうぞ。

穏やか声にターポリンが無言で扉を開けて部屋へと入った。

内部には天井の照明、机とテーブルが一つずつ。

白い壁紙が照り返す光にターポリンは一瞬眩暈にも似た錯覚を覚えた。

革製の椅子に腰掛けているのはグレーのスーツを着た初老の白人。

ターポリンに視線を向けたその男が呆れたように口を開いた。

「せっかくの療養期間だ。少しは回廊で目を楽しませてきたらどうだね」

「すみません。生憎と芸術には疎いもので」

ターポリンの減らず口に肩を竦めて、男が机の上の封筒を手渡した。

「ご要望通り。ファイルは揃えてある」

「ありがとうございます」

ターポリンが受け取った封筒の蠟の印を確かめて脇に携える。

「それで今回は随分とやられたらしいが体の方は？」

「おかげさまで寿命が半年程縮みました」

「そうか。君の我々への忠誠には頭が下るな」

「それ程でも。死に損なつて多少恨みこそしましたが、やるべき事が残っている事を思えば些細な話です。まだ、私の人生にはロスタイムが残っていた……この時間は幸運と言えるかもしれない」

「随分と前向きだ。ふむ」

男が机の引き出しから取り出したものをターポールの前に置いた。
「使つてみるといい。君にならば可能性が無いわけでもない」

ターポールが置かれたモノを見て体を強張らせる。

「オリジナルロットの解析は未だ順調に進んではいないと聞いていましたか？」

「これはオリジナルロットではない」

「まさか、超近似レプリカの？」

ターポールがマジマジとその机の上に置かれた白銀の玉を見つめる。

「いや、我々が持つ近似レプリカを十分の一注ぎ込んだ特注品だ」

「よくそんなものを造る許可が下りたのものです」

「増殖中に出た不良品を固めたものだ。工作精度は超近似レプリカと比較しても六十七パーセント以上。現在の我々に製造出来る物の中では最上位に近い性能を持っている」

「この死に掛けにコレを渡す理由は何です？」

「ただの餞別だ。死に往く君への」

「……………そういう事にしておきます」

ターポールが玉を掴んで、その場から立ち去ろうと背を向ける。

「また、会おう。今度は検死現場だろうがな」

「そうなる事を願っています。では、これで」

ターポールが部屋を後にした。

しばらく、扉を見つめていた男が端末を取り出して電話を掛ける。

「ああ、私だ。今渡したよ。君の言う通りに」

電話越しの声が男に礼を言った。

「君は本当に容赦が無い。彼はあれでも我々の為に最も働いてくれ

た駒だ。少しは感謝するべき存在だと思うが」

電話越しに幾つかの言葉を聴いた男が瞳を伏せる。

「解っているさ。【SE】が消えた以上、彼にはまだやって貰わなければならぬ事が山ほどある」

男が眉間を揉み解した。

「だが、それでもだ。君だってまだ人間を止めたくはあるまい？」

相手が沈黙した事を肯定と受け止めて男は笑った。

「ではな。次の会議で会おう」

端末を床に落として男が思い切り踏み潰した。

「・・・・・・・・・・悪魔が笑っているか・・・・・・・・」

部屋の照明が落とされ、声は途切れた。

長い長い坂道を転がりながら消えていく石ころを見送って、了子は上がった息で上り続けていた。

街の端。

住宅地造成を急いだ都市計画の弊害は山間部近くのニュータウンを坂道の多い年寄りに優しくない世界へと変貌させている。

遠い昔、まだ都市がそれ程アスファルトに囲まれていなかった頃、山に近い場所では自然が溢れていた事を了子は未だに覚えている。

しかし、その名残も見当たらない坂道を登るだけ記憶は薄れ曖昧さを帯びた。

（タレントのおっかけ連中も中々侮れないわよね。こういう事とか知ってたりするんだから）

了子が鼻屑にしている情報屋は元々タレントのおっかけを専門にしている。

情報機器の近代化や端末の手軽さ高性能化に伴い、情報を収集し発信するのはその筋専門の人間だけとは限らなくなっている。

人間が三人以上いる場所の情報なら大概は何処かの誰かが知っている。

了子が掴んだのは外字久重の居場所だった。

情報屋を名乗る素人も千人集まれば玄人と代わらない働きをする。一見まったく関係なさそうな情報でも幾つも集まれば別の情報を引き彫りにしてしまう事がある。

タレントの家の近くで起きた騒動の写真の画像や映像。

明らかに不審な車を思わず撮ってしまった一枚やネタとして提供される一枚が実は重要な情報を有している場合もある。

サーバーの大容量化と高性能化が進行した昨今、自分で取得したデータを全て特定のサーバーにUPしておく事はそう特異な事でもない。

クラウドコンピューティングの浸透によって、そういった特定の情報を端末で受け取るだけという人間も少なくないし、GPS位置を常時送信し、ジオネット上での利益を移動するだけで溜めていく輩も増えている。ログや保存されているゴミのような情報が本人さえも忘れてしまうような真実を教えてくれる事もある。

了子の掴んだ外字久重の情報もUPされたゴミ情報からピックアップされたものだった。

(ここから先の地域であるクーペが確認されていないなら、直前の目撃情報や位置情報から言って近辺で下ろされている可能性が高い)了子が端末に画像を表示する。

それは一台のクーペだった。

不審車両として一般人に取られた一枚は確かに後部座席でグツタリとしている久重を捕らえていた。

問題はそれだけではない。

車を運転する如何にも胡散臭い笑みを浮かべる女や屈強そうな四十年代前半くらいの男。

更には金色の髪で久重にしがみ付く様になっている少女。

(これが【あの子】なのだとしたら)

了子が脳裏でテロ事件の暗闇で聞いた声と少女を重ねる。

「.....」

了子のジャーナリストとしての勘が言っていた。

大当たりだと。

(それにしても長過ぎだから、この坂)

下ろしたばかりのなけなしの万札でタクシーを拾って二時間。

最後にクーペが確認された場所まで辿り着いてから歩いて情報を収集している良子の脚はクタクタだった。

(これで・・・何も見つからなかったら・・・お笑い・・・よね・・・)

歯を食い縛って食い縛って坂の上に立った時、了子の視界が開ける。夕暮れの町並みが地平の彼方まで続き広がる景色。

「綺麗・・・」

思わず呟いて、背後からの影に気付き良子が振り返る。

「！」

それは教会だった。

密集する家に阻まれて見えなかった坂の上の聖堂。

フラフラと導かれるように良子の足がそのドアへと向く。

十数年前に造成されたばかりの場所だというのに木製の扉はまるで長年使われたかのような光沢を放っている。

「」

無言で了子が扉を内側へと押し込んだ。

ギギギイイイと軋んだ扉が内側に開く。

内部の薄暗い長椅子の列に夕暮れの日差しが当たっていた。

誰もいない内部へと入り込み、折れそうなヒールでコツコツ音を響かせながら、良子は不思議と疲れが和らいでいくのを感じていた。

「どなたか居ませんか？」

シンと静まり返った講堂の内側でパイプオルガンだけが夕暮れに輝いている。

「・・・」

しばらく休ませて貰おうと良子が長椅子にへたり込んだ。

ふうと一息吐いた了子が静寂に耳を澄ますと僅かに開かれたままの扉から風が吹き込んで来るのが解る。

頬を撫でた風の行き先が何処かと視線を彷徨させた時だった。
壇上脇の入り口から、その少女が現れた。

「ふえ?!」

「?!」

夕暮れに照らされた金色の髪。

響いた声が講堂に反響し、了子の耳に余韻を残した。

驚きに固まっている少女が何か行動を起こす前に了子が静かに声を発した。

「貴女は此処の方かしら?」

「あ、えと……少しお祈りをして……ちよつと探検……

……」

了子が内心の滾りを抑えた。

少女の言い訳が、少女の声が、少女の仕草が、了子に多くの事を教えていた。

外国人の少女は日本語が堪能だ。

その上でとても正直だ。

少女の視線が泳ぎ、壇上脇の入り口に一瞬だけ合わせたのは、その奥に少女の気になる事があるから。

今までの何もかもを神に感謝してもいいと良子が少しだけ唇の端にやけさせる。

「そうなんだ。奥に誰かいた?」

「え……う……」

困る少女の顔だけで了子には十分だった。

「それじゃあ、私も少し探検しちやおうかな」

優しく言って、了子が立ち上がる。

それに敏感に反応した少女はまるで怯えた猫のようだった。

「ねえ。貴女の名前は何て言うの?」

「な、名前……?」

「ええ」

「聖……ひつじ、なん……」

「ひじり・・・そら・・・さん？」

ゆっくりと歩み寄っていく了子を前にして車を目前とした猫の如く硬直したソラが瞳に困惑の色を示す。

「そう。良い名前ね」

了子が進もうと一歩でソラの横に立とうという時。

「すみません。そろそろ此処は閉めますが何方かいらっしゃいますか？」

了子が振り返る。

扉の外から入ってくるのは修道服を着た老齢の女性だった。

「あら？ これは可愛い娘さんが二人も。こんにちは。いえ、こんばんわ・・・かしら？」

「此処の方ですか？」

了子の問いに女性が柔和な笑みで頷く。

「はい。ここの管理を任されている藤啼ふじなきと言います」

「藤啼さん？」

「今日はこれから友人が来る事になって少し早く閉めに来たんです。悪戯っぽくウインクするお茶目さに了子が「そうなんですか。残念です」と肩を落とすフリをする。

「ちよつと坂を上ったところにこんな場所があって驚いて。それで入ったんですけど、此処は平日には？」

「はい。祝日以外は毎日朝八時から午後六時三十分まで」

「なら、出直してくる事にします」

「礼拝にはパイプオルガンの演奏もあります。どうかお気軽に来て下さい。いつでもお待ちしてますよ」

笑みに「はい」と頷いて了子が扉の方へと歩いていく。

「ところで貴女はこの方のお知り合い？」

了子を見て言う藤啼にブンブンとソラが首を振る。

「そうですね。では、もう遅いですから保護者の方に連絡を入れて向かえに来て貰いましょうか。それまでは此処で過ごされて結構ですから」

了子が扉の外に出ると藤啼がそつと一礼する。

「では、またの機会にお越しを……ふふ……」
パタンと閉められた扉に鍵が掛けられる。

あつという間の出来事にソラは何も言えずにいた。

ソラへと振り返った藤啼がそつと片目でウィンクして人差し指を唇に当てる。

「！」

ソラが驚くと藤啼がチヨイチヨイと壇上脇を指差す。

そこにアズの姿を認めてソラは全て理解し、ドツと疲れた顔でその場にへたり込んだ。

「……………」

閉まった扉の先でどんな会話が行われているのか。

耳を濟ませていた了子は暗くなり始めた辺りを見回して、車の一台も止まっていない事を確認し、その場を後にする事にした。

坂道を降りる途中何度か立ち止まり見上げた教会もやがて見えなくなる。

（聖空。外字久重の秘密に繋がる鍵。あの子は一体何を知っているの？）

もう見えない教会の方角を振り向いた了子の瞳には少女の姿が今もハッキリと焼き付いていた。

（間違いない）

テロリストの包囲事件現場で聞いた声は少女のもの。
了子は確信を深め帰路に着いた。

「紹介するよ。此処のオーナー兼管理者。藤啼三郷。ふじなき・みさと僕の友人の人だ」

横になっている久重の部屋に田木とアズ、ソラ、藤啼が集まっていた。

紹介された三人が一斉に藤啼を見る。

柔和な顔で藤啼が久重の傍まで来ると余った椅子に座った。

「ふふ・・・アズに誰かを紹介されるなんて歳を取ったものね」
「君に言われたくないよ」

アズがやれやれとその藤啼の言い分に肩を竦める。

「このトランクルームを預かる藤啼です。よろしく」

「トランクルーム？」

「都合の悪いものを放り込んでおく場所だ」

ソラが首を傾げると久重が説明する。

「主に武器や書類。それ以上にヤバイものを置いておく事もある」

「君もその仲間入りだよ。久重」

「此処に匿おうつてののか？」

「いや、此処はあくまで仮置き場さ。君にはいつもの場所に戻ってもらおう。君がいきなり消えたらお姫様が悲しむだろうしね」

「お姫様って・・・朱憐の事？」

ソラにアズが頷く。

「襲ってきた連中、ソラ嬢の追手、どちらも公権力を公には無視出来ないを見た。あそこはああ見えて地理的にはかなり恵まれてる。

複数、財閥を仕切る家が近隣にあるせいで近くで事件なんか起こった日には周辺の監視が厳しくなるし、色々と探られる。更にはお姫様の家が近いから裏社会の連中は大手を振って手が出せない」

「・・・ひさしげって」

ソラのジツトリとした視線を受けて、久重が何も知らなかったと慌てて首を振る。

「お姫様とあんな仲になるとは思ってたけど。君は知らない内に守られてるよ。久重」

「全然知らなかった・・・」

「教えてなかったからね」

「教えるよ!？」

「君が恩を恋と錯覚しないか僕は心配だったのさ」
グツタリとした顔で久重が寝台に身を沈めた。

「あーごほん。何か本題から逸れているような気が・・・」

田木から指摘されてアズが話を戻す。

「とにかく、久重。君は戻れ。あそこなら連中もおいそれと攻撃はしてこない。大物政治家やG.I.O.だって今回の部隊壊滅で少しは慎重になる。あっち側のアプローチはこっちで何とかするから、君はいつも通りの生活に戻るように」

「腕の治療はどうする？」

久重の問いにアズがソラを見る。

「ひさしげの家の付近には病院が無い。治療は任せても大丈夫かい？」

「うん。ひさしげの傷は絶対に私が直す」

「という事で決まり・・・かな？」

「まだ、決まってるないだろ。田木さんはこれからどうするんだ？」
久重に田木が首を振る。

「いや、僕の事は気にしないでもらいたい。君達に助けてもらっただけで十分だ」

安心させるような笑顔にソラが顔を曇らせる。

「田木さん。貴方にはしばらく此処で暮らしてもらいたい」

「此処で？」

アズが今まで口を挟まなかった藤啼を見る。

「どうぞご自由に。このルームの借用人は貴女ですもの。アズ」

「という事でしばらくの間は此処で暮らして欲しい。今後の事は状況が落ち着いてからになると思う。連中の出方が強硬なものなら国外への退避を前提に計画を練る事になるよ」

「すまない。君達には本当に迷惑を掛ける」

頭を下げる田木の肩にアズが手を置いた。

「はいはい。お話が決まったならお食事にしましょう。アズ、ほら手伝って頂戴」

「・・・君は僕に家事とかさせる気かい？」

アズのげんなりした顔に藤啼が笑う。

「家事が出来る女が男から好かれるのは理解の範疇でしょう？」

「・・・了解」

「わ、私も」

「あら、手伝ってくれるの？」

ソラが大きく頷く。

「お嬢さんよりもやる気の無い誰かさんとは大違いね」

「勘弁してくれ・・・」

アズのやり込められる様に久重は珍しいものを見たように驚きながら、内側から滲み出す笑いを堪える事が出来なかった。

「僕がやり込められてるのがそんなにおかしいかい？」

「意地悪な魔女が聖女に諭されてるなら尚更な」

「さ、それじゃあ、消化に良いものを何か適当に見繕いましょう」

藤啼が締めくくって出て行くとそれにソラとアズが続く。

「・・・」

残された男性陣二人が顔を見合わせる。

「君は随分と愛されているようだ。久重君」

しばしの沈黙の後。

「・・・はい」

答える久重の声は優しかった。

第九話 ラブコメさん（前書き）

活動報告内で設定に私用している技術に付いての説明などがあります。どうぞご利用ください。活動報告四号は現在進行形での研究がなされている「情報熱機関」に付いて。

第九話 ラブコメさん

第九話 ラブコメさん

カーテン越しに黄金の埃が舞う。

密やかにカーテンから漏れる日が新たな世界を運んでくる。

ハローワールド。

そう朝の挨拶する男を思い出して少女は上を見上げる。

視線はいつか天上へ届くのだろうかと停滞している思考で思う。

「博士・・・・・・・・」

その男は言っていた。

朝とは夜を越えた者だけが持ち得る特権だと。

朝とは死んだ世界が甦る儀式なのだ。

闇に消えた全てが照らし出された時にこそ真実は目前に現れる。

そこにはきつと楽しい事だけではなく、哀しくて辛い事も待っている。

それでも前に進み続けるしかないから、人は朝に希望を見る。

今日は死ぬには良い日だと笑って居を後にすら出来る。

「・・・・・・・・」

男は最後の朝に言っていた。

朝日が昇り続ける限り、希望が消える事はない。

夜の帳が降り続ける限り、絶望が終わる事はない。

だが、どちらに目を向けるかは自分で決められる。

闇に閉ざされた空がいつかは照らし出されるかもしれないと見上げるかどうか。

たった、それだけの選択が、人と世界を生まれ変わらせる。

「・・・・・・・・」

熱いモノが瞳の端から一筋零れ落ちて、少女は横を見た。

小さな寝息を立てて眠る青年が一人。

ゆっくりと起き上がる。

薄ぼんやりした意識のまま少女は身を起こし、隣の青年の顔を覗き込む。

いつも人の事ばかり考えていそうなお人よし。

その顔に片手で触れる。

「Hello World……」

髪を掻き上げて、少女はそつと唇を触れ合わせた。

ガチャリと扉が開く。

「え」

少女はゆっくりと振り向いて、声の主が知っている人間だと認識した。

「……」

己が今何をしていたのか、少女は再確認する。

「!？」

「ソラ……さん？」

その日、朝から外字家には恋の旋風が巻き起こりつつあった。

『今日は一日夏日となる事でしょう』

朝の食卓。

肩を包帯に巻かれて身動きが不自由な久重は顔を微かに引き攣らせて目の前で繰り広げられる光景を見つめていた。

『いやあ……今日の特番ドラマ【愛してるよ。貴女】^{マイハニー}は楽しみです
すねえ……』

部屋の隅にあるラジオから流れる番組など久重の頭には欠片も入ってきていなかった。

『では、今日の運勢です』

ジツと見詰め合う二人の少女がちやぶ台の左右に展開し、黙々と食事平らげている。

片や六本の縦ロールを従える押しかけ富豪少女。

布深朱憐。

片や金色の髪を靡かせ颯爽とNDを操る不思議少女。

ソラ・スクリプトウーラ。

どちらにしても未だ戦いの趨勢は定まっていない。

『おひつじ座の貴方。今日の運勢は最悪。もしかしたら浮気現場を彼女に見られちゃうかも!』

ラジオから垂れ流される番組を真剣に聞くフリをしながら久重は思わずにはいられなかった。

(朝から何でこんな空気!? いや、それ以前にどうしてこうなった!?)

朝、起きた瞬間から何故か背筋を震わせた久重が見たのは二人が互いに無表情で見つめ合っているところだった。

目が笑っていない、どここの話ではなかった。

乙女達の瞳が澄み過ぎた水のように自分の顔を映した時、久重の背筋には何か言い知れぬ冷や汗が伝った。

清過ぎる水には何も棲めない。

正に聖人君子ならば泰然とその視線を受け止められたのだろうか、何かと後ろ暗い仕事をしている久重にはその瞳が眩しすぎてかなり

近寄り難かった。

「ひさしげ様」

「は、はい? な、何だ?」

オドオドしながら朱憐に振り向いた久重が作り笑いを浮かべる。

「今日のお味噌汁はどうですか?」

「う、上手いと思う」

何度も頷いた久重に朱憐が僅かに微笑み、チラリとソラを見てから再び食事に戻る。

「ひさしげ!」

「ソ、ソラ?」

ソラがジツトリとした視線で睨み付けるように久重の方に身を乗り出す。

「食事が終わったら包帯変えるから!」

「わ、解った」

頷く事しか出来ない人形のようにカツクンカツクン首を動かす久重の様子に満足したのか、ソラがチラリと朱憐を見てから何事も無かったように食事に戻る。

「ひさしげ様」

「こ、今度は何だ？」

朱憐の視線が少しだけ迷う素振りを見せてから久重の肩に注がれた。「その・・・ケガは大丈夫ですか？」

「ああ、大した事ない。少し仕事で痛めただけで三日もすれば直るらしい」

「そうですか・・・」

僅かに顔を曇らせた朱憐が俯いて食事に戻るも箸を止めた。

『腕取れてたのに・・・。大した事無いわけない』

久重の耳にソラの沈んだ声が響いた。

ソラが自分にしか聞こえないようNDを使ったのだと気付いて久重はその場の居たたまれなさに頭を掻く。

「ひさしげ様。今までずっと言わずにおこうと思っていた事があります」

「朱憐・・・？」

俯いていた朱憐の顔がいつの間にか上を向いていた。

その瞳に宿る今までとは別の色に久重が戸惑った。

「ひさしげ様。ひさしげ様が普通のお仕事をしていない事・・・わたくし知っていましたわ」

「・・・そうか」

たぶん、そうなのだろうとは久重にも解っていた。

ご令嬢と呼ばれる人種である朱憐が本気になれば家の力で大概の事は調べられる。

そんな素振りもなくいつも接してくれていたからこそ久重は身分や門地とは人間にとって重要なステータスであるという基本的な事を朱憐では忘れられていた。

それを急に持ち出すという事は朱憐にとっても久重自身にとっても互いの深い場所に触れ合う行為であり、その場は無傷では済まない鋭さを持つ。

「ひさしげ様がただの大学院生だけではなくて・・・何でも屋というものをしていて・・・時には危ない事や法に抵触するかもしれないような事をしているのも・・・」

「その通りだ。間違っちゃいない」

久重が朱憐の言葉を肯定する。

「それで失礼かと思いましたが、ソラさんの事も調べさせてもらいましたわ。久重様に留学のご経験は無く、世話になった大学教授もいないと家の者から言われました」

「　　いつ調べたんだ？」

「昨日です」

久重がその日数に内心で驚く。

久重は自分が思っていたよりも朱憐の家の力は強大なのだと言更ながらに感じた。

「ひさしげ」

「ソラ？」

箸を置いたソラが朱憐を見つめる。

制止しようとした久重を手で制して、ソラが首を横に振った。

「私が話さないといけない事だから」

その微笑に久重が反論の余地が無いと知る。

「大丈夫だから、ね？」

「解った」

「シュレン」

向き直るソラに朱憐を真っ直ぐに見つめた。

「単刀直入にお聞きしますわ。聖空さん。いえ、何処かの誰かさん。貴女は一体誰ですか？」

「話す前に聞いておきたいんだけど、私の事をシュレンはどれだけ知ってるの？」

「貴女がこの日本では不法滞在者である事。貴女がこの国では存在しないはずの人間である事。貴女の経歴が全て嘘である事。貴女がひさしげ様の仕事に何らかの関わりを持っている事。これで全部です」

ソラが持っていた箸を置く。

「私は・・・ひさしげに助けられたの」

静まり返る食卓からラジオの音が遠ざかっていく。

「それまで私は一人だった。昔親しかつた人達と道が違えてしまつてからずっと世界中を逃げ続けてきた」

「逃げ、る？」

衝撃を受けている朱憐の言葉にソラが頷く。

「もう何もかもに疲れてた。そんな時、私はひさしげに出会つたの。たつた数日前の事をソラは懐かしそうに語る。

「その時の私は何も見えなくなつてた。自分はまだやれるって弱気になつてなつて無いつて自分が強いフリをしてた」

久重が始めて出会つた頃のソラを思い出す。

まるで何もかもを拒絶するように強がつた少女の姿が今も瞼の裏に焼き付いていた。

「本当はこんなになつぽけで何も出来なかつたのに・・・」

己の手を自嘲気味に見つめてソラが拳を握る。

「敵だと思ひ込んで酷い事をした私にひさしげは優しくしてくれたわ。そして、私の為怒ってくれた。私は絶対に忘れない。ひさしげが私にしてくれた事を・・・」

朱憐がソラの瞳の奥。

揺らめきを見つける。

「・・・」

耀かしいものを秘めた瞳が自分と同じものだとして朱連は認める事にした。

その誰にも侵せない輝きは辛苦を舐めた者の証。

それを知つて尚その先を望む者の色。

「私はソラ。【ただ聖書のみ】（ソラ・スクリプトウーラ）。世界平和を望む逃亡者」

朱憐がその響きを微かに呟くとソラが頷いた。

「私の本当の名前は誰も知らない。私自身さえ。きっと、私を追いかける者さえ。自分がどんな国のどんな人種なのか私には解らない。予測は出来ても証拠が無い。たぶん、どんなに探したって私の生まれた記録はこの世界の何処にも記されて無い。私に解るのは私が誰にも利用されてはいけないという事だけ」

シユレンとソラが名を呼ぶ。

「貴女に私が教えられるのは貴女の未来に私はいないから心配しなくていいって事。それだけ……」

その微笑に感じられるものが胸を抉って、朱憐は胸を片手でそっと押さえる。

それは痛ましさだった。

最初からソラという少女が己の未来を信じていないという事実。

朱憐が望む未来に自分がいないと断言するという事はつまり「そういう」話だ。

「空さん。それはご自分を過小評価し過ぎですわ」

「え？」

未だ整理出来ない混沌とした胸の内が僅かに「弾んでしまった」事を朱憐は羞じ悔いる。

「わたくし達には明確な差がある。確かに優劣が最初から存在する。でも、それは貴女の想いが実らない事に対する言い訳にならない。

それがどんなに『致命的な溝』であるにしろ、諦めるのは最後でいい」

「」

今度はソラが何も言えなくなり、胸を押さえた。

「それがわたくしの持論です。わたくしの未来に貴女がないとしても、それはただわたくしの前からあなた『達』がいなくなっ

るだけかもしれない」

「シユレン……」

ソラの顔に一筋の流れが伝った。

思ってもみなかった言葉がソラの胸を震わせていた。

「殿方の前で無闇にソレを見せてはいけません。それは女の最後の武器なんですから」

ハンカチを差し出した朱憐の手を震える手が捉えて、きゅっと握る。
「あり……がとう……」

二人の様子にどうやら丸く収まったようだと久重がわざとらしく咳払いをして告げた。

「早く食べないと遅刻するぞ」

「え？ あ、は、はい!？」

腕時計を確認した朱憐が慌てて箸を持つ。

その顔は僅かに高潮していた。

着替えても覗かれたような気分には違いなかった。

自分の心の内を吐露するという事は誰だって恥ずかしい。

「空さん。これからもそう呼んでよろしいですか？」

ハンカチで目元を拭いたソラが朱憐に赤い目元を細めて笑った。

「うん!！」

闇雲に走り出せるのは何も若い人間だけとは限らない。

佐武戒十にとつての人生はいつも五里霧中。

その最中を最速で走り抜けてきたからこそ、今の佐武があると言っても過言ではない。

職業倫理ストレスの違法捜査は数知れず。

しかし、自分の正義だけは貫き通してきた。

上から何と言われようと上すら黙らせる結果こそが全てを押し通す剣となった。

磨り減った靴の踵を誇れないならば、己の人生に一欠けらの価値無しと断ずる峻厳さ。

多くの人が佐武を称して「鉄槌」と呼んだ。

その佐武の称号をしてもその結果は警察始まって以来の大戦績だった。

「お宅の住所を家宅搜索させてもらいました。出てきた書類は高度な偽造を施されたものばかり、カード類も免許類も全て偽造。銃弾二十箱。サブマシンガン二挺。フラッシュグレネード七発に通信傍受装置。顔を照会したら何処かの国のテロリストモドキな諜報員と来た。G I Oの実働部隊を捕まえたのは初めてだが、どうやら噂通りらしい」

顔の半分を包帯で巻いている白人の男が黙りこくった。

「一晩過ごした留置場で体が固まったのか。」

佐武の前でしきりに首の間接を鳴らしている。

「おたくのお仲間半分は自供しましたよ？ 後の半分はG I Oが助けてくれると思っっているのかだんまりだが、時間の問題でしょう。」

「ちなみにG I Oにおたく達の顔を照会しましたが、我が社は現在その犯罪者達に内部機密を持ち出されたのではないか調査中ですので」とか何とか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

頑なな男の態度に机の上で手を組んだ佐武が笑みを作る。

「ちなみに此処の留置場の警護は交代で二人」

ピクリと男の眉が動いた事を佐武は見逃さない。

「今時電子錠も掛けてない古い設備なんです、いや困ったな。今日辺り少しの間オレの呼び出しで五分は持ち場に戻ってこないかもしれない」

「脅しているつもりか？」

「いやあ？ どういう意味で」

男が唇を噛んで佐武を睨み付ける。

いつ始末されてもおかしくない男にしてみれば、佐武の言葉は『不審死』を遂げたいのかという脅しだった。

「取引だ」

佐武がニツコリと微笑んだ。

「条件を聞きましよう」

「オレが『独自に行つた作戦行動の全容』を教えよう。その代わり絶対に釈放するな」

（まあ、さすがにそこら辺が落としどころか）

内心で佐武が一人ごちる。

あらゆる分野に進出しているG I Oの影響力は絶大。

そのG I Oに楯突く供述などしようものなら、どんな方法で始末されるか解つたものではない。

だからこそ、男の妥協点は「作戦内容は教えるがG I Oと自分は公式には関係ないという事にしてくれ」というものだった。

「では、銃刀法違反で書類送検しましょう。検察には話しを通しておきます。気にしなくても彼方が嫌いな国とは犯人の受け渡しが無いので安心を。『幸いな事』に彼方は外国人だ。今のご時勢なら再度逮捕されるでしょうから二十年は堅いでしょう。では」
四十分後、席を立つた佐武は外で待たせていた同僚にその場を預けて部屋を出た。

佐武が脳裏で話しを整理する。

男の話を要約すると単純なものだった。

男に暗殺の仕事が舞い込んだ。

とある男を始末しろと言われて手を出したが途中で見失った。

再度見つけた時には女と青年と少女を連れていた。

そこで襲つたが返り討ちにあつた。

対象の詳しい情報は知らない。

（国家権力を何だと思つてやがる）

内心の怒りを静めて佐武はG I Oの遣り方に吐き気を覚えた。

男があそこまで警察に協力的な理由は一重にG I Oに対する恐怖があるからに他ならない。

状況的にぶち込まれるのはもう『詰んでいる』状況の男にとって逆に取りがたい措置だろう。

日本程にスパイ天国の国は他に無いが日本程に国家権力が仕事を
する国もまた無い。

官僚や幹部こそ天下りだの何だのとやっているが日本の末端の公僕
は外国に比べても犯罪者との癒着や賄賂などに対してのモラルが高
い。

組織内部への宗教汚染や官僚・経済界からの圧力なども比較的容易
に撥ね退け自浄する。

日本の警察組織そのものの独立性が高く、その独立性の高さ故に様
々な外部からの干渉が悪い意味でも良い意味でも届き難い。

未だに民営化されていない刑務所の管理は先進国の中でもとりわけ
嚴重というわけではないが、末端まで行き渡る職業意識が大きな背
任行為を発生させづらく刑務所内での暗殺なんて仰々しい事はまず
起こらない。

これが隣国ならば、知らぬ間に殺されていても何の不思議もないの
だから、男にとって捕まった事は未だ最悪の結果ではないと言わざ
るを得なかった。

「とりあえず回るか」

男の身柄の安全を確保する為、複数の協力者に厄介事を申し入れよ
うと佐武が端末を取り出した時だった。

「佐武さん!!」

声に佐武が振り向くと慌てて今正に男を預けてきた同僚が駆けてく
るところだった。

「今、被疑者がいきなり死んだ!!」

「!?!」

「佐武さん!!」

後ろからまた声がして佐武が嫌な予感に顔を強張らせる。

「どうしたってんだよ!?!」

怒鳴る佐武に他の同僚が二人駆け寄ってくる。

「留置場の連中が軒並みやられた!!」

「死んだのか!?!」

「今、救命処置を行ってるがダメそうだ！」

思わず舌打ちして佐武が唇を噛んだ。

「それで原因は？」

「それが目撃者は全員いきなり苦しみ出して死んだとしか?!」

(やられた!?)

佐武が苦い顔で思考を巡らせる。

(もしナノマシンや毒物なら証拠も残らないクソ!!)

GIOならば大げさでも何でもなく証拠の残らない殺害方法をコスト無視で行える。

体内に本人達の知らぬ間に何かしらの仕掛けが施されていたに違いなかった。

「それで今現場はどうなってやがる!?!」

同僚の男の端末に連絡が入り、佐武の前で男が渋い顔をした。

「今、あっちの捜査本部が現場を封鎖してるらしい」

「クソが……」

歯を軋ませて佐武がその場から歩き出す。

「どうするんだ？」

同僚達から佐武に質問が飛ぶ。

「オレはこれから出てくる。お前らは何か解ったら連絡してくれ」

同僚達を置き去りにして佐武は騒がしい警察署から抜け出した。

歩きながら佐武が端末を取り出して短縮ダイヤルに掛ける。

「おい」

相手はすぐに出た。

「ふぁ~~~~い。こひら、りょうほ~~~~」

伸び伸びの声が寝起きである事に佐武がげんなりした顔で続ける。

「面白いネタをやる。欲しかったら公園に來い」

「!?! マジ!? 了解しちやいますですはい!?!」

「お前の頭には何が詰まってるんだ? ああ!?!?」

不機嫌にかなり切れ気味で佐武が怒鳴ると了子が答える。

「それは無論。一にネタ。二にネタ。三にネタ。四に命。五に、く

あ~~~~あ・・・とりあえず衣食住」

欠伸を挟んだ了子がバタバタと外出の準備を整えていく。

「それならお前もネタ出せ。言っとくがこれからの話は命賭けになるかもしれん」

佐武がそう口にするとかラカラと了子が笑う。

「命賭けてないネタでスクープなんて無いですよ。戒十さん」

「冗談に聞こえるか？」

「それでも戒十さんに命賭けなネタを十や二十は上げました。えっへん」

「今回は今までの比じゃねえ」

「・・・それでも戒十さんならどうにかしてくれると信じてます」

「お前・・・後悔すんじゃねえぞ」

「はい！」

了子の電話越しの明るい声に何か救われたような気がして佐武は電話を切った。

昼間の公園に辿り着くまで数分。

(少し他のネタもサービスしてやっかな・・・)

佐武の口元にはいつの間にか緩やかな微笑が浮いていた。

永橋風御にとつて数日も親友が尋ねてこないというのはほぼ異常事態と言つてよかつた。

しかし、それが親友の仕事の話だと言つならば納得するだけの理由として十分だった。

アズトウアズ。

そう呼ばれる女の仕事にはいつも危険が隣り合わせ過ぎる。

風御が知る限り、親友外字久重は常にその危険を^{リスク}背負っている。

数年前。

初めてその年齢不詳の女に出会つてからというものの久重は才能とも呼ぶべきものを開花させている。

それを知る故に風御はその女の情報には気を付けている。傍から見ればアズと久重の關係は雇用關係の域を出ない。

しかし、風御にはまるでアズが久重を試し鍛えているようにも思えた。

最初こそ小さな仕事をしていた久重が今では正体不明の女フィクサーの片腕と裏の世界では大評判だからだ。

猫探しだの浮気調査だのやっているだけならば風御はアズという女を見過ごしていたかもしれない。

しかし、諜報機関を相手取り詐欺紛いの手法で翻弄し、武器商人を相手に得物を安く値切り、公安とのパイプを持ちながら公安そのものにマークされ、海外富豪の私設軍隊やSASと一線交え、暗殺者に狙撃されてもケロリと外出しまくり、出所の解らない莫大な資本で特定業種の会社をM&Aし続け、小国だらけの地域でパワーバランスの調整に一役買い、交渉相手が気に入らなければ確実に破滅させる人間は見過ごせない。

そんな危険人物が親友の借金を持っているとなれば尚更に。

親友の傍にいる自分もその類だとは自覚しながらも風御は久重に極力裏社会に関わらせてこなかった。

自分が裏社会でどんな仕事をし、どんな地位にあつたのか。

それは恥ずべき事ではあつても、誇れる事ではない。

未だに親友である男にそんな自分の昔を見せる事は出来ないと思いつつも、裏社会での仕事から抜けている風御には風聞だけが届いてくる。

情報にイライラもどかしい毎日を送るのは体に悪い。

数日見かけないと思えば、海外で大暴れしているアズのお供が職員をダース単位で返り討ちにしたのだと聞いて風御は愕然とした事もある。

いつの間にそんな話になっていたのかと溜息を吐きたくなる事は数知れず。

(まったく。持つべきモノは気に掛けてくれる親友だろうに)

毎朝のように朝食をタカリに来るのは正直辟易するものの、風御にとっては久重が裏社会に取り込まれていないか確認するコミュニケーション手段の一環だった。

そんなコミュニケーションを数日ほったらかしている親友が何をしているのかと微妙に気になった風御が朝から外字家を訪問するのは殆ど予定調和かもしれない。

淡々と階段を上り、外字の表札のあるドアをそのまま開けようとした時、風御の耳に甲高い声が響く。

『ひ、ひさしげの変態!!』

「は？」

思わず風御は自分の耳がイカレタのかと思った。

万年、アズ以外の女とは無縁の久重の部屋から若い女の声がする等という事態は風御にとって非常事態だった。

『ジャ、ジャパニーず銭湯はこ、混浴だって知ってるんだから!!』

「はあ？」

声はたぶん少女。

そんな若い少女が久重の部屋でほんのり桃色空気の会話を展開している。

その事実には頭痛を覚えて風御がドアを少しだけ開けて中を覗く。

「博士が日本のお風呂は裸の付き合いで銭湯は男と女がくんずほぐれつ夢のドリームパラダイスだって言ってた!!」

少女がぎゅっと自分の体を抱きしめてジットリした視線で呆れ顔の久重を睨んでいた。

「凄い混ざってるというか特定の業種に偏ってるというか何かから突っ込めばいいんだオレは？」

「ひ、ひさしげが・・・その・・・一緒に入りたいて・・・言うなら・・・考えてもいいけど・・・」

モジモジした少女の姿態にげんなりした様子で久重が首を振る。

「オレはここ数日忙し過ぎて風呂に入っていないという驚愕の事実は今気付いただけだ」

「うう。私も少し忘れてたけど」

「いや、忘れちゃダメだろ!? 女の子として!」

「で、でも、ただ忘れてたわけじゃなくて。【ITEND】は体の老廃物なんかを排除して常に肉体の置かれる環境を保つから汗とか皮脂とかそういう汚れを綺麗にしてくれて」

「オーバーテクノロジー無駄に使ってんな?!」

久重が思わずツツコミを入れた。

「こ、これは戦場なんかで清潔を保つ事で士気の向上なんかを目的にしてる機能だから。それにそういう能力があるから今まで逃亡中も不快な思いはしなかったの……」

「そうか。悪い。少し考え無しだったか」

頭を掻いて何やら反省した親友の顔に風御は愕然とした。

『あの』外字久重が自分よりも数歳は若い少女を相手にラブコメをしている。

風御の気が遠くなった。

「言っておくが日本の銭湯は混浴じゃない」

「ふえ!?!」

「とりあえず、これからは毎日風呂ぐらい入りに行くから」

「ひさしげも一緒?」

「ああ」

「あ、でも……」

「どうかしたのか?」

「その、着替え」

「……悪い。気付かなかった。今日はその辺も含めて買出しに行こう」

「いいの?」

「悪い理由があるのか?」

「それは……だって、ひさしげ貧乏みたいだし」

「そういうのはこっさり心の中にしまっておいてくれると助かるな」

「お金大丈夫?」

「それなりに」

「うん・・・ひさしげが言つなら。お世話になります」

「畏まらなくていい。少し値段に気を付けてくれれば数着分買える金はある」

「無理してない？」

「してるように見えるか？」

「いいわ。ひさしげが驚くくらい安いのにするから」

「それはそれはどうもありがとうございます。お姫様」

おどける久重に少女は輝くような笑みを浮かべた。

【・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・お前

誰？】

ラブコメを繰り広げる親友へ密かにツッコミを入れて風御はそつとドアを閉め、その場から立ち去った。

どうやら悪い夢でも見ているらしいと風御が二度寝したのはその日の正午過ぎだった。

第十話 命の宣託を

第十話 命の宣託を

病院の奥にはいつも闇が広がっている。

廊下の先で誰にも知られないようにひっそりと人生の終わりが訪れる。

命と向き合う現場は戦争のようで、実際には救われる命よりも消えていく命の方が多い。

超少子高齢化が進んだ世界は葬儀屋こそ儲かるものの、人の命を救う病院に金は回らない。

高騰する医療費に国は抑制策を打ち出し、年金というシステムは破綻し、国民皆保険は崩壊しつつもまだ生きている。

そんな世の中でも技術という一点において人々の医療は守られている。

新技術による高い医薬品や医療機器のコストダウンが医療の質を下げずに値段を下げた結果、未だ医療現場も完全には崩壊していない。人口の激的な減少が起こった【黒い隕石】事件の後も例外的に人口が緩やかに衰退している日本で医療現場と国民は昔よりも親密な関わりを持つようになった。

一日中病院にいる老人達の多くが良い例かもしれない。

患者の誰もが長い生に疲れながらも、笑い怒り泣き、病院で余生を帯て余している。

老人だけが通う病院で産声の数は少ないという声が聞こえてくるが、だからこそ人々は子供達にこそ未来を託そうと制度上は手厚い保護を行なっている。

「残念ですが、諦めて頂くしか方法がありません……………」
六十を過ぎるだろう医者も僅かに顔を伏せた。

小さな個室で一人の女性が目を閉じ俯いて唇を噛む。

「私の命を賭けても？」

「どうにもなりません」

張り出した腹を撫でて沈む女性を後に医者が出て退出した。
押し殺した嗚咽が暗い廊下を伝う。

その場を通り過ぎる看護師達は誰もが顔を沈ませながら早足になる。
そんな時だった。

ガラリとドアが開いた。

医療関係者以外入ってくるはずの無い扉を抜けて一人の青年が顔を覗かせる。

「何方？」

女性には両親がいない。

女性には恋人もいない。

女性には友人もいない。

「失礼を。私はこういう者です」

白いスーツを着た青年が印象の曖昧な笑みでそつと名刺を女性に差し出した。

女性が受け取った名刺に視線を移す。

名刺には奇妙にも名前が無かった。

書かれているのは肩書きと会社名だけで胡散臭い事この上ない。

しかし、そこに書かれた一文が女性に僅かな興味を抱かせる。

先進技術。

「何か御用でしょうか？」

「その命を賭けても守りたいと貴女が望んだからこそ、私は貴女の前に現れた」

「……言っている意味が解りかねます」

「今感じた貴女の胸の内の期待を裏切らないだけの用意がこちらにはあります」

「本当……ですか？」

「はい」

「でも、用意できるお金は……」

手を握り締めた女性に青年は首を横に振る。

「我々は先進技術を実用化する為の被検体を探して貴女を見つけた。適合率七十七%、金銭は要りません。ただ、我々の実験に貴女が欲しい」

「この子を……本当に救えますか？」

女性の瞳に決然たる意思を認め、青年は頷く。

「産んだ後、成人まで面倒を見ましょう。しかし、貴女がこの子を抱くのは一度きりとなる」

女性がその言葉に張った腹を撫でて沈黙した。

「神も仏も運命も我々の管轄外ですが、技術という一面において我々は貴女に望むままのものを与えましょう。これは契約書のファイルです。三日の後に回答を」

蠟で封じられた黒い封筒を渡して、青年が背中を向けようとした時だった。

「待つてください」

振り向いた青年が黒い封筒を受け取った女性の視線に僅かばかり目を見開く。

「……お願いします」

「よく内容を読むべきだと思いますが？」

「私には学がありません。難しい事も解りません。でも、この子がもう助からないと医者に言われた時思った」

女性がそつと寝台から足を下ろす。

「何をしても私はこの子が産みたい」

青年が女性の強さに敬服するようにゆっくりと手を差し出した。

「人間を捨てる覚悟があるならば、貴女の願いは叶います。ですが、己の幸せを考えるならよく悩んだ方がいい」
女性の瞳は揺るがず。

「いいでしょう」

手を取って青年が先導する。

「では、行きましょう」

「彼方の……名前を教えてくださいませんか？」

青年が恭しく名を告げる。

「ターポリン。世界平和を造るサラリーマンとでも呼んで頂ければ。お嬢さん」

その日、病院から女性が一人消えた。

誰もそれに気付く事は無かった。

洒落たブティックの一角。

カーテンが開く。

黒のスラックスに白いワイシャツ。

男装と見紛う姿に金色の髪が清かに擦れる音。

艶やかな色など無くとも少女は美しく笑みを咲かせる。

「どう……？」

恥ずかしげに頬を染めて聞かれて「それは無い」とか言う野暮な者は誰もいない。

しばし見入っていた久重はソラの服のチョイスが少し残念だと思いつながらも無言で頷いていた。

「あんまり女の子っぽい服装だともしもの時に動き難いから」

言い訳のようにソラが言つて、傍らの黒いコートにチラリと視線を向けた。

「他にも幾つか買っておくか？」

ソラが常に自らが追われている事を意識しているのだと気付いて、何かやりきれない気持ちになりながらも久重は動じずに応じる。

「ううん。これを二着だけでいい」

「金なら本当に心配要らないし、遠慮する必要も無い」

「少しだけ考えたよ。でも、やっぱりいい」

サツと閉められたカーテンの先からの声。

久重がソラの声に耳を澄ます。

「今、一杯服を買っちゃったら久重とまた来れなくなるかもしれないから」

「はい？」

思わずポカンと口を開けて首を傾げた久重にソラが続ける。

「その・・・また、一緒に連れてきて欲しいの・・・ダメ？」

心臓に杭でも打ち込まれたかのように久重の体にジワリと汗が浮いた。

世界の何処にこの破壊力満載なおねだりをダメと言う男がいるというのか。

ソラの声に当てられて紅くなった顔を冷ましつつ、久重は苦笑しながら答える。

「ダメじゃない」

「本当？ それじゃあ、また来てくれる？」

「ああ、折りを見てな」

「うん！」

カーテン越しに輝く笑みを見た気がして、久重がカーテンから視線を逸らし、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

体を硬直させた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

店内にいた女性客からの好奇の視線が久重の全身を磔にしていた。

平日の昼からブティックで金髪の少女に服を買い与える青年。

暇な奥様のゴシップ材料には十分すぎるネタに違いなかった。

「行く。ひさしげ」

上機嫌で服を持って出てきた少女が真っ黒いコート姿をしているとなれば、もう百パーセント周辺の奥様達の噂になるのは避けられない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

手を自然に引かれながら久重は思う。

少女の笑顔が見られるならば、それくらいの事はいいかと。

（いつか、女の子らしい服くらい着せてやりたい、な・・・・・・・・）
ブティックを出ると昼を過ぎていた。

余計な外食は外字家計の敵ではあったが、久重は構わずにファーストフードの店に入る。

「知ってる。これって『ふぁーすとふード』でしょ!？」

まるで幼子のようににはしゃぐ姿にソラの過去が透けて見えて、思わず一番高いセツトを注文した久重はほぼ満席の窓際の一角に隣り合っただけ座った。

「ひさしげ。みんな楽しそうだね」

二階の硝子越しに行きかう人の群れを見つめながらソラが微笑む。何が楽しいのかと思わず聞こうとした久重は口を噤んだ。

楽しいはずだ。

久重にも想像できる程にソラの過去は暗い。

複数の聞かされた事実を照らし合わせれば、ソラにはたぶん明確な親が存在しない。

それどころか育ての親とも言うべき親しい人間すらこの世にいない残っているのは親しかった「博士」から受け取った【I T E N D】と大きな組織から追撃されているという事実のみ。

まともな精神性を獲得しているからとソラを普通の少女として扱うのは問題がある。

久重が今まで出会ってきたソラの追撃者達は誰もが人格的に何処か壊れていた。

ソラと追撃者達は同じ場所で過ごしていた知り合いらしいが、ソラがその場で異端であった事は疑いようがない。

まともな性格をしているからと言って自分の「普通」に当て嵌めてソラと語り合えば無自覚に傷つけかねない。

久重が見る限り、ソラには常識的な知識こそあるものの経験としての知識が乏しい。

何処にでもあるような町並みに感心するのは新鮮だから。

服を一着買うだけで大はしゃぎなのは買った事が無いから。

妥当な理由が久重の心に重く沈んだ。

「あ、呼ばれてる」

ソラが嬉しそうにカウンターへ向かう後ろ姿を複雑な感情のまま久重は見送る。

それから、戻ってきたソラと共に昼食を平らげ始めて数分後。

「ひさしげ。今日はありがとう」

「どういたしまして」

窓の外に視線を向けていた二人の間に生まれた会話は何処か静かだった。

ポツリと呟いたソラがバーガーを置く。

「凄く楽しかった・・・」

「そりゃ良かった」

「ねえ。ひさしげは楽しかった？」

「ああ、少しだけ緊張したが」

「どうして？」

「異性に付き添ってブティックなんて行くのはリア充くらいなものだからな」

「りあじゅう？」

「簡単に言うとNEETとは対極の人種だ」

「にーと？」

解らないという顔をするソラに解らなくていいと笑って久重が口元に付いたソースを指で拭いた。

「~~~~~?!」

「どうかしたのか？」

「ひさしげってずるいわ・・・」

僅かに俯いた少女の黒いコートが揺れる。

「ひさしげ。日本ていいところよ」

「そんなにか？ ハッキリ言っちゃ何だが技術は進歩しても国力は衰退してるし、国政は数十年前からグダグダで毎年首相が代わるし、オレなんかもう社会の底辺ストレスだし」

冗談交じりの久重にソラが「それでも」と首を横に振る。

「だって、この国には平和があるもの」

「平和？」

ソラの言葉に久重が耳を傾ける。

「街にはゴミが落ちてないし、今日の糧を乞う物乞いもない。家族でシヨップिंगをする人がいて、友達同士で笑い合う場所があった、体を売る人が道で誰かを待っている事もない。空は蒼いまま排ガスで曇って無いし、夜は女の人が出歩いても襲われる事が無い。食料と水を奪い合う時代に飲み水が何処でも手に入って食事も命掛けて手に入れる必要が無い。家族を亡くした子供が通りで一杯座つてる事も無ければ、自分の未来を夢見るだけの余裕もある……」

「確かにそうかもしれない。でも、それは『綺麗事』だ」

「うん」

久重の言葉に頷いて、それでもソラは窓越しの蒼い天そらが贗物だとは思えない。

「博士が言つてた。自分のいる其処が戦場なんだって」

久重はそんな「冷たい当然」が未だ幼さが残る少女に教えられた事を内心苦く思つた。

「この国で当たり前に享受してる事が実は凄く尊いものなんだってのは誰もがいつもは忘れてる事実なんだろう。でも、それは仕方ない。世界から見れば本当に恵まれてる日本ですら自殺者が出る。純粹に餓死者が毎年必ず出る。行方不明者の数も多いし、変死体だつてあるし、孤独死して数年も発見されない老人がいる。他人からどう見えようと確実に「不幸」である人間は消えないんだ。命に関わらなくとも平和とは程遠い奴が大勢いる。老後の年金が無くて困る連中は沢山いるし、今日を生きてく為に病気で働く奴もいる。住所が無くて日雇いで働いてネットカフェに数十年暮らす奴もいれば、増水しそうな橋の下にねぐらを構えるホームレスも山の如くだ。暮らし向きが苦しくて不和を起こす家族、働き口も無く家で親の財産を細々と食い潰す独り者、信頼できる大人がいなくて非行に走る子供、どれだけ平和だと言つてもそういう人間はこの国で減るところ

が増える」

「ひさしげはこの国が嫌い？」

「純粹な瞳が久重を見つめる。」

「そうだな・・・・・・半分嫌いだ」

「それじゃあ、後の半分は？」

「嫌いじゃない。少なくともオレはこの国で生きて行きたいと思う」

「どうして？」

「オレが悲観主義者ペンシニストじゃないからだ。この国に将来の展望や希望があるとは思わないが、これ以上に悪くなるなら誰かが変えてくれるはずだと信じてる」

「自分で変えられるとは思わないの？」

「思わないな。人間一人の力には限りがある。大きな変革が個人の力で出来る状況なんて限られてる。理想を共有して大勢の人間を動かしてすら、一つの事を変える為に人生は足りないかもしれない。オレに変えられるのはオレの身近な事だけだし、それ以外に手を伸ばす気もない」

ポンポンと久重の手がソラの頭に置かれる。

「喧嘩して仲良くなった居候の今日のご機嫌とか。近頃いつつも朝方にやってくる女子高生のご機嫌とか。一体オレ以外の誰が取ればいい？」

「それ・・・何か凄くダメな人みたい」

はぐらかされたソラが呆れた様子で半眼になって睨む。

「いいんだよ。それで」

笑った久重がソラの頭をグリグリと撫でる。

「ひ、ひさしげ!？」

慌てるソラに久重が視線を合わせた。

「オレはそういうのいい。オレは世界を救ったり変革できたりしない。オレはオレが出会った奴が幸せとはいかなくとも笑って過ごせるなら、それで十分な人間だからな」

「ひさしげ・・・・・・」

ソラは気付く。

目の前の人はきつとそういう男なんだと。

助けてくれたのは大そうな理由からではない。

それがその人にとって当たり前の生き方なのだ。

（ひさしげはもう世界を救ってる……誰にも救えなかったはずの世界を……）

『ソラ・スクリプトウーラ』の死と共に世界は劇的に変わっていたはずだった。

多くの人間の血を流して、世界は変革を迎えるはずだった。

そんな未来を変えた人の言葉をソラは胸に刻む。

「それじゃ……その……ご機嫌まだ取ってくれる？」

おずおずと上目遣いに少女は青年に甘えた。

「そうだな。今日の夕飯は外食にするか？」

「ひさしげが一緒なら凄く安い袋に入った「らーめん」でもいいよ？」

少女が囁く。

「まいったな」と財布の中身を看破されて苦笑する青年は頭を掻いた。

「ま、それはとりあえず保留だ。そろそろ出るか？」

「うん」

互いに気付かぬまま、少女と青年の手は結ばれ、その日遊び呆けた後の夕食は屋台の「ラーメン」となった。

黴の臭いが僅かに鼻を擽る図書館の最奥。

十数メートルの本棚を左右にしてカウンターが置かれていた。

天蓋からの漏れるのは緋色。

背表紙は日に焼ける事もなく、静かに智を収めている。

日が落ちれば明かりの全てを失うだろう場所で老人が一人本を読んでいた。

顔は白髪であるものの、燕尾服を着込んだ老人の背筋は未だ鋼の芯

を有している。

カウンターの傍らに置かれたカップから立ち上る香気が市販されるあらゆる茶葉と似ても似つかないものだ」と知る者は少ない。

本とインク、黴と紅茶。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

全ての薫りが渾然と漂う世界に老人が足音を聞くのは久方ぶりの事だった。

「まだ、その本を読み終わっていないなかったんだね？」

アズトウーアズと呼ばれる事もある女にそう言われて老人が顔を上げた。

「これはどうも。CEO」

本を置き、頭を下げる老人にアズが笑った。

「いや、頭を上げてくれないかな。君に此処を任せてるのは頭を下げさせる為じゃない」

「はい。それで今日の御用は？」

「ちよつと昔の資料が見たくなって。七年前と十七年前の移民政策に関する情報。それから三年前のアメリカ上院議会八月の議事録。

後はG I Oの五年前の資料を」

「畏まりました。今日はええと・・・・・・・・『ろ』の二千八百八十九番と『さ』の六千百二番です」

「ありがとうございます」

「資料は閲覧後如何しますか？」

「アーカイブに放り込んでおいていいよ。今のところは」

「了解致しました」

頭を下げた老人が手元のキーボードを操作し始める。

カウンターの左右に展開されていた本棚が分割され一本の道だったはずの道が三本に分かれていた。

「今日は右かい？」

「いえ、左に六十メートル。下に五百メートルです。はい」

「ありがとうございます」

アズが左の道に進むと本棚が再び動き出した。

アズの行く手にギツチリと詰まっている本棚が歩みに合せて左右へ分かれていく。

やがて、きつちり六十メートル進んだアズの足元がゆっくりと下り始める。

その足元を構成していた本棚の多くがまるで生き物のように回転しながら自らを別の場所に置き換え続ける。

アズの足元が回りながらゆっくりと落ちていく。

その視界には無数の本棚が蠢く光景があった。

一分もせずに足元が止まりカチリと音がしてアズの目の前に本棚がせり出す。

一冊だけ置かれていた本をアズが取り出した。

開かれた本の中身は紙ではなく画面だった。

上から高速でスクロールされていく情報を読み取って十数分。

アズが本を閉じて本棚に戻すと再び本棚は何処へともなく埋没していく。

元来た道に戻ったアズの前に広がっていたのはカウンターではなく扉だった。

「また、来るよ」

扉の外に出て行こうとするアズの背後に老人の声が掛かる。

『そういえば少し聞きたいのですが【BMI S i g h t】の調子は如何でしょうか？』

「さすが工学博士と褒めておこな。脳に対する負担は最小限で済んでるよ」

『それは良かった。ソレの適合者が何人が狂ってしまって少し心配していたのですが安心しました』

「まったく酷い爺だ。君は」

苦笑するアズに老人も笑う。

『今のところBMI技術の課題は生体改造後、何処まで脳が適応し得るかというところにあります。脳と機械を直結しても未だ人間は』

脳に直接意味のある情報を入力する事が難しい。高次機能を代替するレベルでは未だ成果も出ていない。だからこそ抹消感覚レベルで置換しているのですが、それでも適応性が低く耐えられない者もいるように」

「確かに普通の人間なら狂うって言うのは解る気がするよ」

「何か見えましたか？」

「君のコレは高機能過ぎる。問題は其処さ」

片目を手で隠してアズが笑う。

「・・・・・・？」

「要は無駄に見たくないものが見える」

「ああ、そういう事ですか？」

「やたらと使い勝手が良くて殆ど完璧な視覚情報を得られる上、更に」高機能だから最低限の機能でも恒常的に脳への負担が重くなる。普通の人間には少し辛いんじゃないかな」

「IPS細胞との合いの子なので期待していたのですが・・・・・・」

何やら落胆した様子で老人の声が溜息を吐く。

「重過ぎるプログラムは嫌われるよ。それと同じ」

「今度取り替えましょう」

「いや、いい。僕にはこつちの方が合ってる」

「では、次回には大改造を」

「それもお断り」

「そうですね・・・・・・」

少し残念そうな老人の声がしよげる。

「君の言う改造は全身機械とかになりかねないから。健全な青少年を機械に恋させるなんて野暮ってものだろう？」

「まだ、あの男に御執心なのですか？」

「文句でも？」

「誠心誠意これからも応援させて頂きますが」

「男心の掴み方とか教えてくれると有り難いかな」

『女性のしなを作った際の「ねえ」は日本の昔ながらの口説き文句です』

「君の感性が昭和風味なのは理解したよ……」
呆れ笑いながらアズは外へと出ていく。

『貴女の前途に幸在らん事を……CEO』
図書館の扉がそつと光を閉ざした。

太平洋側にある港の埠頭に大型の石油タンカーが横付けされていた。深夜を過ぎて作業をするものの姿は消えている。

置かれている事務所の一角で握手が交わされていた。

分厚い遮光カーテンに遮られた室内で二人の男が椅子に腰掛ける。

一人は四十代の黒人。

一人は三十代の白人。

どちらの顔にも笑みこそ浮いていたが、内心は厄介事にうんざりで疲れていた。

「はじめまして。ミスター……何と呼べばいいかな？」

黒人が少し困って白人に訊く。

「商売敵にはOZなんて呼ばれてるが何でもいいさ。マイケルだろうがハワードだろうが」

フランクに白人が答えると黒人が僅かに顔を顰めた。

「この国では身分証明が必須だ」

「なら、オズ・マーチャーとでも呼んでくれ」

「どうでもよさそうに適当な答えを返すオズに黒人が溜息を吐いた。

「それじゃあ、オズ。君に三つ忠告だ。一つ目は『ニューカン』に付いて。この国は基本的に密入国外国人に厳しい。移民局こそ無いが法務省下の『入国管理局』はかなり優秀だ。偽造書類は必ず最も信頼できる物を使う事を奨める。二つ目はこの国での態度に付いて。この国だとその態度はかなり目立つ。別人に成り切る演技力が無いなら本国に帰った方がいい。この国での君のような白人のスタンダードは外国人観光客か日本の公共マナーを守る留学生だが、間違っ

ても移民に化けるのは止した方がいい。都市部だと夜間に職務質問の嵐を受ける事になりかねない。三つ目はこの国では公務員その他のあらゆる業種に対して不正を教唆するのは極めて難しいという事だ。チップの習慣は無いし、賄賂も殆ど効かないし、義務や規律の遵守姿勢は尋常じゃないから痛い目を見るかもしれない。もし生の情報が欲しいなら、とりあえずその人物のブログやツイッターを調べる方が手っ取り早い。おっと、ゴミは漁るなよ？ 近所の「オバサン」にマークされるからな。後、仲良くなる手法は厳禁だ。顔を覚えられたら似顔絵を描かれて顔を変えなきゃならなくなる」

「三つ以上のご忠告どうも」

軽いノリのオズに黒人が再び溜息を吐いた。

「言っておくがくれぐれも表立った犯罪は行わない方がいい。警察の優秀さは侮れない」

「今まで中東だったから思うのかもしれないが、法治国家なんてまだ残ってたんだな」

「地球が崩壊する日に暴動も略奪も犯罪も起こらなかった国だぞ。統計だと、その日だけは日本人の犯罪率が劇的に下ったそうだ。無論、移民や外国人達は例外だったが、それもちゃんと機能していた警察に押さえ込まれて死傷者は日本全国でもごく僅かだった」

男が驚きに口笛を吹く。

「本当か？ あの日に警察が動いてたって？ どういう神経してるんだこの国の連中？」

「それが国民性、民度の違いと言ってもいい。インテリジェンスには最適の国と言われる程に平和呆けているし、「スパイテンゴク」なんて汚名も事実だ。世界各国の人間が入り込んで好き放題に情報を盗み出してる。だが、居心地が良いと評判なのは君にもすぐ理解できるだろう。此処に住み着いたら金さえあれば不自由な思いはない。食事は十年違うものを食べていられる程に種類が豊富だし、酒も世界中のが揃ってる。女は総じて御淑やかで露出が少ないものを着てるが『そっち』の文化も進んでるから心配は無用だ」

オズが黒人を呆れた様子で見つめた。

「楽しみ過ぎだろう。おい」

「二十年も居れば愛着も湧く」

「それでオレの部屋は何処に置く事になったる？」

「契約は済んでる。住所はここだ。『カンジ』読めるか？」

「問題ない」

黒人が男に書類一式を渡した。

「ちなみに治安は最高だ。旧華族、旧財閥の名家が乱立する場所が近いせいで普通の組織は手が出せない。だが、逆に犯罪が起きれば徹底的な追及を受ける危険がある」

「こつちから何か事件を起こさない限りは大丈夫って事か？」

「そういう事だ」

「了解した」

書類と鍵を全てを受け取ったオズが事務所から出て行くことすると背後から声が掛かる。

「言い忘れたがお隣には必ず挨拶に行け」

「はあ？ 何言って」

思わず振り向いたオズが黒人が真剣な顔に黙り込む。

「その場所を確保するのに色々とコネを使った。部屋を借りる条件がソレだった」

「・・・そのお隣ってのはどんな奴なんだ？」

「オレも詳しい事は知らない。いや、知りたくない人間だ」

しばし考えたオズがそつと聞く。

「・・・『ヤクザ』？」

黒人が首を横に振る。

「そんなものよりずっと恐ろしい」

「おいおい。危険人物に挨拶に行けってどういう神経してんだ」

「危険は危険だがこちらから手を出さない限りは安全だと保障された。彼女はそれを裏切らない」

「女かよ！」

「いや、正確には彼女の下で働いている男だ」

「男かよ!？」

「それと居候が一人いるらしい」

「何なんだよ?!」

喚くオズに黒人が「まあまあ」と宥めながら汗を浮かべつつサムズアップする。

「頑張れ。相手はただの下働き。ただの『AS』の手下だ」

「何？」

時間が数秒止まったオズが再び動き出して訊く。

「……………ウチの上層部が昔は目の敵にしてた?……………」

「

オズに黒人が頷く。

「その『AS』だ。だが、今は協定で互いに過干渉しないと取り決めてある」

「知ってる。そんな時オレの同僚が四人程仕事止めたからな」

「くれぐれも機嫌は損ねないでくれ。この国での仕事が人生最後になるぞ」

「ああ、解った。くそつたれ」

「後は自力で何とかしてくれ。ここもそろそろ引き払う。もう会う事もないだろう。祖国の為に頑張れ青年」

「オレがそんな年に見えるか? ったく」

オズが事務所から出て行くと黒人がドツと疲れた様子で椅子にもたれてグツタリとした。

階段を上がってくる人の気配に黒人が慌てて起き上がる。

事務所の扉が密やかに開いた。

「あなたいる?」

三十代と思しき女の声に黒人が破顔した。

「おお、マイワイフじゃないか。どうしたこんな夜更けに?」

「お仕事頑張ってるって同僚の方に聞いたから来ちゃった。さっき降りていった人との商談だったのかしら?」

「まあ、ね。とりあえず入りなさい。外は蒸し暑かつただろう」

「ええ、お弁当持って歩いてきたから汗掻いちゃった」

「おお、ベントーか！」

黒人が始めて妻の手に持たれていた大きなバスケットが目に入ったか大喜びする。

（これで借りは返したぞ。アズ……）

黒人はニツコリと笑ってバスケットを受け取った。

二人の賑やかな声が事務所の外に僅かに響き、歩き続けるオズは一人愚痴った。

「何処がテメエの祖国なんだっつーの」

声は小さく闇に吞まれた。

第十一話 偽善者の証明

第十一話 偽善者の証明

佐武戒十は苦虫を噛み潰したような顔でボードの文字を睨み付けていた。

(面倒な事件押し付けられちまったな……)

数日前、警察署内でG I Oの裏方の実行犯達を捕まえるという功績を挙げた佐武だったが、犯人達の不審死によって功績どころか一部上層部からの非難を浴びる事態に至っていた。

不審死した犯人達の解剖結果から解ったのは犯人達が同時刻に心不全を起こしたという事のみ。

何らかの検知不能の殺害方法がG I Oによって使われたのは目に見えて明らかだったが、立証する為の証拠は何一つ残っておらず、自殺の可能性すらあるという建前で警察上層部は全ての事件を揉消した。

事件の犯人達が数人警察署内で同時刻に殺されたともなれば、警察の信用は失墜するどころの騒ぎではなくするのは無論の事、警察機構そのものの弱体化にも繋がりがかねない。

G I Oからの経済界を経由した警察上層部への圧力も犯人達の死亡原因を突然死や不審死、自殺で片付けさせるには十分な判断材料だった。

結果、事件捜査を主導していた佐武はその責任を取らされて、名目上は新たな事件の捜査という話で窓際に追いやられる事となっていた。

「プロファイラーの見地から言わせていただければ」

公には責任を取らせられない事情から無駄に時間が掛かりそんな事件を割り振られた佐武は内心で歯噛みしながらも淡々と事件の概要を頭に入れていく。

「この事からも解るように犯人の性別はほぼ間違いなく女性
二日前、都市部の東側でジョギング中の男性が川原で死体を発見し
警察に通報。」

遺体には四肢が全て欠けていた。

「この遺体を検死解剖した結果、死因は『餓死』だと解りました」
胸糞の悪い説明に佐武が顔を顰めた。

「更に欠落していた四肢は丁寧に縫合され、痕が完全に塞がって
いた事から半年以上前に手術されたものだ」と村田先生からは結論を頂
いています。全肢を縫合するような手術が半年前以前に何処かの病
院で行われていたかを問い合わせてもらいましたが大学病院私立病
院開業医どれも空振りです」

仏の顔を写真越しにそつと覗いて佐武は思わず渋面になる。

今まで惨たらしい死に方の遺体を山のように見てきた佐武だったが、
その写真の遺体は異次元の生物でも見せられているような悍おそましさを
秘めていた。

焼死、溺死、窒息死、失血死、圧死。

どれもこれも決して綺麗な苦しまない死に方は出来ない。

しかし、そこには一様に人間として苦しんだ痕跡がある。

(この仏……なんつー面してやがんだ……)

だが、その写真の遺体は人間らしく苦しんで死んだ顔とは佐武には
とても思えなかった。

「尚、当初遺体の年齢は老齡かと思われいましたが……
検死結果では二十代の男性だそうです」

ザワリと会議室の空気が変質する。

「検死結果では白髪化の原因はおそらく心因性のもので、顔の皺も
飢餓と心因性のものではないかと……」

気まずそうに進行役の刑事が告げると場の空気が一気に重くなった。
誰も彼もが事件の惨たらしさと異様さに汗を滲ませていた。

バラバラ死体なんて昨今珍しいものではない。

問題は殺し方の異常性と遺体の異様さ。

見慣れているはずの刑事達すら遺体の写真を面と向かって見るのは腰が引けていた。

佐武が手を上げる。

「何でしょうか。佐武警部補」

「つまり今までの話を総合すると仏さんはサイコな女に達磨にされた拳句に餓死させられたって事でいいのか？」

『佐武さん！？ 言い方って物が……』

同僚の一人が佐武の袖を引っ張り小声で忠告する。

「言い方もあるだろうがそういう事じゃねえのか？」

進行役の刑事が「ああ」と苦い顔で頷いた。

佐武が座る。

「本人確認は現在齒型を照合中。周辺の聞き込みは五班と六班が主軸となってくれ。二班と三班は病院関係者を当ってくれ。一斑と四班は周辺の監視カメラの情報も当って欲しい」

それから会議が解散となるまで佐武は黙り込んだままだった。

「佐武さん」

会議後の一室で同年代の同僚に話しかけられ佐武が顔を上げる。

「今は我慢の時だ。アンタらしくもない」

「近頃、おかしい事件ばかりだろうが。オレもおかしくなる程度で調度いい」

佐武の冗談に苦笑して同僚が肩を叩いて部屋を後にした。

「……」

再び佐武が遺体の写真を見る。

全体写真を見れば、それは異様としか言えない死に様だった。

ガリガリに痩せた骨と皮だけの四肢を失った老人。

その顔は形容し難い程に歪み人間の顔とは思えない末期を刻んでいる。

「何か起きてやがんだ……何が……」

まるで連動しているかのように続く不可解な事件の数々が佐武には数日前のテロリストの包囲に端を発している気がした。

事件が立て続けに起こる原因が何なのか。それを究明しない限り、また何かが起こる。そう佐武には思えてならなかった。

永橋風御の生活サイクルには労働という言葉が存在しない。

マンシヨンの最上階を全て所有している程度には金に困っていない風御には人生を楽しむ術だけが生活の全てと言える。

居酒屋で引っ掛けた女を連れ込んで次の日には別の女を連れ込んで更に次の日には何処かのパーティーをぶらつき意味も無くホテルのスイートで寛ぎ唐突に家の冷蔵庫が気になって買出しをしてから帰る事もザラだ。

そんな風御の趣味はどうしようもない女を拾ってくるという事に尽きる。

「どうしようもない」という形容は風御本人にとってそう特別な事を意味しない。

顔がボコボコに腫れ上がった腕に注射痕だらけの女をゴミ箱の近くから漁ってくるとか。

完全に捻くれてしまった頭空っぽの哀れな死に掛け不良少女を公園から担いでくるとか。

明日も知れない借金まみれな酔ったソープ嬢を橋の欄干の上からしようがなくお姫様だつこで持つてくるとか。

そういう至つて「普通」な慈善行為だ。

裏の世界側にいた風御にとって身を持ち崩す女は日常的に転がっている落ち葉と大差ない。

何処にでもある悲劇を可哀想等とは思わないし、それを救ったからと利益を得るわけでもない。

だからこそ、正に趣味として風御は保護を行っている。

「どうしようもない」女を拾ってきて、とりあえず傷があるなら手当てをし、病気なら看病して医者に見せ、借金があるなら払ってやり、頭が空っぽなら勉強を教え、ヤクザ屋さんが怒っているなら話

を付け、とりあえず問題が解決したら家から追い出す。
まるで聖人か何かのように聞こえる行為も本人からすれば、趣味の
範囲でしかない。

その日も風御はブラブラと都市を歩きつつ、落ちた木の葉の中を散
策していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黄昏時の都市には多くの匂かおりが混在する。

排ガスよりも濃く鼻に残るのは夕食の香り。

香料と汗と帰路を急ぐ人が立てる埃の臭い。

日常に追われながら生きる者の二オイは都市を昼から夜へと移し変
えていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

ふと気付けば、風御は小さな映画館の前にいた。

大昔の映画をリバイバル上映しているらしい小さな小さな映画館。

貸しビルの一角へ続く狭い階段を上っていけば、風御も見知った十
年以上前の大作のポスターが乱雑に貼り付けられている。

エレベーターも無い貸しビルの三階。

やる気の無さそうな老人が一人ポツンとカウンターに佇んでいた。

耳の遠そうな老人に金を払い途中からでいいかと風御が場内への扉
を静かに開けて入る。

風御が辺りを見回すが誰一人として場内にいなかった。

正面のスクリーンに映し出される男が静かに酒を呷るシーンに何の
映画だったかと僅かに記憶を手繰りながら歩いた風御は部屋の中央
ど真ん中に座る事にした。

微妙に背が高い備え付けの椅子に腰掛けた風御が正面のスクリーン
に集中しようとして気付いた。

「？」

スクリーンの前に余計なものが移り込んでいた。

それは風御から数席前の席からヒョッコリと生える鉤型の細い何か
だった。

暗い室内でよくよく目を凝らした風御がソレの正体を探る内にスクリーンの内側では男達が銃で無駄弾をばら撒いていく。

「！」

風御の見つめる先でソレがビクリと震え、左右に揺れ始める。

（ああ、何だアホ毛か）

ソレが漫画などにはありがちな表現、髪为天辺から何故か生えるレクター的な何かだと気付いて風御は納得する。

スッキリした気分で風御が再びスクリーンに視線を向けると何故かスタッフロールが流れ始めていた。

「・・・・・・・・・・」

何か理不尽なものを感じて風御が溜息を吐く。

とりあえずアホ毛の持ち主に意識を殺がれた風御の時間は無駄になった。

風御は歩いて自分以外にこんな時間帯の寂れた映画館にいる暇人を確認してみる事にした。

歩いて前に五列目、最前列からは三列目、その中心席を覗き込んだ風御の瞳がバツチリとアホ毛の持ち主の瞳と交錯した。

「誰・・・・・・・・何ですか？」

細い声が風御の耳を抜ける。

「君こそ誰？」

互いに同方向に首を傾げつつ、風御の脳裏が高速で回転し始める。列の中央に座っていたのは未だ中学生より下に見える少女だった。

僅かに赤みがかかった髪に夏だからと言うには滑らか過ぎる褐色の肌。顔立ちは僅かに日本人に似ているものの、全体的に彫りが深い。

整った顔立ちのせいでその年齢その身長にしては大人びて見える。割と人物の所属する層を姿から推し量れる風御はすぐに少女が低下層の移民二世三世辺りだと解った。

「失礼な人ですね。名乗るならばまずは自分から、でしょうか？」

年齢の割にしっかりとした答えが返ってきて、風御は少女が学業を収め、礼儀を躰けられている事実に僅かな驚きを感じた。

「そもそもそうかな。ん、僕は風御。しがない大富豪だよ」
シレっと真実を語りながら風御はたぶんはハーフだろう少女の動向を伺う。

胡散臭そうな瞳で風御を見た少女が数瞬だけ考える素振りを見せて口を開く。

「あたしはセキ。しがない移民四世です」

「四世？ 確か日本でも四世は全体の0.00002以下。珍しい部類だ」

「出会った女の子にいきなり珍しい発言をするアナタの方が珍しいのでは？」

皮肉げに答える少女の理知的な瞳に風御は益々驚きを感じる。

「いや、本当に君は珍しい部類に入る。君の国の移民の殆どは自国語での教育に力を入れてるはずだし、こんな場所で見かけるような層は全体でも一万人もいない。それなのに君は平日にこんな場所でこんな時間に映画を見てる。うん、珍しい」

断定口調の風御に少女セキが気分を害するより先に目を細めた。

「そんな事をペラペラ口にする二十代前半の日本人がこんな場末の映画館でこんな平日の夕方にいるのも随分珍しいと思いますけど」
風御はその反論に思わず噴出してしまった。

「確かに・・・つく・・・」

セキが僅かに洗面を作って風御を見上げる。

「これだから日本人は・・・お兄ちゃんを見習わせてあげたいです」

「お兄さんがいるの。セキちゃんには」

「初対面の女の子をちゃん付けて呼ぶ危ない人には教えたくないです」

「それじゃあ、初対面の女の子を呼び捨てにしてもいい？」

「ナンパなら他所でやって下さい」

「生憎と女性関係に困った事は無いね」

「そんな高級スーツを着崩してるなら、そうかもしれませぬ」

棘のある言葉の数々に滲み出た少女の『色』に風御は内心冷静なままで会話を続ける。

「貧乏人には高級感が伝わらないよう着てるつもりなんだけど。よく解ったね？　今まで見破られた事ないからさ」

「見ていれば解ります・・・アナタ、何が目的ですか？」

警戒感バリバリのセキに風御は肩を竦めた。

「君のせいで映画を見逃したんだよ」

「は？」

「君のアホ毛が気になって気になって結局内容も覚えてない」

一瞬、啞然としたセキが自分の頭を慌てて押さえ紅い顔で風御を睨み付けた。

「人の弱点を論^{あはし}う。如何にも金持ちのしそうな嫌がらせですね!？」

「いや、事実君のアホ毛はこの映画館だと他の観客には耐え難い試練だったはずさ。僕には解る。君のせいで数人いた観客も消え失せたのが」

「言い掛かりです!！」

「いいよ。君が何と言おうと事実は変わらないでしょ」

「~~~~~」

ふるふると震える少女の顔が真っ赤に染まる。

怒った顔に風御は「ニヤリ」と笑みを浮かべて手をヒラヒラさせながら道を引き返した。

背中に怒りの視線を感じながら場外に出た風御が幾つかの自販機に財布の万札を呑み込ませて、ドリンクとツマミを大量に取り出す。

「今日何時まで？」

老人が横を指差す。

ボードには午後十一時とあった。

「コレで十一時まで貸切にしてくれる？」

財布から一センチ程取り出して詰んだ風御がニッコリ笑うと老人が僅かに驚き顔を上げてコクコク頷いた。

「それじゃ」

場内に戻っていく風御の背中を見つめていた老人は慌てるように外へと出て行く。

クローズドの札を吊るされた映画館に続く階段には結局、その日最後まで人が訪れる事は無かった。

午後十一時を回った映画館から二人が出てきた時には通りには人通りなど皆無となっていた。

空は暗く、街灯の半分は節電の名目で光量を落としている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ムスっとした顔のセキが無言で歩いていく。

早足のセキが何かに耐え切れなくなつたように後ろを振り向いた。

「どうして付いてくるんですか？ 新手のストーカーか何かですか？」

「僕の金で飲み食いして映画を最後まで見てしまった人間の言葉とは思えないよ」

「それは！？ アナタが何かと私に話しかけて来るから！！ お、お菓子だつて飲み物だつてお詫びとか言つてたはずです！！」

「それを真に受けて冗談だと思わない無垢さが現代には失われた日本人の心つて奴だね」

「意味が解りません！！」

「考えるな。感じるんだ」

「それは映画の台詞です！！」

「僕はこれでも人見知りする方だよ」

「誰がそんな事聞きましたか！？」

「少しだけ引つかかったから少しだけ観察させてもらったんだ」

「アナタは・・・・・・・・」

今までの馬鹿話が一転、風御の笑みにセキの顔が冷静さを取り戻していく。

「十一時まで付き合つどころか。君は最初から最後までいるつもりだつたでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

押し黙るセキの前に進み出て風御が振り返る。

「人間観察は僕のライフワークでね。僕には君が出会ってから奇妙に思えて仕方なかった」

風御が四つ指を立てる。

「君には四つの不審点がある。一つ目は君の服が近頃流行りの低価格帯を席卷してるブランドだったこと。安くてそこそこ丈夫で可愛いのを売りにしてる。でも、君は四世っていう立場でそれを買うには少し無理がある。何故ならそのブランドがあるのは例外なく付近五十メートル以内に交番が存在する場所だけだからだ。残念ながら移民政策の失敗で今の警察は移民への職務質問は常態化してる。移民が仕事をする場合、例外なく端末を与えられ、ジオネット上で登録、更には常時の位置送信を義務付けられる。職質を嫌って移民は普通自分も自分の子供にもそういう付近に近づかないように教えてる。四世ともなれば親は苦労から必ず日本内での仕来りや作法や注点を言い含めてるはずだ。つまり、君は普通なら買うはずのないブランドを、やけっぱちにもならない限り買う機会の無い服を、何故か着てる事になる」

風御が指を一つ折ってセキの靴を見る。

「二つ目は靴。君の靴は僕が知る限り近頃発売されたばかりのものだ。値段こそ最廉価の代物だけど発売からたった十日でそこまで汚れるわけがない。もしも汚れるとすれば状況がそうさせているはずじゃない？ 例えば、ずっと靴を履き続けているからとかね。君の歩き方がぎこちないのは靴擦れで足が痛いからでしょ。成れない靴を延々と履けば誰だってそうなる」

二つ目の指が折られる。

「三つ目は君が映画館に一人でいた事。君のアホ毛が気になったからって普通は金を出した映画を最後まで見ないなんて有り得ない。でも、君は実際に一人だった。トイレの途中で聞いたけど、あの映画館は数人の常連が何時間も見たりする場所らしい。でも、君がいた時間帯には誰一人としていなかった。つまり、一つの映画だけな

らまだしも君があの場合にずっと陣取り続けていた為に常連は今日のところは止めて帰ったって事が推測出来る。あの映画館は客の入れ替えなんてやらずに老人がフィルムだけ入れ替えて続け様に上映していると云っていた。杜撰な管理だから客の出入りを老人が記録して居た時間分だけで料金を取ってるらしい。教えてもらったところによると君は一番最初の上映からずっといた。つまり、君は学校帰りでもなく平日の朝っぱらから映画漬けで学校を休んでいるって事になる。更に言えば、朝から入り浸りだったのに君の近くには飲み物のゴミも食事の痕跡も無かった。普通何時間も飲まず食わずで映画なんて見るもんじゃない。映画は楽しく見るものなんだから。そうしなかったのは無論お金が無いから。普段なら絶対こんな胡散臭い僕から奢られたり施しを受け取ったりしないであろう君がついお菓子を手に取った理由はソレで間違いない。そんな君がわざわざ映画を見ている理由は・・・まだ聞きたい？」

セキが啞然とした後、風御をキツと睨み付ける。

「あたしが家出少女みたいだからってアナタに関係ありますか？」

「大有りじゃない？ 共に寝食を共にした仲間なんだから」

「いつ一緒に寝たんですか？」

「映画が退屈で寝てたよ」

頭痛を抑えるようにセキが片手で額を押さえる。

「アナタと話していたら帰りたくなってきましたから帰ります」

「そう。僕も帰ろっかな」

「それではあたしはこれで」

「それじゃ、僕もこれで」

バイバイと手を振って風御がセキと分かれた。

数分後、分かれたはずの二人はコンビニの週刊誌を置く場所でお会っていた。

風御を見つけたセキが風御の横まで歩いてくる。

「どうして此処にいるんですか？ 帰るんじゃないかなかったですか？」

「ほら、今日月曜だから立ち読みしたくなって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言でセキが風御をすり抜けてトイレへと入る。

数分後、セキがトイレから出てくると風御の姿は消えていた。

しかし、嫌な予感が胸を過ぎったセキはすぐさまにコンビニを出て近くの小さな公園へと歩き出した。

数分後、セキが公園のベンチに座ってグッタリとして目を瞑る。

疲れた溜息を吐いて虫の声に耳を澄ましていたセキの頬に急に冷たいものが当たった。

「ひぁ!？」

思わず可愛らしい声で飛び上がらんばかりに驚いたセキが振り向くと冷えたコーヒーを腰に手を当てながら一気飲みする風御がいた。

「な、なな、何なんですかアナタ!？」

「え? 何だか缶コーヒーが無性に飲みたくなって自販機でちよつと買ってたら君が勝手に僕の座ってたベンチにいたからお裾分けをきよとんとした顔で言う風御にセキは脱力した。

「本当に何なんですかアナタ・・・・」

「ただの通りすがりの大富豪かな。ちなみに虫除けスプレー要らない?」

「・・・・・・・・要ります」

もはや諦めの境地に達したセキが缶コーヒーを受け取って自棄気味に飲み始める。

一気に飲み干した缶が憎いとばかりに近くのゴミ箱に八つ当たり気味に投げ入れ、風緒の手から筆り取ったスプレーを全身に振り掛けた。

風御が横に座ってもセキはもう何も言わなかった。

ただ、ジツと風御を見つめていた。

欠伸をし始める風御にセキが不信感もそのままに心底不思議そうに聞く。

「どうして、こんな事して何かアナタに得でもありますか?」

「僕がそんなケチな人間に見える? ほら、アレだよ。アレ」

「アレ？」

「こう大富豪的な慈善活動というか。報われない無垢で哀れな子羊にお布施をしてあげるような心地というか」

「つまり偽善ですか？」

「うん、ソレ」

「少しは悪びれて!!」

ベチンと風御の頬にセキの手型が付いた。

「どうしたのセキちゃん？」

「どうしたのってアナタおかしいですよ!!」

「何処が？」

「何処がって・・・それは全部が！」

「何で？」

「普通、こういう時は・・・」これから家に止めてあげるよ』とか『何しやがんだテメエ』とか何か言い包めたり脅したりして持ち帰りしようと企んだり・・・って何言わせるんですか?!」

乗りツッコミ全開で再び風御の頬にビンタが炸裂する。

「別に君じゃ後四年は立たないから安心していいよ」

ニツコリ聖人の顔で平然と言う風御にセキが顔を紅くした。

「~~~~~馬鹿にして！」

「僕の友人にダメな人間がいるんだけど」

「人に話しを振っておいて唐突に振り切らないでください!？」

「そいつが社会のクズでどうしようもない貧乏人だったりするわけ」
もう何を言っても話し続けるらしい風御にセキは黙り込むしかなかった。

「僕はいつもそいつに毎日のように朝食を奢ったり仕事を一億とか二億とか使って手伝ったりするんだけど、そいつは僕を殴ったり理不尽だったり怒ったり笑ったりしてくる。ホント馬鹿な付き合いだとは思っけど、僕にはそれが人生のスパイスみたいなものに見える」

風御がスーツの内ポケットからクシャクシャになったタバコを一本

取り出してジツポで火を付け噴かした。

「そいつは社会のクズではあるけどさ。人間のクズじゃない。いや、どっちかと言うと人間としたら聖人クラスかな。だから、そいつが人助けしてるのを見てると何か自分が空っぽだなあとか少し羨ましかつたりする。人間として大切なものをそいつは沢山持ってて、自分はそんなに持ってなくて……」

タバコをポイ捨てして風御が踏み潰した。

「僕は君に同情したりしてないし、君がこれからどんな目に会うのかりアルに想像できても可哀想だとは思えない。でも、ちよつと友人みたいに君を助けられたならそいつに少しは胸を張れる気がする」

風御がセキに視線を合わせた。

「こつというのは僕の趣味の範疇。で、君はもの凄く不幸そうなおーラが出てる家出少女A。つまり、君がもしも困ってるなら僕は君を助ける用意がある。無論、君がそんなのお節介だと言うなら僕は君を『必ず助ける』」

セキが風御の言葉に何か難解な問題でも解いていたように額を揉み解した。

「つ、つまり、アナタはあたしを自分の自己満足の為にこつちへ何の意見も求めず勝手な判断で助けるって事ですか？」

「え、そう言わなかった？」

あまりの「あまりっぶり」にセキが今度こそ全力全開で脱力した。

「こつ見えても功績結構はある方だよ。薬中にアル中にソーブ嬢に自己破産女に頭空っぽな不良と色々見てきたから」

「同じにしないでください!!」

風御がセキに手を差し出す。

「あたしは……家には帰りません」

「好きなだけ家にいればいい。三食パスタか店屋物で良ければ」

しばしの無言の後、二人の手はしっかりと握手で結ばれた。

「まあ、近頃はその友人が人間のクズ（性的な意味で）になりかけてるような気がするけどさ」

Increase .

【Devil1】Central Core Closed System . 【Fatalist】 .

Intervention Start .

Invasive Collapse Rate 0 . 0 0 0 0 0 0 0

0 9 %

「やっぱり」

やがて、何かを諦めたソラが小さな溜息と共に目を瞑った。
数分後、小さな寝息が聞こえ始める。

少女の唇が僅かに寝言を呟き、青年は己の無力さを噛み締めながら意識を閉ざしていく。

密かな少女の呟きが青年の胸にはとても痛く、とても温かった。

【ひさしげ。守るから】

二人の日常は未だ始まったばかりの劇にも似て。

(.)

青年の想いは答にならず。

(情けなさ過ぎだ)

胸底に澱重なっては沈み。

(守ってもらってるのは本当はどっちだった)

明日の夢に燻り続けて。

(. クソ)

やがて、消え去っていく。

(必ず お前を)

その想いの終着点は。

(オレは)

未だ青年の目に映ってはいなかった。

第十二話 よくある話

第十二話 よくある話

よくある話だが、彼女は何よりも兄を愛する。

「おにーちゃん。もうこっちは大丈夫だよ」

微笑みながら彼女は草むらで兄との逢瀬を楽しんでいた。

誰もいない草むらで彼女は兄の横に座って日常を語る。

今日は嫌な奴と会ってしまった。

昨日は優しい人に助けもらった。

明日は大好きな映画を見に行く事にした。

話題は絶えない。

「今はおつきいマンションに住んでるの」

最新のファッションはこうだとか。

きつと、これから来るのはこのアイテムだとか。

どうでもいい話は尽きる事なく彼女の口から溢れ出す。

「昔は辛い事ばかりだったけどさ。今は全然楽しい事ばかりなんだ。お友達は全員優しくしてくれるし、それにお金だって心配しなくてもよくなつたんだよ。凄いでしょ」

彼女は一人喋り続ける。

喋れぬ兄の代わりに。

髪を撫で口元を少しだけ緩めて微笑む。

「誰も今まで助けしてくれなかったのにね。少し顔が変わっただけで態度が全然違うんだよ。おっかしーよねー。人間は心だって道德の時間、先生だって言ってたのにさ」

彼女は辛かった過去を思う。

生まれの別名を運命と言う世界で彼女達は生まれた。

違う国、違う人種、違う肌、違う思想、違う言葉、違う教育、違う世界。

社会の最底辺として生を受ければ、世間は冷たかった。

【ガイコクジン】には冷たい人々に彼女と兄はいつも途方にくれていた。

親達はいつもいっつも彼女と兄に勉強をしろと言った。

勉強をすればきつとどうにかなると言った。

彼女がそれに疑問を持ったのは『ガツコウ』に入った頃。

『ガイジン死ねよ』

ランドセルとノートには落書きが一杯だった。

幼心に彼女は解らない文字が悪口なのだと解った。

兄はそんな彼女をいっつも慰めては抱きしめてくれた。

「その、ね。今ね……付き合ってる人がいるんだ……おにーちゃんがもう心配しなくてもいいように、おにーちゃんがちゃんと安心していられるように。べ、別におにーちゃんが嫌いになつたわけじゃないんだよ！ただ、ほら、おにーちゃんとは兄妹だから、だから……その……おにーちゃん離れしなきゃいけない気がして……」

今まで黙っていた罪悪感から彼女はグツと唇を噛んだ。

「その人ね。おにーちゃんに似てるんだよ。凄く優しく、凄く頼りがいのある人なんだ。でも、ちよつとだけ掴みどころが無くてフラフラ風船みたいに何処かへ飛んで行っちゃう事があって……あはは、ごめんね。おにーちゃんに言うような事じゃないよね。だって、おにーちゃんが喋れないのに一方的に喋ってばかりで……これじゃ、妹失格だよな」

彼女は顔を翳らせて兄の手を握る。

「もう、行くね。最後に話せて良かったよ……おにーちゃん。半年間ありがとね」

彼女はそつと兄に口付けして、早足に草むらを去った。

その頬には涙の痕が幾筋も幾筋も流れていた。

誰も来ない草むらは夏の盛りに猛る。

一日でどれだけ長くなつたかも解らない背高ノツポな草達は兄を最後まで隠していた。

最後の別れを告げられた彼女の兄はただ世界を見上げていた。その瞳に蠅が集り始めた次の朝、彼は発見された。

羽田了子の口癖は常に「ネタ」である事は間違いない。

「ネタ~~~~~ネタ~~~~~最高のネタ~~~~~」

その日も了子は合いも変わらずネタを追い求めていた。踊り出しそうな上機嫌で愛車を運転する了子が回想する。

戒十が窓際に追いやられ、テロ関係の仕事から遠ざけられたのは数日前の事。

それ以降これといったテロ系のネタも無く、チマチマと地道な情報収集をしていた了子が戒十から新ネタを提供されたのは数十分前の事。

【達磨殺人事件】（仮）。

今時猟奇なバラバラ殺人などありふれている。

しかし、戒十が了子に調べると言うならば、それにはそれ相応の価値がある。

戒十からネタを聞いてから短時間で重要情報を入手した了子は即座に行動を起こしたのだった。

「~~~~~」
そもそも了子が前々から追っていた失踪事件が新ネタの事件と妙な合致を見せた事が大きかった。

とある場所の近辺で連続した失踪事件の被害者と新しい事件の被害者の顔写真が了子の頭の中でカチリとパズルの如く嵌り、速攻で車庫から車を出発させるに至っていた。

戒十から送られてきた被害者の顔写真はかなり悲惨なものだったが調べていた失踪者の一人に間違いなかった。

急いで端末のファイルを整理して引っ張り出し、被害者の身元を特定、良子は被害者の住所へと急行していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

車内で不意に了子が静かになる。

近頃キナ臭い警察に任せる事など何も無い。

了子の勘は何か得体の知れないモノが蠢いているのを感じていた。

テロリストを警察が包囲した日以来、都市には何かと多くの噂が浮上している。

白いスーツ姿のサラリーマンがおでんを食べていたとか。

気味の悪い子供が夜な夜なビルから飛び降りているとか。

病院で原因不明の病が流行るとか。

世界の滅亡が再び起こりそうとか。

隣国と戦争になるとか。

まったく馬鹿げた話の数々は了子の興味をそそり過ぎる材料だ。

不安になる程、未知の感覚が了子の第六感とも言つべき記者の勘を刺激していた。

（まだ、あの男の事も解つてないし、これから何が起こるって言うの・・・・・・・・）

テロリストの包囲された日、了子の前に地下道から飛び出して倒れた全裸の男。

病院に搬送されたはずの男の所在は終に解らずじまだった。

了子が調べたにも関わらず、警察の伝手を幾つか使ったにも関わらず、男は忽然とあらゆる情報の中から消えてしまっていた。

（誰が彼を何の為に隠したかったのか。それが問題・・・少なくとも政府系の機関に干渉出来る【何処か】なのは確かだけど・・・）

大規模な情報操作が行われているのを了子は肌で感じていた。情報操作には三つの遣り方がある。

一つ目は関係者への口止め。

古来から人の口に戸は立てられないと言つが、殆どの政府系の情報操作はソレに含まれる。

二つ目は媒体上の情報削除。

ネット情報やら住民基本台帳やら一枚の写真やら媒体から情報を削除する方法。

最も困難であるものの【人間を含めた】媒体の削除は基本的に成功すれば二度と任意の情報を引き出せないという厄介極まりない方法だろう。

三つ目は偽情報の拡散。

九の嘘に一つの真実を混ぜてしまう事で物事の本質を見誤らせる。真実が漏れてしまったのであれば、真実がただの噂に墮すればいいという考え方は良子にとって最も好かない類の遣り方に違いない。どんな荒唐無稽な話にも真実が混ざっているものだが、殆どの場合には偽と真を見分ける術が無い。

噂はとりわけ問題になる。

嘘でも本当でもない【噂】は多くの情報を塗り潰してしまう。

(まずは地道に足で探しましょうか・・・)

ハンドルを強く握り締めて了子はスピードを上げた。

朝、外字家の賑やかさは限界を迎える。

セレブリティー全開な女子高生と怪しさ爆発の美少女がガチンコで微笑み会うからだった。

朝から胃をキリキリさせた久重がアズの呼び出しで仕事へと赴いたのはそんな食事時が過ぎ去った後。

僅かに腹部を片手で押さえつつ、冴えない顔でアズのクーペに乗り込んだ久重とソラはさっそくその日の仕事内容を聞かされる事になっっていた。

窓の外に流れてゆく町並みを眺めているソラの元気が無い事を気に留めつつ、久重はアズから渡された書類に目を通した。

「行方不明者の搜索か。オレにこの仕事を回す意図は？」

「それを見て半分は理解してる。違うかい？」

「半分、ね。問題はジオネット上の個人登録だな」

「その通り。誰かが行方不明者の最後の目撃場所を指定してジオプ

ロフィットを仕掛けてる。かなり複雑な条件を付けてる事からも何らかの意図があつての設定だ。なら、行方不明者達が回つたである場所を巡れば……」

緩やかな笑みで答えるアズに久重が嫌な顔をした。

「おいおい。オレに行方不明になれとか。それ以前に達つて何だ達つて」

「それ以外にも幾つか搜索を頼まれてる。でも、その全ての行方不明者達も最後の目撃場所はそこなのさ」

「警察と政府のジオネット管理業者には問い合わせたのか？」

「無駄だよ。その情報だつて僕のネットワークでキャッシュを抽出したに過ぎない。そもそもそんなジオネット登録は【無かつた】んだから、答えようも無い」

「……ジオネットへの干渉なんて政府機関か諜報機関か。どつちにしろ痕跡が残つてないはずはない」

「それが残つてないから問題なんだよ。久重」

「何だ。つまり、その登録を抹消したのは正規の管理IDを持つてる奴か。あるいは痕跡を完全に消せるハッカーなわけか」

「どちらかと言えば管理IDの方だと思つて構わない。ジオネット上でそんなハッカー紛いな事が出来るのは僕と数人の実力者。それと機関係の連中だけ。連中や実力者達がこんな馬鹿げた行方不明事件を演出する理由は皆無だよ」

「解つた。それでオレは今日このルートを通ればいいんだな？」

久重が書類上のジオネット上に設定されていたルートを見つめた。

「登録そのものが消されても行方不明者を出す【原因】が見逃してくれるとは限らないからね」

「魚が其処げんいんにるとは限らないがな」

「それでもまだ潜んでいないとも限らないから君の出番と」

互いに視線を投げ合い、久重が渋々、アズはニヤリと互いの顔を確認した。

「ひさしげ。私も一緒に行くから」

後ろから掛かった声に久重が振り向く。

「いや、それは……」

真剣な表情のソラに昨日の夜の寝言を思い出して久重が途中から何も言えなくなる。

「ソラ嬢。ひさしげを後ろから見守っててくれないかな」

アズが割り込んだ。

「どうして？」

「行方不明の原因究明には男が必要なんだよ。今までの行方不明者の全員が二十代の男性のみ。ジオネットの設定にも一人でルートを通るようにと出てる。つまり、同伴する誰かがいたら無駄骨になるかもしれない」

「ひさしげ……」

ソラの不安そうな顔に久重が重い空気を笑い飛ばすように笑みを浮かべる。

「本当に危なくなったら頼りにしてもいいか？」

「うん」

「決まりだね」

アズの声と共にクーペが旧市街地へと侵入した。

国道を高速で駆けていくクーペを最大望遠で監視していたパーカー姿の少年メリッサはつまらなそうな顔で端末に耳を当てていた。

「現在、東南東に向かって進行中……先輩いいですか？」

「どうかしましたか？」

「ハイテクも使わずに望遠レンズで覗きするのは仕事としては虚し過ぎます」

クーペが走る道路から十数キロ離れた高層ビルの屋上。

無駄にゴテゴテしたデカイ双眼鏡を片手にメリッサがうんざりした声を出す。

『支給品のソレは十分にハイテクの領域ですが？ ナノフォトニクス系の研磨技術なんて惚れ惚れします。超高精度のレンズ研磨は宇

宙開発を下支えする基礎の一つで」

「ウチには最新の盗聴機器とハッキングシステムと量子コンピューターの最新型が在ったと記憶してます」

「空からの監視と電子的な盗聴は不可能だそうで」

「どついつ事ですか？」

「【SE】の一部が雲で都市部での移動を偽装しています。都市部全域で【D1】と同じ微弱な反応を偽装して反応もロストしました。通常電子機器の盗聴はあのクーパーに乗っている方の防衛プログラムが優秀過ぎて昨夜返り討ちです」

「ふ、『連中』の無能さには頭が下りますよ」

「いえいえ、少し見ていましたが中々の鉄壁ぶりです。たぶんは【SE】の能力の大半を天候操作と【D1】の隠蔽に使っているのです。【D1】の偽装モードを使われないだけマシと考えれば」

「夢の環境技術の無駄遣いだと思いますけど……」

「今の状態だと最も気付かれず監視する方法はソレしかありません」
「分裂した他の【SE】の行方は？」

「『連中』は世界中の都市部に潜伏した状態で自己開発モードを起動していると推測してますが、たぶん見つからないでしょう」

「先輩の考えは？」

「廃坑になつた鉱脈跡や火山近辺で活動しているのではないかと思
います」

「鉱脈は解るとして火山近辺ですか？」

「増殖に必要な鉱物資源やレアメタルを大量に確保し、尚且つ熱エネルギーに困らない場所。ピッタリ合致すると思いませんか？」

「火山性のガスだと腐食するんじゃない？」

「生憎と【SE】は地球環境下なら何処でも運用できるよう開発されました。熱エネルギーと運動エネルギーを相互に極小スターリングエンジン群で置換し、モーターや太陽電池で光、電気エネルギー、運動エネルギーと相互変換しつつ抽出する。これは最終的にはあらゆる環境下での対応を想定していた為です。雷雲の中、陽光の下、

火山の付近、烈風の最中、如何なる場所でもエネルギーを取り出す事が出来る」

「でも、それを連中には教えてないわけですか？」

「さあ？ それはご想像にお任せしましょうか」

「これから移動します。次の定時連絡までは通信を途絶。引継ぎ役の到着まで監視を続行」

『了解しました。では、明日11：20時に引継ぎ役を向かわせませす』

「ちなみにこの件の正式な監視役は誰になったか知ってますか？」

『【テラトーマ】が就くようですが』

僅かにメリッサがターポールの言葉に息を飲んだ。

「 どういうつもりですか？ ターポール先輩」

『 どういうつもりとは？』

平然と返されて、メリッサが言い淀む。

「・・・何処の世界に戦略兵器へ偵察任務を行わせる馬鹿がいるんですか？」

『 いえいえ、近頃デチューン処理を施されたらしく前に比べればスベック上殆ど無害です』

「先輩がそう言うなら・・・この件に関しては何も言いません」

『 スポンサーも近頃は使いどころが無くて持て余し気味だったらしくて、返品したかったものをこちらで引き取ってリサイクル処理しただけの話です。問題無いでしょう』

「『第三世界の終末がこれで少し遠のいたと安堵してる』の間違いですよソレ」

『 人間無駄に強い力を持つと後で気づくものです。こんなはずじゃなかったと』

「ええ、そうかもしれません。それじゃあ、もう行きます」

『では次の提示連絡で』

メリッサが通話の切れた端末を手の中で碎いて捨てた。

「ヤバイ・・・よなあ・・・アレがデチューンされたから大

人しい威力なんて誰が信じるわけ」

しばし、沈黙していたメリッサが脳裏で回線を開く。

『こちらメリッサ。サーバーへの接続許可申請』

電子音声メリッサの声に応じた。

【はい。確認しました。認証番号20880211。サーバーへの接続許可申請通りました。閲覧情報、深度Bまでが開示されます。

閲覧項目を選択してください】

メリッサが作り物の眼球を通して視界に複数の項目を確認する。

【第三世界からの人事異動引き揚げ者のリストを確認します。現時点で引き揚げ者無し。尚、貸出しされていた『戦略兵器テラトーマ』が準人員として該当ヒットしました】

『テラトーマに関するスペックの閲覧申請を』

【不許可。テラトーマのスペック閲覧には閲覧深度A以上の人員の同意が必要となります】

『・・・接続終了』

【接続を切断します】

諦め気味に接続を切ってメリッサはビルの屋上からそっと飛び降りた。

メリッサの瞳はもう遠く消えていくクーペに固定されていた。

長橋風御が目を覚ました時にはもう昼を過ぎていた。

ソファアーに転がされて上に薄いタオルケットが掛けられている。

むっくりと起き上がった風御は寝癖が付きまくった頭を掻きながら直ぐ側の絨毯の上に移民四世少女セキが寝転がっているのを見つけた。

「おはよう」

「ん・・・おはようございます」

寝起きが良い方なのか。

セキが身を起こした。

「目が覚めましたか？ 駄目人間」

「駄目人間？」

いきなり駄目人間呼ばわりされた風御が首を傾げる。

「あの人。泣いてました。もう帰るって……アナタによるしく言っ
つておいて欲しいって」

「そう、悪い事したかな」

「悪い事したかなって！？ 何で裸エプロン姿の同棲してる女性が
いるのに家に家出少女連れ込もうとするのですか！？ どういう神
経ですかアナタ！！」

昼から少女の激高した声が無駄に広い部屋に響く。

「言っただけ。趣味だって。彼女もその類と思ってくれて構
わない」

「な?! アナタの為に料理まで用意してたのに!? 何て言い草
!!!」

風御が相手にせず冷蔵庫を漁って、テーブルの上にラップが掛けら
れている料理の横に大量のシリアルと牛乳を入れたボールを置いた。
凄い形相で憤慨するセキを横目にスプーンでシリアルと食べ始める
風御はテーブル上の冷め切った料理に目を細めた。

「昨日、何かあの人と話した？」

「話しましたとも!! あたしはアナタに連れられてきただけで全
然まったく関係ない他人だと強調しておきました。それから自己紹
介したら、その人も移民三世だって言っていました。あたしの家族の
事を親身に聞いてくれて、それからあたしに【この人優しい人だか
ら後は頼む】とか勘違い全開の泣きそうな笑みで出ていって……

この駄目人間!!!」

セキの怒りも何処吹く風で風御がシリアルを平らげて一息吐いた。

「そっか。やっぱり僕じゃ彼女は救えない……か」

「何を他人事みたいに!?!」

胸倉を掴まれて風御がセキの瞳を初めて見る。

その瞳の奥に敵愾心だけを認めて、風御がソファーに沈み込みなが
らセキの手を退けた。

「行つておくけど彼女を見つけたのは一ヶ月前だから」

「え……」

セキが固まる。

セキは〇と少し話したただけだったが、まるで長年付き合っているような話しぶりであった事は覚えていた。

「君は色んな意味で勘違いをしてる。とりあえずそれを幾つか正しておくけど」

風御が指を四つ立てた。

「一つ。彼女と僕は一ヶ月の付き合いだ。二つ。僕と彼女は体の関係こそあつたけど付き合つてない。三つ。彼女は君と同じで「どうしようもなさ」が目についたから連れてきただけの人間で、それ以上の感情はない。四つ。僕と彼女が会つたのはこれで四回目だ」

「え？ いや、でも、そんな風には……は！？ 誤魔化そうとしてもそうはいきません！！ ど、どっちにしろアナタは四回しか会つてない人間に裸エプロンをさせる最低人間という事です！！」

「まあ、それはいいとして。君には彼女がどう見えた？」

「よくないです！！」

「いいから。問題の本質は僕と彼女の関係じゃない。僕が聞きたいのは彼女の不自然さに気付かなかつたかつて事」

「ふ、不自然……？」

少少だけ己の中で引つかかっていた事を指摘されて、セキの勢いが削げた。

「不自然で……あの人はあたしと同じ移民だつて、それで今は会社で〇してらつて。着替えたらホントに日本人の〇みたいな綺麗な服だつてちゃんとしてて」

「本人が言い出さなければ日本人の〇にしか見えなかつた？ ちなみに君が見ただろうものは彼女の自前だけだ」

「あ……」

風御がラップを取り、冷め切つたオムライスにスプーンを突っ込む。「気付いた？」

「で、でも、あたしに嘘を付く理由なんて！」

「今の情勢でOLをやってる移民なんているわけがない。いや、どちらかという日本人のOLにしか見えない移民なんているわけがない、の間違いかな」

オムライスを平らげながら風御が続ける。

「君も知ってる通り、今の日本は移民を下層労働階級で固定してる。派遣法の改正で非正規雇用では移民が『優遇』されてる」

「あれは差別でしょう!!」

風御が「確かに」と頷く。

「そして、基本的に何処のどんな小さな会社だろうと純日本人の下に移民を置く構図が出来上がってる。社会の風潮がそもそも移民外国人を正社員にしている会社を受け付けない。過去の外資や移民外国人労働者との軋轢から、今の日本の会社と社会構造は海外からの出稼ぎや転勤してきたような永住資格を持たない外国人なんかには偏見を抱かないが、永住資格を有した移民外国人労働者に関しては仕事上の『逆差別を理由にして』採用しないのが一般的だ」

「・・・都合の良い事ばかり言っただけで連れてこられたってお爺ちゃん達は言っていました」

「そこは世の中の議論にでも預けておいて。僕に聞かれても正しい答えなんて返せないから」

「・・・」

「それで本題だけど。日本のOLみたいに見える人間がわざわざ自分を移民と言う理由はないし、逆に移民が自分をOLに見せかける理由もまた無い。本当に移民ならば綺麗な服より明日の家族の糧を得るのに必死だろう。日本人に見えるような整形をしても通り名が禁止され移民である事が仕事を探す上で隠せない以上、そんな金を使う理由にはならない。そんな金を使えるならそもそもOLになる必要も見い出せない。つまり、彼女はとても不自然な存在だった」

「アナタの言う『どうしようもない』って事ですか？」

「そう『どうしようもなく』不自然な日本人に見える移民がいて、

デパートの屋上の遊戯施設のフェンスで黄昏^{たそがれ}てる。だから、僕は彼女をとりあえず家に連れてきた。それで降同じ場所に行くと同じように黄昏てるから仲良くなってみたわけ。彼女は少し人格的に壊れてたから・・・何とか直してあげられれば良かったんだけど・・・」

「こ　そんな言い方・・・」

「人間観察は得意な方って言わなかった？　おにーちゃんと話が出来なくて寂しいとか。おにーちゃんになつてくれるとか。色々言われて何度か深く聞いてみたら支離滅裂で曖昧な話を始めたりしてたから、精神科を薦めようかと思つてたんだけど」

風御が平らげたオムライスの皿をテーブルに置いた。

今まで話を聞いていたセキが風御を真剣な表情で見つめ、何を言うべきか内心から言葉を探した。

「どうして」

「何？」

「どうしてアナタはそんな顔で態度で・・・話が出来て・・・」

「僕も「どうしようもない」から」

「アナタも？」

「セキちゃん。君は今の話を聞いたから何か自分に出来る事があると思う？」

「それは・・・少しぐらい話を聞いてあげられるかもしれません」

「そう、君に出来るのは其処までだ。僕に出来る事もそう変わらない。君と僕の差は大人と子供。金の有無。付き合いの長さ。でも、どれをとつても彼女を本当に幸せに出来るような差じゃない」

「やってみなければ、やってみなければ分かりませんッ」

「いや、分かる。僕には限界がある。君にも。君に出来る事で解決するような問題なら僕にも解決できる。けれど、僕にも解決できないなら君にも出来ない」

「そんな事　」

「無い？」

瞳の奥を覗き込まれて、セキが拳を握った。

「……【この人優しい人だから後は頼む】って彼女は言っていました」

「そう」

「あたしはアナタを正直好きになれません。でも、アナタが彼女にそう言われるような人だつて事は分かります」

「君も言つてたように偽善だよ」

「それでもアナタはお人好しです」

「友人に集^{たか}られるくらいだから」

風御の言葉にセキが立ち上がる。

「彼女を迎えに行きます」

「彼女はたぶん戻つてこないだろうし、きっとあそこにもいない。勘だけど」

セキが風御の持っていたスプーンをもぎ取つてテーブルを指した。意味が分からず風御が首を傾げる。

テーブルの上には色とりどりの肉と野菜が数皿並んでいた。

「とつてもよく出来てます。どれもこれもちゃんとした下拵^{したて}えが無いと出来ません。手間も時間も掛けない手料理なんてありません。

まだ日本人に一宿一飯の恩義を感じる感性があるなら、アナタは彼女を追わなければならぬはずですよ」

「移民が語るようになったら日本はおしまいかもしれない」

セキが首を横に振つて、思い切り風御の頬を張った。

「移民でも日本人でも！ 男が女の手料理を食べたなら褒めるのは当たり前ですよ！！」

風御が驚いたまま固まつて、軽く溜息を吐いた。

「確かに礼くらい言わないと罰^{ばち}が当たる手料理だ……」

「冷めても美味しいように作り直してたから当たり前ですよ」

「へ？」

風御が思わずセキを見た。

「昨日の分はあたしが頂きました。それは彼女が改めて作り直して置いていったものです」

風御がテーブルの上の料理を見つめて、深く、深く溜息を吐いた。

「……………コレ食べたらし出し出るけど君はどうする？ セキちゃん」

「移民は金に汚い社会のクズだって言われます。けど、人に本当に助けられて恩を返さない奴は人間のクズですから」

セキが風御に手を差し出す。

「昨日とは逆になったかな」

二人の手が握手で結ばれた。

（アナタの手があつたかと思つたから…………彼女もあたしもきつとアナタに…………）

十数分後、永橋家には誰もいなくなっていた。

第十三話 夜話は臆に融けて（前書き）

今回は後味が少し悪いかもしれません。

近未来を想像する時、やはり民族や移民の問題は避けて通れないの
ではと思います。

第十三話 夜話は臙に融けて

第十三話 夜話は臙に融けて

夜の幻影に少女を見るのは怪奇譚の一つと言えるだろう。

泡沫は宵の刻を引きずり、やがて闇の中に結実する。

世界の黒より深い色合いを湛えて少女はビルの表面を急ぐ。

夜の霧がけぶるビルの狭間を意に介さず、重力すら超越した少女の動きは緩やかな波紋となつて周囲の霧を広げてゆく。

流れるような金色の髪が常夜灯の明かりに僅か照り返して煌く。

「……………」

ビルの遥か下で久重は事前情報通りの道を急いでいた。

（次の角を十二時まで曲がって後は直線距離で一キロか。バイアスロンでもさせてるつもりなのか？ このジオプロフィールを設定した奴は……………」

ジオネット上に設定されているジオプロフィールは限られた領域での滞在時間や様々な設定にGPS情報が合致した時点で初めて得られる。

細かい設定が加算されジオプロフィールには得られる利益に幅を持たす事もできる。

例えば、とある品を買う為に並んだ人々に整理券が配られ、一人だけあぶれてしまった。

その人は数時間前から並んでいる。

店側が設定していたジオプロフィールの条件に合致すれば、並んでいた時間に比して何かしらのクーポンや特典を得る。

GPS情報のやり取りがそのまま利益となるジオプロフィールの使用われ方は幾つもの商業利潤を生み出した。

深夜に開いているコンビニに来て受け取るクーポン。

祭りの会場をくまなく回って得られる商品。

店舗前を通り過ぎた過ぎただけで得られるジオプロフィットすらある。

政府のサーバーを介して行われるGPS情報とジオプロフィットのやり取りが日常となりつつある日本では、並ぶだけ歩くだけ領域内にいるだけで何かしらの利益を得られる事がある。

その個人利用が増加するのは必然だった。

ジオネット上で様々なジオプロフィットを個人が設定するのも常識となりつつある。

法整備が進んだ昨今でもジオプロフィットに関する犯罪は横行しつつあり、厳しい管理と警察に新たな部署を設ける事で国は対応していた。

(これで十万とか如何にも怪しいのに引つかかる奴いるのか?)
人気の無い道を急ぐ久重が脳裏でジオプロフィットを思い起こす。

所定の場所まで指定のポイントを一定時間で通り抜けて十万円。

正にポロい儲け。

普通なら怪しんで当然。

しかし、それでもやる人間はいる。

遊ぶ金欲しさか。

止むに止まれずか。

どちらにしろ他人を食い物にされる可能性のある利益に人々は群がる。

久重は多くの失踪者達に己を重ね合わせて思う。

(もしも、オレがアズと出会ってなかったら・・・やっただろうな・・・)

借金苦は藁にも縋る。

そんな人間が今の日本には溢れ過ぎていると知る故に他人事だとは思えなかった。

久重にとって金とは命より重くない。

だが、命を繋ぐ為に必要不可欠なものだとも思っている。

今の己の境遇がまだ報われているからこそ、ジオプロフィットに仕

掛けられた罫が久重には許せなかった。

「生きてるよ・・・」

僅かに今まで保ってきたペースが崩れ、息が乱れた。

その途端。

「?!」

久重は不意打ちの浮遊感に抗って虚空に手を伸ばした。
ツツツ。

その手の端がマンホールの端に引っかかる。

(抜かった!? 時間指定が月に一度の理由はこれか!?)

月の無い夜。

スモッグで覆われた都市に星の光は微弱。

金の為に急いている被害者は足元が疎かになる。

不意に一つだけ切れている常夜灯の一角。

都市の光が僅かも届かない死角に開いたマンホール。

注意力散漫な人間はズッポリと嵌ってしまったに違いない。

偶然の落とし穴と言うには計画的過ぎる奈落の淵で久重が声を聞く。

【アナタが新しい・・・おにーちゃん?】

「!?!」

己の足元から響く女の声に久重の背筋が震えた。。

その声は悍おんこしい響きを伴っていた。

子供が蟲を千切るような純粹さと甘く幼い陶酔が交じり合う声。

思わず下を見た久重が僅かに血の気を引かせる。

黒々とした穴の底で赤い瞳が輝いていた。

人の瞳が放つわけのない輝きには【人間らしい光】があった。

キラキラとした揺らめきの中に【理性も感情も】含まれている。

(やばい)

こんな異常な状況でまったく周囲の暗さを気にしない。

闇の底で不安すら無い。

そんな人間が理性と感情を持って人間らしい光を携えて待ち構えている。

人によってはそれを【狂気】と呼ぶだろう。

(こいつ!?)

直感的な震えが久重を慌てさせる。

狂気に走るだけの人間なんて久重は恐れない。

しかし、久重は知っている。

世の中には狂気よりも恐ろしいものがある。

口で何と言おうと己の行動を断じて肯定する【折れる事が出来ない強さ】を持つ者。

そんな【人間】は狂気に駆られただけの【化け物】より恐ろしい。

どんなに酷い事もどんなに醜い事もどんなに異常な事もできるのが人間という生き物だ。

絶対的な精神の支柱を持つ人間は理由さえあれば何でもやる。

大学を出て理論的な思考能力が高い人間が宗教の下テロを行うように。

軍隊の指揮官が無情な作戦を断じて遂行するように。

狂気とは思考停止した人間が陥るもの。

人間らしい思考と感情と理屈に折り合いを付けた結果から人道を外れる者は狂気に取り付かれただけの者と比べても段違いの性能を發揮する。

明らかに女は狂気に駆られただけの【化け物】ではない【人間】だった。

【さあ、行こうよ。おにーちゃん】

何かに足を掴まれて久重の指が急激な負荷に耐えられず穴の淵から離れる。

(何を言っても無駄なタイプか!)

明らかに待ち構えていた女が何も用意していないわけがない。

話し合っても結果が変わらないタイプの人間に状況を掌握された場合、問題は時間との勝負になる。

何かされてしまうのが先か。

救出が先か。

(ソラー！)

闇の底に落ちた瞬間、久重の意識は落ちた。

彼女の一番最初の記憶は大きな手で抱きしめられているところから始まる。

それが父ではなく四歳歳年上の兄の手であると知ったのは彼女が七歳の頃。

その頃、彼女の両親は消えた。

ジヨウハツという言葉を知ったのは確かその頃だったと彼女は記憶する。

それ以来、兄と共に彼女は生きた。

学校で虐められても、世間の冷たい目に晒されても、彼女は兄と共にならば耐えられた。

恐れるものは人間ではなく狭い四畳半の部屋に吹き込む隙間風だけ。そんな生活が終わりを迎えたのは彼女が九歳の時。

親戚の家から逃げ出した後。

保護された兄と共に施設へと送られ、彼女は兄と離れ離れになった。それから兄は学校の卒業と共に彼女を引き取った。

懸命に働き養ってくれる兄を彼女は敬い愛した。

それから、それから、それから。

彼女は兄の勧めで養女として引き取られた。

彼女を引き取ったのは裕福な家だった。

そこで彼女は全てのものを失った。

一月目。

彼女は学校を辞めた。

行く必要が無いからと退学届けが出されていた。

二月目。

彼女は外出できなくなった。

首輪に鎖が繋がれていたから。

三月目。

にだつておにーちゃんみたいに人生を楽しむ権利くらいあるよね？
何も言わない兄にそつと彼女はキスする。

【じゃあね？ おにーちゃん。今度のおにーちゃんはちゃんと愛してあげるから心配しないで】

彼女の新たな始まりは凡そ何処にでもある話で始まった。

【彼女の話】を見終えた久重は覚醒した。

「そついう、事か」

「え？」

女が不意を付かれた。

久重が思い切り体を投げ出す。

肩に担がれていた久重が土手を転がり落ちた。

転がり切った場所で痺れている体を無理やり起こした久重が暗い夜道から降りてくる紅い輝きを睨む。

「自分のママゴトに他人を巻き込むなよ」

僅かに霞む意識を維持しながら久重は紅い輝きに怯む事なく拳を握る。

「あなたは新しいおにーちゃんになってくれないの？」

「生憎と今は居候一人で手一杯だ」

「そつなんだ。あなたは私と同じみたいだから、きつと良いおにーちゃんになれると思つただけだな」

久重に向かい合い佇む女から放たれる声は細かった。

一人一人を持ち上げ逃走しているとは思えない肉体は頼りなく風に吹かれる。

「今まで行方不明になった奴は全員が日本人だ。お前のおにーちゃんとやらは日本人でいいのか」

「おにーちゃんは出会つた時、日本人の顔をしてた。あなたが見たみたいに」

僅かに久重の目が細められる。

「アレを見せたのはお前か？」

「あなたも【銀色の粉】を持ってから、教えてあげられるかなって」

会話時間を引き延ばしながら肉体のコンディションを少しずつ戻していく。

「お前の今までの【おにーちゃん】はどうなった？」

半身の構えで久重が訊く。

「えっと、六人は死んじやったけど三人は生きてると思う」

その答えが予想通り過ぎて久重が拳が白くなるまで握り締めた。

「一つだけ訊きたい」

「何？」

「お前は今幸せなのか」

思ってもみなかった質問なのか。

女が僅かに目を見開いた。

「あなたはどう思う？」

「楽しそうには見えても幸せそうには見えない」

女がまるで悪戯を叱られた子供のように目を伏せた。

「そっか……」

久重は女に拳を向ける。

「復讐、理不尽、無理解、どれもこれも自分で抱えて背負っていく

しかない。それを他人に強要した時点でお前はお前をそんなにした

誰かと同じだ」

女が自嘲気味に嗤う。

「それはやられた事が無い人間の言葉。やられたらやり返して、取

られたら取り戻して、やっと少しだけ私は満たされたの。誰にもそ

れを否定させたりしない」

女の気配が膨れ上がる。

それ以上の会話は危険。

激昂させれば、命も危ない。

そうと知っていて、久重は言葉を躊躇しなかった。

「やられたらやり返せばいいし、取られたら取り戻せばいい。それ

は人間から容易には奪えない自然な感情だろう」

闇の中、紅い輝きが僅かに揺らめく。

「だが、やり返しても虚しくて、取り返しても同じじゃない」

「え？」

「他の誰かにやり返したら加害者になるだけだ。それで何かを決して取り戻しても、それはきつと失ったものじゃない」

「そんな綺麗事じゃ私は満たされない！」

女の声と共に肉体が膨れ上がっていく。

「胸に満たされたものが薄汚いと知っていて尚求める事は綺麗なのか？」

女が襲い掛かってくるのも構わず、久重がその突進を紙一重で横へすり抜けた。

「全てに目を背けて、悪い酒に溺れていれば誰だって楽だろう」

「知った風に！？」

横薙ぎの腕を己の体勢を無理やり崩してやり過ごす。

「本当に望んだのはそんな人殺しのママゴトだったのか？」

「うるさい！」

女が腕を振り下ろす。

その腕は人を薙いただけで殺すに余りある力を秘めている。

背後へと飛んで転がり様に久重は言葉を繋げてゆく。

「本当はただ大好きな人と笑いあっていたかっただけなんじゃないのか？」

「うるさい!？」

人ではありえない速度で女が跳ぶ。

上から降ってくる女の足を避けるも蹴り碎かれた地面と共に久重は転がる。

「一緒に食事をして、今日は職場で何があっただって馬鹿な話に花を咲かせて、暇な日に出かけようとか計画を立てて」

「黙ってよ!!!」

完全に体勢を崩した久重の上に女の影が落ちる。

片腕で首を掴まれ持ち上げられた。

今にももう一方の腕は鉄槌のように打ち下ろさようとしている。

それでも久重は険しい顔で女の額に己の額をぶつけ視線を突き合わせる。

「思い出せ。お前が望んだのはこんな薄汚い満足で贖えるものだったのか？」

「止めてよ?!」

女は表情を歪ませ、久重を投擲した。

あっさりと宙を飛んだ久重の体がノーバウンドで土手へと大きな音を立ててめり込んだ。

(肋骨が三本、か・・・)

他にも全身打撲や内臓破裂の可能性もあった。

「あなただってお金が欲しいだけの卑しい日本人の癖に!!」

女がゆらりと久重の前に立つ。

「もう消えて・・・」

女の表情は暗がりの中で歪んでいた。

憎しみでも怒りでもない哀しみで。

「確かにオレも金の為に色々やってきたさ。だが、金に貴賤があることぐらい知ってる。お前はジオプロフィットを人間の命を買う為に使った。その時点でお前はお前を虐げた奴と何も変わらない」

「女が拳を思い切り振りかぶり久重の胸に叩きつけた。

辺り一体に響く衝撃。

普通の人間ならば臓物をぶちまけているはずの一撃が細い手に遮られていた。

「ソラ!!」

「ひさしげ。大丈夫!？」

「ッ」

目の前に疾風の如く駆けつけてきたソラを警戒するように女が咄嗟に後ろへと下がった。

「お約束のようにギリギリだが助かった」

久重が笑いながらその場から立ち上がる。

「もう！！ ひさしげツ、心配したんだから！？ 解ってるの！！」

軽い久重のノリにソラが怒る。

「それよりまずはあいつを止めないと」

ソラが油断無く女を見据える。

何処にでもいそうなOL風の女はどこどころはち切れたスーツの内側から銀色とピンクの斑な肌を見せていた。

「アレって！？」

その姿に僅かな驚きを持ってソラが久重に訊く。

「どうやら闇ルートに流れたNDの一部らしい」

「やっぱりND！？」

「詳しい事は知らないがそいつを殺す為に使われたNDがそいつを生かしてる」

ソラが女の姿態に正体を探る。

（NDの暴走？ 旧世代型のNDにそこまでの力があるなんて聞いた事ない）

「あなたも【銀色の粉】を持つてるの？」

女の問いにソラが目を細める。

「あなたも同じなの？」

女の視線に僅かな変化を見て、ソラがその感情が何なのか気付いた。

「・・・違っ」

「？」

「私とあなたは同じじゃない。この力は私の大切な人が与えてくれたもの。その使い道は目の前の人と共に歩いていく術。だから、私とあなたは違っわ」

女が傷ついた様子で微笑んだ。

「なら、死んでくれる？」

「断るわ！！」

女の体が跳躍した。

久重を抱えてソラが超人的脚力で回避する。

女が落下し蹴り砕いた地面が鳴動して、爆裂した土石が周囲に飛び散る。

「ひさしげ。あの人のNDについて他に知ってる事は!？」

「あいつは本来四肢を失ってたはずだ。だが、NDを投与されてから他の人間の肉体を取り込んで再生させてる」

「再生?! そんなの普通のNDじゃ絶対」

その事実気付いたソラが黙り込む。

「ソラ？」

「……昔、研究途中のNDを市場に放出して実験させられたことがあるって博士が言ってたの」

「まさか!？」

「うん。たぶん未完成品を流通させて人間に対する作用を観察してた。でも、被検体は全部『連中』が追跡して廃棄処分にしたってデータにあつたから」

「そういう事か……」

女が二人の会話を隙と捉えたのか一直線に駆け手を伸ばす。

その手に掴まれれば人間の体如きは雀り千切られる。

襲い掛かってくる女に対してソラが咄嗟に黒い霧を解き放つ。

「イトモード!!」

「!？」

女がその霧を避けて距離を取った。

イトモードは領域に入った対象となる全ての存在を分子レベルで解体する死の圏域。

対抗できるのは同じNDを身に纏った人間だけ。

女の不完全なNDでは防げない。

敏感に脅威を感じ取った女が警戒しながら圏域ギリギリの場所で黒い霧に覆われた内部へと意識を向ける。

「ソラ。もしも博士が作ったNDならオレに止められるか？」

「……たぶん基本設計もプログラムも同じはずだから。でも、そ

んなケガじゃ」

「やらせてくれ」

「何があつたのひさしげ？」

「あいつに過去を見せられた」

「過去？」

人間を人間とも思わないクズが人間を化け物にする力とは知らずNDで少女を一人処分しようとした。

移民として虐げられ、世間から抹消され、記録すら残らなかった少女はだからこそ生き残った。

その事実を女が久重に知らせる意味なんて無かった。

それは女と同じようにNDの力に関わった久重だとしても変わらない。

同情が欲しかったなら過去なんて幾らでも誤魔化せる。

自分と似た力を持つ人間だからと全てを見せる必要も無い。

ならば、どうしてあそこまで過去を見せたのか。

「そこであいつは泣いてた。ずっと何かを求めていた。知った以上見て見ぬフリなんてできない」

「ひさしげが、それはひさしげがやらなきゃいけない事？」

心配そうなソラに久重が首を横に振る。

「たぶん違う。これはあいつの傍にいた誰かの仕事だ。本当ならなだが、此処で止めてやれるのはオレ達しかない。だから」

女が意を決したように半径二十メートルにも及ぶ黒い霧【ITEN D】のイートモードの中へと突入する。

まず服が全て食い尽くされ、更に膨れ上がった肉体のあちこちが黒く蝕まれ始める。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ?!?!」

下手に全身をNDによって構築している女にとって黒い霧は硫酸の雨にも等しく。

なまじ耐性がある分だけ少しずつ解けていく体に女は転げ回った。

「ソラ」

「・・・ステイモード」

逡巡したソラが躊躇いがちなながらもイートモードを切った。黒い霧が晴れ、漆黒を染める輝きが女の目に飛び込んでくる。ソラの額に微かな光の文字が連なっていく。

【ITEND】Annihilation Mode。

Energy Source 【SE】。

Full Drive。

「おい。憎い日本人なら此処にいるぞ」

「ツツツ!!」

女が全身から血に似た何かを零しながら立ち上がる。

久重の右手に集まる輝きが増した。

「掛かって来い。受け止めてやる!!」

「!!!!」

女が一直線に久重をその手で久重を引き裂こうと跳ぶ。

久重がその手を掻い潜り、真下から【左の拳】でカウンターを仕掛ける。

胸を打ち抜かれた女が久重の倍はあるだろう巨軀を浮き上がらせ、地面へと膝を付いた。

「あなたみたいな人が私のおにーちゃんだったらなあ・・・」

女が胃液と体液に塗れた口元を緩ませた。

膝を付き、上を見上げる額に久重の手はもう触れている。

「自由に生きれば良かったんだ・・・」

「あはは・・・そう、出来たら、良かったんだけど」

「出来たはずだ」

「悪い夢に掴まっちゃったから」

「なら、もう一度やり直せ。夢は起きて見るもんだ」

女が首を振る。

「もう、疲れちゃった」

「……………そうか。なら、休むといい」

NO.000 “Exhaustion Crest”

白い輝きが久重の手と女の額の間を溢れ、世界は白い静寂に満たされていく。

「ねえ、少しだけ傍にいて、くれる？」

「ああ」

「ありがと。おにーちゃん……………」

女はどこか少し残念そうに笑った。

「おやすみ」

事件の終わりは呆気なく訪れ、世界は再び闇に沈んだ。

『では、次のニュースです。本日未明、男性数名が 区の廃工場跡から発見されました。彼らは連続失踪バラバラ事件の被害者達と思われ、四肢を』

未だ絶滅していないラジオが垂れ流すニュースに耳を傾けるでもなく了子は横の男の顔を見つめる。

『尚、容疑者と目される移民の女は死体で見つかっており、その体

の』

「戒十さん。事件解決しちゃいましたね」

「ああ」

「何か呆気ないですね」

「ああ」

「容疑者の身元どうやって調べたんですか？」

「タレこみがあった」

「タレこみ？」

「死んだ女の身辺情報をロッカーに置いておくとさ」

「それって、誰が……………」

「知らねえよ。ただ、ロッカーの中身に事件の全容が殆ど乗ってやがった。調べたらドンピシャだ。移民が人身売買に関わってるってのは常識だが、売られた先でどうなってるのかは実態が定かじゃな

い。というより、お上はそんな都合の悪い事実は無かった事にした
いからだろうな。調べなんかしねえ」

「だけど、今回の件で調べないわけにはいかなかった？」

「移民の子供を達磨にして遊んでやがった男がいて、その養女とし
て女が買われ、女は同じように日本人の男を達磨にして弄んだ。男
はジオネットの管理機構役員で、同僚の男は自分達の趣味の発覚を
恐れて証拠のジオネット登録を消した。女は結局何かの薬で誰か
に殺され、男の同僚は今でも何食わぬ顔で生きてる」

「絶対捕まえてくれますよね？」

「当たり前だ。社会正義なんて胡散臭い言葉は好きじゃないが、今
回の件でこれから世論は移民の人身売買利権を追求するだろう。移
民に対する風当たりは強くなるだろうが子供に対する保護は厚くな
る、と信じていな」

佐武がコップの中身を空にした。

「戒十さん……どうして人間で分かり合えないんでしょう
ね」

「了子。お前第三世界の現状知ってるか？」

「いきなり何です？」

「ほら、答えてみる」

「え、えっと、アフリカの殆どの国は崩壊、現在は内戦すら人口の
減少で消滅してるって聞きますけど」

「分かり合えない民族紛争地帯が今じゃただの無人の荒野って事だ。
ここ数年は更に疫病の流行で二千万人が死んだ」

「何が言いたいんですか？」

「単純な話。分かり合えない人間がいるだけマシって事だよ。争い
争い全ては他人がいるからこそ。やがて分かり合う事ができるかも
しれない希望がある分な」

「人間がいなきゃ分かり合えないも何も無いと？」

「無論、数百年どころか千年経っても分かり合えない民族同士もい
るだろうがな」

「戒十さんは分かり合えない人っています？」

「いるとも。消えてくれと思うような人間なら両手の数で足りない」「いつか分かり合えると思いますか？」

「思わないな。人間の人生なんてあつという間だ。死ぬ前に分かり合えると思えない人間ばかりで困る」

佐武の苦笑に警察内部での苦勞が透けて見えて了子が複雑そうな顔をした。

「日本の世の中は悪くなる事はあつても良くなる事はない。オレの先輩刑事がそう言つてた事がある。どうしてだか解るか？」

「悪事が尽きる事は無いから・・・とか？」

「いや、理由は日本人は前に進んでも何とも思わず、後ろのことが気になる人種だから、だつたかな」

「それは・・・何か解る気がします」

「ホントか？ 要はアレだ。日本人にとって良い事つてのは当たり前なんだよ。当たり前過ぎて誰も誇らないし、誰も気にしない。けれど、悪い事は注目して改善しようとする。そんなだから、日本人は世界でも珍しい人種になった」

「確かに日本人て未来の栄光より過去の失敗を省みる方が多いかもしれせん」

「そんな奴らが多いから日本は平和を保ち続けてる。悪い悪いと言いながら、その平和を脅かす過去の失敗を跳ね除けていく。未来志向だなんだと世の中の連中は言うが、過去を省みなければ国だろうと民族だろうと進歩は無い。きつと、移民問題だつてそうだ。後数年十年もしたら人身売買や道徳や人権の問題より『どうして近頃の若者は自分の民族に誇りを持たないんだ』とか平和ボケしたものが主題になつてんだろ。それがどんなに平和な時代でしか主題にならない問題か無自覚なままな」

「ずっと世の中は悪いのに平和なんておかしい国ですな」
了子の言葉に佐武が笑つた。

「昔の日本はもっと悪かつたぞ。不況に次ぐ不況。政府と政治家の

無能。外国に随分と酷い目に会わされてデモが絶えなかった。それでも平和は続いている。悪い悪い平和がな」

「どれだけ平和になっても悪いまま、ですか？」

意地悪く訊いた了子に佐武が頷く。

「逆に世の中が良くなつたなんて話をし始めたら日本は終わってる。どんなに今が進んでいる平和の最中か無自覚なまま過去を悔い続けるからこそ、日本は悪い世の中を変えていけるんだ」

了子はコップに残っていた日本酒を空にして屋台の外に出た。思い切り伸びをして空を見上げる。

「おい。どした？」

「外字久重」

「あ？」

「今、追ってるネタの中心人物の名前です」

「ああ、あいつか。お前の手帳にも書いてあつたな確か」

「戒十さんもよく覚えておいて下さい。ごちそうさまでした」
了子が一万円をポンと置いてバックを取って歩き出した。

「私もこんな悪い世の中を少しでも変えてみます」

置いていかれた佐武が頭を搔いて、その背中に小さく声を掛ける。

「無理、すんなよ」

声は星の見えない空に融け戒十は再びコップの日本酒に口を付けた。

ジオネットの登録を操作し、移民の女と己の罪を隠蔽しようとした男が児童虐待及びその他余罪十六件で立て続けに起訴されたのはそれから三日後の事だった。

第十四話 名も亡き者が咲きし日に（前書き）

次回から新たな事件が動き出します。

このG I O G A M Eには当初から三人の主人公を想定していました。

一人は世界観と核心であるSFを地で行く主人公。

一人は近未来での社会の有り様に絡む主人公。

一人は非日常からの決別を果たしてゆく主人公。

それぞれがバトルや世界の秘密に牽かれていく者、逆にそれらから遠ざかっていく者、そんなものとは無縁に社会での自分の在り方を悩む者であり、物語において必要とされる要素の塊と言えます。

事實は小説より奇なりと誰かが言っていました。逆説的に小説は事實より奇ではない事もあるでしょう。近未来SFと謳っている以上、主人公達もそのご多分に漏れず、事實より現実味のある人間として描けていけたら幸いです。

まあ、ラブコメ的な要素は好きなので抜かせないんですが（笑）

これからもアニメの総集編的な感じで十四話事に長文を載せると思っています。

長くなりました。

第十四話「名も亡き者が咲きし日に」どうぞご覧ください。

追伸 活動報告を閲覧して頂くと内容が比較的分かりやすくなるかもしれません。

第十四話 名も亡き者が咲きし日に

第十四話 名も亡き者が咲きし日に

オズ・マーチャー。

経歴という経歴を捨ててきた男にとって己の本当の名前など無い。もう実家は存在せず親類縁者は皆無。

実名で呼ばれるような地で働いていた事はなく、属する組織で呼ばれる事もない。

名前だけなら三十通り。

偽の経歴だけなら二十五人分。

殆ど真実と言えるのは彼が嘗ての超大国にある世界一有名な諜報機関に属しているという事だけ。

西アジアから中東、アフリカ北部を主な活動拠点としていた彼にとって最も大きな顔は武器商人という職業。

運び屋と武器商人とマネーロンダラー。

それぞれに同業者達が営んでいた三つの商売を一体として統括する事で武器の小売業において彼は戦場という市場を席卷しつつあった民間軍事会社達を相手に商売を成功させた。

彼はさながら生存競争の過酷な地域の『火種を落としながら歩く亡霊』（ウィル・オー・ザ・ウィスプ）。

周辺国のパワーバランスの微調整役として重宝されていた経緯から彼の活躍は世界の大半の国で悉く評価される悪名高いものとなってしまった。

そんな彼がアフリカでの疫病の大流行を機に姿を消したのは裏の仕事は潮時に来ていると悟ったからだ。誰にも言わないものの彼にとって日本は最後の任務を終える地だ。

もはや表立った行動を取れば命の危険がある彼にとって、最後の任務はスパイ生活のおまけに過ぎなかった。

上司にスパイを止めると言い出し、最後に頼まれ事を引き受けた。その程度の話のはずだった。

「・・・・・・・・・・はあ」

故に甘く見ていたのかもしれないと彼は思う。

平和な国で探し物をする。

きっと、探せばすぐに見つかる。

そんな事を漠然と思っていたのだから。

彼の上司は彼に日本へと持ち込まれた兵器を探し出すよう依頼した。それはアフリカにおいて使用され、何の因果か日本国内に持ち込まれた。

それがどんな形をしたものなのか彼は知らない。

どんな性能でどんな威力なのかも知らない。

知らされた情報は持ち込まれた期日と持ち込んだ業者と名前のみ。

「・・・・・・・・・・はあ」

彼は嘆息する。

血の染みと骨だけが残存する部屋の中、げっそりした顔で視線を死体から逸らした。

蠅や蛆がない。

裸電球なんてものが未だにぶら下がっているコンクリート壁のワンルーム。

周囲を調べ、血が乾いてカサカサになったスーツから幾つかの免許証やカードを拾い出し、その場を後にする。

「帰ってシャンパンでも開けるか」

ボソツと愚痴りながら廃マンションの階段を下りる彼は夏の陽気を感じながら乾き切った血がパラパラと落ちる免許から業者の素性を推し量った。

（日系七世か六世辺りが妥当だとするなら・・・）

死んだ男達のカード類の中から一枚の名刺を見つけてオズは相手の素性に当たりを付ける。

（新手の和僑系の犯罪組織か？ 厄介だな）

日本人が海外において犯罪組織を作る事は稀な事例だったが、二千年代初頭に始まった日本の移民政策において海外へ移住した日本人が自警団や日本人街の発展と共に日本古来のヤクザの如き組織を形成していったのは歴史的事実だ。

その類の組織と何度か仕事をした事のあるオズにとっては華僑系の組織程に派手で数の多い連中ではなく、堅実で手堅い商売で稼ぐ印象がある。

そういつた海外で成功した和僑系の組織が祖国へと逆輸入され、韓・中・露系の人種に浸食されたヤクザや暴力団、マフィアなどの勢力図に食い込んでいるとアジアの片で聞いた噂を思い出す。

彼にとつて死んだ運び屋達は日本で始めて見る和僑系の末端組織の構成員だった。

（連中は日本人と見分けが付かないし、目立つ存在じゃない。こうして死人が出る以上は何らかの動きがあるはずだが、部屋は荒らされたり立ち入った痕跡も無かった）
薄らと埃が積もった部屋の床から判断して死んだ構成員が最初から切り捨てられていた可能性が高い。

死後の構成員をほつたらかしにしているのも妙なら連絡を取れなくなった構成員のアジトに何のアプローチもしていないのも妙な印象を受ける。

血が固まった床には外からの靴跡が一つもありはしなかった。

（とりあえずは身元を洗うか）
彼はビニール袋に再び遺留品を入れて鞆にしまいこんでマンションを後にする。

都市部へと向かうバス停の待合所で数十分待ち、バスで移動して駅から電車を乗り継ぎ、目的の駅の裏手から自転車で移動し、ようやく現在の住処へと辿り着く。

古びれた二階建ての『アパート』とやらはオズにとつて今までの居住環境の中で六番目ぐらいには寛げる場所となっていた。

二階に上り自分の部屋に入る。

爆弾がいつの間にか仕掛けられている事もない部屋こそオズにとつては最高の部屋と言えた。

靴を放り出し入居時にさっそく入れた最新式の冷蔵庫からオズは冷やしたシャンパンを取り出そうとして自重する。

まずは肴の用意しなければご機嫌な晩酌とはならない。

冷蔵庫の中から幾らかの食材を取り出す。

金さえあれば大概のものが揃うと言っていた黒人の言葉をオズは日本に来てすぐ理解する事となっていた。

ネット上なら殆ど何でも揃うのは当たり前。

特定の地域だけに存在するようなコアな品でもなければ見つからない食材は無かつたし、オズが食してきたものの殆どがそういうコアなものではない。

作るのが面倒な時はコーラとピザなら瞬時に電話一本で届き、『テナヤモノ』と呼ばれる日本独自の様々な料理もやはり電話一本で届く。

大型の高級百貨店やスーパーではこのご時勢にも関わらず品物が溢れ、日本独自の商品や新鮮な海産物が並ぶ光景は驚くべきものだ。

そんな日本の普通の品揃えがオズにとっては日本を夢の国と認識させるのに十分な効力を発揮していた。

オズが幾つかの肴を作り終えた後、シャンパンを取り出し、さて食うかと小さなちゃぶ台の前に座った。

壁に賭けてあるディスプレイを起動し、ネット上のニュースを閲覧し始める。

「？」

グラスに注がれたシャンパンに口を付けようとした時だった。音が壁を通して漏れ聞こえてくる。

『ひさしげ様！！今日はちょっと新しいお菓子里に挑戦してみた次第ですわ！！』

『何かこのチョコ・・・アルコールの匂いがしないか？』

『ダ、ダメ!? ひさしげ!! そんなもの食べたら!?!』

『こ、これ・・・めっひゃ、の、のどらけるわあああああああああ
ああ?!』

『純度百パーセントのアルコールですから!! でも、すぐ気にならなくなるって家の者が太鼓判をおしてくれましたの!! これでひさしげ様も心が広がってわたくしに目一杯優しくなるかもしれないと!!』

『ひ、ひさしげ!! ペー!! ペーしなさい!!』

『おれはひうか!!』

『あああ!? ひさしげの顔がもう真っ赤に?! こ、これ以上そんな危険なものひさしげにあげちゃダメなんだから朱憐!! って、ひさしげも何でもう一粒食べようとしてるの?!』

『なんらーか。もう一ひろつほひくなるあひというか』

『ああ?! もう呂律が回ってない!! ひさしげ!!』

『ひさしげ様!! ピ、ピスタチオを食べさせてあげますから、あ、あゝゝんて口を開いてくださいませんか?』

『?・・・あゝゝん』

『ひさしげダメ!? それ以上は今まで積み上げてきた威厳とか尊厳とかその他諸々が大変な事になっちゃう!?』

『ひさしげ様が実はこれ程アルコールに弱いなんて・・・これからも色々とお作りしますわ!!』

『うーいっく?』

ガヤガヤと喧しい隣やかまに何を言うでもなく、オズがシャンパンを飲み干す。

(あれが【AS】の手下なんて誰が信じられる?)

肴を口にして喧騒を聞き流しながらオズは隣の部屋に引越しの挨拶に行った時の事を思い出す。

数日前に済ませた挨拶の傍ら、やはり隣の男は二人の少女に囲まれて喧しい朝を送っていた。

啞然としたのは少女達と男が何やら同居紛いな関係であるという事

だった。

日本は性に開放的な場所だと聞いていたがこんな狭いアパートに自分より十歳くらい下の少女と住まい、朝や夕方に如何にも品の良い少女が出入りする生活は日本ではありがちな普通の事なのかと首を傾げざるを得なかった。

面と向かって貴様はA Sの手下かと聞いてこそいなかったものの、凡そ少女達に振り回されながら困った笑みを浮かべる青年はオズからすれば無能そうという一言に尽きる。

日本なら普通学校に通っていきそうな同居している方の少女は常に青年と行動を共にしているし、ハイスクールに通っているらしき品の良い少女は一目で上流階級の人間と見当が付いた。

無能そうな青年がどういいう状況になれば、こんな生活を送る羽目になるのかとオズは日本の不思議を思わずにはいられない。

唯一の救いと言えば隣から喘ぎ声が聞こえてこないという事実であり、オズは毎日のように繰り返られる二人の少女と青年のコメントをBGM代わりに日夜活動を続けていた。

肴とシャンパンが尽きた頃、少女達の喧騒は消えて、隣から物音が消える。

靴音からすぐに今夜も青年と少女はいないのだろうとぼんやりオズは知った。

ソレらしい行動は青年がA Sと何かしらの仕事をしているからという言葉で片付けて、オズは自分の仕事へと入る。

幾つかの秘匿回線を繋いで情報を買取る。

ものの一時間でディスプレイには送った男達の情報が映っていた。

【大牙会】

男達の所属していた組織の名前に記憶を探るがまったく記憶にない組織だった。

組織に関する情報を画面越しに相手に要求するも明日と素気無く返されて交信を終了させる。

(…………風呂にでも行くか)

仕事を明日に回してオズは近頃気に入っている日本独自の場所である【コウシユウヨクジヨウ】へと向かった。

極めて稀な話だったがオズは内心で日本をもう気に入りはじめていた。

銭湯の談話ルームでコーヒー牛乳を一気飲みするのが日本の仕来り。そう信じて疑わない少女ソラ・スクリプトウーラは今日も今日とて腰に手を当てていい飲みっぷりを披露していた。

「おやおや。今日も良い飲みっぷりねえ」

「ありがとうございます。おばーちゃん」

番台に座る老婆がニコニコして言うとソラが微笑み返した。

老婆がいそいそと傍らにある冷蔵庫から牛乳瓶を取り出してソラへと差し出す。

「え？」

「ほら、あの人にも上げなさいな。他の人には秘密よ？」

老婆の温かな言葉にソラが牛乳を受け取って再度礼を言っ頭を下げる。

そのまま青年外字久重の下に駆けていくソラを老婆はやはりニコニコしながら見送った。

僅かに上せた様子で空いているソファアに身を沈めていた久重の頬にひやりとした感触が奔る。

「?! な、ソラか？」

「ひさしげ。はい」

「どうしたソレ？」

「番台のおばーちゃんに貰ったの」

「礼言ったか？」

「うん」

「そうか。悪いな」

「ひさしげ。こういう時はありがとう、でしょ？」

「・・・違いない」

苦笑して久重が立つと番台の老婆に軽く頭を下げた。

再びソファーに身を沈める久重の横にソラがそつと腰掛ける。壁に掛けられたテレビからは旬の過ぎた芸人が失笑に近い笑いを取るのに必死な姿が映し出されている。

意識だけは横に向けている久重にソラがこれからの事を訊く。

「ひさしげ。今日はどうするの？」

「少ししたらアズと合流する。今日は怖いヤクザ屋さんとの折衝に借り出されるらしい。ジオプロフィールの地権絡みだからって話だが、まあ・・・ただのボディーガードだな」

「ジオプロフィールの地権？」

「現実の場所への滞在で色々と利益を受けるのがジオプロフィールだ。だから、誰もが人の集まる場所や条件の良い場所を探してジオプロフィールを設定したがる。だが、一箇所に複数のジオプロフィールを置くと周辺に人が集まらない空白地帯が出来たりする。そうすると大手の広告代理店が徒党を組んだら卑怯だろって話になるわけだ。だから、設定には限界が設けられてる。つまりジオプロフィールの設定に定員があるんだが、それが利権化しててな。その場所に対しての定員に結構な金が動いたりする。そしてダフ屋行為ってのが発生するわけだ。最初にジオプロフィールを設定する気の無い気も無い連中が大勢その場所の定員に応募して、定員を獲得したら売り払う。色々な規制をしているが巧妙にすり抜けて書類審査では落とされないヤクザ屋さんのダフ屋部門が残る事もある。今回の依頼はそういう連中から定員に割り振られる書類を回収する事だ」

「ねえ。ひさしげ」

「それでオレ達が」

「ひさしげ・・・」

ソラの小さな声に久重が横を見た。

「まだ、気にしてるの？」

「・・・気にしてないって言ったら・・・嘘になるんだろうな」

「ひさしげが止めてあげなかったら止まらなかったかもしれない。

普通の人間や警察には勝てないし捕まえられない相手だったのはひ

さしげがアズに調べてもらった通り。ひさしげは正しい事をしたって私は思う」

「正しい事、か。どうだろうな・・・ただの自己満足だったかもしれない。必要な事だったとは思いますが、オレはあれが正しい結末だとは思ってない」

「どうして？」

「正しい事なら人殺しをしてもいいわけじゃない。必要に迫られるから、自分の様々なものの為に誰かを殺すのが普通だ。よく戦争では兵隊に罪を問わないって言葉が使われるが、アレは正しい事をしたから罪に問われないわけじゃない。言ってる意味解るか？」

「たぶん・・・」

視線を俯かせたソラの頭に手を置いて久重が続ける。

「オレは殺す必要には迫られてなかった。極論するとあそこで逃がして関わりを絶つても良かった。それは道徳的には悪い事かもしれないが、自分が人殺しになるよりはずっとマシだったかもしれない」

「ひさしげ。あの人はもう死んでた。それを無理やりNDで繋いでただけ・・・ターポリンの時にも言ったけど、ひさしげは死体を死体に戻しただけ」

「一種の治療薬を打ち消したって言葉の方がオレ的にはしっくりくる・・・」

ソラが久重を見上げてハッキリと告げる。

「あの人はそもそもターポリンより酷かった。頭部の殆どが残ってなかったから・・・たぶん脳内の電気信号の動きだけをNDが擬態して人格をエミュレートして動かしてた可能性が高い。だから、ひさしげが悩む必要なんて無い。NDが人格があるように死体を見せかけてただけなんだから」

ソラの沈んだ調子に久重が反省した。

自分の保護者であった博士とやらが創ったNDで人が不幸になった。そんな事実を受け止めるソラの方が自分よりも辛いかもしれないと考えてすらいなかった自分の愚かさに久重は冷静さが取り戻した。

「ごめんな」

「何でひさしげが謝るの？ 必要ない」

「そういう気分だからだ。それと・・・ありがとう」
そつと頭を撫でて久重が立ち上がる。

「行くか？」

「・・・うん」

ソラが自然に久重の手を取った。

「さつさと行かないとアズにどやされそうだ」

久重がおどけて言いうとソラは思わず笑う。

「アズが怒ったらどうなるの？」

「それはまあ、知らない方がいい」

「？」

「あいつが怒ったらそれこそ合衆国大統領だろうがマフィアのドン
だろうがただじゃ済まない」

互いに顔を見合わせて・・・思わず噴出した二人はそのまま外へと
向かった。

二十一世紀も半ばを過ぎた日本では二十四時間開いている火葬場も
珍しくない。

そんな場所の一角、チラホラといる人々の端で青年と少女が暗闇を
見つめながら他の人々と同様にその時を待っていた。

風御とセキ。

二人の間にはもう一時間以上会話が無かった。

「ありがとう・・・」

ポツリとセキが呟き、風御が不思議そうに訊く。

「何で？」

「きつとあの人も嬉しいと思うからです」

「死人は何も思わないでしょ」

「それでもきつと・・・」

「これはただの感傷。それは誰だって解ってる」

「……」

「日本じゃ死ねば誰でも仏ってね。形の上で死者に敬意を払ってただけさ」

「あたし……あの人と少ししか話さなかったんです。でも、あの人はあたしにとっても優しくしてくれた」

目に見えて落ち込んでいる少女を前にどうしていいか風御には解らなかった。

傷ついた女を慰める方法なら知っている。

一人ぼっちの女を立ち直らせる方法も理解している。

しかし、風御には落ち込んでいる少女の扱い方が解らなかった。

どうしてかと己に問い掛ければ、「こんな事件で落ち込んだ人間を見た事が無かったからだとのつれない答え。」

「日本人の男を誘拐して達磨にして弄んでたにしては？」

セキが無神経な風御の発言にキツと顔を上げる。

「君だって解ってるはずだよ。セキちゃん」

「そんなの……解りません」

膝の上で拳を白くなるまでセキが握り締める。

「最後に残った事実には彼女の境遇が不幸で、彼女は他人を不幸にする人間だったって事だけだ」

「」

「あの刑事に根掘り葉掘り聞かれた時、僕は納得したさ。そして、幾らかの事情も知った」

「あの人は！？ 移民だったから……！」

「移民だったから不幸だったし、移民だったから人殺しをした？ 違うでしょソレ」

「あなたは どうして……！」

セキがやり場の無い怒りに泣きそくに風御を睨む。

「僕にとって事実と真実が違うものだから、かな」

「事実と真実って何ですか!？」

周囲に他の人間はいなくなっていた。

「彼女は不幸になりやすい移民で立場で偶然その不幸のど真ん中に落つこちた。彼女は不幸の中で誰かを不幸にする道を選んで他人を虐げる側に回った。それが君の目を逸らそうとしてる事実」

「なら、真実は?！」

「彼女は僕と出会って女の喜びを知った。そして、彼女は君っていう仲間を得て、時間を少しだけ共有した。僕と君の真実はそれしかない」

「それが真実だつて言うんですか?」

「それで十分じゃない? 世間では移民の猟奇なサイコ女が不幸な過去から日本人を襲ったつて話になつてる。別に間違つてないし正す必要も無い。けど、僕と君に残された真実は他の人間とは違う。

彼女は普通に笑えたり誰かを思いやりたりできる人間で、ほんの僅かな時間かもしれないけど、共に交わつた」

「それが・・・真実・・・?」

「君はそれ以上の真実が必要だと思う? 僕はごめんだよ。彼女は「どうしようもなかった」から僕と出会った。僕と出会ったから彼女も君と出会った。それだけが価値ある真実つてやつでいい」

「あの人は優しかった・・・優しかったんです・・・・・・」
ギョツと風御の胸を掴んで少女が嗚咽する。

「ああ、知ってる」

声を押し殺して泣く少女を前に何もしてやれないから、風御はただされるがまま胸を貸す。

「・・・一つだけ確かなのは彼女が最後に笑つてたつて事だけだ」

「見たんですか?」

「一応、死体を引き受けたから見られる事になつて、ちょっとだけ「あの人は・・・笑つてたんですか?」

「頭部も無ければ手足も無い。それでも彼女は笑つてた。ホントに羨ましいくらい綺麗に・・・だから、僕は彼女を笑つて見送る事にする。彼女に僕と君が出来る最後の事はそういうのでいいんじゃない?」

見上げてくる顔の涙をスーツの袖で拭って風御は笑みを浮かべる。それを見つめてグツとセキが涙を押し殺した。

何度も失敗しながら、やがてボロボロな笑みを浮かべる事に成功する。

「それでいい。そっちの方が可愛いよ。セキちゃんは」

「ちゃん付けしないでください・・・」

その泣き笑いの少女をそっと立たせて風御が迎えに来た施設の人間に向かい合う。

「ご遺体の方を冷まし終わりましたので・・・」

「はい。すぐに」

そう言つて風御がセキに手を差し出した。

「今日君は一つ大人になった」

「大人になつたら何か良い事でもあるんですか？」

「何にも無いよ。けど、誰かの為に笑顔を浮かべられるなら、それはきつと素晴らしい事だから」

差し出された手を取つてセキが歩き出す。

長い廊下を歩く傍ら、風御の手が大きい事にセキが気付く。

ナヨナヨした印象しかなかったはずの男が自分よりずっと大きいのだと初めて知つた気がした。

「あの人は・・・天国に行けたんでしょうか」

「宗教なんて当てにならないのが相場と決まってる。僕が信じるのは一つだけ」

風御が静かに答える。

「彼女は僕の人生で背負う一人になった。だから、天国でも地獄でもなく彼女は僕の中にいる」

「ロマンチストですか？」

「いや、ただのオプティミスト」

「楽観主義なんて、あなたらしいです」

「神は土から男を創り、男の肋から女を作つた。最後の審判の日、人は裁かれ信仰ある者は天国に信仰無き罪人は地獄に、そう宗教家

達は説く。けど、死んだ人間は日本なら灰になるしかない。最後の審判で甦りなんてしない。灰は何も語らないし、灰は何も喋らない。焼け残った骨すらやがては風化する」

「なら、何が残りますか？」

「決まってる。記憶だよ」

「だから、自分の中にいる、ですか？」

「僕にとって彼女はそんなに重要な人間じゃない。それでも忘れられない人になった」

「あたしもです」

目の前にある扉が施設の人間の手で開かれる。

その先には白い台の上にただ白い粉の塊だけがあった。

風御は内心で少しだけ安堵する。

少女にまだ人の骨を拾わせるのは早い。

それはもう少し少女が歳を重ねてからでいい。

そう思う。

「大丈夫？」

「はい」

しっかりとセキの手を繋いで風御とセキは一步前に踏み出した。

此処では無いどこか。

今では無いいつか。

彼女は一人空白に佇む。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女の人生の大半は哀しい事や辛い事の方が多かった。

だからか、彼女はいつの間にか信じていた。

自分は移民だから、ガイコクジンだから、肌の色が違うから、日本人じゃないから、貧乏だから、「どうしようもない」のだと信じていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

けれども、彼女は知ってしまった。

人は違つても分かり合えるのだと。

大好きだったデパートの屋上で一人寂しく思っていた彼女に声を掛けてくれた人がいた。

最初、彼女はその人が自分を日本人と勘違いして話し掛けて来たのだと思つた。

しかし、その人は彼女に最初にこう言つたのだ。

『移民なのに此処が好きだなんて変わつてますね』

それから彼女は何かに導かれるようにその人と話した。

沢山、沢山。

その人は優しい瞳で頷いては話をずっと聴いてくれた。

まるで夢のようだったと思う。

ずっとずっと酷い事ばかりだった人生の中で兄以外に安らげる人を初めて見つけた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その人の近くで安らいで、また別の人と出会つた。

今度は自分と同じ・・・・自分を見つけた。

その瞳は昔の自分だった。

本当に信頼出来る人以外は拒絶して他の何もかもを敵視してばかりいた。

それでも絶望をまだ知らず、それでも愛するという事を信じていた。遠い過去の自分に彼女は思つた。

こんな自分なら、その人に本当の安らぎを与えられるのだろうか。

何もかもを絶望して、全てを失つて、誰かを虐げていく事ですが、自分を保てない。

抜け殻のような自分より相應しいのではないかと。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女はその人の下を去る事にした。

寂しくて寂しくて彼女は兄を求めた。

そんな彼女が最後に出会つた人はとても優しい人だった。

その人は彼女に醜さを教えてくれた。

彼女が目を逸らし続けたものを指摘してくれた。

終わりもなく苦しみ続けた人生に最後を与えてくれた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女は思う。

空白の最中で思う。

人は分かり合える。

赦し合えなくても、どんなに醜くても、争っていてさえ、その努力を放棄しないならば。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女は啼く。

空白に呑み込まれながら一人啼く。

自分の罪に、自分の境遇に、自分の愚かさに、自分の醜さに、自分のどうしようもなさに、啼く。

やり直せたらと、未練だらけだと、死にたくなかなかつたと、それでもどうしようもないから、啼く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女は思った。

たった一つの願いを。

また、いつか、会いたい。

そんな刻を、そんな世界を思い描く。

胸にした言葉を抱いて彼女は笑みを浮かべ終わってゆく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

最後の、最後の最後の、最後の最後の最後に、彼女は確信した。

結局のところ、自分は今幸せなのだろうと。

それが彼女に残った最後の真実なのだろうと。

「ありがとう・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「

空白にはもう誰もいない。

ただ、言葉の余韻だけが、終わりもなく、空白に、響き続けた。

第十五話 死に到る病

第十五話 死に到る病

枯れてしまった樹に少女は水を掛けていた。

何度も何度も涸れた井戸から僅かな水を汲む。

他の誰かが野次を飛ばす。

そんなの無駄だ。

諦める。

それでも少女は日に何度も何度も水を運ぶ。

やがて、涸れ井戸が水を一滴も吐き出さなくなった頃、少女は己の血を少しづつ与えるようになった。

誰もが言った。

もう止める。

その樹は枯れている。

それでも少女は血を注いだ。

どんなに苦しい時でも、どんなに渴いた時でも。

やがて、彼女に誰も何も言わなくなった。

少女は年月を費やした。

枯れ枝に新芽が芽吹いたのは少女がいなくなった後。

少女はついに花を咲かせた樹を見る事は無かった。

そんな夢を見た。

「ひさしげ」

ゆさゆさと揺さぶられて目を覚ました久重が欠伸を噛み殺す。

「・・・ひさしげって大物な気がする」

半眼のソラが溜息を吐いた。

「悪い。だが、こつも交渉が長期化すると・・・ふあ・・・」

二人が座ったソファは革張りの高級品だった。

「……………」

久重が視線に気付いて横を見る。

強面なセールスマンが六人ほど直立不動で立っていた。

「今夜で四日目。アズにしては珍しい」

「そうなの？」

「まあ、こういう所でここまで話が長引くつてのは中々無いな」

ソラが辺りを見回した。

何故か国旗と大きな家紋らしき文様を縫い付けられた布が並んでいた。

何故か日本刀が二つの布の下に置かれている。

何故か虎の毛皮が壁には掛けられている。

最初こそ驚いたものの、四日もくれば見慣れた景色にソラが今の今まで黙っていた疑問を久重の耳にヒソヒソと呟く。

「……………ねえ久重。ここつてあの有名な【YAKUZA】の事務所？」

「何が有名かは訊かないが、あまり違わないな」

「？」

「基本的にお世話になりたくない場所という意味じゃ同じか？」

解らないという顔をするソラに久重が向き合う。

「ここは簡単に言くと和僑の事務所だ。厳密にはヤクザとは違う。

外国からの逆輸入な分、現在の日本のヤクザより昔堅気なヤクザなんて希少価値かもしれない。解り易い例えにすると日本人より日本好きな外国人みたいなものだな」

ジロリと一斉に視線が二人に突き刺さる。

「ひ、ひさしげ！？ そ、そんな事言っていいの？」

ソラがサラリと言つてのける久重の言葉に慌てた。

案の定。

細身でメガネを掛けた強面のセールスマンが二人の前に進み出る。

「!？」

ソラがビクリと体を震わせると近づいてきたその男がニツコリと微笑んだ。

「お嬢さん。そう身構えなくともいいです。横の方の言っている事は殆ど当たりですから」

外見とは裏腹に柔らかな物腰にソラが拍子抜けしたように男を見つめる。

「我々のような和僑。とりわけ、外国で最下層から組織に拾われたような人間は日本のヤクザなんかとはそもそも成り立ちが違います。日本は様々な差別や貧困層からあぶれた人間がよくこちらの道に來ますが、我々は基本的に自警団的な意味合いが強い組織がコミニティーを守る為の尖兵として招き入れるのが常道。故にどちらかと言うと本当に昭和までは残っていた日本古来のヤクザに近い立ち位置なんです」

「そ、そう、なんですか・・・？」

おずおずと訊くソラに男がニツコリとして名刺を差し出す。

「【大牙会】で税理士をしている『伊佐・ジョージ・由木』です。どうぞよろしく」

「は、はい・・・」

ソラが差し出された名刺を受け取ると久重が伊佐に振り向いた。

「伊佐さん、でいいか？」

「ええ、構いません」

「あんた三日目まではいなかったよな？ 今日はどうしてまた？」

「はい。そろそろ話が付きそうだと言うので様子を見に來まして」

伊佐の笑みに久重が内心で警戒心を引き上げる。

「【大牙会】って名前はあまり聞かないんだが、日本で活動し始めたのって近頃の話なのか？」

「そうですね。日本での活動はここ数年の話で未だ新参者と言っているかと」

久重が僅かな違和感に首を傾げる。

「和僑の殆どは貿易商を兼ねてるのが常識だが、何でジオプロフィール

ツトに手を出した？ こつちの分野は基本的に地元と同業者が食い合うから、新参加者が参入するには辛いはずだろ？」

「いえ、ウチの頭は先を見据えなざる人で。それでこれからはこつちで食つていけるんじゃないかと道を模索してる最中なんですよ」

「アズが出張るなんて相当に珍しいからな。大成功つてところじゃないか？」

「褒められても何も出せない台所事情でいつもカツカツですよ。恥ずかしいですが組のもんに食わせていくのが精一杯です」

頭を掻きながら伊佐が苦笑いした時だった。

何かが割れる物音がした。

反応して伊佐が目つきも鋭く横の別室に向かう。

久重とソラが即座に立ち上がり、それに続いた。

「どういう意味だコラア！？」

「止めねえか。馬鹿たれ」

別室で床に灰皿が割れていた。

一人激昂している比較的若い男の額には青筋が浮かび、もう一方の黒い羽織姿の六十代の男が若い男を制止していた。

「ちなみにこれは僕からの純然たる善意であると忘れなく」

いつもの胡散臭い笑みでニコリとしたアズの顔に久重がドツと疲れた顔をする。

「・・・アズさん。あんたの言葉が真実だとすりゃ、オレ達はさつさと此処を引き払わないと壊滅するって聞こえるんだが。そういう事でいいのかい？」

「ええ。ちなみにこつちは商売相手が消えると色々と不都合があるので情報はサーブिसにしときます」

「ちなみに期限は？」

「今すぐにでも」

「さすがにそりゃ無理つてもんだ。組の連中を全員移動させるとなりや色々運ばなきゃならんもんが多過ぎる」

「お宅が運んだものはそれだけ危ないものだったという話です。運

ぶものくらいは選んだ方が良かった」

「そんなにアレが拙いものだって言うのかい？」

「拙いで済めばいいですが」

「……おい。組のものに全員集合を掛ける。事務所を移す」
「頭！？」

その場にいた誰もが六十代の男の発言に驚いていた。

「こんな若い女の言葉を信じるんですかい！？」

「君にも見習わせたい発言だよ。久重」

「お断りだ」

アズの微笑にキツパリと久重が返す。

「勘てのは無視すると時々酷え目に合う。オレの勘が正しけりゃ、この人の言ってる事に間違いは無えな」

最初に灰皿を落とした男がその言葉に何かを言おうとした時だった。

「そん　？」

ビチャリと男の口から血が飛び散った。

【！？】

その場の誰もが固まる。

そして、男が倒れ、咳き込み始める。

咄嗟にその場から一歩引いたアズが久重に視線を走らせた。

「おい！？　大丈夫か！？」

倒れた男に伊佐が駆け寄ろうとした時、久重がその手を掴んで止める。

「何を！？」

「何かのウィルスや病気だった場合、血に触れればアウトって事もある。まずは救急車とこの場の全員を退避させた方が無難だ」

「……解った。おい！！　今からこの部屋は立ち入り禁止だ。他の連中にも声を掛けて警戒させておけ！！　それから基本的に二人一組で必ず行動するようにと　」

伊佐が場を取り仕切り始める。

慌しくなっていく事務所内で黒の羽織を着た男がボリボリと頭を搔

いた。

「こりや行動するのが遅れちまったか？」

「まずは病院に行つて検査した方が身の為だと忠告しておきます」
アズの言葉に男が倒れこんだ部下に視線をやる。

「おい。こんなところで死ぬなよ？ まだテメエもやりてえ事一杯あるだろ？」

「は・・・い。おか・・・しら・・・」

途切れ途切れの返答を耳にしながらその場の全員がすぐに部屋を退出した。

ドラッグストアから買ってきたのか。

男達が数分後にはマスクと手袋を次々に着用し始める。

「あんた達も」

伊佐がマスクを渡そうとしてくるとアズがソラに視線を向ける。

「必要かい？ ソラ嬢」

「要らない。でも、このウイルスは・・・危険」

「解るのかソラ？」

久重の声にソラが頷く。

「この系統のウイルスにしては繁殖力が尋常じゃない。空気感染しないみたいだけど血に触れたらアウトだと思う」

ソラが難しい顔で虚空を見つめている光景に伊佐が僅かに目を見開いた。

「その・・・お嬢さんは一体何をしてなさるんですか？」

「色々と」

アズが笑顔で答えた。

「色々・・・ですか」

「ええ」

その返答から答える気が更々無い事が解つたのか伊佐が他の組員へとマスクと手袋を配りにその場から遠ざかっていった。

「ちなみにこの場にいた他の人間に感染してるかどうかは解るか？」

「ひさしげとアズは大丈夫。私という時はいつもNDで基本的に守

られてるから。私の場合はウイルスや病原体に対してNDが繁殖する前に除去してくれるから何ともない。他の人は体温が普通だからまだ大丈夫だと思う」

「つくづく便利だなNDって奴は」

感心する久重にソラが難しい顔をして首を振る。

「それでもやっぱり感染症なんかの重篤患者までは治せない。DNAの解析データと現在の細胞構造。他にも色々な情報が無いとNDでの治療は無理だから・・・」

自分では治せない罪悪感から暗い顔をするソラの頭を久重が撫でた。ソラが久重の服の端をキュツと握り、撫でられがままに受け入れる。
「頭！！ 救急車が後数分で着くそうです」

ソラがその声に反応して伊佐に近寄った。

「何ですか。お嬢さん？」

伊佐の耳元でソラが囁く。

「それは・・・本当ですか？」

僅かに驚いた顔の伊佐にコクリと頷いてソラが真摯な顔で頷く。

「解りました。救急隊員にはそう伝えておきます」

ソラが久重の下へと戻ろうとするとその背中に声が掛かる。

「ありがとうございます」

伊佐の丁寧な言葉にソラは振り返って再び頷いた。

そろそろ潮時かと事務所内部で部下達に指示を出していた黒い羽織の男にアズが声を掛ける。

「それじゃ、僕達はそろそろお暇させてもらいます」

「大丈夫ですかい？」

「ええ。そちらこそ気を付けた方がいい。相手が本気になる前に此処を引き払う事をお勧めしておきます」

「今回の件はやはりさっきのくだりで出てきた？」

「ほぼ、間違いなく。あなた達が運んだものの手口と一緒にです」

「・・・解りやした。その情報への対価は必ず」

「サービスですから。お宅も大変でしょうし、商談はまた後日。一

息着いたら連絡を」

そう言い置いてアズが番号だけが書かれた名刺をそつと手渡し、事務所を後にした。

クーペが事務所から遠ざかるのと同時に救急車のサイレンが聞こえ始める。

慌しい事務所周辺を見えなくなるまで後部座席からいソラが見つめていた。

「それでアレって何の事なんだ？」

助手席の久重の疑問にアズが視線も寄越さず声だけで答える。

「【大牙会】が近頃運んだものが相当にヤバイ代物だったのさ」

「テメエが言うならさぞかし危険なものに違いないと思うがバイオテロされる程のものなのか？」

「本来は第三世界、アフリカで猛威を振るっていたらしいけどね。

何の因果かこつちに流されてきた。情報だけは入っていたけど運び屋が何処かまでは掴んでなくて。ようやく運び屋の名前が解つたと思つたら」

「自分の交渉相手だった・・・か」

アズの言葉を引き継いだ久重が苦い顔をした。

「ちなみに核心は？」

「僕が掴んだ限りじゃ、戦略兵器」

「さすがにんなもんを日本に持ち込めるものなのか？」

「それが本当に兵器の形をしていれば、持込は防げたかもしれないでも、それが兵器とは無縁の形をしていたらどうだい？」

「兵器とは無縁・・・？」

「ちなみに持ち込まれた経緯までは掴んでる。ソレは自分の意思で運んでくれと【大牙会】に接触を持った。そして、ソレは自分の意思で日本まで来た。その跡をまるで掃除するように誰かが意図的に情報を消して回らなければ僕も感づかなかつたね」

「自分の意思って・・・まさか」

「人間さ。そして、僕が掴んだ限りの情報を総合するとソレは限り

なく真つ黒な兵器だ」

「今回の件と内容から察するに病原体の保菌者か？」

「今までもそういう例は世界に幾つもある。難病の抗体を持っている為、自分だけは病で死なず、自分の周囲に病気をばら撒く。でも、もし自分の周囲に病気を『意識的にばら撒く』事が出来るとしたらどう？」

「だから、戦略兵器なのか？ 病気の種類にも因るが確かにヤバイな」

「それだけなら戦略兵器の名は要らないよ。問題なのはその病気の種類じゃなくて病気の数だ」

「何？」

久重の額に嫌な汗が伝う。

「僕が調べた限りだと第三世界で流行した疫病は三百種以上。その殆どが同時多発的に一定の区域から広まって広大なアフリカを覆い尽くした」

「今回は運がいい。いや、手加減されたのか？」

久重があまりの話に思わずアズに訊く。

「ちなみに疫病とそれに端を発した紛争やらで二千万人は死んでる。紛争と言っても敵も味方もバツバツタ逝ったから殆ど発生初期で自然消滅したらしいけどね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

後味の悪い話に久重が口を噤んだ。

アズは躊躇無く話を続ける。

「誰が付けたか知らないけど、ソレの名を知っている輩はソレをこっ呼んだ」

「テラトーマ」

「ソラ？」

久重が後ろを向くとソラが沈んだ様子で俯いていた。

後部座席から聞こえてきた言葉にアズがバツクミラーを思わず見た。
「知ってたのかい？」

俯いたままのソラの表情を久重は確認できなかった。

「戦略兵器テラトーマ。【I T E N D】のバイオ工学部門から兵器開発部門に移転された技術で生み出された唯一の兵器。【連中】が地球環境改善の為に人口コントロール制御の要として開発したの。でも、一個体が能力を完全開放しただけで人類が滅びかねないスベツクだったから製造は初期ロットで中止。それ以降は造られてない」いつの間にか路肩にクーペが止まっていた。

久重が思わずソラに手を伸ばそうとして、ソラがその手をそっと掴んだ。

「本来は私に積まれるはずだったもの……なの……」

「ソラ……もういい」

「逃げ出す時に見た情報だと【連中】の造ったテラトーマの完成度は七十%未満。運用データや病原体の種類なんかの完全な調整を含めて、私に移植される手筈になつて」

「もういい」

「でも!？」

顔を上げた少女の目尻を久重が差し出した指で拭い、車を降りる。

「アズ。後は二人で帰る。いいか？」

「構わないよ。若い二人を邪魔する程野暮じゃないさ」

後部座席のドアを開けてソラの手を引いた久重がポケットから出したハンカチでソラの泣き顔を拭いた。

「それじゃ、明日はお休みだから」

気を利かせたらしいアズの声に内心で感謝しながら久重は車を見送った。

「……………」

「ゆつくり聞かせてくれるか？」

「……………」

トボトボと覚束ない足取りの少女に寄り添いながら久重は話しかけもせず黙って歩く。

傍にいてやる事しか出来ないもどかしさに齒噛みしながら、少女の

手を決して離さないよう強く握った。

やがて、ポツリポツリとソラが語り始める。

「・・・テラトームはBSL-4、物凄く嚴重な施設でしか生成出来ない兵器なの。無数の病原を一個体に共存させて尚且つ制御する。それは従来の科学技術では殆ど不可能に近かった。でも、博士の造ったNDはその常識を覆した」

「確かに凄い技術だよ・・・」

「うん・・・施設ではNDの実用的な計画を幾つかの分野に分けて研究開発してた。博士は専ら兵器開発部門担当だったけど、他の開発部門から研究成果を借りて人の為になる研究も幾つかしてた」

「その結果の一つがそのテラトームって奴なのか？」
ソラが頷く。

「NDによる厳密な病原体の保存と管理、分かりやすく言うとNDを使った人工免疫プログラム。それがあれば病原菌を保持したまま日常生活が送れる。つまり、本来はエイズや他の病原体なんかの活性を抑えたりする事を目的にして開発されたのがテラトーム・レゾナンス・システム。TRSだった」

「TRS？」

「病原体は発症する為の条件が幾つもある。だから、その発症条件を満たさない生体情報を、他の健康な人間の体なんかを基にしてリアルタイムで体の上書きする。NDの生体融合実験の過程で出来た技術の一つで、それがあれば幾つかの制約はあるけど現存するどんな病原体に掛かってても病気の進行や発症は抑えられるって・・・ひさしげ分かる？」

「つまり・・・あーなんだ。他人の健康な状態をNDで無理やり再現するって事か？」

「・・・ひさしげって結構頭いい？」

「結構は余計だ」

僅かにソラが笑うものの再び表情を硬くする。

「それで軍事転用技術としてもTRSは優秀だったから、ND保有

者の肉体制御にも使われた。でも、病原体を制御する技術を【連中】は最も残酷な形で兵器に転用した」

「それが戦略兵器テラトーマ？」

「うん。テラトーマって日本語だと奇形腫って言葉になるんだけど、それは技術的などころから来て。ひさしげは他の人間の生体情報を別の人間に上書きしたらどうなると思う？」

「それは・・・何かしらの弊害があるんじゃないか？ 普通の臓器移植も他の人間から移植すると免疫系の薬とか一生飲まなきゃならないらしいし」

「そう。だから、TRSで上書きする健康な肉体情報をどこから持ってきたらいいかって話になる。だから、病原体が病気を発症させられない細胞の情報を保有する分身を作った」

「まさかクローニング技術か？」

呑み込みの早い久重にソラが首を横に振る。

「人間一人分をクローニングするのは凄い手間と時間が掛かる。整備費なんかも見合わない。だから、IPS細胞技術で作った正常な細胞の塊で奇形種テラトーマを人工的に作ったの。【連中】はその技術の先で逆に病原体を保存するテラトーマを人間の生体情報で管理するって方法を見出した」

「つまり、病原体を保持した自分の細胞の分身が兵器になるって事か？」

ソラが僅かに沈黙した。

「・・・戦略兵器テラトーマのオーナーはその体にテラトーマを取り込まれる。それはつまり生きてきた病原体の保管庫になるって事。NDとTRSで保存されたテラトーマを肉体に取り込んだ人間は歩く核弾頭に等しい存在になる。どんな国も滅ぼすのは簡単。能力を解放するだけでその国は滅亡するんだから」

「・・・」

ソラが続ける。

「比較的死亡率の低い病原体で同じような発症条件を持つものを数

個ずつ、それ以外の絶対に流行させてはいけない病原体は一つずつ、各テラトームは保管してる。全身に植えつけられるテラトームの数は大体四百個前後。人類を百度絶滅させて余りあるって言われてた」「確かにそれなら戦略兵器で間違いない、か」

「隔離してない場所でもしオーナーが死ねばNDは全ての病原体を解放する。NDで特定の病原体を他人に運ぶ事も出来る。安全に倒す方法はオーナーと周囲の病原体飛散予想地域を同時に千度以上の炎で焼き尽くす事だけ。そして、それが実現できるのは今現在の兵器では……」

（核弾頭だけ、か）

ソラが何を言いたいのか察した久重はとりあえず、笑う事にした。

「ま、何とかなるだろ」

「ひさしげ？」

「オレはどんな状況だろうが二度と君を死なせないと決めた。それがもし誰かの犠牲の上にしかり立たないと言うなら、覚悟はしよう。その時が来たら泣くかもしれない。でも、絶対に守った事に後悔はない。それだけは言える」

「ダメ……そんな事言われたら私……」

身を引こうとしたソラの手を久重が握る。

「頼っていい。オレは、オレ達はもう家族みたいなもんだらう？」

「か……ぞく？」

「一緒に飯を食って、一緒に笑い合って、何かもう何年も一緒に暮らしてるような気がしてるからな。迷惑か？」

手だけが握り返される。

その握り返された手に宿る力の強さが久重には嬉しかった。

「話してる間に到着っつと」

ソラが顔を上げるともうアパートの前まで来ていた。

二人が二階の階段を上がる。

「……?!」

暗闇の中進んだ二人が通路の先に人影を見つけた。

そのタイミングに恣意的なものを感じた二人が警戒心から止まった。カツカツと硬い靴底の音。

歩いてくる姿がやがて常夜灯の僅かな光に照らし出される。

「！！？」

ソラが驚愕に体を強張らせた。

「へえ、今はその人が貴女の保護者？」

ツインテールの髪が揺れる。

映し出されたのは端正な少女の顔だった。

十三歳程の日本人と久重には見えた。

小豆色の外套を羽織り、ソラよりも幾分か背が低い。

その顔には僅かなソラへの嘲りが込められている。

「【連中】からの命令を覚えておくわ。ソラ・スクリプトウーラは現時点では要監視対象である。対象の能力査定が済むまで一切の戦闘行動を禁じる。以下の条件において対象への干渉を許可する。一つ対象への敵対行動を取らない事。二つ対象を無闇に挑発しない事。三つ【D1】の調査を行う事」

ソラの目の前まで歩いてきた小柄な少女がソラを睨み付ける。

「グランマを死なせた貴女が博士すら死なせて未だ笑っているなんて滑稽だわ」

ソラが後ろに下る。

「自分がどれだけ罪深いか自覚してないの？ それとも現実逃避？

どちらにしる貴女の友達は何も貴女を赦したりしないわよ。ソラッ！」

少女が吼え、ソラはその声に威圧されながらも踏み止まった。

後ろにいる久重の事を思い出していなければ、逃げ出していたかもしれない視線を前にソラが拳を握る。

「シャフ・・・まさか貴女がテラトーマ！？」

ソラの驚きようにシャフと呼ばれた少女が嗤う。

「そうよ？ どんなに近くで監視しようと絶対に貴女が手を出せない兵器。それがアタシ」

「今日のあの事務所での一件も？」

「挨拶代わりよ」

ソラが僅かに震えた。

その様子にシャフが得意げ顔で笑う。

「大丈夫。まだ、死人は出てないはずだから。せいぜい半年も入院したら日本じゃ治るようなのにしといたし」

「他の人を巻き込まないで！」

「それはここまで他人を巻き込んだ人間の言う事じゃないわ。【連中】がご執心な【D1】の機能を赤の他人に渡した時点でアタシと貴女の何が違うっていうの？」

唇を噛んだソラがジツと耐えるように俯く。

見かねた久重がソラの前に出た。

「ひさしげ?!」

「何アンタ? 聞いてないの? アタシに攻撃するって事は国を滅ぼすのを覚悟しろって話なのよ。ま、一番最初に死ぬのはアンタだけ」

バチンと世間に響く程の音量が鳴った。

一瞬、静寂がその場を支配する。

シャフが信じられないように放心して、無意識に自分の張られた頬を触り、久重を見上げた。

「それが人に傷つけられる痛みだ。お前が誰かに向ける力がもたらす痛みはこんなもんじゃない。覚えておけ」

「ひ、ひさしげ!?!」

慌てたようにシャフの頬を張った手をソラが掴んだ。

「な、ア、アタ、アタシにひ、平手!?!」

混乱したように瞳の焦点をブレさせて、シャフの目尻からジワリと涙が浮く。

「来い」

ドアの鍵を回して扉を開けた久重がソラに掴まれているのとは反対

「ひゃ、ひゃめ!？」

反射的に逃げ出そうとするシャフを捕まえ、久重が張った方の頬へ大きな絆創膏がベチリと貼り付けられる。

沁みる薬を擦り込まれ、シャフがビクンと全身を震えさせた後、グツタリと畳みにへたり込んだ。

「いいか。誰かを傷つける事に言い訳するな。お前がもしも人をオレ達への報復で殺すなら、それはオレ達のせいじゃない。ただ、お前自身の選択の結果だ。もしも、お前がオレ達の大切な人を殺したならオレはお前を憎む。この行動がお前を誰かの殺害に駆り立てるって言うなら此処でケリを付ける。もしもお前が此処で何らかの手を打っていたとしても無意味だ。オレにはオレの力で救える限界がある。だから、オレはそれが誰の命だとしても被害を最小限にして切り捨てる。理解したか？」

「………アンタ自分が何言ってるか」
顔を上げ、久重を睨み付けるシャフの顔にはもう嘲りも嗤いも無かった。

「解ってないと思ってるなら、それこそお前はオレの事を何も解ってない。オレがどうという人間でオレがどうという事を選択するのかお前に解るとは言わせない」

久重の問いにシャフが立ち上がる。

「アタシは『海を渡る風』（シャフ）。世界平和を憎む篡奪者。アタシに手を上げた事、後悔してからじゃ遅いわよ?」

「なら、此処で死んでも止めるまでだ」

譲らない男の前にシャフは思う。
何をしているのかと。

未だ自分は混乱していると。

ここで戦う事になれば激戦は必至。

【連中】によって消滅させられる事すらありえる。

しかし、それでも目の前の男から視線を外せない。

周囲に配置してあったNDの多くはソラによって破壊されていたが、

それでもいざとなれば、周囲数キロ圏内の民間人の殆どを人質に出来る状況下にあった。

シャフにとってそれは大きな力であり、即座に号令一つで都市一つを病に侵す事も出来た。

だが、シャフの前で男は宣言している。

最小限の犠牲なら、甘んじて飲もうと。

外に待機させているウィルスの殆どが致死率五パーセント程のもので、完全には都市部の人間を殺せない。

それどころか密室での戦闘ともなれば、至近にソラがいるだけでシャフの致死率は跳ね上がる。

所詮は間接的に人類を滅ぼせる程度の力。

条件さえ揃えば直接的に人類そのものを殲滅できる【D1】や【SE】の力はまともに戦えば負ける。

それに、そんな事をすれば、本気で男が攻めてくる。

今まで何とも思っていなかったはずの男の瞳に見えるものをシャフは知っている。

それは死を覚悟している者の目。

シャフが第三世界で見てきたテラトーマの犠牲者達の中には時折、そんな目をして反抗した者がいた。

直接戦闘を苦手とするシャフを追い詰めた者すらいた。

もしも、そんな目をしているNDの保有者と戦えば、結果は芳しくない。

更に言えば、今現在のテラトーマは日本内部への侵入に備えて弱体化されていた。

日本という完全に大陸から離れている場所で貴重なウィルスを散財したくない【連中】の思惑からシャフの持つ病原体の九割近く、テラトーマの八割が削られている。

そんな状態で戦ったところで身体を常時NDで守られている人間は殺せない。

奥の手と言えるものはあったが、それでも不安要素が多過ぎた。

ほんの少しだけ、シャフが頬を意識する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・馬鹿馬鹿しい」

シャフは全身から力を抜いた。

「止めるなら誰か殺したり、人質に取ったりするな」

「それも含めて止めるわよ。だから、いい加減アタシのNDを壊すの止めてくれない？ ソラ」

次々に身体を保護していたNDを破壊されるアラートを脳裏に聞きながらシャフがソラに視線を向ける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「テラトーマの制御NDまで破壊されたらどうなるか。解るでしょ？」

ソラが体から力を抜いた。

それと同時にシャフの脳裏のアラートも消えた。

「また来るから」

そう言い置いてシャフがその場から立ち去ろうとして、ガシッと頭を掴まれる。

「な！？ 何して！？」

声を荒げようとしたシャフに久重がビシッといつの間にか持っていた雑巾を突き出した。

「？」

怪訝そうな顔のシャフに久重が告げる。

「土足で人様の家上がったんだ。拭いてけ」

「はあ？！」

「嫌なら畳み代を置いていけ。ちなみにコレだけ」

指を二本立てる久重に啞然としたシャフがソラに顔を向ける。

ソラが何か居たたまれないようにポツリと呟く。

「ひさしげ。貧乏・・・・だから」

「び、貧乏だけど！ この頃ちよっと脱出気味じゃないのかとオ、オレは主張する！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

いきなり下らないコントを見せられたようにげんなりしたシャツが溜息を吐いたのは当然の成り行きだった。

その日、結局のところシャツは雑巾を持ち畳を拭く事になった。

畳みを綺麗にしるとガミガミ五月蠅い青年のリクエストに渋々応えている内に料理を振舞われるとは知る由も無く……。

妙に脱力させられてしまった結果にシャツは一体自分は何をしているのかと本気で首を傾げるしかなかった。

第十六話 齟齬

第十六話 齟齬

羽田了子にとって歩き続ける事はネタを拾い続ける事に等しい。

誰も知らない秘境だろうが銃弾飛び交う抗争のど真ん中だろうが何処までも歩き続けネタを拾い続けてきた事、了子にとって誇れる事と言ったらそれしかない。

「はあはあ・・・やつと、着いた・・・」

息を切らしながら了子が小さな街を見つめる。

山間にある人口数万の寂れた街。

都会からのアクセスは日にバスが二本と隣街から通っている私鉄が一本。

本来なら電車かバスで行けるはずの街に了子は取材の為、愛車で来ていた。

しかし、愛車が突然のエンスト。

更に業者を呼んだら「あゝこれは一度徹底的に直さないとダメですね。って言うかどんな乗り方したんです？」との褒め言葉。

街から幾分離れた場所を取材中だった了子は取材資金の節約の為にもと涙を飲んで歩く事にした。

それから一時間。

アップダウンの激しい一本道を歩き続けた末に良子はその街に辿り着いていた。

(これで少しはあの男の事も・・・)

下り坂を降りる了子は手帳の中央、外字久重の名を睨みつけながらパラパラと新しい手帳に書き込まれた情報を頭の中で整理した。

外字久重。

20xx年5月4日生まれ。

現在二十四歳。

來邦大学大学院一年生。

両親なし。

災害孤児。

アパート「栄和」在住。

出生地に関する情報皆無。

ネット上での検索ヒット皆無。

電子媒体上の情報ほぼ皆無。

大学の紙媒体の完全閲覧不可により基本地情報も皆無。

何らかの意図的な情報封鎖が行われている可能性大。

唯一の友人である永橋風御に情報提供を求めるものの話す事なんてもう無いと素気無く断られる。

ただ、唯一「あの街」に言ってみればいいとの証言を得る。

「遊ばれてる？」

整理したら何やら理不尽な答えが脳裏に浮かび上がり、ブルブルと了子は頭を振った。

（と、とりあえず収穫はあったんだから！？）

街の最南端に位置する小学校。

そこで了子は外字久重の情報を手に入れる事に成功していた。

（その当時の先生が一人だけ残ってて生徒を覚えてたなんて、まったく僥倖だったわ）

今年で定年を迎えるという女性教師はニコニコしながら了子に久重の事を語った。

曰く、外字久重は神童だった。

曰く、それを隠していた。

曰く、あの子ならきつとどんな職業にでも就けるだろう。

（相当に頭が良いってのは確定みただけど、どうしてそれを隠す必要があったのか？）

街に近づきながら良子が疑問を呈する。

（大学に当たって見たけど友人はいなかったし、成績も普通みたいだった。けれど、あの研究室の人間でもないのに招かれて研究に従

事してたつて事はそういう知識があつたつて事よね？ なら、並みの秀才なわけがない)

冶金学博士ステイブ・ライオネル・ジュニア。

外字久重が大学在学中に入り浸っていた研究室の長。

その功績は調べれば立派以外の言葉が出ない。

新合金の開発やその関連の加工技術特許の数は業界関係者の中でもダントツ。

現在は過去の観測情報を元に【黒い隕石】の組成を再構築する研究を行っている。

産業スパイが横行する昨今、そんな重要な研究をしている研究室に部外者である人間を招き入れるだけでも十分におかしい。

それが同じ分野や学部の生徒ならともかく、別の学部に通っている別分野の生徒であるなら尚更に。

外字久重はたぶん天才の域にいる。

大学卒業後も大学院に残り、校舎で度々目撃されている事からも、研究室へずっと通いつけていたに違いないと了子は推察した。

「まずは生家を調べないとね」

了子は田が広がる街の端で一端止まる。

「待つてなさい。外字久重」

意気揚々と新たなネタを求めて了子は歩き出した。

パーカー姿の少年メリッサにとって仕事＝退屈という図式は随分と前から出来た代物だった。

主に人殺しと雑用を押し付けられる立場の人間であるメリッサにとって上司の有能無能は己の置かれる環境を左右する重要なファクターとして見逃せないものとなっている。

同僚であり同時に自分の管理者でもあるターポリンという存在を上司にしてからというもの、メリッサの周辺環境は劇的に変わった。まずは仕事の質が上がった事を筆頭に多くの点でメリッサ自身に利するような特典が付くようになった。

例えば、一仕事を終えると定期的に自由時間が設けられるようになり、規則なども緩められた。

おかげでメリッサは日本で仕事をする度に幾分かの休日を得られるようになっていた。

別に趣味も無いメリッサにとって休日とは多くの場合、自分の次の仕事や自分の周辺に関する情報を集め、己を鍛える時間であり、自身の肉体や能力に対する見識を深める時間でもある。

【連中】から管理される立場にあるメリッサにとって科学技術全般の知識はそういった管理からの離脱や逸脱を行う為のカードの一つであり、決して学習や情報収集は疎かに出来ない。

そんな日々を送っていたメリッサに長期休暇という名のお使いが頼まれたのは監視任務の引継ぎ後だった。

「先輩も人使い荒いよなあ・・・」

情報隠蔽と経費節約の名目で殆どの乗り物や交通機関を使わず足だけで移動する事を余儀無くされているメリッサはトボトボと山道を歩く。

暮れ掛けた山間に差し込む夕焼けが妙に赤かった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

メリッサは幾つかのお使い内容の内を反芻する。

外字久重の身辺調査。

情報操作や隠蔽を常とするメリッサ達にとって外字久重という存在は久しぶりに現れた謎の人物だった。

表面上の軽い情報は幾らでも手に入ったが、特定の情報が如何にも何かありますよと言わんばかりに電子媒体上から削除されていた。

電子情報で解らない事など無いと言われている時代に地道に足で情報を稼ぐしかないという馬鹿げた状況は殆どメリッサ達にとって悲劇だった。

無駄な行動は情報として残る。

それを承知で情報を足で追う。

現代ではありえないようなアナログ極まる方法で正体を探る。

その煩雑さに探偵でもあるまいし、とメリッサは内心で愚痴った。日本という国の地形は森林が多く起伏が激しい。

更に言えば、道路には多くの場合カメラが設置されていたりする。無用な情報を残さない為だと山道をわざわざルート指定する辺り、本当に極秘なお使いなのだろうとメリッサは感じていた。

「アーテンションが……」

歩く内に落ち込む気持ちにメリッサは頭の中を空っぽにする。

何とか山道を抜け、山にありがちな畑と私道を抜け、誰も通らないような獣道を抜け、ようやく目的の街に付いた時、メリッサは空っぽの頭を殴られたような気分で見上げた。

「……先輩。まさか、何か知ってたんですか？」

今までメリッサが歩いている最中にまったく気付かなかった空の異常。

小さな山間の街。

その上空に巨大な黒い岩塊が制止していた。

それが何であるか知識上は常識として知っているメリッサだったが、そんなものが日本の田舎街の上に鎮座している等という情報はどんなに事前情報を漁っても出てこない。

【黒い隕石】（ブラックメテオ）

人類を滅ぼしかけた原因。

何故か、そんな馬鹿げた映画にしか出てこない滅亡が街の上で鎮座している。

背筋に伝う冷たい何かを押さえ込み、メリッサはもう傍にいない少女の名をポツリと呟いて己を奮い立たせる。

（【連中】はこの事を知ったのか？ いや、それなら僕がここまで辿り着くなんて在り得ない。くそ……情報が足りない）

自分や自分を操っている【連中】こそ世界を裏から動かしている陰謀論者達の敵だと思っていたメリッサにとって、その光景は自分達すら誰かの掌上に踊らされているのだろうかという疑問を抱かせた。言い知れぬ不安を抱えながら、メリッサは拳を握り、その異常な街

へと降りよつと震えそうな足を踏み出した。

外字家の朝は早い。

否、早くならざるを得ない状況となっていると言つべきかもしれない。

十畳一間の主である外字久重の朝はまず超人的な勘によつて何かされるより先に起きる事から始まる。

近頃、朝からやってくるセレブ女子高生と同居中の謎美少女が微妙な視線を交わしあいながら、微笑み会つていたりするので油断できない。

油断すると部屋の空気がいつの間にか戦場のような雰囲気ガラリと変わつていたりするのだからしょうがない。

朝から食事を作りたがる同居人が女子高生にニコニコしながら教えを受け、ふふふふと笑い合いながら朝食を分業で作っている姿は竜虎を想起させて見ていられない。

胃への負担からか。

連日の背筋に冷や汗を禁じえない光景を見ていたからか。

そういう朝はそくさその場を後にしてトイレで着替え、サクツと軽いノリで朝の挨拶をするのが吉であると久重のブレインは冷静な判断を下せるようになった。

「ひさしげ様。どうぞ」

ご飯のお代わりをニコニコしながら盛ってくるのは亜麻色の『縦口ール』（チヨココロネ）を持つセレブ女子高生、朱憐だった。

久重は無言で頷いて盛られた白米を口に運ぶ。

「はい。ひさしげ」

鮭の切り身を口に運ぼうとして視線を彷徨させた久重に金色の少女ソラがニコニコしながら醤油を差し出した。

やはり久重は無言で頷いて醤油を受け取る。

「ソラさん。その切り身にはもう塩が掛かっていますわ。ひさしげ様のお体を考えたらお醤油は要りません」

キツパリと言い切って醤油瓶を遠ざけようと久重の手からひよいと取り上げた朱憐の手をガシリとソラの手が掴む。

「ひさしげはちよつとしょっぱいのが好きだから別にいいと思う」「ニコニコしながらソラが反論するとギシリと醤油瓶が軋む音がした。「ソラさん。日本にはこんな諺がありますわ。過ぎたるは及ばざるが如し。調度いい塩加減こそが人間にも求められているのです。ひさしげ様も自重くださいませ」

ニコニコと瓶を手放す事もなく朱憐の指に血管が浮く。

「ひさしげ。必要ないわ。人間は好きなものを食べるのが一番健康だもの」

「同じものを食べ続けるのは偏食ですわ。ソラさん」

ミシ、ミシッ、と少しずつ何やら不吉な音がし始める瓶に久重が口を挟むのも恐ろしく視線を逸らした。

「ひさしげ様？」

「ひさしげ？」

二人が同時に久重に意見を求めようとした時だった。

玄関がバタンと開いた。

ビクリと驚いた二人の手から何故か醤油瓶が飛んだ。

どれだけ力を入れていたのか。

瓶は弧を描いて玄関の開け放たれたど真ん中にストライク。

ガツンという非常に硬い音がして、瓶が地面に落ちて割れる。

飛び散った醤油に下半身を汚されて、ドアを開けた主の頭からブチリと何かが切れる音がした。

久重の目に飛び込んできたのは・・・人形のように無表情な戦略兵器搭載型少女シャフが底冷えするような笑みを浮かべるといっしーンだった。

十分後。

必至なソラと久重が謝り倒し事なきを得た一室で三人の少女が微妙な間を持って対峙していた。

「それで、その・・・こちらの方はソラさんのお友達ですか？」

「う、うん。そうなの。ね？ シャフ」

慌てたソラが言い訳気味に笑って肘でシャフを急かした。

「……ええ」

微妙な間を置いてシャフが答え、非難の視線をソラに向ける。

「それでその……シャフさん、でいいですか？」

「ええ」

「シャフさんとひさしげ様はどういうご関係ですか？」

「関係……殺るか殺られるか？」

「や、犯るか犯られるか！？」

「な、何かシユレン絶対間違ってる気がする」

「そろそろ学校じゃないのか？」

「え？ あ、もうこんな時間！？」

慌てた朱憐は身支度を軽く整えてからシャフに笑いかけた。

「シャフさん。これからもソラさんと仲良くしてあげてください。」

今度来る時にはお菓子を用意しておきますわ」

ペコリと頭を下げてから朱憐が玄関を出る。

妙な沈黙がその場を支配し、いたたまれずに久重が台所に食器を持つていく。

「……外字久重。大学院生の傍ら借金返済の為にアズトゥーアズと呼ばれる日本屈指のフィクサーに仕える男。大まかな表側の情報はあるものの電子媒体上での個人情報皆無。現在調査中」

背後からの言葉に振り返った久重はシャフにジッと見つめられていた。

「よく調べたな」

「別に自分で調べたわけじゃないわよ。それに」

「それに？」

シャフが半眼になる。

「【連中】に調べられない人間なんて例外中の例外だわ。それこそ紙や電子媒体上でも情報が殆ど載ってないって事になる。買い物をするだけで殆どの人間は情報が追跡できて中身まで丸裸にできる時

代だつてのにアンタは買い物の中身から上辺の情報しか探れなかった。【連中】が推測出来たのはアンタがボットみたいに特定のパターンに沿った買い物しかしてないって事。それこそアンタは電子媒体上でプログラムでも走らせただけなんじゃないかってくらいパターンに入ってる」

「オレは真正正銘ただの人間だが？」

「でも、本当の買い物は電子情報が残らないようにされてる。この部屋の中に存在するもので見える限り十一個、電子情報上は買われた痕跡が無い」

「よく解るな」

感心する久重に呆れた様子でシャフが溜息を吐く。

「更に言えばアンタの身辺事情は複雑過ぎるわね。大物フィクサーに大財閥を牛耳る名家のご令嬢。ノーベル賞ものの冶金学博士に元【ADET】の関係者。極めつけにSFなナノマシンを持った美少女。ふざけてるわ」

「お前がソラをどう思つてのかは解つた」

「皮肉よ！？ 解るでしょ！？」

「ああ、はいはい。ツンデレ乙」

サラッと久重が適当に流す。

「何その態度！！ アタシにそんな態度でいいと思つてるわけッ？」

喚いたシャフに久重がやれやれと肩を竦めた。

「それで今日は朝から何しに来たんだけ？」

久重を睨み続けていたシャフだったが、不満げに息を吐いて、冷静さを取り戻す。

「アタシの任務はアンタ達の監視よ。アンタ達の情報を得て上に報告する義務があるわ。アタシが選ばれた理由はアンタ達が手を出せないから。つまり、アンタ達の傍で堂々と監視しないわけじゃない」

「……………」

久重とソラが同時に沈黙する。

「な、何よ……」

「暇、なのか？」

「何だよ!？」

真顔で聞いてくる久重にシャフがちゃぶ台をひっくり返しそうな勢いで立ち上がって拳を握る。

「いや、昨日ソラとお前の事を話してたらお前が目の前に現れる理由なんて殆ど無いって聞かされたからな」
ギロリとシャフがソラを振り向いて睨む。

ソラがそ知らぬ顔でそっぽを向いた。

「ソラの話だとそもそもお前があんな風に現れずに監視されても得られる情報は今と殆ど同じだろうって事だったんだが、違うのか？」
シャフの眼力に負けたようにソラが見つめ返した。

「久重と私を監視するのはたぶん【連中】がこちらの現在位置を常に把握する為。本当なら最初から手を出せない人間が監視を行うって何かの方法で警告してから監視を受け入れろって言うだけではない。遠くから監視されてた時に生活圏内の移動ルートはバレてる。ある程度の距離を保って見るだけで十分な任務のはずだから、わざわざ姿を現して警告する意味なんて無い」

「ふん。何て言うかと思えば。そんなのアンタを追い詰める為に決まってるじゃない。アンタは仲間を捨てて裏切ったのよ。一人で逃げて【連中】から自由になった……」

シャフの言葉にソラが瞳を伏せる。

「友達なら祝福したらどうだ？」

久重の言葉にシャフが怒鳴り返す。

「何がアンタに何が解るのよツツ!？」

久重がちゃぶ台の前に座った。

「オレに解るのは今のお前が嫉妬してるように見えるって事だけだ」
「嫉妬ですって? 笑わせてくれるわ。世界を滅ぼす力を持って、人間を止めて、仲間も捨てて逃げた先でいつ回収されるのかとビク

ビクしながら暮らしてる。「冗談じゃないわ」

目に見えてソラが俯いた。

「いい？ 貴女の運命はもう決まってるのよ？ これから【連中】に捕まっつてモルモットにされて体切り刻まれて実験動物にされて玩具にされて、ただの兵器として永遠に使い潰される。解ってるでしょ？ ソラ」

「……………」

ソラが言い返せずに俯いたまま瞳を閉じた。

それ見た事かとシャフが己の正しさに勝ち誇るが久重が笑いながらソラの頭を撫でる。

「させやしない」

「え……………」

ポンポンと軽くソラの頭が叩かれる。

大丈夫だと安心させるように。

「オレは君を守ると決めた。オレと君はもう家族だと思ってるって昨日言っつたる？ 家族を誰かに奪われるなんて、そんなのさせやしない。誰が何と言おうと、な？」

「ひさしげ……………」

シャフがその二人の間にあるものを感じ取って、今までの表情を一変させる。

僅かに拳を握り震わせながら、その光景にギリツと歯を軋ませた。

「どんなに言い繕おうと結局のところ結末は変わらない！」

シャフの言葉に久重はあくまで不敵だった。

「ああ、確かにその可能性は高いんだろう。でも、オレは諦めるつもりはない。そして、オレとソラが諦めていないなら可能性は低くとも盤上の形勢はひっくり返るかもしれない」

「何を相手にしてるのかも知らない癖にツ？」

「この世の中の殆どの人間は自分が何と戦ってるのかなんて知らない。それでも誰の手にも二つの選択肢が乗っかってる。諦めるか。諦めないかだ」

「綺麗事で誤魔化せるわけないでしょ!? 【連中】は確かに世界を動かす力を持つてる。滅びかけた多くの国々に浸透し、政治、宗教、経済、あらゆる分野に根を張ってる。それこそ、ソラの持つてるNDの為ならたかだか先進国一国ぐらい潰してもいいって考えてるわ。そうでなきゃアタシが此処にいるはずないんだから!」

「お前の言ってる通りなんだろう。でも、オレにはお前がそんなに悪い奴には見えないな」

「アタシがどれだけ殺したか知らないなら教えてあげる。二千万人よ。どんな独裁者だって敵わない数でしょ? その気になればアタシの親類縁者同僚職場赤の他人・・・誰も彼も皆殺せるわ」

「なら、オレはお前がその気にならないよう気を付ける事にしよう」

久重が冷静に返す。

「~~~~!! ああ、そうね!! そうするといいわ!!!」

完全に怒ったシャフが立ち上がる。

「おい。何処に行く?」

「気分が悪い・・・今日はこの辺で勘弁してあげる。せいぜいその時が来るのを怯えてるといいわ」

険しい顔で二人が引き止める間もなくシャフが玄関から出て行く。後姿を見送った久重が頭を掻いた。

「悪い。怒らせちまったな」

「いい。昔からシャフはちよつと頑固で意地っ張りだったから・・・」

「友達、だつたんだろ?」

「うん。教養分野で一緒だった」

「教養分野?」

「普通の人間の暮らしに溶け込んで任務を遂行できるようにって研究所には普通の人間の生活様式と礼儀作法なんかを学ぶ場所が設けられてたの。メリッサとシャフは私と同じ教養をそこで培った。だから、こうやって日本語が話せるし、日常生活でも溶け込める」

「どんな奴だつたんだ? その頃は」

「皆小さかったから・・・シャフは凄い能力を手に入れて、いつか【連中】を逆に自分に従わせてやるんだっていつつも言ってた。メリッサは博士のライブラリーから漫画を持ち出して自由に飛べる翼が欲しいって笑ってた」

黙って耳を傾ける久重はソラの優しい声が泣きそうだからなのだと気付いた。

ソラの唇からは止め処なく言葉が溢れる。

「私達に常識を教えてくれたのは英国人の年を取った女の人。皆はグランマって呼んでたわ。研究所で働く人の奥さんで英語と日本語はその人が教えてくれたの。とつても優しい人だった・・・」

ソラの瞳の奥で光が揺らめく。

「でも、二年前グランマは事故で死んだ・・・ううん。シャフが昨日言ってた通り私が殺したの。稼動データを集めてた最中に【D1】のプロトタイプが制御不能になって、暴走して研究所ごと消滅した・・・」

「消滅？」

「熱量の放出実験中に通常ではありえない熱量を放出して研究所そのものを融解させたの。その後【D1】の自動防衛プログラムが研究所を強制的に再構築して私とその周囲だけは守ってくれたけど、他の職員は全滅。グランマもその犠牲者の一人だった」

「それ確か？ あんなに刺々しいのは？」

「シャフはグランマの事が大好きだったから・・・」

ソラの罪悪感に押し潰されそうな様子からグランマという老婦をシヤフと同じように好きだったのだろうと久重には解った。

「私以外で助かった人も殆どは死に掛けてた。そして、黒い繭の中で地獄が始まった。それを後から映像で見たシャフは凄いショックだったと思う」

ソラがちやぶ台の上に手を翳す。

黒い粉が虚空からサラサラと流れ落ち、ちやぶ台の中心で薄く円を形成する。

何をしようとしているのか久重が察した。

「ソラ。見せてくれるのか？」

ソラが目を閉じる。

すると薄く輝きを帯びるNDの群体が映像を浮かび上がらせた

「これが・・・」

それは白と黒に分かれた世界だった。

黒い世界側から覗いた白い世界では部屋が扉がグズグズに蕩けていく。

その中で多くの人型の何かが一瞬で融け消えていく。

そして、全てが融けてしまった白い世界を押し込めるように黒い世界が全てを侵蝕し封じ込めた。

光も差さない黒の世界での視点は一貫している。

ゆっくりと視点が移動し、本来は廊下だったのだろう黒い穴の中を覗いた。

「
久重が絶句した。」

その穴の中で黒く蠢く人型の何かがいた。

それは全てを覆う黒いものと同じもので出来ている。

蠢いた黒い人型はよく見れば、様々な部分が欠けている。

あるモノは手も足も無く。

あるモノは体だけが無く。

あるモノは頭だけが無く。

「人間の機能を向上代替する機能が備わっているオリジナルロットに侵蝕されて、研究所の再構築と同時に再構成されたのが・・・その【人達】」

あるモノは欠けた部分が多過ぎて黒く蠢く水溜りのようになっていく。

「再構築に中身が足りなかったから、NDは人間を人間以外のモノで補完したの」

全てが蠢いて一斉に視点の方に視線を向けた。

その人型らしき蠢く黒い何かの瞳はすでに人間のものではなく赤い色をしていた。

「勿論、足りないものを他のもので補ったからって、そもそも同じになるはずない。それ以前に人間の体を人間に使われていないもので再構成したら、どうなるかなんて解り切ってた」

黒い人型のモノがザワザワと蠢いて、一斉に視点に襲い掛かってくる。

しかし。

ザクンと黒い壁の一角から伸びた鋭いものが人型を貫通した。

「NDはより良い材料を探した。その結果が」

人型達がざわめき、不意に黒い人型の一体が他の人型に襲い掛かった。

瞬間、人型の首から上が頭部とはまったく別の機関に変わる。

即ち、顎^{あぎと}。

「それなの」

ただ、それだけとなったソレが他の黒い人型を捕食した。

「NDは『無い部分』を合理的な結論として最良のもので補う事にした」

「私はNDの最優先保護対象だったから助かった。けど、他の優先順位同列で個人に貸し出されている状態のNDは他のND個体群と競争を起こした」

人型が喰い合いを始める。

その時点で映像が途切れた。

ソラの肩が僅かに震えていた。

「結局、あの事故で生き残ったのは二人だけ。私とターポリンだけだった」

「あいつか？」

「最後まで頭部を失わずに黒い人型の中で生き残ったのがターポリン・・・博士の助手だったの。【連中】は生体融合実験の貴重な被検体としてターポリンを使った。人間に戻す事には成功したけ

ど融合実験は失敗してNDで固定化して実験は終了。それでも寿命は五年以下って言われてターポーリンは殆ど死を待つだけになった」
己が一度は倒した男の過去に久重は苦い顔をする。

「シャフはそんなターポーリンの実験を誰に何を言われてもずっと見学してた。そしてグランマが死んだ時の事を知りたがって今の映像をライブ러리から盗み見て・・・」

久重は何も言えなかった。

「恨まれたって当然なの。家族みたいだった研究所の人をあんな姿にして殺したんだから・・・」

「暴走したのはソラのせいなのか？」

「解らない。でも、私が【D1】を制御できていれば、あんな事にはならなかったかもしれない。それが解ってたから事件の後、最後に会った日もシャフはあんな感じだった。それでも・・・まだ・・・その時は・・・仲間だって・・・言ってくれてた・・・」
涙声のソラがグツと堪え切って話を続ける。

「それから、ターポーリンの生体融合実験のデータを使う事で【D1】は完成した。ターポーリンにしてみれば、私は自分の犠牲の上に成り立ってる存在。許せなくて当たり前だと思う。オリジナル口ツトの開発が終了した事で博士は【SE】シフト・エンジンの研究も飛躍的に進歩させた。一年前に【SE】は完成。博士は私に【D1】を持たせて逃がした。ターポーリンはたぶんそんな博士が許せなかった。自分の敬愛する科学者でありながら、自分の実験データで研究を完成させ、あまつさえ私に成果を渡して逃がそうとした事が。だから、私を逃がした日に博士を裏切って・・・」

その時の情景が甦ったのかソラが唇を噛んだ。

怯えるように久重を見上げる。

「ひさしげ・・・」

もしも軽蔑されてしまったら。

そんな不安に少女の瞳は翳っていた。

「話してくれて嬉しく思う」

「ホント・・・？」

「ああ」

ソラの表情が僅かに和らぐ。

「悪いな。辛い事思い出させて」

「でも・・・私は確かに裏切り者で・・・皆を死なせて・・・沢山の人に迷惑を掛けて・・・それなのにこんな風にひさしげに支えられてる・・・本当はそんな資格無いのに・・・」

「オレにだって誰かに助けられる資格なんて無い」

久重の言葉にソラが首を横に振る。

「ひさしげは凄く沢山の人に必要とされてるわ。本当は私なんかより朱憐の相手をしなきゃいけないし、アズを手伝って借金を減らなくちゃいけない。本当なら大学院にも通って研究を手伝って、友達ともっと遊んだりしてるはずだもの。みんなひさしげなら助けてくれるわ」

「いや、そうか？」

自分の事では必死に堪えようとしていたソラの涙が、

「ひさしげに私・・・迷惑しか掛けてない・・・」

一筋畳に落ちた。

「ああ、その、何だ・・・」

久重が何と言って慰めたらいいのかと迷ったあげく、ソラの額にペチンと軽くデコピンを喰らわせる。

「ひ、ひさしげ?!」

「オレはな。今までの生活が結構幸せだった。オレの傍にいる連中は確かに気の良い奴ばかりだ。どんな鼻屑目に見ても恵まれてるのは間違いない。けど、思うんだ。オレは今、昔よりも幸せになっただんじやないかってな」

「　　幸せ？」

思ってもいなかった言葉を受けてソラが驚く。

「君が来てからオレは初めて朱憐があんな風に表情が豊かなんだと気付いた。今まで一緒にいたはずなのに、オレはあいつがあんな風

に怒ったり嫉妬したり笑ったりする普通の女の子なんだって事を知らなかった」

「そんな・・・」

「それにアズだってオレの事をあんな風に思ってくれてると解らなかつた。オレの事はまあ冗談の類だと思つてたし、もしも本当に危なくなつたら切り捨てられる側だと思つてたからな。あそこまでソラを脅すなんて思つても無かつた」

「それは・・・」

「他にもあの大学のライオン親父だつて、あんな条件を付けてくれる程にオレを必要としてくれてた。オレが気付かなかつたものを・・・君は気付かせてくれたんだ」

「私がいなくても」

久重はソラに最後まで言わせない。

「オレは今まで生きてきて色んな奴に支えられてた事を忘れてた気がする。感謝するどころか何もオレには救えないんだと自分勝手に絶望ばかりしてきた。傍で支えてくれてる連中が大勢いたのに目を向けてこなかつた」

「ひさしげ・・・」

「近頃のオレは銃で撃たれて片腕を飛ばされて肋骨を幾つも折つた。でも、辛かつた事より楽しかつた事しか思い浮かばない。それはソラがいたからだ。だから、もう一度言つておく」

久重がとつておきの秘密を告げるように囁いた。

「君のおかげで、オレは今幸せなんだ。ソラ」

ソラは視界が完全に歪んでしまった事を惜しく思う。

その人の笑みをちゃんと見つめたかつた。

身を寄せて、その人の胸に顔を埋める。

「私も、私も今・・・幸せだよ。ひさしげ」

未だ現実は厳しい。

少女を守る為の戦いは激しさを増すだろう。

それでも目の前の少女を守れなければ、この世の何もかもが嘘だと

外字久重は思う。

こんなに純真で己を責めてしまう少女が幸せになれないならば、こんな世界に価値など無いと思う。

「ソラ・・・言いにくいんだが・・・ちょっと、この体勢は改めた方がいい。怖いお姉さんが見てるぞ」

「え？」

思わず振り返ったソラの目には未だ歪んでこそいたが、ハッキリと胸元の開いた黒いスーツが玄関に見えた。

「久重・・・朝から昼ドラとは良いご身分だね？」

「休みじゃなかったのか？」

「緊急の要件が出来てね。本当は休みにしてあげたかったんだけど、僕も商売だから」

「昼ドラが終わってからでいいか？」

「随分と余裕みたいだから借金の利子を上げておこうかな」

「それは勘弁してくれ」

「・・・ふ・・・ふふ・・・あはは・・・」

二人のいつものやり取りにソラが思わず噴出した。

「笑われてるよ。久重？」

「いや、お前が、だろ？」

部屋に流れる温かい空気にソラは内心で誓う。

こんな日常を続けて生きていきたいと。

こんな日々を守らなければならないと。

心の中で何度も、何度も・・・。。。

そして、そんな幸せそうな声に小豆色の外套を羽織った少女は近くの公園のベンチで絶望していた。

【どうして、何で！？ 何なのよ！！ どうして貴女だけ、そんな・

・・・そんな風に笑えて・・・アタシは貴女と同列の力を手に入れたのに・・・何で！！・・・こんなの・・・こんなのありえないわッッ？！】

孤独な少女の呟きは深く深く己の内へと沈んでいく。

自分と同じ位置にいたはずの少女が笑っている。

本当に幸せそうな声で笑っている。

そう思うだけで少女の脳裏は悲鳴を上げる。

大勢の人間を殺し、自分や仲間達を裏切り逃げ出した少女、自分と同じ虐殺者の少女がそんな声で笑う事など許せなかった。

【やだ・・・やだ・・・やだ・・・やだよ・・・こんなの・・・許せない・・・許せない・・・許せない・・・】

虐殺兵器となつた自分と世界を滅ぼせるだろう少女。

どっちもどっちだと嗤ってやれるはずだったのに、現実は違った。

自分と同じだけ汚れているはずの少女は自分と違って未だ笑えた。

一体何を間違つたらそうなるのか。

【最初は全部同じだったはずじゃない！！】

同じ罪を、自分と同じように汚れた少女を、最初は期待していた。

きつと、どんなに言い繕っても内心は自分と同じように穢れているはずだった。

そんな少女を楽々連れ戻して【連中】を見返してやれるはずだった。こんな殺すしかできない力を捨てて、あの神の如き力を手に入れられるはずだった。

なのに、少女と少女の間には大きな差が溝が明暗が分かっている。

ただの笑い声でそれが解ってしまう。

【どうして！！ どうしてよ？！ グランマを研究所のみんなを博士すら貴女は殺したのよ！！ それなのに！！ 何でそんな貴女の方がアタシより、アタシより幸せそうなのよ？！】

しかし、幾ら内心で叫ぼうと自分とは似ても似つかない笑い声をNDは拾い続ける。

やがて、少女は呟いた。

「奪ってやる……」

少女は己の名を呟き立ち上がる。

「アタシは世界平和を憎む篡奪者なんだから……」

幽鬼の如くシャフの姿は数分後にはその場から消え失せていた。

第十七話 W W W (前書き)

次回からタイトル通りのGAMEが始まります。
難しい筋で申し訳ない気分ですが気長にお付き合いください。幸いです。

第十七話 W W W

第十七話

ワールド・ウオーター・ウオー
W W W

眼窩に花を持つ猫が寂しげな様子で森の中に横たわっていた。

朽ち果てた動物達の亡骸を寄り代に根を下ろす小さな花々は禍々しいというより、何処か散った命を祝福しているようにも見える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そこは小さな森だった。

その中で生きる小さな住人達を観客に白いスーツを着た印象の薄い青年が一人片膝を折り頭を垂れていた。

「ターポーリン。君は今まで己を捧げてきた者の中で最も僕らに貢献しているね」

老成した雰囲気を持ちながらもそれは少年の声音をしていた。

「いえいえ」

謙遜しながら首を横に振るターポーリンに対して声が続ける。

「【D1】への警鐘を鳴らし、管理と廃棄を真剣に考える君の目的が本当にただそれだけなのかは疑わしいけれど、君が今まで行ってきた数々の工作は我々にとって有意義なものだったよ」

「そう言って頂けるならば重畳です」
僅かな沈黙。

その沈黙に込められたものを感じ取り、ターポーリンは内心の苦笑を悟られぬよう表情を一切崩さなかった。

「あの女は君に部隊の使用権限を与えた。あの男は資源を惜しげもなく次ぎ込んだ意欲作をくれてやった。僕も君に何かをやるべきかな？」

「そんな滅相もありません。ただ、テラトーマの管理権を譲ってくだされば幸いです」

しれっと冗談交じりに要求するターポーリンに何処か困ったような

溜息が吐かれる。

「僕らは一人に付き一人分の被検体を己の分野で改造する事で合意していたんだ。知ってるかい？」

「存じています」

「他がどういふ風に被検体を使っているのかは知っているよ。でも、僕は違う」

「そうなのですか？」

「あの子は僕にとって最高の素材だった」

声が無気味に寂しげに呟いた。

「だからこそ、僕は彼女をデチューンなんてしていない」

僅かも崩れない鉄面皮の笑顔でターポリンがその不穏な言葉を訊き返す。

「はい？ それはどういふ事でしょう」

「単純な話。彼女から病原の殆どを取り去ったのは強化の為だった事だよ」

「強化……」

「あの子が死人みたいな肌が嫌いだったって不満そうだったから」

ターポリンは脳裏でTRS技術の情報を反芻した。

「TRSの逆利用だと人体機能の殆どを停止させNDで維持しなければならぬから、ですか？」

「そう。だから、彼女が普通の人間並みに体を扱えるようにして、病原は数じゃなくて質でカバーする事にしたんだ」

「……」

「今、彼女が積んでいる病原体の保有数は実際のところ七つ【も】ある。どれも僕の最高傑作だ。そして、切り札も与えておいた。更には飴もね」

「随分と可愛がっているんですね。被検体に飴とは」

「あの子が【D1】をこちらに引き戻した際には【D1】そのものを与える約束をしてるぐらいだから」

「冗談にしても笑えませんが」

「冗談にするつもりはないよ。適性試験でAだったしね。SとAの違いなんて研究に何の支障もないよ」

「強引に事を運べばテラトーマを失い、日本が滅びるかもしれない」

「それは全て彼女次第。今の彼女なら単純に虐殺するだけだった過去よりも複雑な働きが出来るはずだよ」

ターポーリンは相手は何を言いたいのか正確に理解した。

つまり、今までの会話は覚悟しておけという警告なのだろうと。

自分以外が【作品】に手を出した場合、思わぬところで躓くかもしれないと釘を刺された格好だった。

「ふふ、意地悪もこれくらいしておこうか。君にテラトーマの管理権限を移譲しよう」

「ありがとうございます」

頭を下げたターポーリンが立ち上がり、その場に背を向けた。

「それでは。私はこれで」

森を抜けようとその場からターポーリンが歩き出す。

「ターポーリン」

「はい。何でしょうか？」

声があかを迷ってから言葉を口にした。

「博士はもういない」

「理解しています」

「他の【連中】には君を止められないだろうね」

ターポーリンの足元に小さな子犬が森の何処かからやってくる。

チヨコチヨコと歩いてきた子犬の口には小さな試験管が咥えられていた。

それを受け取ったターポーリンがしげしげと日差しに試験管を翳す。中には銀色の粒子が舞う琥珀色の液体が満たされている。

「だから、これは君への退職金代わりだ。もしも老後を静かに暮らしたいなら、その時は飲むといい」

「……………受け取っておきましょう」

ターポリンが一度振り返ってお辞儀をすると森の中から出て行く。

「可能性があるだけいいと思うのは僕の自己満足なのかな」

しばらく、子犬は円らな瞳で去っていく背中を見つめていた。

「これじゃ悪魔が笑ってるのも無理ない話、か」

声はそれを機に途切れた。

銃弾が終わりを運び。

世界は崩壊した。

その世界には幾つもの選択肢があった。

しかし、誰もが滅びゆく選択をしてしまった。

『これで終わりだ』

敵の声。

敵は強く、彼らは弱かった。

何億回繰り返し返した所で決して自分では歯が立たないのだと彼は悲しげにその光景を見つめる。

「結局は何処で間違ったのかも解らない。まったく因果な事だ」

ブラックアウトしていく視界の端に今も助けを求めている少女を見つけて、彼は目を閉じた。

「これが、死か」

彼は絶望に身を浸しながら、その時を待ちつづけた。

「田木さん」

パチンと部屋の明かりが点けられ、呆れた溜息が彼の頭の上に降り注ぐ。

「いい加減に寝てください」

振り返った彼、たき・そつかん『田木宗観』三十九歳を呆れ半分で見っていたのは初老のシスター、ふじなき・みさと『藤啼三郷』だった。

「これはすみません。いや、また何処で間違ったのかヒロインを救えずに……」

「……田木さん。ゲームは一日一時間ですよ」

田木は四十近い年齢の己が初老の藤啼に叱られる様子が何となく子

供の頃と被り、懐かしい気分です。

「よく母にも言われてました」

「田木さんは元自衛隊員という話でしたから体育系かと思っ
ていました。他に趣味は無いんですか？」

「お恥ずかしい話ですが、コレといったものがなくて。カ
ードにゲームにライトノベルに漫画に音楽。こういうのばかり好き
なんです。よねえ……」

「いつまでも子供心を忘れないのは結構ですが、トランクル
ームの電源は有限というのを覚えておいてください。昼間の太陽
と電源からの充電だけで成り立っているんで容量が少ないんです。
夜間の消費電力の殆どは警備システムに回っていて独立性の高い
反面、無駄遣いされると一部センサー強度が落ちる可能性が
あります」

「すみません。藤啼さん」

素直に田木が頭を下げてテレビとゲーム機の電源を落とした。

「よろしい。では、また明日。おやすみなさい」

「はい」

廊下を帰っていく藤啼の足音が去った後、田木が四畳一間に
設置された狭い寝台に横となる。

そして、何処から取り出したのか。

ポチリと携帯ゲーム機の電源を入れた。

「ふむ。やはりゲームはいい。これこそ人類が生み出した
文化の極み」

イソイソとセーブデータをロードしようとした田木だったが、
不意にゲーム機の画面が明滅した。

「……」

一通のメールだった。

メールに一通り目を通した後、田木がゲーム機の電源を落
とす。

(どうやら徹夜しなければならぬようだ)

その数分後、一室から田木の姿は消えていた。

次の朝、藤啼が見つけたのは田木からの「心配しなくて
ください。」

少し日本を救いに行つてきます』という置手紙だけだった。藤啼の深い溜息が朝の教会の空気に溶けて消えたのは言うまでもなかった。

呼び出しを受けた田木が向かったのは深夜の国道沿いだった。

一台のクーペが道路脇に止まっているのを発見し、田木が躊躇なく後部座席に乗り込む。

クーペが発進した。

かなりのスピードで国道からバイパス、高速道路と道を次々に変えていく車中、田木は懐かしい気持ちで後部座席に座っていた少女に挨拶する。

「お久しぶりだ。お嬢さん」

「おじさん」

ソラが僅かに微笑んだ。

「また、あんたに会う事になるとはな」

「青年も一緒か」

田木が助手席の久重を見て拳を突き出した。

それに久重も拳を突き合わせる。

「男同士感動の再会もいいけど。今日は用があつて呼んだからちょっと借りるよ」

大型トラックしか見えない夜の高速を限界まで飛ばしながら危うげない運転をするアズがバックミラーで田木と視線を合わせた。

「・・・貴女にも感謝しなければならないな」

「料金分は働いてるもので」

アズが唇の端を歪める。

「それで。何が【日本が危ない件】なのか聞いてもいいかな？」

アズがミラー越しに頷いた。

「G I Oに動きがあつて」

「居場所がバレたわけじゃないようだが？」

「今現在、僕は政府筋の依頼で動いていて、その件で貴方に色々と

確認したい。もしも貴方が今回の件で協力してくれるなら料金分働いたと見なしてもいい」

「・・・話を聞こう。それで政府筋の依頼とは？」

「貴方の件と幾つかの点で重なってる事案が浮上して僕に御呼びが掛かった。これを」

アズが片手でサイドボックスから資料を出して後ろ手に放った。

田木が資料を暗い車内で見ようとして、背後のトラックからのライトに一瞬資料の表紙が照らし出される。

「」

田木は資料の内容をその文字からすぐに推し量り、自分が呼ばれた訳を知った。

資料の表紙には部外秘とWWWの文字があった。

「三日前。大陸東部旧モンゴル自治区でロシアの四個大隊と中国の軍閥連合一個師団が衝突した」

「マジか？」

アズの言葉の危うさに久重が思わず訊き返していた。

「理由は色々あったらしいけれど、一番大きいのは砂漠化らしいね」

「予てから懸案だった高速での砂漠化進行か？」

田木の静かな声にアズが頷く。

「その通り。NEW United Nations Convention to Combat Desertification。新砂漠化対処条約は主にアフリカが主役だったから、放って置かれた方は結局我慢出来なかった」

「？」

話の筋が解らずソラが首を傾げた。

「お嬢さんにも解りやすく説明すると。問題は水資源の枯渇だ」

「・・・あ・・・えっと、それって・・・」

ソラが田木の持っている資料のWWWの文字に見入りおずおずと答える。

「水、戦争？」

答えたソラにアズが頷いた。

ワールド・ウォーター・ウォー

「正解。WWW・・・世界水大戦の資料だ」

「現実になつたのか。その話・・・」

久重が聞き齧つた事のある水戦争に付いての知識を幾らか脳裏から掘り起こしながら訊く。

「あの【黒い隕石】騒動後は特に中国で水資源の枯渇が酷くなった。理由は単純。無秩序な人口増加と国家不在で対等した軍閥の水源地確保による大規模開発が乱発した結果さ」

ソラがよく噛み砕いてからゆっくりと問い直す。

「それってつまり人が増え過ぎて水を沢山使うようになったからって事？」

「中国はあの混乱でほぼ瓦解したからね。複数の軍閥がそれぞれに水資源を奪い合つて開発した結果は水質汚染土壌汚染として現れた。温暖化も後押しした結果、中国東部は水資源の枯渇に喘ぐ事になつた。つてわけさ。開発を抑制すれば後十年は持つって計算だつたんだね。軍閥にそれを守るだけの理由は無かった。砂漠化との相乗効果でそろそろ干上がる頃だとは思っていたけれど、侵攻が此処まで急になつたのには理由がある」

「理由？」

「今現在でも旧中国領内沿岸部は辛うじて水質汚染限界を超えてない。他国からの輸入で飲料水だけは確保してる有様だけだね。それが一気にまずい方向に転がった。理由は二つ」
アズがバツクミラー越しに田木を見る。

「伝染病の隔離を名目にした海上封鎖と軍閥間バランスの変更か」

随分とG I Oは日本が欲しいと見える。貴女の考えている通りだ」
田木が資料を暗闇で読みながら溜息を吐いた。

苦い顔をしたまま資料をそつと横に置く。

「第三世界での疫病の蔓延をWHOはずっと監視していたはずだ。

伝染病が東に伝播し始めたのを理由にG I OがWHOを抱き込んだ。そついうことだろう？」

「ご明察。世界貿易はGPS機能無くして語れないわけだけど、GIOは世界規模で海路にジオプロフィットを設けてる。そのジオプロフィット航路に変更があった。理由は伝染病の伝播速度遅滞。WHOが推奨してるともなれば貿易船の殆どは利益優先安全優先で遠回りせざるを得ない。つまり、今まで一週間で届いたものが二週間掛かるようになる。中国各軍閥領内は限界ギリギリで保たれていた秩序を水が無いの一言で瓦解させられる」
田木が沈んだ様子で座席にもたれる。

「もしも未だ中国が一つの国家だったなら国家存亡の危機に一致団結、利益度外視、安全度度外視、さつさと水は運ばれて問題は無かったかもしれない。けれど、軍閥同士の駆け引きと争いで足を引っ張り合ってる連中は互いに事実上の海上封鎖を機と見なし、難しい舵取りを迫られた。受け入れるか。抗うか」

「抗わなかったのか？」

久重の言葉にアズが頷く。

「実際に今現在の環境で伝染病が入ってくれば、人口爆発に悩む各地域は壊滅的な疫病被害を受けるかもしれない。そうなれば他の軍閥の【大規模な領土拡大】も在り得る。そういう憶測が結果的にWHOとGIOの方策への支持に繋がった」

久重が難しげな顔でアズを見る。

「他の軍閥には弱みを見せたくない。かと言って水資源を確保しないと渴いて死ぬ。つまり、隣国を攻め落とし水資源を確保する以外の道が絶たれたわけか」

久重の言葉にアズが頷く。

「でも、未だに形を保ってるロシアに軍閥一つじゃ役不足だ。そして、各軍閥もそれは解ってた。だから、水が入ってこない状況を容認する代わりにGIOからの全面的な軍事支援を取り付けた。GIOにとってはどうぞどうぞって話だったはずさ。各軍閥は水資源の確保という大義名分で一応の結束を得たわけだ」

「武器の横流しはGIOの副業だったからな」

田木が殆どの状況を把握して呻くように言った。

「連中は旧モンゴル領からロシアへと進軍を開始。軍閥間のバランスはG I Oが音頭を取ると。そして、その結果として」
久重の言葉尻をソラが捕らえる。

「日本の戦争へのG I Oプロフィット導入が早まる・・・？」
ソラの真剣な視線にアズが頷いた。

「そうこれは日本のジオプロフィット導入を後押しする為の戦争なのさ。正に呼び水なわけだ」

アズの冗談に笑えず久重もソラも田木も黙り込んだ。

「そして、ここからが本題。官房長官は日本を売り渡す契約を全部無かった事にしたい。G I Oは日本の全てを手に入れたい。問題は一つだけ。官房長官とG I Oで作成した書類一式の在り処は何処か？」

「それって・・・」

ソラが田木を見る。

「青年に預けた鍵が刺さる場所の中だ」

「ひさしげ。持ってる？」

「あれか？ あんな危ない鍵はサクツとアズ行きだが？」

ソラの視線がアズに向く。

「無論、ちゃんと現物は預かってるよ」

「それじゃ安心」

「じゃないのが今回の話の味噌でね」

アズがチツチツチと人差し指を振る。

「基本的に契約書つてのは二つ用意されるものなのさ。そして、一つは持ち去られたけれど、もう一つはG I Oの手の中にある。僕の依頼主は少なくともG I O側のものが消えれば、今回の国土分割は無かった事として処分する方針だけど、もしも相手側から言われたらやらざるを得ないと言ってる。その為の根回しと準備は済んでいて、実際に契約書そのものが表沙汰になった時点でアウトだそうだよ」

「今回の依頼主つてのは官房長官か？」

アズが笑みで誤魔化した。

「さあ？ とりあえず言える事は中国軍閥とロシアの戦闘が表向きに報道されてからが勝負つて事かな。来週の審議にG I Oの社長が呼ばれてるのは知ってるかい？」

「そうなのか？」

「依頼人的には野党からのG I Oの違法献金問題追求なんて瑣末な事なのさ。外国人献金の禁止なんてもので罰されるより、あの総理みたく日本を売り払った売国奴として暗殺される方が怖いらしいよ」
「・・・つくづく政治に絶望させられる発言ありがとさん」
「最初から止めておけばいいものを・・・」

久重のぼやきと田木の呆れ顔にソラは日本は難しい国なのだろうと難しい顔をする以外なかった。

「それでさつきから気になってたんだが、一体オレ達は何処に向かっているんだ？」

「何処？ 今更だよ久重。今までの話の流れから行く場所なんて一つしかない」

「おいおい。おいおいおい！？ まさか？！」

久重がクーペの窓から見える景色の一部に気付いて顔を引き攣らせた。

超巨大ビル。

言葉にするならそんな粗末な単語になってしまう現代のバベル。

ゼネラル・インターナショナル・オルガン
G I O日本支社ビル。

666メートルと洒落た高さを持つ日本最高のビルが迫ってくる。

その迫力に久重が思わず片手で顔を覆った。

「敷地内に戦車あるんだぞ？！」

「何も戦車にガチでタイムン張って来いなんて言わないよ。何処かの泥棒三世みたいに華麗な盗みを披露しろともね。ただ、ちよつとGAMEをしてもらいたい」

「ゲーム？」

アズ以外の三人が内容を飲み込めていない内にクーペが敷地に侵入し地下駐車場へと入ってしまう。

すんなりと入れた事にわざわざ驚いたりはしないものの、久重は気が気ではなかった。

G I Oは日本でも屈指のセキュリティを誇る。

何かあった場合、拘束、拷問、処分のフルコースにもなりかねない。近頃は産業スパイをセキュリティの対人装備が焼き殺す事件すらあった。

それでもG I Oの日本での地位は小揺るぎもしない。

それがG I Oの実力到他ならなかった。

「ちなみに頑張れば契約書は返してくれるらしいから」

「・・・どんな取引しがやった？」

「まあ、単純に僕と戦争するか大人しく返すかの二択を迫ってみただけだよ」

「ああ。お前ってそういう奴だったな、そういえば。すっかりこの頃は忘れてたが」

サラリとトンでもない事を言うアズに久重が顔を引き攣らせた。

「僕も居心地の良い国が無くなると困るからね」

クーペの行く手に大型の車両エレベーターが姿を現す。

音もなくエレベーターのドアが開き、クーペを招き入れた。

「それに僕としては中国軍閥が本格的に戦闘状態に突入した場合に発生する危機は避けておきたい」

「珍しく愁傷な心がけだな」

「別に僕は虐殺を止めたいわけじゃない」

「何？」

「あんまり人が死ぬとヤバイものの管理が疎かになる可能性がある。それが僕にとっては問題だね」

「どういうことだ？ お前以上にヤバイものなんてあるのか？」

アズがニヤリとして久重に説明を続ける。

「【黒い隕石】騒動当時に中国もアメリカもロシアも保有核の半分

以上を宇宙に上げて、残ったものも太陽系絶対防衛線構想の爲つて名目で現在までに殆どが宇宙に上げられた。今現在、世界で保有されてる核弾頭の数はせいぜい十発程度。それぞれロシア、中国軍閥、アメリカが本国に保有してる」

「一体、その話がどんな風にお前の目的に繋がってる？」

「世界は核の脅威から遠ざかった。そう当時は持て囃されたんだ。その原因の一つが各国の原発を安全に停止させる国連採択の緊急勧告だった」

「確か燃料棒を原発から順次抜き取って嚴重に地下施設で保管するって話だったか？」

「その頃、各国は核によるテロや原発を狙ったテロに参ってた。地球全体でウランの採掘にも陰りが見え始めていたから、原発を一時封印し、使用済み燃料棒の再利用計画が技術的進展を見るまでは地下施設で保管する。これが国連での一致した見解だった。そして当時、日本の各都道府県は原発の停止に伴って出る使用済みの燃料棒を何処に貯蔵するかで揉めた。日本の原発数は世界でも有数。でもその原発から出た燃料棒を貯蔵する施設はすぐに満杯。さて、どうするのか？」

「ヤバイものつてのはまさか！？」

「中国国内でも核燃料棒保存の為にゴビ砂漠近郊に作られた地下施設があった。日本は他の国よりも余裕があったから中国に有償協力をしていた。その当時の政府は恩を売って利益を得たわけだ。長年の懸案が消えてくれて大助かり。国内での核テロを未然に防ぐ事にもなった」

「いや、待て。中国に燃料棒を預けるとか本気なのか？」

「普通感覚だと危ないのは理解できる。けど、それがもしも国連ぐるみで行われていたとしたら？」

「何？」

「中国と日本の交渉は最初とても合意されるとは思えない流れだったらしいよ。でも、世界各国で核テロの脅威が実しやかに囁かれて

た時期に日本と中国のこの交渉は国連内部で話題になった。中国は喉から手が出る程援助が欲しい状態。各国は混乱してて保安にまで手が回らない状態。両者の利害は一致した。結果は秘密裏に国連主導で世界各国から運び込まれた約二万本の燃料棒。それを守る為に配置された大量の作業員と監視システム。今現在も周辺地域は見張られてる」

「で、戦争になると作業員は引き上げて監視システムも崩壊すると久重が溜息を吐いて頭を抱える。

「そういう事。現在、あそこを管理している軍閥は正に金塊や核汚染兵器を持つてるのに等しい。燃料棒をロシア国内の反政府主流派に渡せば、穢い核で国土を蹂躪できるだろうし、他のテロリストや何処かの国に高額で売り付ける可能性もある。再び核の脅威が世界を覆えば、結果は火を見るより明らかだ。世界中でインテリが減った隕石事件以降、テロの脅威は増すばかり。それを阻止するはずの警察や諜報機関もガタガタだ。国連は正確な情報が無ければ事件をでっち上げたり、PKOの派遣をしたり出来ない。国連を現在主導してる日本の影響力がそれを許さない。日本の事実隠蔽体質と事なかれ主義は良くも悪くも世界の動きを鈍化牽制してるのさ」

アズ以外の三人は己の置かれている状況を理解して、何やらとんでもない事に巻き込まれてしまっていることを自覚した。

「それにしても今日だけでそれ調べたのか？」

久重に「何を今更な」という顔をしたアズがやれやれと肩をすくめる。

「依頼を受けて戦端が開かれたのを知ったのは今日だけど、最初から知ってた事を照らし合わせたら、こういう話になる。前々から危ないとマークしておいた案件でGEOが介入好き勝手やってるのが解ったから、こうやって急いでるわけだよ」

「それにしても teme と戦争するぐらいならこれだけ大きい規模の計画を諦めてもいいのかGEOは・・・」

「ま、多少のコネは使わせてもらったけれどね」

「呆ればいいのか。笑えばいいのか分からん」
ガコンと車両エレベーターが止まる。

「さて、そろそろ着いたかな」

「やけに長かったが地下か？」

「G I O が誇る地下施設にご案内つてところ」

アズがクープをエレベーターから移動させる。

久重達が見たのは広大な地下駐車場だった。

軽く百メートル四方はあるだろう場所の一角にクープが止まる。

「田木さん。どうしますか。此処で貴方が下りるといふなら、それでも構いませんが？」

日本のG I O 総本山のど真ん中で言うセリフではないだろうと思いつながらも、アズの理不尽さに久重は何も言わず行方を見守った。

「ここまで来たらN O とは言えないな」

「身の安全なら心配無用。G I O と幾らか取引しましたから官房長官と公安にさえ気を付ければ大丈夫かと」

「私は日本人・・・それが答えだ」

「解りました。貴方の勇気に敬意を表します」

僅かに頭を下げたアズが助手席の久重に微笑む。

「さ、行こうか。久重」

「つくづく悪魔だ。テメエは・・・」

呆れながらも久重は頷いた。

アズに先導される形で久重達が付いていく。

やがて、薄暗い駐車場の奥に見えたのは何の変哲も無いE X I T と

名の付いた扉だった。

扉の前には誰もいない。

それどころか何かの機器も無い。

あまりにも無防備な扉を前にアズが三人に振り返る。

「これから僕達はG A M E をする。此処にはそのエントリーをしに来たのであつて、戦いに来たわけじゃない。つまり、暴力はご法度。それとソラ嬢」

「？」

「NDの使用は極力控えた方がいい。目を点けられると後々面倒事が増えるからね」

コクリとソラが頷く。

「それと久重」

「何だ？」

「その子は君の何だい？」

「は？」

チヨイチヨイと人差し指で久重の背後をアズが指した。

振り返った久重に見えたのはソラの姿。

久重は何やら恥ずかしい事を聞かれているらしいと顔を僅かに赤くした。

「ソラはオレの・・・家族だ」

「ひさしげ・・・」

ソラが頬を緩ませ笑う。

「むう。もうそんな仲に・・・これが若さか」

田木が若い二人の間の空気を敏感に感じ取って何やら一人得心した様子で頷いた。

「いや、ソラ嬢じゃなくて後ろ後ろ」

アズの言葉に久重がソラの後ろに視線を向けて、見つけてしまった。「な!？」

凍り付く久重の様子にソラも後ろを振り返った。

「どうしたのひさしげ・・・え？」

ポカンとソラが呆けた顔で己の背後数メートル先にいる影に気付いた。

ポツンと薄暗い駐車場の明かりに照らし出されていたのは小豆色の外套を羽織った少女シャフだった。

「シャフ?!」

半歩後ろに下がり、NDの警戒レベルを引き上げたソラが後ろの三人を庇うようにして構えた。

「随分と腑抜けてるわよ。ソラ」

「どうやって此処まで付いてきたの!？」

「言わなかった？ アタシが今どういうNDを使ってるのか」

「シャフが片手を手を上向けるとその掌の中にゆっくりと黒いものが堆積し始める。」

「 そんな!？ まさか、オリジナルロット!？」

「ソラが信じられないように目を見張る。」

「【連中】はそれだけ本気って事よ」

「この間のNDはただの複製品だったはずなのに!？」

「わざわざ奥の手を初っ端から見せるわけないでしょ」

「でも、機能なんて使えるはずない!？」

「無論、機能の九割以上は停止してるわよ。けど、近頃の解析で一割近くの能力は開放された。オリジナルの一割も能力があればアタシの力を生かすには十分」

「何が、目的」

「ソラが慎重にシャフに問う。」

「目的？ アタシが貴女になんて言ったのか覚えてないわけ？」

「唇を噛んでソラはまずいと直感的に感じた。」

「話は聞かせてもらったわ。アタシもそのGAMEに混ぜてくれな
い?」

「ニヤニヤと笑みを浮かべるシャフがソラに近づいて耳元で囁く。」

「それとも同列のNDを使って此処で戦争してみる? 【SE】の
加護無き此処で」

「!？」

「固まったソラは何も言えなかった。」

「おい」

「不意に掛けられた声に不満そうな顔でシャフが視線を向ける。」

「何かしら?」

「久重は呆れた視線でシャフをソラから引き離す。」

「ソラを虐めるな」

「虐めるだなんて。ただ、アタシはお願いしてるだけ」

「この場での決定権はオレ達にある」

「決定権があるのはこっちでしょ」

「オレは別にお前がこの件に噛むのは構わない。だが、一々ソラに突っかかるな」

断られる事を前提で話を進めていたシャフが内心で警戒心を引き上げた。

目の前にいる男はやはり一筋縄ではいかないと再認識する。

笑みを消したシャフが久重を睨んだ。

「アタシの監視を受け入れてくれるってわけ？ わざとGAMEとやらに負けるかもしれないわよ？」

「オレにはお前がそういう奴には見えない」

「・・・何分けの解らない事を」

「オレの目にはお前がソラに対して突っかかるのは負けず嫌いだからだと映る。ソラが勝てるのにお前が勝てない状況をお前自身は許容できるのか？」

シャフの瞳に怒りが灯る。

「いい度胸してるわよアンタ。【連中】が本気になって命令が来たら一番に相手してあげるわ」

「光荣だな。その時は「ごめんなさい。もうしません」と言うまで尻を叩いてやる」

頭に一瞬青筋を浮かべたものの、シャフが息を吐いて心情を平静に保った。

「なら、決まりって事でいいわよね？」

シャフが作り笑顔で微笑む。

その微笑の裏にある悪意を隠しもしないシャフの姿に内心の溜息を飲み込んで、久重がアズに振り返った。

「と、いう事でいいか？」

「・・・久重。別に僕は世界を救えなんて言うつもりはないけど、失敗したら給料が無くなると雇い主として言うておくよ」

諦めの境地に達しているらしいアズが久重の肩にポンと手を置いた。その手の「解ってるよね？」的意味合いに恐怖して久重が頷く。

「わ、解ってる・・・」

「それとシャフ嬢、でいいかな？」

「構わないわよ」

アズが人差し指を立てる。

「一つだけ言っておきたい。僕はこのGAME中に死人は出さない事を君に希望する」

「どういう事？」

「君が何処まで僕達の事情を聞いたのかは知らないし、君がどれだけ力を持っているかも正確なところ僕には解らない。でも、GIOを怒らせればただじゃ済まないのは確かだ。GIOはあくまで企業しかし、君達が扱う技術と比べても遜色無いだけの技術を持つてる君一人で怒らせる分には構わないかもしれないが、君の後ろにいる人間達にすら迷惑が掛かる事は想像に難くない。だから、これは希望であると同時に忠告であり警告だ」

「一応、聞いておくわ」

「よろしい」

アズがあっさりとシャフの参加を受け入れ頷いた。

ソラが複雑そうな顔でシャフとアズのやり取りを見ていたが、不意に肩をチヨイチヨイと叩かれる。

「？」

「お嬢さん。よく事態が飲み込めなかったんだが・・・つまり、彼女は」

真剣な顔の田木にソラが頷く。

「君の恋敵なのかね？」

「「へ？」」

ソラとシャフのリアクションが被った。

「「な、何言ってる!？」」

思っても見なかった言葉に二人が同時に言い返そうとする。

「君も大変だな。若い身空で修羅場とは」

何やら同情した表情で久重の肩に手を置いた田木が笑う。

久重は顔を引き攣らせながらも、場を和ませようとしたのだろう心遣いに感謝した。

「久重。ラブコメつてるところ悪いんだけど時と場所を弁えてくれないかな？」

アズの半眼の視線に久重が脱力する。

「何かスツゴイ理不尽事を言われてないかオレ？」

「とにかく。この五人でとっととエントリーを済ませよう」
扉が開いた。

「G I O G A M Eの始まりだ」

アズの言葉と共に新たな事件の幕が上がる。

第十七話 W W W（後書き）

十七話までに色々誤字脱字の修正をしたり、話の矛盾を手直ししたり、表現を変更しています。出来る限り投稿前に修正していますが、投稿する毎に幾らか出ると思われます。その場合は数日から数週間以内で修正すると思しますのでご了承ください。もしそれでも直っていない箇所を発見したらご一報下されば修正いたします。

著者より

第十八話 祭典の始まり（前書き）

も〜い〜くつね〜る〜とお正月〜。

十二月三十一日投稿です。

事件の幕開けは少し風変りと映るかもしれませんが。

そして、今まで巻き込まれる側だった主人公の秘密などが少しずつ見え始めます。

第十八話 祭典の始まり

第十八話 祭典の始まり

会場は極彩色のライトが目まぐるしく駆け巡るステージを中心に
して大勢の観客で埋まっていた。

「おう！！ 野郎共&女郎共！！ 今夜のゲストのとうじじよお
だだああああああああああああああああ！！！」
流れ出す曲にステージ上からパイプ椅子が邪魔とばかりに投げ落と
される。

弾み出す音楽。

観客達の熱気と叫びが会場を包み込む。

ステージ上でマイクを握り締めた二十代の青年達がジーンパンにTシ
ヤツ一枚で踊り出す。

会場全体からカウントダウンが始まる。

【10】

「Are you ready?」

【9】

「Are you ready!!」

【8】

「Are you ready!?!」

【7】

「Are you ready」

【6】

「Are you ready」

【5】

「Are you ready」

【4】

「Are you ready」

本来は愛らしいのだろう少女の顔も体と同じく幾つも傷が走り、見るものに痛ましさを感じさせる。

しかし、少女の顔には陰りが無い。

顔に浮かんでいる微笑には微塵の羞恥も無い。

あるのはただ楽しげで何か懐かしいものを見るような視線だけ。

アズの目の前まで来た少女がそつと膝を付いて頭を垂れた。

「お帰りなさい。CEO」

「な?!」

衝撃の一言にアズ以外その場の誰もが固まった。

「随分と前に辞めた身だよ」

顔を上げて立ち上がった黄色い髪の少女が首を横に振る。

「それでもCEOは皆の生みの親です。そして、それはこれからも変わらない。だから、皆!!!」

【お帰りなさいツツツ!!!】

その日、青年と壮年と少女二人はよく解らない内にGAMEのエントリーを済ませる事となっていた。

ただ年齢不詳の女だけは微笑みながらもGAMEの始まりを実感していた。

GIO日本支部人事管理部門。

人材勧誘から配置転換まで幅広く行う部署の一角。

支社ビルの地下一階。

デスクワークの殆どは終わり、社員達の姿はほぼ無い。

それでも片隅のデスクは小さな照明に照らし出されていた。

ガチャリと扉が開き、警備員が一人入って来て僅かに苦笑した。

「なかおみ中臣さん。とつくの昔にセキュリティが作動してますよ」

デスクの横に立ったのは頭の禿げ上がった壮年の警備主任。

「ああ、すいません!? でも、もうちょっとで仕事が終わりそうなので。後一時間!!! いえ、後三十分もあれば」

答えたのは三十代後半の柔和な表情の男だった。

取り立てて有能そうにも見えない糸目の男が実は日本支社でも指折りの実力者であると知っている警備主任にしてみれば、毎日のように残業している姿は実に好感が持てる要素と言えた。

「相変わらず仕事の虫、ですか？ あなたも一応幹部なんですから他の方と同じように時間外勤務は自宅でされては？」

「そうしたいのは山々なんですけどね〜。何せウチの部門は機密と持ち出せないデータが多くて。やっぱり社で仕事をするのが一番効率的なんですよねえ」

「で、今日の残業理由は何ですか？ 一応、決まりですから」

「ああ、はい。これです」

小さなノートパソコンが警備主任に向けられた。

「ええっと、ライブ会場？」

画面へ映った歌い踊る男達の映像に困惑する警備主任が中臣と呼ばれる男に首を傾げる。

「実は広報部門から幅の広い人材を頼まれました。インディーズでぶいぶい言わせてる人をスカウトしまくらないといけないという・・・」

警備主任は半ばいつもの如く、規則で決まっている残業理由の欄に部外秘情報と書き込んでおくかと内心で決めていた。

「家でも出来そうな仕事ですが？」

「はは、実は実力者だけを集めてちょっとライブを開かせてましてお客さんに投票してもらって、その結果で決めようかと。それで今はそのライブ中なんですよ」

「それだけの為にライブを？」

人員を一人二人入れる為にライブを開く。

画面の中の会場や機材はとても古臭いものとは思えない輝きを映している。

賃貸料だけでも相当なものになるはずで、そんな事をサラリと言つてのける目の前の男はやはりヤリ手なのだろうと警備主任は呆れ半分感心半分で画面を見つめた。

「いや〜一億も掛かるとは思ってたませんでした」

「一・・・はあ、よく解りませんがこういうのは下請けに委託でいいのでは？」

「自分の目で自分の同僚になるかもしれない人間を選ぶわけですから金も時間も掛けずにはいきません」

「そうですか。では、三十分後にもう一度来ます。それまでには仕度をしておいってください」

「はい。重々承知してます」

「では、自分はこれで」

警備主任が去った後、見送った笑顔のまま再び中臣が自分のデスクで画面を見る事に集中し始める。

「アズ・・・」

その視線は画面中央に位置するステージではなく、画面端観客の一人に注がれていた。

【お帰り】

そう言った顔に笑みは無く。

僅かな哀惜だけが滲んでいた。

エントリーを済ませた五人はライブ会場から数分歩いた場所に移動していた。

五人を先導するのは不自然に黄色い髪をした全身傷だらけの少女。

ドアを開けて明かりを点けた部屋へと招き入れられた四人が内部に入って啞然とする。

「

洒落たバーが其処にはあった。

一人だけ驚いていないアズだけがカウンターに先だつて腰掛ける。

他の四人もアズに倣った。

バーの壁一面にあるボトルの数は数千本以上。

壁面全てが瓶で埋め尽くされていた。

「CEO。何か飲みますか？」

カウンターの内側に入った黄色い髪の少女が訊く。

「いや、その前に自己紹介をお願い出来るかな？」

「はい」

素直に頷いた少女が四人に畏まった様子で頭を下げた。

「G I O警備部特務外部班総括。亞咲あさきと申します」

「……?!」

その肩書きに久重と田木が驚きを隠せず目を見張った。

「ひさしげ……?」

ソラの問い掛けに久重が頷いて小さな声で切り出す。

「覚えているか。オレが腕を飛ばされた時に襲ってきたG I Oの掃除

屋連中の話」

「それって!?!」

「そうだ。首を飛ばされた奴は特務の人員だった」

ソラが亞咲と名乗った少女を驚きにマジマジと見つめる。

「その節はお世話になりました。まさか、CEOと同僚の方々と
は知らず。お詫び申し上げます」

深く頭を下げた亞咲にソラと久重は名状し難い顔でどう反応したら
いいのか解らず固まった。

「そのくらいにしておいてくれるかな。君の謝罪が欲しいわけじゃ
ない」

「はい。CEO」

頭を上げた亞咲にアズが渋い顔をする。

「それとCEOも無した。呼びたいならアズでいい」

「……承知しました」

刹那の逡巡を経て亞咲が頷く。

「アズ……話してくれるか？」

二人のやり取りを聞いていた久重がようやく本題に入れるとばかり
にアズに視線を向けた。

「まあ、そういう事になるだろうとは思ってたけど。どうしても知
りたいかい？」

アズの歯切れの悪い口調に久重が内心で驚いた。

年齢不詳、本名不祥、国籍不祥。

世界を又に駆ける女フィクサー。

過去を一切話した事の無いアズが己の過去に口を重たくする。

その今まで見た事の無い顔に自分の知らない過去の一面を見た気がして、久重は頷くのに数秒の間を要した。

「何処から話したものかな」

「こちらでお話しても構いませんが」

「僕の事を僕以外で誰が語れるのかな？」

「失礼しました」

亞咲が黙り込む。

「それじゃあ、G I Oと僕の関係から話そうか」

「ああ」

久重の視線に口を重くしながらもアズが訥々と語り出した。

「G I Oは僕が友人達と一緒に立ち上げた会社なんだよ」

「まさかとは思ってたが……」

「ま、大昔の話だけだね。途中で友人と意見が合わなくなって代表を降りた後、自由業を営んだわけだ」

「それが探偵紛いの事務所か？」

「探偵つてのはそもそも管理されてたり、公安に興信所ですなんて届け出たりしなくても出来る。僕に一番合ってる生き方がそれだっただけの話さ」

「いや、届け出るよ！？ 後、随分とアバウトだな」

室内に緩やかなジャズが流れ始める。

釘を刺され話に参加する気が無いのか。

亜咲がカウンターでBGMのボリュームを調整し、何やら料理を始めていた。

「まさか世界的女フィクサーがG I Oの大物だったなんて、あんたに付いてきて正解だったわ。ソラ」

「……」

ソラの視線が無言でシャフと交わる。

「今は株式も一株しか持ってないし、実質的には何の関連も無い。その頃に出来たコネや資産は有効活用してるけど、GIOを出た僕の情報は殆ど消したからGIOの社員や役員会だって僕を知る人間は今じゃ極少数。更に言えば何をしているのかも知らないはずだよ。今回の件で色々調べられたらどうけど」

亞咲がアズの微妙に非難がましい視線に頭を下げた。

「悪いとは思いましたが現在の情報は会長の命で全て調べました」

「あの馬鹿は元気？」

「お変わりなく最前線で働かれています」

「そう。それであいつは何だった？」

フライパンから香ばしい匂が辺りに漂い始め、亞咲が危うげなく答える。

「今回のGAMEは過去最大。プロジェクトに掛けられた資金以上に元が取れば、手を引くそうです」

「そう。それで他には？」

「無論、あなたが戻ってきてくれるならば一切の要求はしない方針だとも」

アズが顔を顰める。

「なら、あの馬鹿に言っておいてくれるかな。もうGIOに未練は無いつてさ」

「畏まりました」

フライパンから料理が皿に移され、カウンター越しに五人の前に置かれていく。

「どうぞ」

話を聞いていた四人が目の前に置かれた皿で湯気を立てるパスタとアズを交互に見つめた。

「食べても問題無いよ。此処で何か入れるようなら僕は迷わず戦争するって相手も解ってるから」

五人分のフォークが出され、各自がパスタを口に入れた瞬間に固ま

る。

「相変わらず、だね？」

「いえ、近頃調理器具を握っていませんでしたから腕が鈍っているかと。申し訳なく思います」

四人がアズと亞咲のやり取りを横目にパスタを微妙な速さで食べ始める。

その料理の味は一言で足りた。
美味い。

数分間、場には妙な空気と沈黙が漂う。

命を掛けたGAMEに参加するものとはかり思っていた四人は何故か地下でパスタを啜っている己の状況に疑問を抱きながらもアズとGIOの因縁に口を挟む事もできずにいた。

「・・・一つ聞いてもいいか？」

最初に切り出したのは久重だった。

「何だい？」

「『皆の生みの親』ってのはどういう意味だ？」

「それは」

言い掛けたアズを亞咲がそつと手で制止した。

「それはこちらから申し上げる事です」

久重が亞咲を見る。

「私は結論から言えば普通の生まれ方をしていません」

「生まれ方？」

「【誘導多能性幹細胞（pluripotent stem cells）】はご存知ですか？」

「まさか！？ 国際条約で禁止されてるはずだろ?!」

久重の理解の速さに亞咲が僅かに顔を綻ばせ頷いた。

「IPS細胞技術を使用したクローン。その初期ロットが私です」

「?!」

驚いたのは久重や田木ではなくソラとシャフの二人だった。

「それと私に適応されるのはどちらかと言えば【カルタヘナ議定書】

(Cartagena Protocol on Biosafety)の方かと思えます」

「カルタヘナ・・・確か生物多様性を遺伝子組み換え生物から保護するやつだったか」

「はい。私や私の兄妹達は人間という種に対しての優位性を持った遺伝子組み換え生物。クローンと言うよりは人間を種族的に脅かす・・・そうですね・・・日本で言うところの生態系を乱す外来種みたいなものです」

まったく亞咲の顔には悲壮感も無ければ秘密を打ち明けるような後ろめたさも無かった。

「GIOには色々噂があるが、陰謀論者やネットの謂れの無い誹謗中傷にも幾つか真実が混じってたわけか」

久重の何か遣り切れない顔にクスクスと亞咲が笑う。

「ええ、GIOは遺伝子工学において違法な研究をタブー無く進めていますから」

「何処のSFだ・・・」

溜息を吐いた久重に亞咲が続ける。

「CEOは元々経営だけではなく多彩な才能をお持ちでした。私や兄妹達を生み出したプロジェクトチームの統括者としてお世話になった過去があります。そういう縁で今も私や兄妹達はGIOを去ってもCEOを人間で言うところの親だと思ってます」

「アズでいいと言っただけだな」

「すみません。いつもの癖で」

割り込んだアズの声に亞咲が頭を下げる。

「皆さんも大体の事情は理解されたと思いますので、これからGAMEに付いての説明をさせてもらいたいと思います」

空になった皿を回収し後片付けながら亞咲が本題とばかりに話し始める。

「皆さんが参加するGAMEはGIOが不定期に世界各国のVIPに賭けの対象として行っているものです。年間で賭け金は世界経済

総価値の約1%程で日本円で五兆は下らないでしょう」

その示された金額に田木が目を細める。

「社内の噂は本当だったのか。随分と規模が違うようだが・・・」

「ミスター田木にはあのプロジェクト後に秘密を知るだけの地位が約束されていました」

亞咲が始めて口を開いた田木にもしもIFの話をする。

「どうやら辞めて正解だったようだ」

田木の言葉に何も返さず亞咲が続けた。

「このGAMEの特徴はジオプロフィールを点数化して扱うというところにあります」

「ラリー形式のレースか？」

久重の言葉に亞咲が頷く。

「民間で行われているようなジオプロフィールの総合得点で順位を競うラリー形式のレースと基本は変わりません。ですが、GIOの行うGAMEがそんな健全なものであるはずありません」

「自分の勤めてる会社をそんな風に言っているのか？」

「会長はよく【こんな会社がよくまだ存在するよなあ】とか言ってますから」

「どんな奴なんだよ」

「それは直接お会いする機会が来れば解るか。説明を続けます」
呆れ顔の久重にサラリと亞咲が返す。

「このGAMEの特徴は毎回そのジオプロフィールを得る為の場所や設定にテーマが設けられている事です。例えば、室内に一時間いるだけでジオプロフィールが得られるとして、テーマが耐久だとすると・・・そうですね。今までの例から言えば、遅効性の毒ガスやそれに近いものが室内に充満していく事もあります」

「随分と物騒だな」

「序の口かと。例えば、移動手段を問わずポイント通過順位のみでジオプロフィールを得るとして、テーマが妨害だとすれば、一定の規則内で武器の使用や戦闘を行っていた場合もあるでしょう。」

無論、生死問わずというのが基本になります」

「物騒過ぎだろ」

「それくらいしなければ大金を掛けるだけの興奮も無い。それがGAMEを取り仕切る部門の見解です」

「それでオレ達はどうかしたら勝ちなんだ？」

「今回行われるGAMEは一ヶ月掛かるものですが、プロジェクトが動くのは来週中です。今日が木曜日ですから土日にGAMEをスタートとして来週の国会での質疑が行われる時間までGAMEには参加してもらいます。その過程であなた達に賭けられたチップの総額がプロジェクトの運用した資金満額に届いて回収された場合のみ契約書は全て引き渡し、今後一切同プロジェクトを凍結。同じようなプロジェクトは立ち上げないと制約した上で皆さんに対しGIOは如何なる干渉もしないと会長自身が出向き誓うそうです」

「ちなみに僕に関して集めた情報も破棄してくれると助かるな」
アズの笑顔に亞咲が頷く。

「はい。会長はそう言うだろうとデータは全て閲覧せず此処に後片付けが終わった亞咲が懐から一枚のディスクを取り出した。

「あの馬鹿の事だから本当に閲覧してないんだろっね」
亞咲が頷く。

「フェアでは無いので賭け金の総額は常に開示します」
どうぞと亞咲が小さな端末を久重に渡した。

「プロジェクトが今まで運用した資金の総額が右。あなた達に賭けられた資金の総額が左です。ちなみにレートは円で、運用した資金が増える事はありません」

久重が端末に表示された金額を覗き込み、頭痛を抑えるように片手で顔を覆った。

「どうしたの？ ひさしげ」

「見てみる」

端末を受け取ったソラが画面に示された桁を数え始めて顔色を変えた。

田木とシャフがソラの背後から画面を覗き込む。

「……」

「軍閥に流した武器類と取り込みに使った賄賂。工作人員の件費や機材の運用コスト。その他には日本でジオプロフィット導入に際して行った政府への援助や政治家への裏献金。総額で1798億4567万2451円です」

三人が沈黙した。

「約一千八百億、か」

半笑いで久重が額に冷や汗を浮かべた。

「それでも安い方かと。経費削減でプロジェクトの規模が縮小されていなければ三千億以上は次ぎ込んでいたはずだったそうですから金額の大きさにこれから己が参加するGAMEの過酷さを全員が認識した。」

亞咲から詳しい日程やルールを聞かされたアズと一行がその場を引き上げたのは夜半も過ぎ朝も白み始めた頃だった。

メリッサはまるでお伽噺に迷い込んだような錯覚を起こしながら街を歩いていった。

街には灰色の雪が降っている。

異常な状態に慣れてしまっているのか。

あるいはまったく認識していないのか。

人々はまるで何事も無いように過ごしている。

「……」

肥大化していく違和感を感じながらメリッサは夜の街を歩き続けた。街の端から端まで隅々まで歩く必要も無い。異常の中心。

隕石が止まっている中央。

その一軒家をメリッサはなんとなく発見した。外字。

もう人が住んでいない家の表札にはそうある。

家の二階はほぼ破壊されていて、内部の部屋が丸見えになっている。巨大な隕石の真下に存在する一種の境界とメリッサにはその家が見えた。

秘密や謎といったエッセンスは殆どメリッサにとって unnecessaryなもの。外字久重の基本的な身辺情報さえ上げれば問題はない。

そう自分に言い聞かせながら、一刻も早く離れたい気持ちに蓋をしてメリッサが玄関の扉に手を掛ける。

ギ、イイイイ。

あっさりと開く扉の中は暗黒。

しかし、作り物の瞳にはハッキリと内部が映っている。

己の全ての能力を限界近くまで上げながら、メリッサは意を決して内部へと侵入した。

巨大な影の落ちる灰色の世界。

床に積もった雪は今までこの家に誰も入っていない事を示している。

「.....」

リビングを覗いたメリッサは小さな棚の上に写真立てを見つけた。

そっと手に取ったメリッサが覗き込むと写真には三人の人間が写っている。

一人は老齡の男。

一人は若い女。

一人は小さな男の子。

その男の子に外字久重の面影を見つけて、メリッサが写真立てを回収する。

続けてキッチンやトイレ、和室を見て回ったものの他には成果らしい成果が出なかった。

トイレには使われた痕跡が無い。

和室には仏壇の一つも無い。

ようやく階段を上がる決心が付いたメリッサはゆっくりと二階へと上っていく。

「？」

その途中、壁に落書きを見つけた。
落書きは小さな文字で書かれている。
ひらがなでの一文。

【きょう、いんせきがせかいをほろぼした】
何かがズレた感覚。

滅んだ後に書かれるはずの無い言葉。

「・・・・・・・・」

メリッサが階段を上り切ると二階には部屋が三つ存在した。

その内の二つは扉が完全に拉げていて中を伺い知る事は出来ない。
屋根と壁の消えた一部屋に進む。

すぐ其処がどういふ部屋だったかが知れた。

子供部屋だった。

クローゼットに勉強机に寝台が一つ。

灰色の雪がやはり一面に積もっている。

雪は融ける事も無いのに何故か積もり過ぎる事も無いらしい。

「・・・・・・・・」

勉強机の一番上の引き出しを漁ると中から一冊のノートが出てきた。

拙いひらがなと感じ混じりの日記だった。

幾ら捲つても重要な事は書かれていない。

友達と遊んだ。

外食をした。

親にものを買ってもらった。

何処にでもある話に過ぎない。

「？」

ただ、ふと日本語に違和感を覚えて、メリッサはよく内容を反芻する。

明日、友達と遊んだ。

明日、お爺ちゃんと外食をした。

明日、お母さんにゲームを買ってもらった。

明らかにオカシイ。

何かがズレている。

更に机を漁る。

鍵の掛かった引き出しがあった。

それを無理やりに壊して中を漁ると更に日記と同じノートが幾つか出てくる。

「・・・・・・・・」

目を細めながらメリッサはノートを捲っていく。

内容はやはり何処かオカシイ。

明日、夢を見た。

明日、友達とサッカーをした。

明日、テストの点数が悪かった。

やがて数冊のノートを捲り終えたメリッサが机の上にノートを置くとして、気付く。

灰色の雪の下に何かが見え隠れしていた。

全てを払い退けた瞬間、メリッサが息を呑む。

机の上には透明なマットが敷かれていた。

下に幾つかの学校の連絡やらクラスメートの連絡先を書いた紙が挟まっている。

その中央。

たぶんは破かれたのだろうノートの切れ端が一枚。

幾つかの文が並んでいた。

【きのう、いんせきがふってきた】

その書き出しで始まった文は僅か三行。

【あした、いんせきはふっていないかった】

最後の一文にメリッサは言い知れぬ不安を覚えた。

【きょう、せかいはほろんでしまったのだろうか？】

悪い夢でも見ている気分でメリッサはその場から離れる事とした。

家の中を再び通るのも気持ち悪くて、その場から跳躍した。

何かに急かされるようにメリッサは道を急いだ。

やがて、街から遠ざかり気付いた時にはメリッサはもう隣の市まで

来ていた。

夜明けが近い。

「……………」

白く染まり始める空を見上げながら使い捨ての端末をコールする。

『はい。こちらターポリン』

『先輩。任務完了しました』

『上出来です。それで成果は？』

僅かに逡巡したメリッサの沈黙は短かった。

『家を見つけて進入しましたがこれと言って重要なものは何も……』

『……………』

『そうですね。解りました。では、次の指示があるまで待機してもらって構いませんよ』

『……………一つだけ写真を見つけてました』

『写真を？』

『はい。祖父と母親らしい人物と幼少の外字久重が映っているものです』

『十分に成果かと思いますが？』

『やはり通常の業者を使って過去の調査を行うべきかと思えます。』

『聞き込みなどが出来ないのでは集まる情報も限られます』

『……………そうですね。では、幾つかの専門業者に声を掛けてみる事にしましょう』

幾つかの連絡事項を受け取ったメリッサはいつも通り通話を切った端末を投げ捨て踏み壊す。

完全に朝日が昇った国道をトボトボと歩きながら、自分の握った情報を忘れぬように幾度も脳裏で反芻する。

（あれだけの情報じゃまだどういう意味合いを持つのが解らない。でも、あれだけの情報に意味があるとすれば、それはたぶん）

メリッサは朝日を眩しそうに見つめる。

（僕を解放するに足る情報のはずだ）

そのままメリッサは通常の待機場所へと向かった。

大きな秘密を背負った小さな背中に冷や汗が流れている事を自覚し
ないまま。。。。。

第十九話 チヨココロネ誘拐

第十九話 チヨココロネ誘拐

嘗て軍事強国であつた中華人民共和国。

世界の工場と言われ、世界中から富が集まり、その成長は世界を牽引していた世界最大の共産主義国家。

軍事を増大させる隣国と海を隔てながらも、その小ささを笑えていた大国。

全ての民はその国では等しく平らであつたと教科書は語る。

そして、あの大战で侵略者達から国土は守られたのだと大人達は語っている。

もう誰もその当時の事を本当に知る人間はいない。

嘘塗れの教科書を作つた役人達を批判する国民の気持ちは解らない事もない。

しかし、自分達は大陸に覇を唱えられる大国で、あの小日本は今も我々の軍靴の音にビクビクしているのだと笑う大人達の戯言は好きになれない。

今も国家は偉大だと思う。

されど、国土の大半が砂漠化していく最中、無策に滅びゆく大人達の姿はいつそ哀れと言えた。

物事の本質が見えていない。

歴史がどうあれ、過去がどうあれ、今現在の大陸と日本は掛け離れている。

真に国を憂う者がいれば、その絶望的な距離に目を覆うだろう。

ずっと昔、我が国は偉大だと言つた先生を思い出せば「では、我々よりも彼の国は更に偉大なのですか先生」と聞いてみたい感慨に囚われる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

小日本に来る前まではそれでも少しは希望があった。

そう、小さいと心の何処かでまだ侮っていた。

見上げれば摩天楼。スカイスクレーパー

見渡せば巨大都市群。メガロポリス

過去の遙か彼方に置きざられたはずの大中華。

心の奥にあつたそのままの威容。

初めて知つた真実は絶望的だった。

どちらが優れているのか。

その光景を見て解らないものはない。

真実を心に刻まれない限り、己の心にある虚栄は全てを盲目としてくれるだろう。

国家の中にいる大半の国民は真実を知る事は無い。

それは国が盲目であるのと大差ないのではないかと感じた。

「・・・・・・・・・・」

もしも、そんな事を言えば、すぐさま処刑されるか迫害されて当然だろう思考は留まってはくれない。

国民の大半は知っているのだろうか。

小さな国と馬鹿にしてきた国の道には痰が無く、塵が無く、糞も無く、ゴミ箱も無く、乞食は在らず、転んで起き上がるうとしたら無償の助けの手がある事を。

大丈夫？と聞かれて何も答えられなかった。

持ち歩く銃器の重さが想定外だっただけの話。

大人達が転んだこちらを射殺すような視線で睨んでいたにも関わらず、少し怖がりながらも手を差し出してくれた小さな手。

きつと、苦労なんてした事が無いのだろう柔らかで白い手。

薄汚れた移民に成りすましていたはずの自分にそんな手を差し出す子供なんて在り得ない。

どんな国でも移民は嫌われている。

そんな事すら知らないのか。

小さくとも男だというのに、膝まで折って他国の人間を助けようと

いつのか。

男の子は差し出した手を掴むと引っ張り上げてニッコリと笑った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

小日本の日本鬼子が何を偉そうに。

助けの手などいるものか。

そんな、大人達からの小さな呟きが聞こえてきた時、咄嗟にその手を払い除けていた。

もしかしたら、大人達がその手に何かしてしまうのではないかと怖くて。

男の子が呆然とする中、背を向けて大人達の中に混じって道を急いだ。

急いで、思い知った。

道を歩けば秩序があった。

車が走れば秩序があった。

人が居れば秩序があった。

誰も見ていないのに。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

如何にも移民姿の大勢にホテルのフロントで笑顔を浮かべる女性。

その職業意識はどれ程なのだろう。

良く思っていないとも決して不快な顔などしない。

蛇口を捻れば出てくる水やお湯。

しかも、飲めてしまう程に清いもの。

その蛇口を目前にこれは魔法かと涙が浮かんだのは当たり前前の話ではないか。

たった一分蛇口を開けて出た水を持っていけば、大陸で今正に渴き果てようという赤子が何人助かるだろうか。

口々にまったく平和ボケした国だと嗤いを浮かべて嘲りの言葉を吐く大人達の誰もそんな事は口にしない。

初めて湯船というものを見た。

お湯を張り、その中に身を浸す。

本国の誰がそんな贅沢を許すというのか。
大人達はその時だけは嬉しそうに笑いながら狭い浴室で騒がしかった。

自分の体がようやく収まる小さな浴槽で始めての快樂を得ながら、
心は晴れなかつた。

初めて自分がどれだけ汚れていたのか出た浴槽を覗いて解つた。

初めて自分がどれだけ何も知らなかつたのか蛇口から苦しい程に水を飲みながら思つた。

こんなにも近くて遠い世界。

海を隔てただけの世界が哀しかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

微酔んでいた顔を上げる。

何度も世界が眩んだ。

いつの間にか緊張の糸が切れてしまったのか。

周りの仲間達も見張り以外は気も漫ろな様子で静かに浅い眠りに身を浸している。

【黒星^{ヘイシン}】

中国裏社会において星の教程もある幫^{ソウシヤク}の一つ。

過去に名を馳せたトカレフと呼ばれる密造拳銃を売り捌いたところから付いた名だと幫の幹部は言う。

どうでもいい事だったが、そんなものに拘らなければ幹部にはなれないらしい。

幹部達はいつだって手下を殴って蹴って金で黙らせる。

己の美学と遣り方が最高だと派閥を創る。

けれども、そんな派閥にさえ入れてもらえない下っ端はやはり使い捨てる駒にしか過ぎない。

それが女ならば尚更だろう。

男の為に働け。

そう育てられてきた。

大きな荷物を運ばされれば死体だったし、小さな荷物を運ばされれ

ば首だった。

殴られなければ殺される場所で、教育だけは受けられた事を感謝するべきかは解らない。

ただ、娼婦にされなかつただけマシだとそれだけは解る。

人殺しの方がマシだ。

病気の末に一人苦しみながら死ぬよりは誰かに銃弾の一つも貰って死んだ方が良い。

少なくとも帮の男達はそういう生き方をしていて、そういう死に方をする。

そんな普通の死に方が良いと聞いた男達は何やらこちらを見てから変な顔をするけれど。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゆっくりと起き上がる。

腕の安物の時計は四時を指している。

交代の時間だった。

廃ビルの一角。

未だ通電している場所。

電子錠が取り付けられた部屋の前まで行くと大人の一人が待っていた。

遅いと怒鳴られ殴られる。

ただ頭を下げてから部屋の中に入ると鍵が掛けられる音。

たぶん、閉じ込められた。

次に移動するまではそのままなのだろうと悟って拳銃の安全装置を外す。

上からぶら下がった青白いライトに照らし出されて、その部屋の主が不思議そうな顔でこちらを見ていた。

布深朱憐にとって世界は謎に満ちている。

それは別に世界が滅ばなかつた理由とか、見知らぬ少女がいつの間にか恋敵になっっているとか、そういう事ではない。

謎とは常に男と女の深い溝に付いてだ。

ちやんと連絡手段を渡したにも関わらず一回も掛かってこない連絡掛かってくる番号に一喜一憂させられ続ける空回りな自分。

いつも朝食や夕食を作りに行っているのに時折何の連絡も無くないなる愛しい男^{ひと}。

正に自分は「都合の良い女」なのかと思ってしまう辺り、まだ外字久重という青年と自分は絆的な意味で結ばれていないと思う。

別に絆的な意味じゃなくても結ばれているべきとは思うものの、中々難しい

「・・・・・・・・」

そんな朱憐は自分程にお嬢様をしているお嬢様も珍しいという自覚がある。

日本でも中堅に位置する財閥の令嬢でそれなりに裕福な人間。

更にはありがちな誘拐や誘拐未遂もそれなりに経験が有ったり無かったりする。

その経験の中でも現在進行形で続いている誘拐は妙なものだとして朱憐には解っていた。

朝、偶然寝坊した朱憐を送る車に待っていましたとばかりに黒いバンが横付けされ、車で四方を囲まれたあげくに、それぞれ防弾リムジンを安々と打ち砕くだろう武装が窓からニョッキり生えた。

それだけでも日本では有り得ない事態と言えた。

日本に武器を持ち込むのは難しい。

兵器に関する輸出入の原則が此処数十年で大幅に緩和されたとはいえ、正規のルートを通らない武器弾薬兵器の類は殆どが水際で取り締まられている。

特に危ない地域からの船には注意が払われるし、十数年前から続く厳しい海上保安庁の臨検で小型艇などで運ばれる銃器、薬ともに上陸は阻止している感がある。

そんな日本にまとまった兵器類を密輸入するとなれば、無駄に足が付くのは避けられない。

更に言えば、大財閥ならまだしも、小さな財閥を細々と続けている家を脅したところで取れる身代金も少ないのは自明の理。

数十人規模で綿密な連携が必要だろう営利誘拐としては兵器や人数から言っても不審過ぎた。

最も解らないのは犯人達が日本人ではなく中国人というところだった。

訛りなどを聞けば内陸出身者も多い。

話している内容は何やらキナ臭くて「止められるのか」「いや、まずは取引の窓口をどこにするか」等々と何やら計画性が疑われるような話も出ていた。

そして、何よりも疑問なのは・・・目の前の十五歳前後の少女だった。

真夏だと言うのに茶褐色のトレンチコートを羽織った少女。

その姿が自分の知る少女達と何処か被って、朱憐はマジマジと少女を見つめた。

浅黒い肌に蒼い瞳。

胸元には鋭利な輝きを宿すナイフ形のアクセが一つ。

その目付きは鋭く尖った顎や細い体と相まって猛禽類を思わせる。細められた視線。

銃の安全装置を外す動作。

どれもこれも苛烈な環境で生きてこなければ身に付かないものだろうと朱憐には思えた。

「熱くないですか？」

近頃予習をサボっていた広東語で話しかけてみる。

「!?!」

ビックリした様子で何やら警戒されてしまった。

「コートを脱がないと脱水症状になるかもしれません」

「・・・・・・いい」

日本語で返されて逆に驚く。

誘拐犯達は殆ど日本語が話せないと解っていた。

誘拐後の相談で日本語の出来る代理人を立てようと何故か今更な話をしていたから間違いない。

「日本語、解りますか？」

コクンと頷かれて、胸に少し安堵が広がる。

日本語が解らないままの誘拐犯達にトイレは何処かと話しかけるのは躊躇われていたところだった。

少なくとも同じ年代の少女とコミュニケーションが取れるだけでも精神的に違った。

「貴女は中国の人みたいですけど、何処の生まれかしら？」

「・・・無い」

「え？」

「生まれは無い。知らない」

「知らない？」

コクリと頷かれてそれ以上訊くかどうか迷った。

「^{バツ}幫は孤児を育てるから」

その独特の言い回しにやはり誘拐犯達が中国裏社会の人間なのだと確信する。

不意に今まで青白いライトのせいで気付かなかった事に気付く。少女の頬が腫れていた。

「そこ、どうしたんですか？」

朱憐に指された頬を僅かに撫せてトレンチコートの少女は言った。殴られたと。

「ど、どうして？」

無言で目を逸らされて何も言えなくなる。

組織の内情を悟られるのは良くないと思われたのかもしれない。

「大丈夫？」

触れようとすれば警告され撃たれるかもしれない、そつと尋ねる。

「・・・」

無言で頷かれて、僅かに緊張が解れる。

相手がコミュニケーションが取れる人間だと解ったから。

「そう言えば自己紹介がまだでした。私の名前は布深朱憐」

「ふみ・・・しゅれん？」

「そう、朱憐。貴女は？」

「・・・・・・虎トラ」

「ふー？」

「・・・とら」

「虎・・・ああ、虎トラ？」

小さな首肯。

「随分と可愛いらしい虎さんです」

朱憐の顔に笑みが零れた。

「・・・どうして、怖くない？」

ジツと虎が朱憐を見つめる。

「貴女が悪い人には見えないから」

「・・・・・・」

虎の視線が銃に向いてから朱憐に戻る。

言いたい事は朱憐にも解った。

「家の父がよく言っていますわ。この世には貧富の差や資質の差を持って生まれてくる人間はいても、善悪や功罪を持って生まれてくる者はいないと」

朱憐の言葉を噛み砕いている最中なのか。

虎は考え込んだ様子で俯いた。

「どんな子も生まれた時には善くも悪くも無い。罪も無ければ功も無い。そういう事です」

「銃、ある」

「そうしなければならぬから、ではありませんか？」

虎が朱憐の瞳を上目遣いに見つめる。

「撃たれれば、死ぬ」

「でも、貴女は貴女の決定で私を殺さない」

朱憐の瞳が揺らいでいない事に虎は内心で驚く。

銃を持ってすぐ横にいる人間が撃つという単語を使って未だ微塵も

揺るがない瞳は普通ではない。

「撃たれたら、痛い。血が出る」

「ええ」

「どうして、怖くない？」

再びの問いに朱憐は微笑む。

「貴女が私を脅かさないからですわ」

「？」

「今も貴女は銃口をこちらに向ける事が出来る。でも、貴女はそうしなかった」

虎は未だに自分が持つ銃が下げられたままである事に気付く。

でも、それはただ単に必要なからという、それだけの理由でしかない。

もしも、怪しい素振りを見せれば、躊躇い無く威嚇射撃を行い、必要であれば体に銃弾を掠らせる事も平気で行う自分にそんな言葉を投げ掛けてくる方がどうかしていると思う。

「そうして、ないだけ」

「でも、こういう時にそういう事をする人間が沢山いる事を思えば、貴女は良心的です」

もう何を言えばいいのか解らなくなった虎はただ朱憐を見つめるしかなかった。

「痛みを知らない人間は人を傷付ける事を厭わない。だけど、貴女は傷つく事を知っている。だから、私を無闇に傷つけない。そんな貴女に私は自分を傷つけさせないし、自ら傷つく選択もしません」

二人の間に沈黙が流れる。

先に折れたのは虎だった。

「・・・好きに、したらいい」

目を逸らして壁に寄り掛かる虎に対し、朱憐が笑顔で頷いた。

「はい。そうさせて頂きますわ」

誘拐されている方と誘拐している方。

その関係は変わっていない。

にも関わらず、何故か虎は不可解な敗北感を感じて、情けない気分になっていた。

永橋家は基本的に朝の挨拶など皆無な世界だ。

それは間違いない。

そんな日々にピリオドが打たれたのは極最近。

移民の家出少女セキが居ついてからの話だ。

朝に弱い永橋家家長永橋風御は基本的に朝の挨拶などしないし、するような人間を家に泊めた事もない。

だからこそ、風御はその挨拶を受けるようになってからというもの、殆ど毎日のように困る事となっていた。

おはようございます。

そんな風習はもう要らないと思う日本人にあるまじき怠惰で風御は完璧な作り笑顔なセキに手をヒラヒラと振るのがやっと。しかし、そんなもので誤魔化されない真面目家出少女は「挨拶も出来ないなんて風御さんは本当にロクデナシです。あはは」と皮肉を忘れない朝から何故か和食が出てくるようになった永橋家の台所事情は改善されている。

毎日、朝早くから朝食を作ってくれている少女に「挨拶なんて要らないじゃん」とも言えず、風御は半笑いでシャワー室に逃げ込んで熱いお湯を浴びるのが日課になっている。

風呂場から出たらダラダラといったもの如くバスローブ姿でいたい気持ちになる風御だったが、そんな事を許してくれる程居候少女セキは甘くない。

一緒に生活し始めてから一週間目でセキは「風御さんは女の子にフルチンを見せても平気かもしれませんけど、あたしはまったく平気じゃないですから（ニツコリ）」と風御には釘を刺された。

風御的には色々あった後、「アナタ」から「風御さん」にクラスチェンジした呼び名をそれなりに重く受け止めていたりして、とりあえず大人の玩具や大人のBDフルレイトイスクや大人の漫画や大人の小説や大人にし

が必要無いだろう諸々を隠しておいたりする大サービスなのだが、それを公言するのも躊躇われた。

とどのつまり、永橋風御は家出少女セキの尻に敷かれつつある現状をとりあえず黙認していたりする。

どこかで言わないとガチガチな常識人にされかねないと思いつつも、備え付けてある全然使った事の無い洗濯機を回す少女の背中
の健気さにちよつと絆されていたりする。

そんなあやふやな距離感で今日も風御はセキの作った温かい朝食を
頬張っていた。

「うん。マジ美味しい」

「お世辞よりも食費を下さい」

「アレ？ 何か立場逆転してない？ 此処僕ん家だよな？」

「どうしてこの家には酒と肴とパスタしかないんですか？」

「だって、作れるのソレしかないから。ほら、酒の肴にする奴つて結構塩辛いよね？ アンチヨビとかニンクとかオリーブの実とか鷹の爪とか。香草やそういうのを具にするとあら不思議。いつの間にか本格パスタのできあが」

ビキツとセキの持っていた茶碗に罫が入り、風御は押し黙った。

「食費と食費と食費を下さいませんか。家主の風御さん？」

「はい。コレ……」

サクツと女の怖さに降参した風御がカードを一枚どこからともなく出すとセキの前に置いた。

「それとあんまり塩辛いものばかり食べてると高血圧になります。

野菜と魚は定期的に取ってもらいますから」

「僕のお母さんか何かなのかな。セキちゃんは」

「ちゃん付けは止めて下さい。それとお母さんとか年頃の女の子に言う事じゃありません」

半眼のセキの視線に責められながら風御は涼しい顔で朝食を完食した。

食器を片付け始める背中をぼんやり見つめながら風御はこれからど

うしたのかとしばし思案する。

「……………そうだ。今日はカジノに行こう」

ガシャンと台所から皿が甲高い音を立てた。

後ろを振り向くセキの形相はもはや鬼娘と言ったところ。

氷の微笑を浮かべたセキがスタスタ風御の前まで歩いてくる。

「今、何て言いましたか？」

「え？ セキちゃんて結構耳悪い？」

ビキッとセキの額に青筋が浮かぶ。

「風御さんがどんなにお金持ちでも、この間から言ってる通り、少しは働いたらどうです？」

「冗談まで上手いなんてセキちゃんといつか結婚する人は幸せものだなあ……………」

ヘラツと返した風御に思い切りグーを叩き込みそうになったセキが何とか思い留まった。

「カジノに行ってお金を擦るなんてアホみたいだと思います」

「カジノなんてATMと変わらないよ？」

額を手を当てて頭痛を抑えるような仕草をしたセキが反論する。

「バカラだろうがポーカーだろうがブラックジャックだろうがルーレットだろうがスロットだろうが負けない賭け事なんてありません」

「え……………賭け事で勝った事ないの？」

以外そうな風御の顔にセキの頭の何処かで何かが切れた。

「少しは反省してください！」

「……………今日のランキング一位はえつと」

風御はいつの間にやら端末で動画サイトに接続していた。

ヒョイツと端末を振って風御が壁掛け型のディスプレイに動画を投げる。

すぐさま接続されたディスプレイが起動、動画を写し始めた。

「……………!!!」

まったく人の言う事を聞いていない家主の横暴ぶりに思い切りセキが拳を振り上げようとした時だった。

リンゴーンとベルが鳴り、玄関の来客を知らせる。

玄関脇のカメラの映像を端末で見た風御は微妙に顔を顰めた後、チヨイチヨイとセキを指を曲げて呼ぶ。

「？」

不機嫌なセキが傍まで来ると風御がそつと人差し指を唇の前に立ててから、風呂場を指した。

セキは目の前の男が実はそれなりに何やら普通な世界の人間ではないと漠然と知っていた為、渋々音を立てないようバスルームへと入って扉を閉めた。

そのまましばらくの間は静寂が辺りを支配したものの、突如としてドアが内側へと弾け飛んだ。

轟音を立てて近くまで飛んできたドアを踏み越えるように男が一人室内へと入ってくる。

ラテン系の男は黒い肌には赤い髪、痩身で三十代も半ばという、如何にも日本の堅気には見えない。

目に悪そうな赤いスーツに赤いネクタイ。

物腰は柔らかかそうな面持ちだったが、している事は強盗のようなものだった。

そのスーツから覗く左腕は人間の形を模しているものの鋼色の光沢を放っている。

「あゝゝら。居たのね」

しんなりと体をくねらせてラテン系の男が微笑む。

所謂オネエ系な人種だった。

「家の玄関結構高いんだけど」

風御が半眼で溜息を吐く。

「あなたの資産に比べりゃあどうでもいい事よ」

男の言葉に風御が肩を竦めた。

「それで【ADET】の大幹部様が何用。つか、君は暇なはずでしょ？」

「年がら年中暇なわけじゃないわ。というか、また何処かのアバ

ズレ匿ってるの？ 随分と良いもん食べてんじやない」

男が台所でまだ湯気を立てている味噌汁の鍋を見て辺りを見回した。

「あゝはいはい愚痴は今度聞いてやるから。それで本題は『BAI・

AR』」

「ちよゝゝと気になるけど、ま・・・いいわよ。今度また来るから」

「いやいや、来るなよ。もう足洗った人間のところに」

「別にいいじゃないのよお。あんたとあたしの仲じゃない」

「誤解が発生する言い方は断固拒否らせてもらおう」

げんなりした風御にBAI・ARと呼ばれたラテン系の男はニヤリとしつつも、本題に入る。

「ま、今回は簡単に言つと二つ程お使いを頼まれて欲しいの」

「内容に拠るよ」

「一つはちよつとそこら辺でやんちゃしてる連中を黙らせてきて欲しいっていう簡単なのだから大丈夫大丈夫」

「自分の兵隊使つたら？」

「それがねえ。今回はGIOが噛んでて、あたしんこの兵隊使うとファツキン官憲ちゃんがお出ましになつちやうかもしれなくて面倒臭いわけ」

「何処の尖兵？」

「んゝゝあたしも詳しいとは知らないんだけど、どうやらお隣の国の帮^{バシ}みたい」

「華僑系とか。何かしたら命狙われまくるんですけど」

「そこら辺のイザゴザはこっちでどうにかするって【FADO】^{フアド}が言つてたわ」

「ぶつちやけるけど、それって僕じゃなきゃダメなわけ？」

「ぜゝんぜん。別に他のとこ雇つてもいいっちゃいいのよ？ でも、あなただつて自分の家の近くで勝手にドンパチされたくないんじゃない？」

「・・・何処？」

「んもお！？ 相変わらずのツンデレさんなんだから 期限は明日までよ」

グツタリした風御の前にBAIが左ポケットから取り出した紙切れを一つ置いた。

「方法はこつちに任せてもらえるわけ？」

「煮るなり薬なり殺すなり、お好きにどうぞ」

「それでももう一つは？」

「これよ」

右ポケットから紙切れを一つ取り出したBAIが今度は風御の手に直接渡した。

「……………報酬つてわけじゃないのはいいとして、どうしろと？」

渡されたのは高額の小切手だった。

その中に書き込まれている金額に風御はBAIを睨む。

「別にロンダリングして欲しいとかじゃないわよ？ ちょっと、それで遊んできて欲しいんだって【BOSS】が」

「あの男まだくたばってなかったのか」

毒づく風御にBAIが苦笑した。

「【BOSS】の事を悪し様に罵って生きてられるなんてホントあんたも恵まれてるわよねえ……………」

「何処で遊んでこいつて？」

「GIOでいつものレースが土曜からあるんだけど【BOSS】は今回の参加を見送りたいらしいの。でも、それで関係悪くしたくないじゃない？ だから、名代としてあんたがそのお金でパァァァとツと遊んできてくれれば、あっちの面子もこつちの義理も通るつてわけ」

「全部使つていいの？」

「ええ、勿論。でも、レースは一ヶ月ぶつ通しだから基本的に全レースへ賭ける事。こつちとしては賭け金そのものは返ってこなくてもいいし、スつちゃっても全然OK。勝った分に関しても懐にいれ

ていいそうよ。ホント、羨ましい夏休みだわ〜」

まるで夢見る乙女のように頬を染めてBAIが自分も行きかけたかと溜息を吐いた。

「最初の件と何か絡んでたりするわけ？」

「そこはあたしノータッチだから解らないわ。でも、この頃大陸への本格的な参入で色々忙しい時期だから、そこら辺が絡んでるのかもね。あ、いつけない！？ もうこんな時間。あたしもこの頃は忙しいのよ。じゃあね？」

腕時計を確認してヒラヒラと掌を振ったBAIが来た時同様スタスタと歩き去っていった。

後に残された風御が二枚の紙を見てポケットにしまう。

「もう出てきていいよ。セキちゃん」

おずおずとバスルームのドアが開く。

室内に転がっている玄関のドアを目を丸くしながら、セキは微妙な顔で風御を見た。

「お友達？」

「アレとお友達にされたら自殺ものですよ」

「でも、親しそうでした」

「まあ、昔の同僚だからね」

「何を話してたんですか？」

しばらく無言でセキを見つめていた風御は埃を払って椅子から立ち上がる。

「ろくでもない話、かな」

その日、業者によって深夜まで掛かった永橋家の玄関修理が終わっても風御は帰ってこなかった。

一人残されたセキは久しぶりに寂寞とした心地になり、風御が今まで自分を寂しからせないよう極力傍にいてくれたのだと初めて理解した。

眠りこけたセキの点けていたテレビが風御家に近しい廃ビルで爆発があったと報じたのは午前零時過ぎ。

隣の国で不穏な動きがあると報道したのは翌日。

戦争の影は少しずつ日常へと迫り出し始めていた。

第二十話 突入（前書き）

第二十話です。

著者が勝手に記念します。

これを書き始めてから三か月あまり・・・他の作品を書きながらの投稿は結構頭が疲れたりするのですが、何やら二十話だと思つと筆が進んでしまったので十九話から四日目で徹夜明け投稿です。

次回は第二の主人公である永橋風御君が大活躍にげたりします。

第二十話 突入

第二十話 突入

布深家^{ふみけ}は所謂第二次世界大戦後に現れた戦争特需による成り上がり
の一族と言える。

その原動力となったのは昭和から平成に掛けての海運・貿易。

日本を牽引する大財閥と比べれば小さな企業体を管理しているに過ぎなかつたが、時代の流れに逆らつた経営方針と柔軟な対応をした資本家の一族として有名と言えるかもしれない。

会社をあくまで株式会社ではなく有限会社として育て、法改正が行われるまで株式会社の形態を取らず、更に全ての有限会社が株式会
社化されて久しい現在も保有株式の全てを一族が握っている。

株式市場にも上場せず、頑なに一族の理念を反映する貿易会社はや
がて時代の最先端を行く古風な総合商社という奇妙なものとなり、
あらゆる時代の荒波を乗り越えてきた。

バブル期には投資ではなく蓄えを作り、効率化と経営の大規模化の
時代に少数精鋭の人間を永続的に抱えて大規模化を避けた。

時代遅れの理念に柔軟な発想で一つの事業を深く開拓し、新規事業
は十年単位でのリサーチと地盤固めを行った後に実行された。
儲けは二の次。

重要なのは永続的な経済活動。

厳しい時代も儲けられる時代も大当たりを期待せず、淡々と存続の
二文字を守り続けた。

その結果、二十一世紀の半ばを過ぎた現在、日本有数の大財閥とま
では行かなくとも小規模にして堅牢な資産運用を行う財閥として十
二分な地位を確立するまでに到っている。

一族の殆どは高学歴のインテリであり、天才は輩出せずとも秀才は
幾人も出した家。

現代日本において最もお堅い家柄。

そう言われるまでになつた近頃の布深家が抱える最大の問題は次期当主の交代。

時代に対応する為、企業のトップである当主は六十五歳までに定年。同時に当主の座を次代へと受け継ぐ。

しかし、布深家本家筋には子女しか生まれていない。

次代の当主は分家筋からの養子を取るか何処かの家から婿を取るか。そう言われ始めて十年の月日が流れた。

「・・・・・・・・」

そんなよくある世代交代の話を悩まなければならない現在の布深家当主『布深海造』^{ふみ・かいそう}はその日、本当にどうすればいいのか解らず、額を揉み解しながら使用人達から話を聞くこととなっていた。

主に可愛い一人娘の身柄が何故か得体の知れない中国人に確保されているらしいと知れば当然だったかもしれない。

過度な装飾の無い無味乾燥とした一室の中、部屋の中央に位置する革張りの椅子が軋んだ。

「それでお前達はオメオメと戻ってきたわけだな？」

白いものが混じり始めている髭を撫でメガネを外した当主に睨まれてSPのリーダーである男が土下座した。

「申し訳ありません。お嬢様の命を守る為には身柄を渡すしか・・・」

「六十四歳。」

未だ衰えを知らない瘦身の海造は土下座する男に立てと促す。

「それで敵の武装は？」

「はい。基本的には機関銃やアサルトライフルでしたが、幾つかの武装は車体ごと吹き飛ばせる重装備でした。車両に横付けされた時点で朱憐様に身柄を渡すようにと言われ・・・申し訳ありません！！」

「！！」

土下座こそしないものの男は腰を九の字に折った。

グレーのスーツ姿のまま海造が立ち上がる。

「直ちに銃器の出所を探れ」

「はい。それはもう始めています」

「なら、今日一日もう社は閉じて構わん。相手からの連絡に対しての逆探知準備。それと南口の倉庫からDコンテナを開放。SP各自は完全武装で待機だ」

「了解しました」

「あと」

敬礼した男が頭を下げ、部屋から出て行くこととした時、背後から海造が呼び止める。

「なんででしょうか!？」

「あの男を呼べ」

「は・・・あの男とは？」

僅かに困惑する男に海造は不機嫌そうに告げた。

「あの胡散臭い経歴の男だ。資料は見た。少しは役立つだろう。私は外務省と警務省を当たる」

「はッ!!!」

GIO日本支社から明け方に帰った久重とソラが叩き起こされたのは寝てから十三分後。

馴染みの顔が何故か朝食を作りに来る途中で誘拐されたとの報を聞かされての事だった。

『みやた・さかとし
宮田坂敏』はその道を今日も急いでいた。

警察官僚。

五十二歳。

単純に言えば幹部クラスのエリート。

本庁からテロリスト捜索本部を任された事で一気に株を上げた宮田に今や追い風の吹かない日はない。

根っからのインテリである宮田が現場の最前線へと送られテロリスト捜索本部に入ってからと言うもの、都市部には大きなテロの予兆らしき事件が多発している。

それを機に上層部から大幅な権限の移譲、更には現場レベルでの高度な捜査も許されるようになっていた。

事件が起これば起こる程に宮田の辣腕は冴える。

そう上層部は重く信認している。

不気味な程に沈黙していると他の部署からは懐疑的な目で捜索本部は見られていたが、水面下での巨大な戦果は警察官僚達を震え上がらせる大規模な事件を未然に防ぐ結果に繋がっていた。

その捜査上の戦果が実際の空間ではなくネットの電子空間上であるという事実が無ければ、正に巨悪と戦う警察官僚と宣伝に利用できなかつたかもしれない。

契機となったテロリスト包囲事件。

結局のところ全てはそこに集約される。

上層部から突如として案件を押し付けられた宮田にしてみれば、不可解な事件ではあった。

指名手配のテロリストが公安によって発見され、大規模な避難誘導をして包囲するという馬鹿げた話。

普通では考えられない対応だったが、上層部からの絶対に逃がすなとのお達しに宮田は全力で事に当たった。

結局、テロリストには逃げられて捜索本部が設置されたが、それすら何故専門の部署で行わないのかと疑問は尽きなかった。

よく解らない上層部からの命令も多く、何か得たいの知れないものを感じていたのは何も宮田だけではない。

それでもそんな疑問を覆い隠して宮田は全力で捜索本部を指揮した。本部のマンパワーを半分以上電子空間上に割く事でテロリストの発見に全力を注いだ。

結果はサイバーテロ対策に躍起となっていた警察の威信を十分に満足させるだけの戦果を叩き出した。

移民達による大規模テロ計画。

同時に発生させられるはずだった騒乱と暴動。

中国からの覚せい剤・銃器大規模密輸ルートの摘発。

暴力団に浸透する外国勢力の内情。

指名手配のテロリストを追う過程で何故か面白いように引つかかった別案件の情報は未然に事件を防ぐ柱となった。

別件のテロ計画中核人物を根こそぎ逮捕し、準備されていた騒乱と暴動の加担者達を別件逮捕で国外追放し、密輸ルートを壊滅させて、非合法の外国勢力から資金源を断ち、暴力団のパワーバランスの調整にも一役買った。

将来の事を考えるなら、正に警察官僚のトップまで上り詰める事も出来るだろう成果。

しかし、その大きな結果を一番醒めた目で見ていたのは他でもない宮田自身だった。

宮田は内心でそれらの戦果を冷静に分析し続け、一つの結論に到っていた。

自分は誰かに動かされている。

(.....)

大きな事件を幾つも未然に防いだ事は確かに喜ぶべき事だった。

それでも情報の収集結果には疑問が尽きない。

何処か不自然に思える。

本来ならばするはずの無いミスをした犯罪者達。

普通ならば知れる事の無いはずの僅かなヒント。

それらの情報から細い糸を手繰るような捜査証拠固めで事件の全容を看破し続けた自分。

まるで最初から仕組まれていたように辿り着く犯罪の数々。

世界中で資源の枯渇と砂漠化が進む現代。

政情不安は内乱とテロ戦争を進める。

それを好ましく思う勢力がいるのは確かで、その状況に漬け込もうとする者は必ずいる。

だから、そんな悪は必要悪だと見逃されがちだ。

悪が栄えた例は^{ためし}ないと誰かは言うが、それにしても『正義が勝ち過ぎる現状』は不気味だった。

まるで他国の工作した後を通り過ぎていくようで。

(.....)

国家単位での間接侵略は二十一世紀に入ってからと言うもの、激しさを増している。

日本は一時期それらの侵略に対し無防備で、数多くの犠牲を払った。ネットを中心とした報道勢力の拡大により、侵蝕を受けていた政治家、政治団体、企業、広告会社に自浄作用が働きだした頃には目も当てられない惨状ではあったが、増大する弱者利権を食い物にする他民族の勢力という図は日本の誰もが知るところとなった。

勃興したナショナリズムの台頭は諸外国に比べれば大人しい方だ。時の政治家や評論家達は言うが、それは殆どの場合詭弁と言わざるを得ない。

大人しいナショナリズム。

そう見えたのもそのはずで、ナショナリズムは暴力ではなく、あらゆる文化的復権によって為された。

レイシストと謗られながらも多業種に渡る国籍条項の強化と外国人勢力に対する規制と監視の強化を行った政治家が幾人もいた。

内政干渉を明確に規定し、日本人が日本人を統治するという基礎を打ち立てた男達がいた。

それらの政策は諸外国との摩擦こそあったものの、極東の島国がまだ己の利権を追及する為なら、戦争が出来る国家なのだ。世界中に知らしめた。

『小さく静かな戦争』（リトル・サイレント・ウォー）。

グローバリゼーションを否定し、多民族国家を否定した日本という国のナショナリズムの勃興はそう呼ばれる。

兵器も武器も使わずに文化と法律と人間によって行われる戦争。

それ以来、隣国との摩擦は激しくなるものの、逆に様々な面で日本が安定したのは皮肉な話かもしれない。

領土問題も移民問題も貿易も全ての面で日本の立ち位置が明確になった。

あの曖昧な笑顔の日本人が怒った。
それが他国に与えたインパクトはアジアの権力者層を密かに震撼させた。

笑っている内は静かな友人が怒ると銃を醒めた瞳で見ている。

そんな例え方をした外国の有識者も多い。

それからの外政・内政は成功こそしなかったが失敗も少なかった。
財政再建こそ不完全にしか出来なかったものの、厳しい緊縮財政や財政規律の強化が国債バブルを安定させた。弱者利権に群がっていた外国人勢力から日本人は乖離し、その殆どの外国人勢力も衰退した。

艱難辛苦の道ではあったが、現在の日本は低成長のまま緩やかに滅亡していく安定した国家と言えた。

そんな時代を戦ってきたのは別に現場の人間だけではない。

宮田もエリートとしてあらゆる事件・犯罪の場に立ち会った。

テロ、移民、新興宗教、外国企業。

様々な悪と断じられた全てと戦ってきた。

正にそんな自分は国家の手先で相手側から見れば日本人の悪そのものナショナリズムのだろうと自嘲した事は数知れない。

(.....)

もはや年若い、激動の時代を戦いきった後、安らかな間にある国。

そんな見方が世界中からの日本への評価だったというのに、近頃宮田には緩やかな流れが急激に荒波を孕み始めていると見える。

その原因は何なのか。

宮田には予測しようもない。

超少子高齢化も半ばを過ぎた時代。

移民の子供の活力と日本の子供の少なさが目立つ時代。

今一度、揺り返しが起こる前兆なのか。

それともまたそれとは別の波が来るのか。

自分は流れの中でどんな場所にいるのか。

もしも、いるとすれば波紋を起こせるものなのか。

全ては何もかもが終わってから解る事なのかもしれない。
ルルルルルル。

やけに今日は懐かしい時代を回想したものだと言田が自分の歳に苦笑しながら端末に出る。

『ああ、言田君？』

『これは警視総監?! こんな時間にどうかされましたか!?!』

驚いた言田に警視総監が続ける。

『うん。僕なんだけど。ちょっと、緊急に頼みたい事があるんだよね』

『は、どういったご用件でしょうか!』

『それがね。ちょっとマズイ事になった。今から迎えの車を寄越すから、そうだな・・・自宅で待機していてくれるかな? それから信頼出来る部下で荒事が得意そうなのを二人か三人くらい集めておいてくれると嬉しい』

『わ、解りました!』

『本当なら僕も君みたいな苦労人の睡眠を邪魔するなんてしたくないんだけど、どうやらそうもいかないみたいだね。状況はこちらに来たら話すから』

『了解しました』

幾つかの連絡事項を受けてから端末の通話が切れる。

(荒波か・・・それとも日本を転覆させるような嵐か。どちらにする私にはまだ何も出来ないですか・・・)

言田は自宅へと急いだ。

その背中には歳を反映してか僅かに細い。

しかし、確かに大きなものがその背中には背負われていた。

少女は夜気に籠る熱気と湿気を吸い込んで空ろな視線で溜息を吐いていた。

戦略兵器搭載型少女シャフだった。

一人ビルの淵に座り込み足をブラブラさせながら湿度の高い日本の

夏を憎々しく思っていたシャフは突如として視界の片隅に発生した爆炎と黒煙に目を細める。

「？」

爆発など都市部でいきなり発生する類のものではない。

僅かに作り物の瞳孔が収縮し、レンズがテロの標的にでもされたような惨状のビルを映し出す。

「・・・拡大、サーバーに接続、記録」

監視役としての役目を思い出したシャフはだるそうに呟く。

シャフの視界にはRECの文字が浮かんだ。

ビル全体を眺めていたシャフは内側から吹き飛んだ硝子の無い窓の中で人がワラワラと動いているのを確認する。

人相や風体からサーバー内の人物を参照するも該当する人間は一人もいなかった。

そのまま見続けていると不意に窓の一つに黒い影が横切る。

「グリッドE12を拡大、補正、明度上昇」

不穏なモノを見た気がして、シャフはその窓の中に一瞬映った影の正体を明確にしようと画像に補正を掛けて鮮明にしていく。

幾度目かの補正を掛けた時、シャフは震えた。

（【ボタフメイロ大香炉】?!！）

顔を顰めたシャフが今まで記録していた情報を全て破棄して、その方角を見る事を辞めた。

（もう此処まで来てるなんて・・・【連中】は全部消す気？ いや、でも、それならこちらの情報も漏れるような監視任務なんてさせたりしないはず・・・そう言えば報告に対しての次の指令が遅かった・・・まさかGIOとのGAMEで散逸する情報を全部消す準備でもしてるっての?・・・）

影の正体を知っているシャフは視界に映し出された記録の中の影を睨む。

黒い獣のように四つん這いになった何か。

頭部は人間のように見えるものの、目も鼻も耳も口も無い。

全身は黒く滑らかな皮の服でも着ているように見えるがまったくそんな生温いものではない。

人間のように見えるが人間ではない。

その悍しい中身おそを知れば、大概の人間は吐き気を覚えるか、卒倒するだろう。

「・・・・・・・・」

シヤフはその場から飛び降りる。

これからあのビルの中で起こるだろう惨劇とその惨劇を引き寄せた情報が如何なるものなのか、シヤフは一瞬情報収集するべきか迷った。

出来る事なら関わり合いにはなりたくない。

しかし、放っておけば好き勝手に自分の持ち場を荒らされる可能性もあり癢に障った。

(今のアタシの性能なら、あのケダモノには劣らない)

地面を陥没させて着地したシヤフが小豆色の外套の埃を払う。

普通ならば地面に何もかもをブチまけているはずの衝撃をいなしたNDがシヤフの体に掛かった負荷をすぐに軽減し回復していく。

(まずは様子見。それから情報収集・・・後は臨機応変にってところかしら)

通常よりも行き当たりバッタリの行動ではあったがシヤフはそう決断した。

(それにしても【連中】が何を考えてるのか読めない・・・・・・・・あれをこの盤面に放り込んだのは【連中】の誰？・・・少なくともあいつからの連絡は・・・・)

全ての疑問を振り切るようにシヤフはその場から走り出した。祭りでも始まったような喧噪へと。

彼は小さな教会の司祭だった。

彼女は大きな会社の社長だった。

その子は死に掛けた女の子だった。

彼らは大工、医者、貿易商、画家、作家、脚本家、小説家、放蕩息子、宗教家、老人、幼子、青年、淑女、童貞、娼婦、政治家、商人、葬儀屋、殺人犯、放火魔、兵隊、海賊、船員、船長、添乗員、その他諸々の個人であり、それぞれの名前で呼ばれていた。大工としての彼はとある工事を受け持った為に彼らとなった。医者としての彼はとある治療を行った為に彼らとなった。貿易商としての彼はとある品を扱った為に彼らとなった。他も全て同じような理由で彼らとなった。彼、あるいは彼女、その全てである彼らは基本的に犠牲者でありながら加害者だった。

彼らは選ばれた者だった。禍々しい息を吐く彼らからはもう個性が消失している。彼らにとって至上の喜びは彼らを増やす事だけだ。

彼らの上に降る祝福の音色は管弦楽の響き。彼らの内に積もる声は主の御言葉。産めよ増やせよ地に満ちよ。

彼らの増え方は哺乳類より形の無い単細胞生物に似ている。

【力となる源】（ぎせいしや）を得て、増え、分かれる。

宗教家である彼が信者であり彼を、信者である彼は可愛い孫である幼子を、幼子は父親である青年を、青年は妻である淑女を。

そんな調子で彼らは増える。

彼らの通った後には何も無い。

彼らとなった彼あるいは彼女達の痕跡は風化していく。

蒸発したのだと言う人間がいれば、自殺したに違いないと勘ぐる者もいる。

他国に旅行に出たと思われている者もいれば、誰にも疑問に思われない者もいる。

ただ、彼らの姿を見た者は一人として彼らの事を喋りはしない。いや、出来ない。

彼らの姿を目撃した電子機器も同様だ。

耳で聞く必要が無いから鼓膜も要らない。
肌で感じる必要が無いから皮膚も要らない。

その全ての代わりとして主から授けられた黒い衣がある。
黒い衣は万能だ。

獲物に喰い付き栄養を補給する。

無数の目となつて標的を見逃さない。

嗅がずとも成分を分析し、相手を嗅ぎ分ける。

聞かずとも最適な方法で振動を検知し、居場所を知る。

感じずとも空気の流れを把握してあらゆる攻撃を避け、弾体に対して無類の強度を誇る。

【……………】

彼らは新たな彼らを祝福する。

頭の中を染められ続ける事を、喜びに満ちた人生を祝福する。

二体となつた彼らはものの五分でビルの屋上から五階までを制圧した。

彼らの前に等しく全ての彼は無力だった。

ある者は叫び声を上げながら突撃した。

ある者はありつたけの重火器を発射した。

ある者は漏らしながら背を向けた。

ある者はこれは夢だと壊れた。

ある者は拳銃で己の頭を撃ち抜いた。

ある者は勇敢に素手で立ち向かった。

彼らとなつた者は十五名。

彼らとなれなかつた者は十二名。

【……………】 【……………】 【……………】 【……………】

総勢十七名の内五人である彼らは一枚の扉の前にいた。

扉へと殺到する。

ベキベキと電子錠は壊され、鋼鉄製厚さ十センチの扉が拉げていく。

彼らとなるべき者を求めて、彼らはその扉を壊し、中へと飛び込んだ。

【【【【【?】】】】】

彼らは一斉に首を傾げた。

誰かいるはずの場所には誰もいなかった。

キヨロキヨロと辺りを伺う仕草をした彼らの一人が不意に天上近くを見つめる。

【……………】

そこにはダクトに続く換気口がぽっかりと口を開けていた。

久重が招かれた場所で言われた事は三つ。

布深朱憐は誘拐された。

生死は不明。

居場所はほぼ特定されている。

対して久重が招いた者達に言った事は二つ。

居場所を教える。

オレが行く。

招いた者達が難色を示した中、誘拐された娘の父親は記しの点けられた地図を渡して言った。

準備が出来次第に突入する。

リミットは突入準備の完了する十一時五十五分。

久重は頷いた。

それから諸々の準備を行った久重とソラがそのビルの傍まで来たのは午後十一時四十五分。

ソラが傍受した情報によれば、犯人グループは交渉の場を用意しろと言い、まだ人質は無事との事。

二人が人通りの無くなった道を歩きビルの手前まで来た時、ソラが顔を強張らせた時点で、もう事態は急転直下を迎えていた。

突如の爆発。

炎と煙が上がり始めるビル。

更にはビル周辺百メートル圏内においての停電。

そこまでならば、まだ久重にも余裕があった。

ソラの支援を受ければ、取り戻せる範囲だろうと思っていた。後方に控えている突入部隊は混乱して今にも突入を始めようとしているかもしれないが先行する事は出来る、はずだった。ズダンッツツツツ。

そう、ビルの上から合計五体の黒い何かが落ちてくるまでは。

【……………】

全身を黒い皮のような質感で包んだ人間のような何か。

「ポタフ、メイロ?!?!」

驚きに固まったソラの眩きを聞く暇も無く。

久重はソラを抱いて横っ飛びにその黒い人型から伸びる腕を回避していた。

「ソラ!!」

久重の叫びで我に戻ったソラが周辺を氷に閉ざすNO・00“closed jail”を咄嗟に展開した時点で、待機していた警察と布深家のSP達は完全に混乱のどん底に叩き込まれた。

突然の爆発、停電、異常気象、そして部隊を襲う謎の黒い人型、。

全ての現象が場を地獄へと変えていく中、一人ビルへと突入した男がいる事をまだ誰も知らない。

永橋風御は表での騒動が大きくなりつつある事を感じながら一人ビルの全自動ゴミ処理用パイプの点検用通路から内部へと侵入を果たしていた。

「ホント、だるいよね。まったくさ」

早く帰りたい本人はいつものスーツ姿にトランカーっという気軽さだった。

第二十話 突入（後書き）

活動報告内にて技術や世界観の補足を行っています。片手間で書いてる代物ですが作品内でよく解らない事があつたら読んで頂ければ大抵の事が解るかと思えます。

最新は投稿九号。

G I O G A M Eの世界観に付いてです。

第二十一話 天命（前書き）

筆が進んだので第二十一話を投稿です。

基本的には十日ぐらいで更新しているのですが、やはり戦闘要素も
のは勢いがある分書きやすいかもしれません。

第二十一話 天命

第二十一話 天命

夜霧。

そう言うには黒過ぎる粒子が辺りを覆っていた。
纏わりつく瘴気は天を覆う程に高く。

その元凶たる黒の人型は炎上するビルと辺り全体を覆う薄氷の世界を背に久重とソラの前に立ちはだかる。

【大香炉】
ボタフメイロ

そうソラに呼ばれた人型達がゆらりと四つん這いの姿勢から立ち上がる。

背は優に三メートルは越えるだろう細くしなやかな姿態。

目も耳も鼻も口も無い。

無貌。
むぼう

「こいつら、何なんだ?! 【連中】ってのの手先か?」

「ひさしげ」

ソラが久重の手を己の胸へと押し当てた。

驚く久重の手の中へと黒く硬い感触が現れる。

横目に確認した久重は己の手の中に黒い塊が現れたのを知る。

「先に行つて」

「ソラ!？」

久重には己の手の中のソレが何なのかすぐに解つた。

ソラ・スク립トゥーラという少女の唯一にして最大の切り札。

【D1】と呼ばれる【I T E N D】の集積制御装置。

それ無くして少女は今まで生き残れなかった。

少女にとって力の全てとも言えるソレを他人に渡す行為は正気の沙汰ではない。

五体の敵を前にして、何を言い出すのかと久重はソラに視線だけで

問い掛ける。

「もう増殖は完了してる。本体が無くても力を使うのに支障は無いから」

「いや、でも、どうやって」

久重の慌てた声に静かにソラが告げる。

「大丈夫。ひさしげが望めば【D1】はちゃんと力を解放してくれる。ほら」

ソラの声と同時に、久重の手の中にある黒い塊が解けてほど空気へ溶けるように消えていった。

「これが【D1】」

久重は全身が軽くなっていくのを感じた。

更には視界に様々な情報が流れ込んでくる。

ビルの見取り図やら現在の自分の肉体の状況やら現在使用できる武器とプログラムの一覧やら。

「ちゃんとひさしげにも解りやすいようにしておいたから」

「大丈夫、なのか？」

「うん。此処は任せて早く」

久重が唇を噛んだ。

「こいつらは人間を侵蝕するの。NDが無い人間は近づくだけでも脳にダメージを負う。こいつらを送り込んできた【連中】の意図は解らないけど、早くしないと手遅れになる」

久重が白くなる程に拳を握り締めた。

「すぐ戻ってくる。無理は絶対するな」

緊迫している状況にも関わらず、ソラは笑みが零れるのを止める事が出来なかった。

「うん」

「すまない！！」

久重が真正面から大香炉の群れへと突っ込んだ。右手が輝きを帯びる。

その手の脅威を感じ取ったのか。

五体の大香炉が咄嗟に脇に退く。

中央を突破していく久重の背後へと殺到しようとした五体が振り向こうとして更に跳び退った。

虚空に突如として現れる輝き。

超高温の明滅が暗い辺りを一瞬だけ浮かび上がらせた。

「行かせない。ひさしげは、私が守る」

身を低く構えたソラが瞳を細める。

その貌に浮かぶ苛烈な視線が五体の大香炉を射抜き、再び世間が明滅する。

NO.03 “fire bag”

【D1】に登録されたプログラムの一つ。

糸状にしたNDを対象の特定部位に複数貼り付け、急激に熱量を放出する事で一点の温度を急激に上げる。

本来は溶接作業用のプログラム。

【……………】

五体の大香炉の内一体が久重を追おうとして、その両足が明滅と共に融け崩れた。

全ての個体がソラへと体を向ける。

ソラは僅かに唇を噛んだ。

「あなた達が本当は人間だった事。巻き込まれてそんな姿にされた事」

大香炉達がソラとの間合いをギリギリと詰め始める。

「謝っても赦されないのは解ってる」

ソラその言葉は僅かに震えていた。

「でも、私はひさしげを守りたい。だから」

黒い巨体がソラへと殺到する。

「ごめんなさい」

脚部を融かされて明らかに移動速度が鈍かった一体の頭部がトプンと明滅と同時に融けた。

ワンステップで背後へと跳躍したソラに追い縋ろうとした残りの大

香炉の動きが一瞬ガクンと止まる。
同時に闇に紛れていたものが姿を現す。
薄氷に覆われたビルや道を薄く黒いベールが隔てていた。

【CNT defender】
NDによって編みこまれたカーボンナノチューブによる対弾防御機構。

その強度は相手が見える程に薄い布でも対戦車ライフルの弾丸を止める。

そんな強度を誇るベールが幾重にも重なって外界と内部を隔て四体の巨躯を浮き彫りにさせた。

ソラが両腕を背後へと引く。

全ての巨躯が釣られた魚のようにソラへと無理やり引きずられた。

「fire bag」readjust mode HALO」
ソラが前へと踏み出した。

大香炉達が少しでも傷を負わせようと体を動かすもベールに絡め取られて思うように動けず、ソラの真横を通り過ぎる。

【……？】

大香炉達がベールを何とか切り裂いた時点で気付く。

体の大半がまるで何かに挟られたように消えていた。

黒い瘴気が断末魔を上げる。

行動不能に陥った四体の巨躯が次ぎの行動を取る前に頭部を明滅させられ、融けた。

闇の中で融け崩れていく巨躯が映し出したのは挟られた体が少女の周りに落ちて同じように解け始めているという事実だった。

ソラと大香炉達が交差した刹那に起きたのは「fire bag」による線の攻撃だった。

従来の一点へと熱量を注ぎ込む使い方とは違う。

点ではなく線となった「fire bag」は融かし崩すのではなく、融かし斬る。

背後に擦り抜けた時点で肉体の大部分を挟られてしまった四体には

もうソラの攻撃を避けるだけの余力など残ってはいなかった。

「さようなら」

目を伏せて黙祷した少女の背後には未だ余熱を持って輝くNDの輪が幾つか見て取れた。

従来よりも多量の熱量を点ではなく線で出力した故か。

NDで構成された輪はホロホロと儂く崩れ消える。

「ひさしげ……」

ひああああああああああああああああああああああああああああ？！
！！！！。

ビルへと突入しようとしたソラの耳に叫びが木霊した。

振り向いたソラが目を細める。

NDによる情報収集プログラムが起動する。

近くで未だ生きていた情報端末の一つに侵入。

カメラ機能を起動。

映像がソラの瞳に張り付くNDから出力される。

完全武装の警察官らしき十数名が大香炉数体に襲われていた。

警察官の一人が解けた大香炉の一体に取り込まれる。

【松井iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！】

叫び声が聞こえる。

ザリザリとカメラからの画像がブレて途切れた。

大香炉の撒布するNDが端末を焼き切ったに違いなかった。

「！！！！」

ソラが迷ったのは一瞬。

(此処で見捨てたら……ひさしげに胸を張れない！)

その足はビルではなく背後の道へと向かっていた。

ビル周辺が慌ただしくなった頃。

息を切らしながら朱憐は狭いダクト内部を進んでいた。

「大丈夫？」

「は、はい……大丈夫……ですわ」

背後の虎が平静な声を出しているのに年上である自分がどうしてこんなに弱いのか。

「大丈夫」

そう思い直した朱憐はハッキリとそう口にした。

「そう、ならいい」

二人が進むダクト内には薄く煙が充満している。

胸が苦しくなるものの、それでも二人はダクトを延々と渡っていた。

「この先、エレベーターシャフトある」

「そこから下へ？」

「そう。爆薬爆発したら、下の通路から逃げて主導権握る作戦」

「・・・教えていいのですか？」

「もう、関係ない」

虎の僅かに沈んだ様子が朱憐にあの映像を思い出させていた。

虎と共に閉じ込められてから数時間。

何かと話しかけていた朱憐と虎の間には犯人と被害者というより、

何処か友達とお茶でもしているような空気が流れていた。

そんな空気が変わったのは日付も変わろうという時間帯。

いきなり虎が険しい顔つきで懐から端末を取り出したところから始まる。

虎が何か信じられないような顔つきになった後、取り出した端末を操作して何かの映像を見ながら凍り付いた。

その様子に警官隊でも突入したのだろうかと疑問に思った朱憐が数回虎に呼び掛け、我に返った虎は何かを悩んだ後、端末を朱憐にも見せた。

その端末の画面には幾つかの監視カメラの映像が流れていた。

問題は全ての監視カメラの映像に黒いものが蠢いていた事。

「警官隊、違う・・・」

人間が黒いものに取り込まれていた。

ビクビクと体の一部が黒いものの中から出て痙攣している。

カメラが一台ずつブラックアウトしていく中、ハッキリとは解らな

くても・・・映っていた人間がどうなったのかすぐに想像は付いた。
「な、何ですのアレ!?!」

「知らない。日本の?」
虎の疑問に思い切り首を横に振って否定した朱憐は何が起こっているのかと体を震わせる。

「今、八階突破された」

「虎・・・さん?」

虎が唇を噛んで何かを考えていたが、朱憐に瞳を向けると僅かに見つめ、拳を握った。

「仲間、アレに食われてる・・・アレ増えた」

「え?」

虎にどうしてそんな事が解るのかと疑問に思う前に虎が片目を手で覆う。

「たぶん、最新型のND機械、みたいなもの・・・爆薬で、完全に壊れてない。ダメ・・・止められない・・・」

虎の瞳に何が映っているのか臆げに朱憐は理解した。

「B M I 義眼・・・」

「退却しない?! でも、勝てない。それ無理・・・」

ブツブツと独り言を言う虎の表情がどんどん泣きそうになっていく。やがて、轟音が部屋を揺さぶった。

「・・・あ」

ガクリと崩れ落ちた虎が両手を床に付く。

その片目からは一筋だけ涙が零れていた。

それで何があったのか察した朱憐は・・・虎に初めて近づいた。不意に近づいた朱憐に染み付いた動作で虎が銃を向ける。

しかし、朱憐は止まらずにそのまま虎を抱しめた。

「？」

朱憐を見上げてくる左目は哀しみに染まっていた。

「虎さん」

ただ名前だけを呼ばれ、そっと抱しめられた虎の手が銃を無意識に

下ろす。

優しい朱憐の手にされるがまま撫でられていた虎はしばらく無言だった。

「しゅれん」

そう切り出した虎の表情にはもう哀しみは無かった。

ただ、何か決意した感情だけが乗っていた。

「はい。何ですか虎さん？」

「逃げる。このままだと、死ぬ」

虎が立ち上がる。

そのまま朱憐に手を差し出した。

「・・・しゅれん、死なせたくない」

「虎さん・・・」

手を取った朱憐が立ち上がると真っ直ぐに虎が朱憐の瞳を見た。

「信じて・・・貰いたい・・・」

「はい」

朱憐は切迫している状況にも関わらず、そう微笑んだ。

二人はどうかして逃げようとしたものの扉が開かず、監視カメラの映像が途切れた事から包囲されたと気付いた虎は見つけたダクトの入り口へと朱憐と共に逃れた。それから複雑に入り組んだダクトを二人は這い続け、ようやく目的の場所まで来る事に成功していた。

「次の角を右」

「はい」

答えと同時だった。

ダクトが大音響を立てて揺さぶられる。

「きゃ?!」

思わず縮こまった朱憐に虎が大丈夫だと告げる。

「たぶん、置いてきた手榴弾」

「え?」

「入り込んでくるものあったら、線が切れて爆発する。今ので距離解る。百メートル」

朱憐は百メートルという生々しい距離に息を呑んだ。

あの黒い人型。

人間を食って増えるという悍おぞましいい怪物。

それがすぐ傍にいるという事実事実に冷や汗が止まらなくなる。

「い、行きましょう」

コクンと頷いた虎に促されて朱連は更に這う速度を速めた。

すぐにダクトの終着点に付く。

しかし、ダクトの終端はボルトで止められた格子が嵌っていた。

朱憐の気が遠くなる。

「大丈夫、少しだけ退く。耳塞いで」

朱憐がその言葉に従う。

僅かに身を擦って開いた狭い隙間から銃だけが出され、正確に四隅のボルトを打ち抜いた。

「すぐにアレ来る。シャフトの中ロープある。飛び移って、足持つ」

「は、はい」

格子が外れ落下する。

そのまま急いで上半身を出した朱憐は底の見えない虚空に眩暈がした。

しかし、化け物がいつ襲ってくるかも解らないという状況に唇を噛んで虎に持たされていたペンシル型のライトを点ける。

すぐにロープは見つかった。

手を伸ばせば届くだろう範囲。

グツと上半身を引き出した時だった。

ダクトに異様な音が反響した。

「来た!!!」

(?!)

朱憐が慌ててロープを掴んだ瞬間、足が虚空へと放り出された。

その後が続いて虎が這い出た。

その手を掴んだ朱憐に引き寄せられ、ロープに片手でしがみ付いた虎が銃を正面に向けて撃った。

一発、二発、三発。

一発目の火花で目標である固定していたロープを見つけ、二発目で狙いを付け、三発目で命中させた途端、ダクト内部から黒く長い腕が迫り出した。

「?！」

その腕を真直に見てしまった朱憐が叫ぶより先にロープが急激に落下し始める。

「最初だけ!! ちゃんと掴んで!!！」

最初の二秒間の落下後、ロープの落下速度が減速し始める。

それでも結構な速度でシャフトを降りていく二人は十秒後には地面に転がっていた。

速度が落ちたとはいえ、コンクリートの上に落ちた朱憐が衝撃に咳き込む。

「早く!!！」

受身を取っていた虎が起き上がり朱憐へと駆け寄って支えた。

二人の前には落ちたライトに照らし出された非常用と書かれた鋼鉄製のドアがあった。

その扉は開いている。

すぐさま扉の中に入って虎が扉を閉めた直後だった。

何かが落下してくる轟音。

重い鉄製の扉を閉め切った虎は慌てて鍵を掛ける。

小さなツマミを回した途端に周囲のロックが作動し、鉄製の扉を棒がガツチリと固定した。

しかし、ドカンと轟音と共に扉が僅かに内側へと凹んだ。

非常灯が僅かに二人の顔を照らし出す。

「~~~~~」

二人の顔が引き攣り、同時に頷いた。

同時に走り出した時には鋼鉄の棒は曲がり始めていた。

「で、出来の悪いホラーですわ・・・」

「悪鬼・・・」

顔を蒼白にして二人は同時に呟かずにはいらなかった。

二人が走る通路の先にはゴミ処理用のパイプラインが設置されている。

本来は都市計画時に設置されたゴミ焼却施設へと直通するはずだったパイプは建設途中で業者が変わった事により、殆どの人間に知られる事なく眠っていた。

「一度も使われなかった保守点検用通路に風御の姿があった。

いつもの着崩したスーツに小さなトランクを一つ持っただけの姿。眠っていた電源は入れられていて、通路の明かりは数十年前に使用されていたREDの青白い光で煌びやかに飾られている。

本来はゴミのパイプだけではなく非常用の電源や水道も引くはずだったのか。

通路は数メートルの直径を持つトンネルの左側を通っている。

「ほんと、だるいよね」

一人ごちた風御がそろそろ準備でもするかとトランクを開けようと立ち止まった時だった。

いきなり、パイプラインの一角の扉が開いた。

「？」

「「!？」」

走り出てきた二人がいきなりの明るさに立ち止まる。

そして、風御に気付いた虎が咄嗟に銃を向けた。

「………どういう状況？」

「え、あ……まさか、ひさしげ様のお友達の……えっと……風御さん、ですか？」

「しゅれん？」

三者が三者とも何とも言いがたい顔で互いの顔を交互に見る。

「どうして君が此処に？ 確か久重のところにいつも来てる子でしょ？」

「あ、あの！ 誘拐されて、それで化け物が、すみません。わたくしにもよく解らなくて」

「何かもう巻き込まれ臭半端ないんですけど・・・」

何かにとんでもない事に巻き込まれるのが確定してしまった気がして、風御が脱力した。

「しゅれん。もう来る!？」

「と、とにかく風御さんも一緒に逃げてください!! 化け物に追われてます!!」

「化け物？」

「誘拐犯の方々が全滅して、人間を食って増える化け物です!!」

「・・・」

「そ、そんな風に見ないでください!？」

自分が何を言っているのか解っている故に、風御の微妙な表情に耐え切れなくなつて朱憐は頬を軽く染めた。

「しゅれん!!」

「は、はい!!」

急かされた朱憐が虎と共に風御の下まで走ってくる。

「早く!」

「いや、僕も一応仕事だから。化け物だろうが誘拐犯だろうがA D E Tの敵だろうが一応殺つておかないと後でどやされるし、君達だけで逃げたらいいよ」

サラツと流した風御がトランクを開けて中身を取り出した。

「銃も効かないみたいで、それに爆破されても生きてるような本当の化け

「来た!!」

風御の袖を引っ張り必死に説得しようとした朱憐が虎の声に固まる。

轟音。

通路の反対側の壁が爆砕し、更に二人が通ってきた通路から黒いものが這い出してくる。

「「!？」」

二人が完全に言葉を失った。
挟撃されていた。

唯一の逃げ道である反対側の通路にはコンクリートの粉塵が舞っている。

その中から黒い巨躯が姿を現す。

「へえ、確かに化け物・・・ジーンプラント計画か、それとも亡国の次世代遺伝子組み換え生物か、つてところ？」

トランクから取り出した中身、金色の粉が詰まった小さな試験管の蓋を開けて自分の頭に掛けながら、風御が何やら一人呟く。

「・・・しゅれん。必ず、守る」

虎がもはや逃げ道は無いと懐から銃を取り出し安全装置を外す。

「とりあえず、君達にも、はい」

幾らか残った金色の粉を二人の上にサラサラと掛けた風御がトランクの内部にあるスイッチを押した。

内部に備え付けられていた画面に赤い文字が表示される。

LIMIT 11。

【……………】

【……………】

青白い輝きが満ちる通路で大香炉が全身を広げるように立ち上がった。

長い手足、貌の無い頭部。

皮のような質感の全身。

悪夢に姿があるとすれば、正にそのような化け物かもしれない。

「とりあえず聞くけど、アレの正体が使われてそんな技術に心当たりは？」

「ND機械、かもしれない」

虎の声に風御が頬を掻く。

「人体のND魔改造なんてムズい研究成果出てたっけ？ ま、それなら幾らかやりようは……………」

風御がおもむろに懐から三種類の試験管を取り出して、ひよいと無造作にビル側の大香炉へと投げた。

反応した巨軀がそのまま高速で三人へと突っ込んでくる。

風御が腰のホルスターに収められていた拳銃を抜き打ち様に撃つた。巨軀に接触し割れる寸前の三つの試験管を一発の弾丸が一直線上で割る。

直後、混合した三種類の液薬は大香炉の表面で弾けた弾丸の衝撃に反応し、通路内を莫大な衝撃と爆風が突き抜けた。

マジ？

風御の呆れるような声が二人に聞こえた。

目と耳がすぐに回復した二人が頭を振る。

ズダンと通路を蹴る音と共に鈍い殴打音が続く。

二人が見たのは逃げ道を塞いでいた巨軀が吹き飛び、自分達の横を抜けて起き上がるうとしていたビル側の化け物にぶち当たる瞬間だった。

「硬った。あゝゝゝ確かに化け物なみ。撤収かな、これは・・・」

「だ、大丈夫ですよ！？」

朱憐の心配そうな声に風御が笑う。

「大丈夫大丈夫。どうせまだNDで守られてるから。君達もまだ大丈夫でしょ？ それよりアレは今の装備じゃ殺しきれないみたいだから逃げるけど、動けるなら早くした方がいい。あっちはまだまだやれるみたいだし」

肩を竦めた風御は早くも起き上がるうとしている大香炉へと銃を無

造作に乱射し始める。

「しゅれん」

「はい！」

「レディーの足だと遅い。乗っけてくよ」

風御が銃を投げ捨て二人の下まで来ると朱憐の体をお姫様だっこした。

「な、なな、何を！？」

「ちびっ子は走る事」

風御が疾風の如く走り出す。

背後に付いた虎が頷いた。

二十秒程ノロノロとしていた大香炉達がようやく銃撃の痛でから起き上がる。

二体は腕を伸ばしてガツチリと通路の数メートル前に固定する。

そして、腕が急激に縮んだ。

巨軀が瞬時に加速し、ミサイルの如く飛翔した。

「おいおい」

三百メートル近く離れていた距離が瞬時に百メートル以上縮められるという瞬間をさっと振り返って確認した風御は溜息を吐きたい気分を駆られた。

「ちよつといいい？」

「は、はい！」

懐にある情報端末を取り出すように風御が朱憐に告げる。

「この端末の左端、そう、そのボタン。それを僕が言ったら押してギョツと端末を握り締めて朱憐が頷いた。

「後ろのちびっ子に言っておくけど、遅れたら見捨てるから」

「了解した」

「な、何を！？」

慌てる朱憐の声に風御が罰が悪そうな顔をした。

「気付いてないかもしれないけど、さっき逃げ道の方の奴を殴り飛ばした時に脇腹をやられてる」

「え、虎さん？」

朱憐の瞳に虎が首を振る。

「問題、ない」

「何が、何が問題ないですか！？ ケガをしてるならどうして！？」

「大丈夫。心配しなくても、いいから」

風御はそれ以上は何も言わなかった。

化け物が二人の横をすり抜けていく途中に朱憐を掴もうとした。

その指先から庇つたとまでは……。

顔色こそ変わらないものの、虎の足が少しずつ遅れ始める。

「虎さん!？」

「気にしなくていい。どうせ誘拐犯、だから」

息が上がりはじめた虎が風御の背から離され始める。

「ま、待つて、待つてください!!」

「死にたいなら止めないよ。後ろ」

もう二体の大香炉と数十メートルも距離は開いていなかった。

「!？」

「この先に、何がある?」

虎が風御の背中に問う。

「ゴミ処理施設側からの悪臭対策と侵入者対策に厚さ四十センチの分厚いシャッターがある。パイプライン以外は完全に切断するやつ。ま、上を爆破してロック外すだけだけど」

大香炉二体との距離はもう三十メートルを切っていた。

「もし、死なせたら、鬼になって出る」

「幽霊は信じてない。けど、ウチに出られると居候が泣き喚いて困りそうだから承知しておくよ」

二人の会話に不吉なものを感じて朱憐が口を挟もうとしたが、虎と瞳が合った瞬間に言葉が口内に消えた。

「……後は任せる」

虎が立ち止まった。

「餞別だ」

風御がサツと己の腰から銃を落とした。

「虎さんツツツ!!!」

朱憐が暴れようとした。

「あのちびっ子は君を助ける為に残った。君が出て行けば、あの子は君を守ってすぐに死ぬ」

「?!!」

風御の言葉に朱憐が固まる。

バツと路の明かりが消えた。

電源が落ちたのか非常灯も付かない。

「あの子を一秒でも生かしたいなら黙って助かれ。助かった後にどうにかしろ。それが君に出来る唯一の方法だ」

「そんなツツ、そんなのありませんわ!!!」

「あるさ。幾らでもある。そんな話は五万とある。君が知らないだけの話だ」

「あの子はまだきつと何も知りませんツツ!! お友達がどんなに大切なものかツ！好きな人が出来たらどんなに嬉しいかツ！甘いものが好きかもしれませんツ！可愛いお洋服に興味を持つかもしれませんツ！ そんな、そんな未来があの子にはツツ?!」

「なら、君は死体に友情を語るの？ 恋愛事を話すの？ お茶をして洋服の話をするの？ 君の言ってる事はそういう事だよ」

「わたくしは!!!」

泣きそうに、何よりも強い瞳で、朱憐は風御を睨み付けた。

「後、二十メートル。僕は君にスイッチを任せる。もしも、そうしたいなら君を下ろしもしよう。ただ、あの子の寿命はその時点で零だだけは言っておく」

朱憐の耳に銃声が響き、目に一瞬だけ銃を撃つ虎の姿が映った。

「あ・・・」

「今だ!!!」

その時、朱憐は端末のボタンを押す気など無かった。

しかし、虎の必死に戦う姿にまだ生きているのだと、そんな僅かな安堵が生じ、指は

爆破。

風御達の背後に迫っていた数メートルは伸びた腕が、上から落ちてきたコンクリート壁に押し潰され、片腕が地面へと落ちた。

遠方で爆破の火の粉が上がった時にはもうその場から走り出していた。

チャラチャラした男が置いていった銃は反動が殆ど無いにも関わらず凄まじい威力を発揮し、暗闇の中でも命中した化け物の体が大きく孔を開けるのが見て取れた。

（これなら、行ける）

化け物の動きが鈍った時点で撤退の為のルートが幾つか浮かんでいた。

化け物に対して背を向ける恐怖はあった。

それでも両肩への銃撃が腕を伸ばさせていないとの確信もあった。

四肢が十分に動けるように回復するまで一足でも遠くへ。

元来た道を走りながら図面を義眼に呼び出す。

パイプラインの点検用敷設通路は一つだけだったがその通路の真横には工事用の通路が存在する。

いきなり背後へと出てきた化け物がいたのはたぶんそういう事だと解っていた。

道は二通り。

工事用の通路へと侵入して今は使われていない郊外の出口まで走るか。

再びビルへと戻るか。

工事用の通路にはたぶん殆ど出入り口が無い。

それはつまり化け物と出くわせば死ぬまで戦わなければならないという事。

再びビルに戻れば出入り口こそ多く隠れる場所や死角はあるだろうが、確実に化け物と遭遇し、切り抜けなければならない。

どちらもどちらだったが、すぐに回答は出た。

（立ち回りで、切り抜ける!!!）

再び通路の終点へと戻った。

化け物が追ってきた通路はまだ崩れていない。

「.....」

そのまま走り込んだ。

慎重になれば死ぬ。

何処までも大胆に走り抜けなければ命は無い。

そう理解していた。

背後には未だ音が無い。

それでも確実に近づいている事は感じ取れていた。

すぐに出口であるエレベーターシャフトの真下まで辿り着く。

そこで思わぬものを拾った。

ペンシル型のライトが未だに光を放ったまま生きていた。

拾い上げた時、その光が小さな偶然を起こした。

シャフトの真下に扉がもう一つ存在していた。

(これは・・・?)

見れば、シャフト点検用通路との文字。

気が動転していて気付かなかったもう一枚の扉を開けると階段があった。

「しゅれん・・・」

暗闇の中で、誘拐した少女の名を呼んで、まだ助かったわけではないと気を引き締める。

扉を閉め、階段を走り出した。

螺旋状の階段はどうやら他の階とは繋がっていないらしく何処まで上に伸びている。

たぶん、エレベーターシャフトの最上階、ビル屋上から直接降りてくる為のものらしいと気付いた。

だが、もしもそうならば逃げ場は無い等とは考えない。

壁をよじ登る事も降りる事も訓練の内だった。

指先だけで断崖絶壁からビルの隙間まで、とっかかりのある場所ならば上り下りする技術は叩き込まれていた。

息が上がっていくのも構わず階段を上る。

下から何か近づいてくる気配は無かった。

苦しくて足が鈍り、速度が歩く程になっても進む。

よるめいて不意に脇腹を触った手がネチャリと音を立てる。

出血はそれなりであったが、内臓が食み出していない事と歩くのに支

障が無い事からまだ無視できそうだと思わず笑みが浮かぶ。

最後の一段を上がり切った。

「はあはあ、はあ・・・」

階段を登り切った場所には巨大なエレベーターの巻き上げ機があった。

稼動していないソレの横。

屋上へと続く扉を押し開ける。

「・・・・・・？」

風を感じた。

熱風と寒風。

煙と薄氷。

ビルは燃えていた。

しかし、屋上の床は凍り付いていた。

夏にこんなにも熱く寒い場所。

化け物がいるのだから、こんな事もあるのかもしれないと日本の不思議を思う。

何とかビルの淵まで辿り着く。

ギイイイイ。

そんな音がして、振り返る。

屋上へと続く通常階段からのドアが開いていた。

並ぶのは五体の黒い人型。

三体は何の傷も無く。

一体は両手両足に傷を負い、一体は片腕が無い。

逃がしたくないのか。

いきなり襲い掛かってくる事もなく。

散開した五体がゆっくりと距離を狭めてくる。

持っていた銃で正面の化け物を撃った。

頭部を狙ったものの、頭を横に傾けるだけで回避される。

しかし、銃の威力が大き過ぎるのか。

目の横の部分が僅かに吹き飛んで、中身が見えた。

「大兄……」

今回の件のリーダー。いつも威張り散らしてはいたが金回りは良く、女には他の幹部より優しかった。

自分を何故かいつも重用し、友人になろうなんて冗談を言っただけで自分をいつも撫でていた。

周囲の大人達にどうしてかと聞けば生温い視線と下卑た笑みが返ってきて、その意味を近頃は少しだけ理解できていた。

そんな間柄の男の顔が見えた。

【……虎】

感傷が奇跡でも呼んだのか。

男の声が聞こえた。

「！」

しかし、

【……神の御意思を】

もう、中身が違うのだと悟った。

【……大兄。残念です】

最後に口にするのは祖国の言葉。

「……」

片目を閉じる。

義眼で周囲の電子機器に接続する。

予め用意していたものは全て全滅していた。

どのチャンネルからも応答が無い。

それが切り札を使い切った末の結末ならば、惜しくはあっても、悔いはない。

ドロリと黒いものが解けて体に纏わり付いていく。

せめて、敵は増やさないでおこうと、まだ自由になる腕で銃を頭に当てる。

引き金を引いた。

「？」

弾切れだった。

弾すらもはや切れていた。

死ぬ時は誰かに弾を貰って死ねたら本望だと、そんな死に方すら出来ない己を笑うしかない。

(しゅれん・・・ごめんなさい)

ほんの少しの時間だけ何故か打ち解けられた・・・朋友とは言うてはいけないだろう少女の名を内心で呼んで、諦めようと瞳を閉じる。

そして、耀きが世界を覆った。

死とはそんなものか。

己が無くなるとはそういうものか。

そう、思っていたのに。

目を開ければ、世界の光景は未だ死を否定する。

黒く覆われた天地に一本の雷光が落ちていた。

右手の耀きに照らされた男。

その背中はとても似ている。

三国志に出てくる猛将のような、誰かを背にして立つ、物語の主人公に似ている。

「動けるか」

声は軽やかに優しく、耳に響いた。

「は・・・い・・・」

「なら、死ぬな。まだ、やりたい事くらいあるだろう?」

地に突き立つ拳。

“Exhaustion Crest”
Dividing Pe
netrate.

地から放たれる五つの雷。

「・・・はい」

悪夢が掻き消えていく。

世界が再び耀きに閉ざされていく。

「お前達が誰かは知らない」

その日、天命に出会った。

「だが、そんな姿にした奴らなら知ってる」

黒い災厄を払う天命に。

「だから、敵は……いつか取っておいてやる」

そんな、敵はげものに優しい言葉を掛ける人に……出会った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8164w/>

GIOGAME

2012年1月14日11時49分発行